

第2部

学部・研究科のFD活動報告

・ 法文学部、人文社会科学研究科	2
・ 教育学部、教育学研究科	12
・ 理学部	31
・ 医学部	34
・ 歯学部	47
・ 工学部	59
・ 農学部、農学研究科	88
・ 水産学部、水産学研究科	108
・ 共同獣医学部	122
・ 理工学研究科	143
・ 医歯学総合研究科	186
・ 保健学研究科	204
・ 司法政策研究科	211
・ 臨床心理学研究科	217
・ 連合農学研究科	224

法文学部・ 人文社会科学 研究科

法文学部・人文社会科学研究科 FD 活動報告

法文学部・人文社会科学研究科においては、従前から取り組んでいる 1. 法文学部学生による授業評価アンケート調査、2. 法文学部授業公開・授業参観（研修授業）、3. 人文社会科学研究科授業評価アンケート調査、4. 人文社会科学研究科 TA アンケート調査を実施した。これらの成果は以下のとおりである。

1. 法文学部学生による授業評価アンケート調査

今年度の授業評価アンケートは、6月23日から7月17日までの間、各教員が担当授業のひとつを選ぶという方法で実施された。アンケート用紙の質問内容に関しては、平成23年度に改変を行い、その際に同一の内容で何年か調査を実施すると決定したことに従い、本年度も前年度に引き続き同じ内容で調査を行った。以下、学科ごとの結果分析である。

1.1. 法政策学科

(1) 講義

昨年度・一昨年度と比較して上昇した項目は、「(1) -1 あなたのこの授業への出席状況について」であり、学生の出席状況は毎年改善傾向にあるといえる。しかし、その他の項目については、昨年度・一昨年度と比較して評価が悪化している。全体的に積極的な評価（各項目の「4」「5」）が低下する一方で、消極的な評価（各項目の「1」「2」）が上昇している。学生自身の項目、授業に対する項目のいずれもが低下していることを踏まえれば、教員側の授業改善の努力と学生の自主的な学習を促すような授業展開が求められる。

昨年度・一昨年度と同様に、「(3) あなたは不明な点を積極的に教員に質問した」「(4) この半年間でこの授業のオフィスアワーを利用した」の項目は、それぞれ「1：全く質問しなかった」「1：全く利用しなかった」が突出して高くなっている。今後も引き続きオフィスアワー制度の周知などを通じて、学生の質問しやすい環境を醸成する必要がある。

(2) 演習

本年度の演習に対する評価も、例年どおり講義に対する評価と比較して高い傾向にあり、すべての項目で講義に対する評価を上回っている。演習について、昨年度と比較して評価が高いのは「(12) 教員は授業を時間どおり行った」のみであり、その他の項目については、いずれも昨年度の評価を下回った。演習においては、学生自身の主体的な参加も求められることから、学生の興味や意欲を引き出すような教員側の工夫が引き続き必要である。演習のみについて問われた項目「(a) 質疑応答等が活発になされた」「(b) 授業での教員の発問や誘導が適切であった」は、昨年度の平均値と比べてわずかに減少したが、一昨年度の平均値と比べると高い数値を示しており、今後も授業運営の改善に向けた教員の努力が求められる。

1.2. 経済情報学科

(1) 講義

昨年度と比較して、評価は全体的に若干の上昇傾向にある。ただし、上昇傾向といっても、多くの項目において若干上昇しているか、あるいはほとんど変化していないかであり、評価の分布も著しく変化しているわけではない。また、「(9) この授業はわかりやすいものであった」の評価が低下しており、授業への取り組みに対する教員側のより一層の努力が求められる。「(14) オフィスアワーの活用」については工夫が必要だろう。「(17) 学生生活の支援」については、昨年度・一昨年度と同様に学生の不満が浮き彫りになっており、物理的に解決できる部分は教員側が早急に努力していく必要があるだろう。

(2) 演習

演習については、昨年度と比較して、評価が全体的に若干低くなっている。ただし、概ね良好な評価であるものの、「(5) 授業を通して、自分にとって発見があった」および「(13) 教員の授業に対する意欲や工夫が感じられた」の回答が悪化しているため、教員のさらなる努力が引き続き求められる。また、例年のことながら、演習についてのアンケートは教員と学生が見えるところで行うことになり、どうしても講義よりも匿名性が損なわれてしまい客観的な評価になりにくい側面がある。したがって、アンケートの取り方も依然として今後の課題となるであろう。

1.3. 人文学科

(1) 講義

今年度も、質問項目自体は昨年度までと同一である。ただし昨年度までの上昇傾向と比較すると、頭打ち感が否めない。むしろ、これはFDの結果として授業の質が向上し、本年度もその高い水準を維持したと評価することができる。しかしその一方で、教科書や補助教材の利用に関して指摘したように、「すぐれた授業」と「普通の授業」の二極分化の発生が疑われる現象も見られることから、今後もそうした傾向に注視していく必要があるだろう。

またオフィスアワーの利用については、例年通りの低水準を維持した。この点についてはむしろ、学生が質問等をしやすい環境がまだ整備されていないという評価を下すことも可能であるが、そもそも今の学生に対し、質問のためにわざわざ教員の研究室まで出向きなさい、という指導自体が適切ではないという可能性も考慮すべきである。熱心な学生の中には、教員の研究室へは出向かないまでも、電子メールや、実施している授業においては授業中の小レポートなどの手段を通じて質問等をしている者も見受けられる。

さらに、当然ながらこの授業アンケートには、何らかの理由で授業に出席していない学生の意見や、アンケートを実施していない授業に関する評価は反映されていない。この授業アンケートの結果は、上述したような技術的限界を勘案しつつ読まれるべきであることは言うまでもないことである。

(2) 演習

昨年度より過年度生を除く全学年の学生が新カリキュラムの学生となった。そのため、

数値の比較もより大きな意味を持つのは本年度と昨年度との比較ということになる。その中で明らかになったのは、学生の要望する事項の変化の兆しである。

学生は以前にまして、シラバスで提示された学習目標の達成、教員の意欲や工夫などを強く求め、またそれに関連して個人別学習の助言指導といった、きめ細かいケアを要求するようになってきていると思われる。それに対応して、教員側も学生の要望を察知し、適切な対応を取ることが求められているといえよう。

むろん、人文学科の演習に対する学生の評価は例年通り、総じて高い。だが、それは受講生の多様性の低さが一因である可能性が高いことを忘れるべきではないだろう。現在の評価に甘んじず、教員が学生のニーズをくみ取って改善を継続することが演習の質をさらに高めることにつながるだろう。

2. 法文学部授業公開・授業参観（研修授業）

今年度の授業公開・授業参観は、11月20日から12月17日まで実施され、法文学部の全教員に対して、期間中に1コマ以上の科目を公開するとともに、公開される授業の中から1コマ以上参観することが求められた。

2.1. 授業改善への取組について

全教員参加による授業公開・授業参観は、今年度で9年目となる。過去8年間の取組を通して、授業の方法に関するさまざまな工夫や改善が図られてきたことが跡付けられるが、今年度についても多岐にわたる教員の努力が読み取れる回答が多く寄せられた。受講生の理解度を高めるとともに、授業内容への関心を喚起する種々の工夫がこらされていることが分かる。

まず講義形式の授業について特に目に付く点を取り上げてみよう。

(1) 配付資料の質的、量的充実

レジュメや関連資料などの配付資料が質的にも量的にも充実してきていることがよく視える。受講生が講義内容を把握しやすくなり、講義後の復習や試験勉強にも大いに役立つはずである。講義内容を全体として体系的に理解する上でも有用だと思われる。

(2) 視聴覚教材・機器使用の一層の広がり

これは近年目立って増えており、今年度の回答でも様々な形で活用されていることが分かる。Moodleの活用も含まれており、教員の意識改革が進んでいることが読み取れる。パワーポイントの使用も広く普及し、説明内容の明確化や受講生の注意を引く上で役に立っているようである。DVDやスライドの活用はもはや珍しいことでなくなり、プロジェクター、スクリーン、Callシステム等、機器使用の利便性を図るためのハード面のさらなる整備、拡充も不可欠となってきている。

(3) 出席票や連絡シートの活用

出席票や独自の連絡シートを用いて、前回の講義内容についての受講生の質問や要望を汲み上げようとする手法は非常に評判がよいようである。受講生にとって教員に直接問いただしたり、要求したりするのはやはりなにがしかの心理的抵抗を伴う場合が多いかもし

れないが、カードやシートに書いて提出し、次の講義で教員がそれに答(応)えることで相互の意思疎通が図りやすくなっていると推察される。また質問への解(回)答は、他の受講生にも参考になるであろうし、前回の講義内容を想起する上でも有益であろう。

これら以外では、講義科目でも受講生に意見発表を求めるなど、双方向的なやり取りが採用されている点が今回の報告で目に付いた。いわゆるアクティブ・ラーニングの考え方が講義科目にも浸透しつつあるように見受けられる。また、一般市民への公開も併せて行ない、授業に対するモチベーションをみずから高める試みも報告された。授業を公開すること自体が教員に意識改革を促すであろうし、また参観を通じて新しい工夫が他の教員に伝わり、広まる機会ともなるはずである。

演習形式の授業についても、前年度に引き続き工夫や改善の多様な努力が報告された。受講生の自発的な発言や学習姿勢を引き出すための試みがよく読み取れる回答が各学科で寄せられている。演習においては当然ながら学生のプレゼンテーションや自発的な意見表明が求められるが、授業全体の雰囲気づくり、進行の仕方、時間配分、机の配置などはもとより、実物教材を用いた実習的要素や視聴覚資料の採用、小テストやレポートの活用、グループ討論と全体討論の使い分けなど、多彩な試みが報告されている。

学生の自主的、自発的学習は本学部の教育理念の中心を成すものでもあり、各教員がその育成に多大の努力を払っている様子が窺える。演習の公開には消極的な意見もあるが、講義形式の場合と同様に、演習形式の授業に関しても授業参観が他の教員の手法を学ぶきっかけとして役立っていることが確認できて幸いであった。

2.2. 授業公開の現状と今後のあり方について

まず、今年度を含めた5年間の授業公開・参観の状況を以下に表で示す。

	2010年度 (後期)	2011年度 (後期)	2012年度 (後期)	2013年度 (前期)	2014年度 (後期)
(A) 公開された科目数	80科目	80科目	87科目 (107コマ)	91科目 (112コマ)	<u>88科目</u> (<u>161コマ*</u>)
(B) 参観者数	39名	48名	48名	46名	<u>37名</u>
(C) 参観率[(B)÷(A)]	約49%	60%	約55%	約51%	<u>約42%</u>
(D) 参観者のいた科目数	30科目	28科目	29科目 (31コマ*)	32科目 (32コマ)	<u>29科目</u> (<u>29コマ</u>)
(E) 被参観率[(D)÷(A)]	約38%	約35%	約33%	約35%	<u>約33%</u>
(F) 推薦授業の参観者数	6名	11名	4名**	[推薦授業 廃止]***	

*コマ数には同一授業の複数回の公開あるいは参観が含まれる。

**2012年度は経済情報学科で推薦授業の指定なし。

***2013年度からは全学科で推薦授業の指定なし。

(1) 参観者数 (参観率)

今年度は公開科目 (A) が 88 科目と前年よりやや少なくなったが、総公開コマ数は延べ 161 コマと過去最高を記録した。同一授業の複数回公開や複数授業公開の呼びかけが浸透し、教員が積極的に公開に応じてくれたことが分かる。ところが、まことに残念なことに、参観者数 (B) は 37 名で過去最低となり、2010 年度の水準に戻ってしまった。そのため、(C) の参観率も約 42% に低下した。

(2) 被参観率

被参観率 (E) は例年並みの約 33% であり、参観者のいた科目数(29 科目)も例年並みであった。

これらの数字をどのように解釈すべきかについては意見が分かれるであろうが、参観できる総授業コマ数が飛躍的に増加したにもかかわらず、参観者数自体が減っていることは歴然としており、まさにこの現実をこの制度の今後の在り方を考える上で踏まえなければならない。全学科から寄せられている意見から判断しても、授業公開そのものは肯定的にとらえ、協力する姿勢を示しながら、みずからは参観しようとしな(あるいは、多忙等の故に機会を得にくい)教員が依然として少なくないことが問題である。改善に向けて今後どのような方向をとるべきかについて、報告中の「2.5. 授業公開に対する意見」を参照しながら以下で考えてみたい。

2.3. 授業公開制度の改善に向けて

報告書の「2.5. 授業公開に対する意見」を踏まえ、参観者を増やしていくことを中心課題として、(1) 実施時期・実施期間、(2) 実施方法、の二つの観点から今後の在り方を探ってみよう。

(1) 実施時期・実施期間

今年度は前年度委員会の決定事項(毎年交互に前期と後期で実施)を引き継ぎ、後期に授業公開を行うことになった。どちらかに固定されている授業が多いことから考えても両学期で実施するのは合理的である。しかし人文学科からの[授業公開に対する意見]にも見られるように、後期に実施すると年末の繁忙期に当たり、参観しにくいという問題があることは否定できない。10月～11月に、あるいは1月に入ってから行うという可能性もないわけではないが、前者の場合、夏期休暇後の準備期間の問題や大学祭との関係があり、また後者では冬期休暇や期末試験に近接することへの配慮が求められよう。もちろん、[(2) 授業公開・参観への意見・要望]に寄せられた提案にもあるように、実施期間を(例えば)2週間に短縮すればこれらはクリアできるかもしれない。公開期間の短縮と実施時期の選定とをどう考えるか、難しい問題である。引き続き検討していきたい。経済情報学科からご提案いただいているように、実施期間を短縮する代わりに、期間内(たとえば2週間)の授業をすべて原則公開とする方法は一考に値するアイデアであろう。公開期間を広げたからと言ってそれに比例して参観者が増加するわけでないことは今回までではっきりしている事実であり、期間の長短は決定的な要素ではない。ただし、様々な事情を抱える参観者の立場から言えば、長い方が参観の機会を得やすいことも確かである。

とりあえず実施時期については、昨年度(2013年度)委員会の決定を尊重し、次年度(2015年度)は、前期に実施することを前提として考えたい。

もちろん将来的には年2回(前後期)の授業公開を検討する必要もあるかもしれないが、そのためには報告書の簡素化をはじめ、本制度の整備を先行させねばならないであろう。

(2) 実施方法

昨年度に引き続き今年度も複数科目の提供に加えて、同一授業の複数回の公開を呼びかけた。その結果として、公開授業の総コマ数が161コマと大きく増えたことは上で触れたとおりである。遺憾ながらそれは参観者の増加には結び付かなかったわけだが、できるだけ多く公開し、できるだけ多く参観機会を提供する、という意味で、この方針自体は今後も継続すべきと考える。

さらに踏み込んで、公開期間中のすべての授業を公開対象とすることも、(期間の短縮を条件とするか否かは別として)検討されてよいであろう。

ただし、従来から問われていることであるが、担当教員が参観者に「事前連絡」を求めることを可とするかどうかは判断が難しい。事前連絡不要が確かに好ましくはあるが、担当教員にしてみれば資料や教材の準備の都合もあり、また初めて聴講する同僚教員にも授業内容が理解できるような工夫を求められることもあるかもしれない。現時点では、あくまで努力目標とし、全体の合意を確認しつつ進めるべきであろうと思われる。

なお、特定の教員の授業を選んで参観する「研究授業方式」については、以前からアイデアとして提唱されているが、通常の授業に支障が出るおそれや、従来の授業参観に加えて実施した場合の教員の負担増に対する配慮も必要となりそうである。今のところ、「意見交換会」という形で、参観者と授業担当者との話し合いの場を設けることを奨励している。ただし実際に行われている事例は残念ながら多くない。教員間でも同僚の授業について率直に批評し合う雰囲気醸成するのは容易ではない。むしろ授業公開という制度をその突破口として活用していかねばならない。

今年度の新しい試みとして、担当教員に公開授業の「紹介コメント」を求める方式は、多くの教員の理解と協力を得たにもかかわらず、参観者を増やすという一点に限れば成功したと言えない。しかし、公開制度への注意喚起や、担当教員自身の授業に対する動機付けの再確認あるいは意識改革の一つの契機として、無意味ではなかったと考えている。表記の仕方(形式上も内容上も)についてさらに工夫の余地はあろうが、次年度も引き続き実施していきたい。

参観者を増やすための最後の手段としては、何らかの強制力を伴う、参観のより厳格な義務化を考えざるを得ないが、上で触れたような種々の問題に取り組む中で、いろいろな声に耳を傾けつつ、慎重に全体の合意形成を目指さなければならないであろう。教育現場に戸惑いや混乱をもたらすようなFD活動になっては本末転倒である。教員と受講生との生きた触れ合いの場という教育の原点にも思いを致しながら、あくまでも授業の質の向上を目指す1つの方策としての「授業公開・授業参観」の制度を今後とも大切にしていきたい。

いものである。

3. 人文社会科学研究科授業評価アンケート調査

今年度の「人文社会科学研究科授業評価アンケート調査」は、6月23日から7月11日にかけて実施された。調査の対象は、各教員の担当授業のうち1科目としたが、博士後期課程を担当している場合は、博士前期課程と博士後期課程それぞれ1科目とした。アンケートの項目内容は、継続性を重視する観点から、従来と同様としたが、今年度は、調査の実施率を向上させるために、学部授業に対する授業評価アンケートと実施期間を同一とし、教員への周知徹底を図った。アンケートの結果は、おおむね次のようにまとめられる。

(1) 今年度の調査においても、授業についての5項目(1)～(5)と受講生に関する2項目(6)と(7)のすべてにおいて、5段階評価で4以上の評価が全体の9割以上を占めている。このことから、本研究科においては、受講生のニーズに合った質の高い授業が提供されており、受講生も熱心に受講していることがわかる。しかしながら、今年度は(3)授業の内容の理解度と(7)受講態度に関して、5の評価の占める割合が(3)ではここ6年間で最も低くなっており、(7)では昨年度の調査結果から10%近く低くなっている。他の質問項目の結果や自由記述から見て取れるように受講生の授業に対する評価は極めて高いが、今年度に関しては授業内容の理解度と受講態度については相対的に評価が低くなっていることが明らかになった。先述したように、近年は全学横断的カリキュラムに指定された科目を他研究科の多くの学生が受講しており、担当教員にとって授業内容のレベル設定が難しくなっていることが、受講生の理解度の低下に少なからず影響しているのかもしれない。そして、このことが学生の受講態度を低下させている可能性があるといえよう。自由記述には、一方的な講義でなく受講生間のディスカッションの場を増やしてほしいなどの要望があり、授業内容の理解度および受講態度を向上させる上で受講生間でのディスカッションの場を増やしていくとともに、学生の理解度に応じた、さらにきめ細やかな対応が教員に求められるだろう。

(2) 過去8回の調査と今回のアンケート結果を比較しても全体的傾向は一貫しており、全ての調査において全項目は5段階評価で一貫して高い評価を得ている。こうしたアンケート結果の一致は、本研究科の授業に対する受講者の満足度が高いことを示しているといえよう。

平成26年度授業評価アンケートにおいて、特に改善された点は以下の通りである。

大学院課程の授業評価アンケート調査は今回で9回目だが、研究科全体の実施率は77.8%で、前年度の74.2%と比較して、およそ3.6%改善された。今年度は各専攻会議および研究科委員会でアンケート実施について周知徹底を図るとともに、今年度で9年目を迎えた大学院授業評価アンケートが各教員に浸透してきた結果と考えられる。本アンケート調査は、授業改善のための基礎的データを収集するために不可欠なものであるから、実施率を高い水準で維持するため、アンケート実施に対する各教員の意識向上、アンケート実施依頼の

徹底措置が必要であろう。

以上のように、人文社会科学研究科では、受講者から高く評価される効果的な授業が実施されていると評価することができる。今後は、このレベルを維持するだけでなく、さらにより高いレベルの授業を構築していくために FD 活動に取り組んでいくことが望まれよう。

4. 人文社会科学研究科 TA アンケート調査

「TA アンケート調査」は、授業における教育支援者としてのティーチング・アシスタント（教育助手。以下、「TA」と記す）の在り方を教員間で検討することを目的に、平成 19 年度より開始された。今年度は、法文学部後期授業に TA として働いた人文社会科学研究科の学生全員を対象として、平成 27 年 1 月 14 日から 2 月 4 日にかけて実施された。その結果は、以下のようにまとめられる。

- (1) TA に対するアンケート調査は今回が 7 度目であったが、全ての TA 担当者からアンケートの回答を得ることができ、TA の活動実態を知る上で有意義なデータが得られた。
- (2) 「事前準備」「教員の指導等」「TA のメリット」の項目の結果から、TA は教員との間で適度な連絡をとりつつ、熱心に業務に従事し、TA 制度が効果的に実施されていることが確認できる。また、「TA の負担」については、研究活動等の大きな支障にはなっていないが、難易度の高い授業科目においては、受講生へのサポートも難しいことが多いため負担を感じている場合もあった。この点については、担当教員が TA と授業内容について事前の打ち合わせを行い、TA がスムーズに業務に臨める環境作りが求められるだろう。

平成 26 年度 TA アンケートにおいて、特に改善された点は以下の通りである。

昨年度まで TA は後期のみの雇用であったため、TA が従事できる科目は制限され、学生自身の専門とは異なる科目で TA を務めるケースも少なくなかった。今年度より前・後期両方で雇用が可能となり選択肢が増えたことで、より学生の専門に近い科目（例えば、指導教員の専門科目）で TA の業務を遂行できるようになった。学生は TA の業務を通して、専門的知識をさらに深め自身の研究およびプレゼン能力を高める良い機会と捉えているようである。

これに伴い、アンケート調査を前・後期で実施する必要が生じた。アンケート調査は例年通り 1 月～2 月に実施したため、前期に TA を担当した学生からすべて回収するのは極めて難しかったが、総務係から多大な協力を得てすべてのアンケートを回収することができた。今回、全ての TA 担当者からアンケートの回答を得ることができ、TA の活動実態を知る上で有意義なデータが得られた。

以上の結果から、今年度も、人文社会科学研究科の TA 制度は、学生へ教育経験の機会を提供し、業務の遂行も高く評価できることが確認できた。今後も継続し、さらに充実し

た制度となるよう努力していきたい。次年度への課題としては、これまでアンケート調査は1月～2月に実施していたが、この時期の実施だと前期にT Aを担当した学生からアンケートを回収するためかなりの労力を必要とすることから、アンケート調査時期を7月～8月と1月～2月の2期間に拡張すべきかもしれない。

教育学部・ 教育学研究科

1章 授業アンケート回答の分析

1. 授業アンケート質問項目について

昨年度には授業アンケートの質問項目に関して見直しをおこなった。主な変更点は、学生側の義務や態度を問うような質問を排し、授業に関して学生がどのように受け止めたのかという内容に統一した点である。

今年度の質問項目も昨年度を踏襲しているが、まだ2年分のサンプルしか集まっていないことから詳細な比較分析はおこなわなかった。明確な問題が無い限り、経時的データ分析が可能となるまで質問項目の変更は避けた方が良いと思われる。

2. 授業アンケート回答の分析

授業アンケートを実施した全60授業に対する各質問項目の平均値を図1に示した。概ね高い得点だがQ3の「予習復習が必要だったか」を問うものが特異的に低かった。また次に平均値が低い項目はQ4の「質問や発言がしやすい雰囲気だったか」を問うものであった。これらの傾向は昨年度と同様である。

予習復習の必要性が低い授業は学生にとって“良い”科目とみなされているのかも知れない。したがって、本来の意図とは別に、この質問項目に限り学生にとっては低い得点=高評価なのではないかと考えられる。Q4の結果からは、学生が主体的に授業に取り組めるような工夫をおこなう余地がまだ多数あると考えられる。

これらアンケートの結果は、全科目の平均値と各教員の担当科目の平均値との比較ができる形で教員に返却した(図2)。これによって、他の授業と比べて高く評価された項目と、低く評価された項目を把握し、今後の授業に活かす参考資料となると考えられる。

学生側から頻出する意見として、実際に改善を願う授業ほど授業アンケートをおこなっていないというものがある。実際、今回の授業アンケートは原則的に全教員にお願いしたものであるが、実施率は50%程度である。したがって、より高い回収率を達成するための方策が必要であると考えられる。また一方で、授業アンケートの有効性に関する疑問もある。授業アンケートをなぜおこなうのか、そもそも必要なのか、どういった利用法があるのかといった基本的な問いから考えなおし、説明することも必要なのではないかと思う。

質問項目

Q1: 授業はシラバスの内容に沿ったものでしたか

Q2: 授業の進度は適切でしたか

Q3: 授業内容を理解するためには普段の予習や復習が必要不可欠でしたか

Q4: 授業中は質問や発言がしやすい雰囲気でしたか

Q5: 授業内容は理解出来ましたか

Q6: 大学の授業にふさわしいレベルの内容を学べたと感じましたか

Q7: 授業に満足していますか

Q8: 授業はあなたのためにたったと思いますか

Q9: 授業はあなたの知的好奇心を刺激しましたか

Q10: この授業の履修を他の学生にも薦めたいと思いますか

- Q11: 教師の話し方は明瞭で聞き取りやすいものでしたか
 Q12: 教師の説明の仕方は分かりやすかったですか
 Q13: 資料（板書，プロジェクター，配布資料）の内容は明瞭に見てとることができましたか
 Q14: 授業は時間通りに行われましたか
 Q15: 質問には丁寧に対応してくれましたか
 Q16: 授業に対する教師の熱意を感じましたか

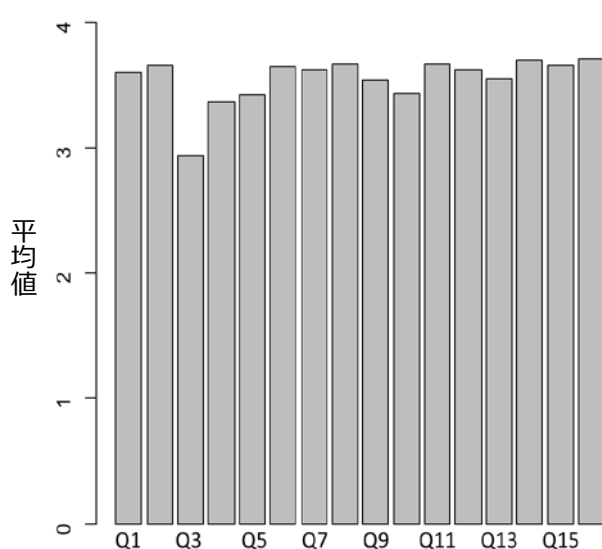


図1 各質問項目に対する全科目の平均値

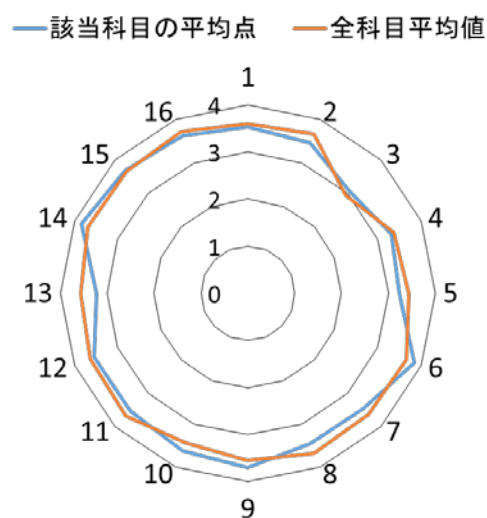


図2 各教員に返却した図の例

該当科目と全体の平均が比較できるようにした。円の周囲の数字は各質問項目，円内の数字は平均得点を示す。

2章 平成26年度教育学部授業公開報告

1. 授業公開の実施計画

鹿児島大学ファカルティ・ディベロップメントに関する指針のFDの定義にある「～教員が、本学の教育理念を実現するために、カリキュラム及び授業の内容や方法を開発・改善することにより、教育の質の向上をはかるとともに、学生支援を行う自発的な取組」により、本学部の教育改善委員会においても各教員による授業公開・参観を行うこととした。本学部の授業公開の目的は「教員同士が相互に授業を公開・参観することにより、各教員が授業方法・授業運営の改善をはかり、教育の質的向上を目指す」としている。

昨年度までの実施状況を顧みると、徐々に参観数が減少している傾向が見られる。教員自身の意識の低下も考えられるが、仕事量の増加にともない提供された授業を参観する時間が失われているのではないかと考えられた。そこで、今年度は一人でも多くの教員に参観の機会を提供すべく、前期と後期にそれぞれ授業参観期間を設けることとした。

(1) 授業公開の枠組み

実施方法は、基本的に昨年度の方法を準拠して行った。教育学部所属の教員に必ず一つは提供するよう依頼し、提供された授業公開科目一覧表をもとに参観する教員が授業提供者に事前に連絡を行い、確認を行ってから当日に参観する方法を行った。

(2) 授業公開科目の調査

前期授業公開については、事前に教授会で報告した後に平成26年5月21日(水)～5月30日(金)の期間で授業公開に関する調査を行った。調査内容は、①授業公開実施科目名(曜日・時限・科目名・講義室)、②受入可能人数(人数を指定する場合、人数を記載)であり、それらを各専修世話人に報告しもらい、専修世話人は、それらを一覧表にして教育改善委員会の担当者にメールで転送をしてもらった。

後期授業公開も同様の内容の調査について、教授会で報告後、平成26年11月19日(水)～11月28日(金)の期間で授業公開に関する調査を行った。

(3) 授業公開科目一覧と授業参観報告書書式の提示

各専修世話人から提出された資料を集約し、前期授業公開については平成26年6月4日(水)に、また後期授業公開については平成26年12月3日(水)に教育学部全員に授業公開科目一覧表と授業参観報告書の書式を配布するとともに、授業公開実施要項を提示した。各教員の諸事情により授業公開科目一覧表の内容に変更等が生じた場合は、その都度訂正版を全教員に配布した。授業参観者は、授業参観報告書を提出することを原則とした。また、授業公開科目一覧表は、本学の他学部に対しても送付された。

(4) 授業公開及び授業参観の実施

前期授業公開期間は平成26年6月9日(月)から7月11日(金)までを、また後期授業公開期間は平成26年12月8日(月)から平成27年1月23日(金)までとし、この期間中に各教員は、授業公開および授業参観を実施した。

(5) 授業参観報告書の提出

授業に参加した教員は、前期授業公開については平成26年6月9日(月)から7月25日(金)までに、また後期授業公開については平成26年12月8日(月)から平成27年2月6日(金)までに授業参観報告書の提出することが求められた。

(6) 授業公開のまとめ

提出された各教員の授業参加報告書をもとに、教育学部教育改善委員会が集約、整理を行った。

2. 授業公開の実施状況

授業参観報告書を集計、整理した結果、平成26年度教育学部授業公開の実施状況は以下のとおりであった。

(1) 授業公開科目数

前期授業公開については、公開科目として97科目の登録があった。このうち1科目は、7名の教員の連名で登録があったものである。また一つの科目を複数名で担当している授業について、それぞれの担当日ごとに登録されているケースがあった。参観者が目的を持って参観授業を選べるよう、授業担当者が異なる授業については、授業名が同

じであっても別の授業として一覧表に載せている。参加教員数は、97名であった。理由を確認してはいないが、1名の教員の授業提供はなかったが、ほぼ全ての教員から授業の提供があった。

後期授業公開については、公開科目として98科目の登録があった。このうち1科目は、5名の教員の連名で登録があったものである。前期と同様に一つの科目を複数名で担当している授業について、それぞれの担当日ごとに登録されているケースがあった。参加教員数は、97名であった。理由を確認してはいないが、3名の教員の授業提供はなかったが、ほぼ全ての教員から授業の提供があった。

(2) 授業参観件数

前期授業参観について、提出された授業参観報告書は27通であり、昨年度の27通(後期実施)と同数であった。後期授業参観については、提出された授業参観報告書は17通であり、前期に比べると大幅に低下している。

平成23年度の授業公開から、参観者は20名から30名の間で推移しており、今年度についても同様の結果になった。特に後期授業公開については前期との組合せの意味で行う旨を広報していたのが減少の理由に考えられる。

3. 授業参観報告書における記述

多くの報告書に共通する内容は、参観でよかった点や工夫や配慮についての具体的な記載であった。以下に「授業参観者が、よい、あるいは取り入れてみたいと評価した授業の方法」と「参観授業の改善のための工夫」の2つにわけて紹介をしたい。

(1) 授業参観者が、良いあるいは取り入れてみたいと評価した授業の方法

【授業の導入】

- ・ 前回の授業の最後に受講生に書かせたコメントを1枚のプリントにまとめ、授業の冒頭で受講生にフィードバックさせることで、他の受講生の感想などに触れさせ、授業内容についてより一層の理解が得られるよう働きかけられていた。
- ・ 前回の授業の振り返りにおいて、受講生の提出した課題の中から、相互評価の高いものが配布資料として紹介されており、受講生の関心や主体性を引き出すため非常によく練られた仕掛けになっていると感じた。
- ・ 語学の授業であるが、導入で地図を用いて地理的な状況と自身の経験談を結びつけて背景を説明することで、学生への動機付けがきちんとなされていた。
- ・ 導入部分では、学生の興味を引くような教材を持ってきており、まずは自分で考えさせる、次に全員で意見を出し合うという、学習効果の高い手法を取られていた。教材選択、発表手法にも工夫があることが、とても参考になった。

【授業の展開】

- ・ 小集団での話し合い活動が複数回に別けて設けられていた。その中でもペアーで議論させ、ペアーの考えを発表する機会を設けることにより、各課題を自分自身の課題として捉えさせられていた。
- ・ 授業の場面ごとに受講生の発言内容のポイントやキーワードをホワイトボードに適時整理されていた。

- ・授業の最後の5分間を用いて、本時の感想やまとめをコメント用紙に記入させ、授業内容の整理を促されていた。
- ・授業の中で、身近な附属学校での活動のビデオ映像が紹介されており、受講者の興味関心を引く様に工夫されていた。
- ・教卓に貼りついたままということがなく、絶えず受講者の中に入っていき、個々人と全体とに絶えず気を配っていると感じられた。
- ・相手の言うことを聞くときは、話し手の方を向くというコミュニケーションの基本的なことができていないときは、しっかりと指摘し、改めさせていた。
- ・受講者がずっと座り放しではなく、時には立ってグループ内で議論させ、内容がまとまったら座らせることで、視覚的にクラス全体の進捗状況がつかめるような指示もなされていた。
- ・よい意見には拍手を送ることで、互いのよい点を評価し合い、他者のよさに気づかせ、教員の側からもそれぞれの発言をほめることで受講者の意欲がさらにかきたてられていると感じた。
- ・教室では、机をコの字に並べ替え、全員がお互いの顔を見ながら話ができるように配置されていたため、学生が積極的に発言しやすく、また教員のレスポンスも早かった。
- ・授業終了後には、学生達に「シャトルカード」が配布され、授業の感想や気付き学んだ事、質問等を書いて提出し、教員がそのカードをチェックして学生の理解度を把握し適切な指導が出来るようなシステムになっていました。双方向授業の進め方の一つとして、「シャトルカード」はとても参考になりました。
- ・受講生が創ったデジタル絵本と幼児の男の子がつくったデジタル絵本が面白く、最近では児童や青年のクリエイティビティを伸ばす教育が行われていることを知って驚いた。
- ・授業では、ランダムに指名した学生からすぐに質問が出ない際、根気よく質問を待つ姿勢が印象に残った。発言しないままではいけないルールが周知されていると伺った。
- ・覚えさせる場面では、学生たちにスライドに書かれた言葉を読ませていました。大事な部分は、単に赤字・太字で示して講師が「ここ大事！」と説明するだけではなく、学生に精読させることもひとつの方法であることを学びました。
- ・学生の授業検討会は「発問に答えにくかった」とか「説明が長かった」といった表面的な意見に終わることも多いのですが、模擬授業前に授業検討の観点をプリントにして配付されており、模擬授業後の授業検討を焦点化しようとすることも勉強になりました。
- ・体育館での授業実施において、授業担当者の先生は、マイクを使用し、適宜指示や指導を行っていたことである。私自身は、可能な限り、自身の「声」を出すことで指導内容を伝えることを前提として授業展開をしている。学生たちに、指導内容を明確に伝えるためには、マイクの使用については、採用を検討したいと強く考えた。
- ・講義内容は一見易しいが、じつは深遠な問題を扱っていて、大学の講義に相応しい内容であった。学生の理解度だけを評価の尺度にするのは間違っている。

- ・作品や出席のみならず、授業態度（例えば、作業が進んでいる学生が、遅れている学生を助ける等）も加味して評価されるとのこと。授業内容にもよるが、教育学部の場合、このような評価の観点も重要に思われた。自らの評価にも取り入れたいと思う。
- ・学生自身が被験者となって実験に参加する機会や、実験の結果について学生同士でディスカッションする時間を設けるなど、理論と現象の往復ができるように、さまざまな工夫がなされていました。
- ・学生との質疑応答に多くの時間を割くことで、学生の理解度を確認しつつ授業を進行できるメリットがあることを認識した。さらに、プリントの記載内容を充実させることで、学生の知識の整理に役立っていると感じた。
- ・学生が模擬授業の中で見せた板書や発問、資料提示や生徒役の学生とのコミュニケーションの取り方など、教育実習での学生の姿と重なることができました。ここまでの講義の過程の様子を知りたいと思うことであった。
- ・導入部分のリラックスした雰囲気から、講師の熱のこもった態度に、学生も真剣な表情を見せ引き込まれている様子が伺えた。
- ・実験の課題の中に難易度の高い目標も盛り込んでいたため、学生間、学生-教員間で自然に議論がおこっており、その議論に沿って理論的知識を教授するといった工夫も参考になった。
- ・101号室という大講義室での授業でしたが後のほうからも板書の文字がよみとれ、声も良く聞き取れました。
- ・何かと学生に手を挙げさせていました。「当てない安心感」があったので、学生が手を挙げるのができていた気がしました。先生が普段から当てないのか、本時のみ当てなかったのかはわかりませんが……。当てるにしても、「間違えてもよい雰囲気」を作るんだろうなあと思えました。
- ・月曜日の1限目ということもあり、若干遅刻してくる学生が気になりましたが、欠席せず、送れても授業に出るということは理解を深めたいとの思いがある証拠だろうと思うことでした。
- ・また、二つ目の詩はこれから！というところで終わりにされたので、学生さんたちはこの先どうなるのか気になったのではないかと思います。こういう形で次回への興味に繋げていく方法も非常に有効だと思いました（私自身、続きが気になって仕方がなかったので、つい頑張って先も読んでしまいました）
- ・今回の授業資料として、実験の手順を示す資料のみならず、当該実験に関する科学的な知見に関する資料、当該生物を活用した理科授業に関する資料が準備されており、理科教師として必要な知識をバランスよく習得できるようになっていた。
- ・運動量も十分に確保されており、導入、実技の一連の授業の流れは、学生に教員の意思が十分に伝わるものであった。ラグビーは危険なスポーツと思われがちであるが、安全面にもしっかりと配慮があり、非常に参考になった。
- ・写真（スライド）、口頭での講義、板書、学生への問いかけなどバランスの良い授業である。板書の時間が学生にとってはノートをとる時間になるということを改めて認識できた。

- ・講義の中では、板書はほとんどなされなかった。板書をほとんど必要としないほど、講義資料が充実していた。講義資料と講義担当教員の講義を聞いていれば、講義内容は大体理解できた。
- ・講義は説明ばかりでなく、順番に受講生に考えを述べさせたり、簡単な作業を手伝わせたりして、適度な緊張感やメリハリを付けている点も学ぶべき点が多かった。また、Evernoteが教材管理のツールとして用いられていた点も新鮮であった。
- ・表現技術だけでなく、曲そのものへの理解力がなければ、聴く人を感動させるような響きは生まれてこない。それを念頭におくことの大切さもまた、授業の中でさりげなく、だが確実に伝えられていたと思う。

(2) 参観授業の改善のための工夫

- ・課題を手順と異なる方法で作成している学生が少数ながら見られ、最終段階で作り直す例も見られたので、作業中のチェック回数を増やすか、可能であればTAを用いて指導させた方がいいかもしれない。
- ・教室が仮設教室であったが、多数の蚊が部屋の中を飛び回っているという環境でした。蚊などの発生を予防する措置を早急に図る必要があると思います。
- ・物理的に難しいかもしれないが、各個人あるいは小グループそれぞれのアイデアで多くの実験ができると良いと思った。
- ・廊下側の蛍光灯を消さないとスライドが見えないという理401教室の電灯の区分けのためなのですが、スクリーン前方の明かりだけを消せるように電灯回路を変える必要があると思いました。
- ・道具の使用方法について説明するなかで、その道具の危険性に関する内容が少々抜けていたように感じたので、追加するとより安全に授業が行えるのではないかと。

4. 授業公開のまとめ

教育学部における授業公開は、平成18年度から開始され、今年度は9回目の実施であった。

授業を公開した専任教員の割合は、残念ながら100%には至らなかったが、ほぼ全ての教員に公開授業の提供を行った。オムニバス形式の授業を考慮し、複数の授業を提供された教員もいた。また、授業参観者数の推移は図1に示した通りとなった。今年度の参加者数が、前期授業参観において27人、後期授業参観においては17人であった。後期授業参観において報告書を提出した教員のうち前期も報告書を提出した教員は15名であり、参観者の固定化が予想される。しかし、2名の教員が新たに後期授業参観に参加しており、全体では参観した教員数は29人となった。参観のべ回数は44回であった。

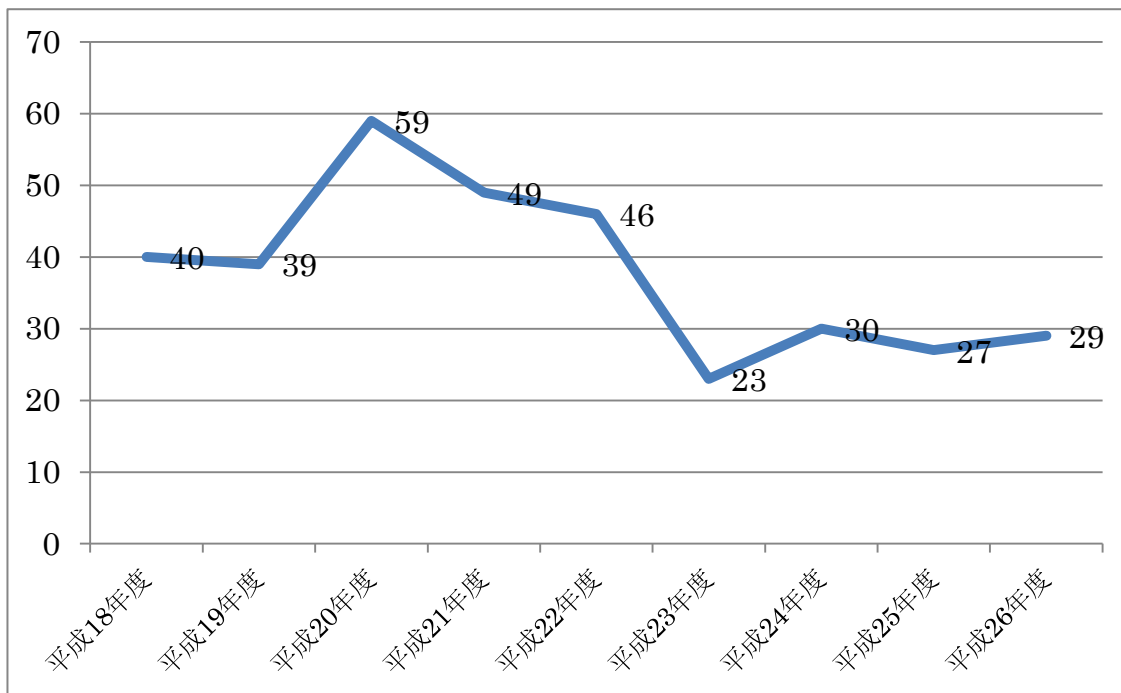


図1 参観者数の推移

本年度の授業参観は、参観者数を増やすため機会の増加を目的として前・後期に渡り実施した。参観した教員数については微々たる効果しか上げられなかったが、15名の教員はどちらの期にも参観を行っており、参観機会の提供は各教員にとって意義のあるものであったと判断しても良いと考えられる。来年度の授業公開にむけては、公開授業を各教員に提供していただいた上で、参観者が他の授業に興味がある場合はその授業の参観も行えるシステム作りを行い、より多くの教員が参観できるよう参観機会の拡充を計りたい。

3章 教育学部・教育学研究科合同FDシンポジウム

1. FDシンポジウムの目的

本シンポジウムの目的は、以下の2点である。(i)学生の視点から授業活動の実態を調査・報告し、授業改善策を提供すること。(ii)教育改善活動が今後も継続的に行えるよう、改善策を文書として蓄積し活用すること。

2. FDシンポジウムのテーマ

シンポジウム開催前の準備段階において本FDシンポジウムのテーマが学生FD委員会と協議され、下記の3つが提案された。いずれも「大学をよりよくするために」という視点で共通する部分があるために選ばれたものである。

- (1) 時間割に関して (2) 履修に関して (3) 授業に関して

3. スケジュール

日時：平成26年12月9日（火）

- | | |
|------------|-------------|
| (1) 受付 | 13:50～14:00 |
| (2) 基調報告 | 14:00～14:30 |
| (3) グループ討論 | 14:40～15:40 |
| (4) 全体報告 | 15:50～16:50 |

4. 基調報告

グループディスカッションを円滑に行うことができるように、教員2名（錦織委員、濱崎委員長）によりテーマの内容に即した基調報告がなされた。錦織委員からは、教育学部の教育職員免許法に則った教育学部のカリキュラムの特徴、授業の種類の解説をもとに時間割作成の現状、他大学の状況の情報提供がなされ、単位上限の趣旨と現状や、履修指導体制の説明がなされ、履修の仕方に関するアドバイスがなされた。濱崎委員長からは、FD活動の解説がなされ、鹿児島大学全体のFD活動でも重要視されているアクティブ・ラーニングや協同学習の理念についての説明がなされた。

5. グループ別討論会および全体報告会

各グループの基本構成は、学部3年生を中心に学部1～3年生6人、教員1～2人、大学院教育学研究科学生1人程度の計6～8人であった。それぞれのグループで出された学生の意見は以下の通り。

(1) 時間割に関して

- ・必修科目がある時間に密集していて困る。学部全体で調整してほしい。
- ・人数制限のある授業の抽選の仕方に問題があるのではないかと。
- ・共通・教職科目が問題であることが多い。
- ・単位の上限を緩和してほしい。
- ・教務係・学生係の担当（履修，実習，免許）分担を明確にしてほしい。
- ・実習校の希望をとってもらえないか。実際に実施している学科もある。家が遠く、交通手段がないという人がいた。

(2) 履修に関して

- ・『教育課程』を分かりやすくしてほしい。専修ごとに冊子を作ることで、関係のある内容だけに絞るとか、ネットに『教育課程』を上げるような工夫がほしい。
- ・カリキュラムの変更が多いので、変更を少なくしてほしい。
- ・相談窓口がほしい。
- ・初等・中等コースの選択は実習後にしてほしい。実習を経験することによって取得したい免許がはっきりするので。

(3) 授業に関して

- ・一方的な授業や、要点が分かりづらい授業がある。

- ・アンケートが活用されていない。記述式の質問も入れてほしい。
- ・テストが少ないし、易しい。レポートが難しいときがある。
- ・レポート等はちゃんとフィードバックしてほしい。一言でもコメントがほしい。
- ・シラバスが明確でないものがある。
- ・評価基準がはっきりしない授業がある。疑問に思ったことを聞きにくい雰囲気。
- ・授業の雰囲気がよくない（遅刻者が多い、全体的に緊張感がない）。
- ・実践的な学びがやりたい（教育現場観察，指導案作成，模擬授業等）。
- ・実習や演習とのバランスをよくしてほしい。

(4) その他

- ・喫煙所を設けてほしい。

《改善案》

- ・初回の授業で、今年のアンケートを受けてどのように改善したのかを学生に伝える。（無理なら無理で、授業の変更）
- ・教育学部だからこそ、知識の享受だけでなく（どう活かせるのか）専門的なものも入れてほしい。
- ・学生の目的に合わせた授業にする（免許をとるために受けている授業なら、それなりにその目的に合わせて）。
- ・資料・板書等は、多すぎても少なすぎてもよくない。
- ・講義形式ではなく、参加型の授業を。
- ・評価、一言でもほしい（フィードバックの方法、授業の最後に何か書く紙、気になったこととか）
- ・学生側が意欲をもてば、受け身の授業にならない。学生間の授業に教師が助言を与える。

4章. 学生 FD サミット 2014 夏

日時：2014年8月23日(土)～24日(日)

会場：京都産業大学キャンパス(京都市北区)

1 活動内容

1 日目 8月23日(土) 【受付10:00～】

10:30～12:00 オープニング(1. 各企画説明 2. 事務連絡)

12:00～13:00 昼食

13:00～15:00 ポスターセッション

15:30～17:00 しゃべり場

17:30～19:00 懇親会

2日目 8月24日(日) 【受付10:00～】

10:30～11:30 オープニング

11:30～12:45 昼食

12:45～15:00 分科会(「学生FDはじめてみました」、「一目瞭然!みんなで貼ろう授業アンケートのイイネ!」、「これさえあれば安心!!学生FD広報ガイドをつくろう!!」、「ファシリテータのしゃべりバナレに次の一手」、「学生FD七転び八起記～こんな失敗しちゃダメよ～ダメダメ!～」)

15:00～16:30 未来への招待状 エンディング

2 活動詳細

*ポスターセッション

ポスター発表全体を通してみることで、学生FD委員の発足から発展に至る過程の一般的な傾向が読み取れた。まず発足当初は授業アンケートの実施や空き教室の開放、新入生との交流会といった比較的取り組みやすい活動から開始される例が多かった。発足から数年経ったグループでは、同じ内容の活動を毎年繰り返すことになり、FD活動の目的や方向性に迷いが生じていることを開陳するポスターが多かった。さらに、ある程度の歴史を持つグループでは、それまでの経験を活かして、外部の有識者を招いた講演会やワークショップの定期的開催をおこなうといったように順調に活動しているグループが多くなっていた。これらから、学生FDが十分に発展していくには発足から数年目の停滞期に今後の方向性をどう決定するかが重要になってくると考えられる。

また、興味深い視点の発表を岡山大学のFDグループがおこなっていた。学生FD委員はいわゆる「意識の高い」学生が参加するため、学生FD委員の意見を学生全体の意見の反映と捉えると偏りが生じてしまう。すなわち学生全体の意見のランダムサンプリングとはならない。そこで、トップダウン方式で学生FD委員のメンバーをランダムに決めてしまうことで、この偏りを無くそうという活動が紹介されていた。しかし、必ずしもやる気のある学生が選出されるわけではないため、この活動がどこまで発展継続していくのかはまだ不明である。

*しゃべり場

しゃべり場では7人程度のグループとなって「大学を良くするためには何ができるのか」というテーマについて議論をおこなった。まず議論のたたき台として、理想の大学と現在の大学への不満を提起することからはじめ、その不満を解消するためにはどういった方法があるのかを議論するという流れで進められた。

大学への不満は大きく分けて施設面への不満と授業に対する不満とに大別された。施設面への不満に関してはその都度大学の該当部署に一つ一つ問題提起していくしか無いということで議論は収束した。授業の不満に関しては、シラバスと実際の授業内容の不一致や教員による授業の質の違い、授業アンケートによる改善が見られないといった内容が主なものだった。授業に関しては議論が紛糾しなかなか統一見解は得られなかったが、教員との対話機会の増加や学生の意見を教員に届ける方策を作るといった比較的常識的な意見に落ち着いた。

*分科会 一目瞭然!みんなで貼ろう授業アンケートのイイネ!

5件の分科会が開催されたが、私は授業アンケートについての分科会に参加した。京都産業大、札幌大、名古屋大の演者がそれぞれ発表をおこなった後に個々の内容について議論をおこなうという形で進行した。

まず授業アンケートにおける「良い授業」という点について学生と教員の意識に乖離があることが説明された。調査の結果、学生の考える良い授業とは授業のやり方(プレゼンテーションの方法)が優れたものであり、教員は授業内容の良さを重視していることがわかった。

次に授業アンケートの問題点として、学期末にアンケートをおこなうと自分ではなく次の学年にしか反映されないといった意見や教員の人気投票にしかない、教員からのフィードバックが見られないといった不満が紹介された。

これらの不満に対して、授業アンケートを中盤におこなう、アンケート内容に対して教員が授業中に回答する、教員評価的な質問項目から授業評価的な質問項目に切り替えるといった対策が紹介された。また、選択式の質問だけでなく、授業で理解が困難だったキーワードや専門用語を書く欄を設けるという例もあった。

全体を通して授業アンケートを活かすには、質問項目の厳選と教員からのフィードバックをいかにおこなうかについて工夫する必要があると感じた。

5章 平成26年度教育学研究科教育改善のための意識調査

1. はじめに

今年、本学大学院教育学研究科が改組され6年目である。社会及び学術的には、青色発光ダイオードの発明で日本人3名がノーベル賞を受賞し、改めて日本におけるアカデミックな水準が認められた年であった。しかし他方、スタッフ細胞を皮切りに研究者の剽窃・データねつ造など汚点も少なからず見られたこの1年であった。このような中で、鹿児島大学教育学部研究科として、優秀な人材を放出し、そのための研究条件の改善は必須となっている。

改組されてから引き続き、院生への意識調査をおこない、昨年度の特に「院生室使用時間の延長」の要望があつた。その結果、院生室の使用時間の延長が認められ、研究条件の一部が改善されたと思われる。同様に昨年度の意識調査からは授業内容・授業形態・研究・学習環境に満足していた結果が得られている。

しかし、研究・学習環境の面では、研究室自体の環境・整備にはまだ課題があると思われる。また、「院生」の学際的な位置づけとして情報が与えられているか、研究の支援の在り方を今後視野に入れる必要があると思われる。

以上の課題点を明らかにするため、本年度は、意識調査を引き続き実施し、教育改善の分析に務めることとした。

2. 意識調査の実施方法

平成26年度の教育学研究科大学院生による授業改善意識調査を以下の手順で実施した。

- (1) 調査期間:平成27(2015)年1月14日(用紙配布開始)～2月6日(回収締切)

- (2) 対象:教育学研究科全学生 76 名を対象とし、回収は 11 名（1 年生 7 名、2 年生 4 名、計 11 名）であった。
- (3) 手法:意識調査質問紙（別紙 1・2）にて自由記述及び選択解答とした。
- (4) 配布方法:研究室・修士論文提出時及び修士論文発表時に配布
- (5) 回収方法:回収 BOX を事務室に設置した。
- (6) 集計方法:2015 年 2 月末に集計および分析を行った。

3. 意識調査の質問項目

調査項目は、Ⅰ 諸科目の授業に対する意識調査 ①「研究科共通科目」・「コース共通科目」等の授業、②「学修コース専門科目等の授業、③研究・学習環境について、満足している点とその理由、改善してほしい点とその理由を自由記述式で回答を求めた（別紙 1 参照）。

Ⅱ 今後の研究についての方向性 ①修士論文発表・中間発表について ②執筆について ③学会所属について ④その他、要望・意見についてで、主に 3 択で回答を求めた（別紙 2 参照）。

4. 調査結果

Ⅰ 諸科目の授業に対する意識調査

(1) 「研究科共通科目」・「コース共通科目」等の授業について

1) 満足している点

表 1 は、「研究科共通科目」・「コース共通科目」等の授業における満足している点である。なお、重複する回答は表記せず、回答内容を箇条書きにして記している。

表 1 「研究科共通科目」・「コース共通科目」等の授業における満足している点

<p><授業内容面></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 専門外のことを広く学んだ ・ 小学校専修免許のための単位になったのでよかった ・ 現職の先生方と話ができて勉強になった ・ 先生方が親切であった
<p><授業方法面></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 学校現場での事例の紹介 ・ 少人数でのグループワーク ・ 自分の意見を発表する機会 ・ ディスカッション等の話し合い活動 ・ オムニバス形式で、多様な領域が学べた

上記のとおり、多様な専門性を有する教員によるオムニバス形式という本共通科目の特色は、内容面・方法面において、大学院生たちから評価されている。また、とかく机上の研究になりがちであるため、学校現場による学習内容（事例紹介や分析等）や相互の意見交流については、各自の研究において視野を広げ、展望を見いだせるという教育的・研究

効果があると思われる。とりわけ、授業方法面においては、少人数のグループ活動において多様な学びが展開されている様子が推察される。

2) 改善してほしい点

改善点については、授業内容面、方法面、その他の3つに類型化された(表2)。授業内容については、分野が広く、多様な知識が得られる反面、「理解が難しい」、分野が違くと理解が困難である等、といった意見もあった。また、共通科目でありながら専門性が高い点がある一方、もっと深く専門性があるとよいという意見もあった。また受講生(大学院生)の属性(現職教員や社会人)に対する配慮等を望む声が見られた。

授業方法については、グループ編成の方針について、要望が出されている。現職や専攻分野といった異属性からなるグループ編成のメリットはあるものの、時には、同じような属性でグループを編成することで、学びが深まるのではないかという意見であった。

なお、その他の事項として、授業時間に関する要望がなされていた。終了や開始時間を守ってほしいとの要望や、時間帯を検討してほしいという要望である。評点に関する要望や教室環境に関する要望もなされている。これらは、昨年度からも同様なので至急改善をする必要があると思われる。

表2 「研究科共通科目」・「コース共通科目」等の授業における改善点

<p><授業内容面></p> <ul style="list-style-type: none"> ・研究者になるための学習内容もあってよいのではないか ・分野がひろく理解が難しい ・もっと深く専門性があるとよい ・他学部とのコラボレーションで教育以外の学びもあるとよい
<p><授業方法面></p> <ul style="list-style-type: none"> ・現職教員が中心になっている ・社会人もいるので配慮が必要 ・ディスカッション時に毎回似たようなメンバー構成であった ・先生により、決め方や、進め方が違うので戸惑う
<p><その他></p> <ul style="list-style-type: none"> ・教室が狭いので、もっと広いところで行いたい ・時間厳守でお願いしたい ・5・6時間目が多い

(2) 「学修コース専門科目」の授業について

1) 満足している点

研究科共通科目と同様に、授業内容面において、多様な分野からの知識・情報が得られていることがわかる。また、オムニバス形式は、浅くて嫌いだという意見がある一方、幅広く学べるという利点を指摘している(表3)。

表3 「学修コース専門科目」における満足している点

<p><授業内容面></p> <ul style="list-style-type: none">・他分野の学習内容から視野が広がった・オムニバス形式は幅広く学べる・少人数なので詳細に指導してもらっている・専門性・最新である・グローバルな学びができた
--

2) 改善してほしい点

「授業内容」からは、「理論上の観点・問題点」を明らかにしてほしいとの要望があった。これは、研究としては最も大事な観点であるので、院生と話し合いながら研究の到達点を伝えていく必要がある。

表4から、他に授業時間厳守に対する改善要望が寄せられている。他にグループ編成の在り方や課題の与え方にも、要望をよせている。

表4 「学修コース専門科目」の授業における改善してほしい点

<p><授業内容></p> <ul style="list-style-type: none">・理論上の観点・問題点を明らかにしてほしい
<p><授業方法・その他></p> <ul style="list-style-type: none">・現職教員よりも、学生の方がグループの中心的役割を担った方がいいのではないかと。・時間厳守をお願いしたい・オムニバス講義で、各分野レポート課題が多い

(3) 研究・学習環境について

1) 満足している点

研究・学習環境について満足している点(表5)を見ると、個々人の研究環境(研究室や空調、研究のための器材等)について、院生たちは、およそ満足していると考えられる。

表5 研究・学習環境について満足している点

<p><環境面></p> <ul style="list-style-type: none">・院生用の研究室がある・研究室の利用時間の延長・研究スペースが確保されている・長時間実験ができる・研究環境が良かった

2) 改善してほしい点

研究・学習環境について改善してほしい点(表6)は、研究環境面、施設やその利用面、その他の2つに分類した。

研究環境面についての中心課題は、研究室の「広さ」の確保であると思われる。機器や

備品利用、資料収集面での要望が指摘されている。また、研究時間の確保から、必要なメール発信への要望があった。そして、その他としては、教育学部独自の図書館がほしいとの要望である。理由は、現図書館への通行に時間がかかることと、教育の専門書の充実を要望していた。

表6 研究・学習環境について改善してほしい点

<p><研究環境面—施設やその利用面></p> <ul style="list-style-type: none"> ・必要なメールが来ない(集中講義の日程・入校許可申請) ・信頼できる掲示板づくりとメール発信をお願いしたい ・プロジェクターの機能が弱い ・パソコンを支給するか、貸与してほしい ・個々人の研究スペースが狭い ・全員が入室するには狭すぎる ・給湯室がほしい
<p><その他></p> <ul style="list-style-type: none"> ・教育学部独自の図書館がほしい

II 今後の研究の方向性について

これまでは、研究条件としての環境整備が中心であった。今回はそれらに加え研究の中心と思われる「発表・執筆・学会加入」について意識調査を行った。

(1) 学会発表・中間発表について

口頭発表を学会など(学内ではなく公の専門機関)で行ったかどうかの質問をし、回答を「すでにした」「する予定である」「予定はない」の3択の中から選んでもらった結果、「すでにした」が2年4名のうち2名であった。1名は「する予定」、残り1名は「する予定はない」であった。1年生の場合「する予定はない」が7名中6名であった。1名だけが「予定」であった。

今回は学外の発表についての質問であったが、学内外を問わず、発表をすることにより、プレゼンテーション力をつけ、研究内容の指導・援助として批判にこたえうる内容により発展できるので、「学会の発表」を目標にするよう支援することを研究科も検討したい。

(2) 今後の執筆について

指導者側は、院生の成果を活字として、世に出し、かつデビューさせることは大きな役割を担っている。そこで、今後の執筆について「すでにした」「する予定である」「予定はない」の3択から、回答してもらった結果、2年生4名中3名が「予定はない」という回答であった。1名が「予定がある」と回答した。1年生の場合、同様に質問した結果、3名が「する予定である」、4名が「予定はない」という回答を得られた。(1)の学会発表の回答を合わせてみると、1年生の場合一般的には「発表」→「執筆」という順を理解していないか、または知らされていない、という状況が分かった。今後、担当教員は、院生の

希望である「執筆」に関して、研究に対しての基礎的な情報を支援・指導する必要がある。それにしても2年生の執筆予定がない、という回答は大変残念である。

また、執筆予定者は、「共同執筆で院生名次に指導教員」の連名を望んでいることが分かった。自然科学と社会科学および人文科学のそれぞれの分野・学会によるが、いかに共同研究であろうとも「院生名次に指導教員名」というのが、一般的であろう。教育学部学術的研究発表の場として「実践紀要」「教育学部紀要」の著者を見る限り、院生執筆はまれに見るだけである。このような状況下で、院生の名前を筆頭者にし、業績を積み上げることを今後院生支援としての「大学院紀要」の発行を提案したい。

(3) 学会所属について

学会所属に関しては、「学会に入会している」院生のうち、2年生4名全員が「入会」していた。それに対して1年生は、7名中3名が「していない」、4名は「わからない」であった。今後指導教員の指導があると思われるが、「学会」に対しての所属意識が低いと思われる。

その意識を高めるためには、1年次から学会に所属し、学術的な交流と視野を広げることが急務である。これも、専修・コース並びに指導教員の意向によるものであるが、少なくとも1年次から「学会とは何か」などレクチャーをする必要があり、自らの研究がどのような位置づけなのかを明確にすることが求められる。

5. 総括

当調査から、「研究科共通科目」や「コース共通科目」、「学修コース専門科目」について、その授業内容や方法は、大学院生たちの学びに資していると考えられる。「専門性の高い授業内容」や「幅白い意見や知識の吸収」、「他分野の学習内容から刺激を受ける」といった回答項目がその証左である(2011年同様)。

課題としては、多様な分野の共通科目としての内容レベルや、学校での教育実践との関連性や学術性について、受講生たちが改善を要望している点が挙げられる。「分野が違い過ぎて理解が難しい点もある」、「専門性が高く、かつ多様・多岐にわたる」の回答項目が前者に、「教育現場において実践できる内容」や「教職に関連する内容に偏りすぎているのではないか」や「研究者になるための学習内容もあってよいのではないか」といった回答項目が後者に属する((2011年同様)。

また、こうした評価点と課題点の表裏一体的な関係は、授業方法についても、同様である。「少人数でのグループワーク」や「ディベート等の話し合い活動」が評価されているものの、「グループメンバーを固定化しない」「他学部とのコラボレーションで教育以外の内容も」といった改善点も寄せられている。

ところで、鹿児島大学大学院教育学研究科教育実践総合専攻は、今後教職大学大学院として新たに出発に期待がかかっている。こうした設置の意図から考えるに、上記の表裏一体となった評価点と課題点は、専門性の向上と異分野融合という本研究科の特色を反映していると考えられる。こうした特色について、履修案内に記されているものの、ガイダンス時や共通科目時等において確認していく必要がある(2011年同様)。

研究・学習環境については、研究室の時間延長など評価されていることが明らかとなっ

た。しかし、専修・コース別によって評価が異なり、個別研究室が与えられている場合はよいが、そうでない共同研究室の場合の個人のスペースはまだ、十分とは言えない。さらに、研究支援の向上としては「給湯室の確保」「パソコンの貸与」など新たな機器及び施設の要望への対策が必要である。

今回は新たに社会問題として起こった剽窃・データねつ造などの背景をもとに意識調査を通して、院生の本来の中心課題—「学会所属・学会発表・執筆」という研究過程を問題とした。その結果、研究科入学時からこれらの所在と自らの研究をクロスさせ、自らの研究を向上させる必要性が明らかになった。そのためには、男女共同参画室が行っている「メンター制度」の活用のほか、留学生も視野に入れた、専門的に業務を行う常時相談窓口や相談員配置が必要である。

理学部

平成 26 年度理学部 FD 活動報告書

平成 26 年度に理学部で実施した FD 活動は以下の通りである。

- (1) 学生による授業評価アンケートの実施（7 月、1 月）
- (2) 授業公開および授業参観の実施（6～7 月、12 月）
- (3) FD 講演会の開催および学生・教職員ワークショップへの参加

以下、それぞれの活動の概要を報告する。

(1) 学生による授業評価アンケートの実施

理学部における授業評価アンケートの目的は、受講学生の率直な声を担当教員に還元することにより個々の授業や学科のカリキュラムをより有益なものへと改善していくことにある。理学部での授業評価アンケートは平成 13 年度に初めて実施され、その際に集計結果を教員評価のための資料として利用しないことを取り決めている。平成 26 年度の授業アンケートは、不定期実施科目、集中講義、教職専門科目、非常勤講師担当科目を除く全科目（前期 73 科目、後期 63 科目）を対象に行われた。アンケート用紙は、授業ごとに受講者分を担当教員に渡し、適切なタイミング（原則として最終講義日）に記入させた。受講者は 13 の質問項目に、それぞれ 5 を最高値（高評価）とする数値で回答する。また、自由記述欄も設けられている。授業担当教員は、（無記名で）記入されたアンケート用紙を所定の封筒に入れ、学生係に持参することとした。

アンケート結果は、授業ごとの回収済みアンケート用紙の現物と集計したデータを担当教員に返却し、担当教員はそれを参考に授業改善を行う。理学部では、アンケートの集計結果を保存し、必要に応じて学部および学科のカリキュラム改善のための基礎データとして活用できるようにしている。以下に平成 26 年度のアンケート結果について報告する。

アンケートの回収率は、実施科目受講者総数に対する回収枚数の割合が、前期が 68%、後期が 60% であり、例年と比べると後期がやや低い数字であった（前年度は前期が 68%、後期が 64% であった）。26 年度の全質問項目の評価点平均は、前期が 3.82、後期が 3.87 であった。これは、前年度（前期 3.68、後期 3.65）に比べるといずれも高い数字であるが、一昨年（前期 3.86、後期 3.85）とほぼ同じであり、一昨年以前の 5 年間の平均点は、3.68 ～ 3.86 の範囲で変動している。昨年度、それまでの 5 年間で最も低い数字であったことに対して、各教員が危機感を持って授業改善に取り組んだ結果が今年度の結果に表れたのであれば、今年度の FD 活動の大きな成果といえる。今後、いっそうの授業改善の努力をすることで、より質の高い授業を目指していくことが重要である。

(2) 授業公開と参観の実施

平成 26 年度の授業公開・参観は、前期は 6 月 30 日から 7 月 4 日、後期は 12 月 3 日から 12 月 9 日に行われた。公開授業数は前期が 12 件、後期が 15 件であり、前年度の公開授業数（合わせて 23 件）を上回った。一方で、参観者数は前期後期ともに 0 人であった。

昨年度も参観者数（前期 3 人、後期 0 人）は少なく、教員の多忙化が進む中で、いかに実のある取

組とするかは大きな問題点であったが、今年度の参観者0人という結果は問題点を改めて強調するものであった。これまで理学部では、この種のイベントにノルマのようなものを課すとFD活動を形骸化させることとなり、教員をFD活動から遠ざける恐れがあるという考えに基づき、授業公開・参観への参加は教員の自主性に任せ、委員会としての数値目標などは掲げてこなかった。その結果、参観者数は毎年なかなか増加しないものの、公開授業数は昨年度、一昨年度に続く増加となった。自身の講義と重なる等の理由で参観が困難（不可能）という声は以前から寄せられていたが、一方で、授業の公開は多くの教員が可能であり、実際に年々、授業の公開が増加していることは、FD活動に積極的に取り組む教員が増えていることを示唆している。参観の有無にかかわらず、公開授業を担当した教員全員が「授業公開・参観報告書」を提出しており、その報告書の内容からも、参加した教員が授業改善に真摯に取り組んでいることがわかる。今後は授業参観の方法自体を見直し、これまでのように1週間だけ公開期間を設けるのではなく、年間を通して自由に公開、参観のできる取り組み方法などを考えるのが効果的と思われる。

(3) FD講演会の開催および学生・教職員ワークショップへの参加

3.1 FD講演会

理工学研究科・工学部との共同企画として講演会を実施した。講師は、同支社大学の山田玲子教授をお招きし、「教学IRの役割と可能性」というタイトルで講演いただいた。

日時：平成26年10月29日（水） 13:30～15:00

場所：鹿児島大学稲森会館

演者：同志社大学社会学部 山田礼子教授

演題：「教学IRの役割と可能性」

参加人数： 理学系教員 15名

工学系教員 48名

他学部教員 5名

事務系職員 19名

3.2 学生・教職員ワークショップへの参加

平成26年12月9日に行われた、学生・教職員ワークショップ「『英語を学ぶ』から『英語で学ぶ』へ」に、理学部から教員5名、学生6名（学部生5名、大学院生1名）事務系職員1名が参加した。

医学部

医学部医学科 FD 活動報告書

1. はじめに

医学科では平成 22 年度より、教育到達目標と 3 つのポリシーによる教育を実践し、アドミッション・ポリシーに基づく入学試験のための面接試験の評価方法について講習会を実施してきたが、平成 25 年度は諸事情により実施されなかった。平成 26 年度からは医学科前期、後期入学試験に 2 段階選抜を実施することとなり、例年より受験者数が減ることが予想された。そのため、受験生 1 人に対する面接時間が例年より多く確保できることとなり、より教員の教育技能を高めることが必要とされた。そのため、本年度の重要な活動として、入試面接担当教員を対象とした講習会を再度実施することとなった。

また、平成 23 年度から全学年の学生を対象として実施している授業評価アンケートも、学生の教育への自主的な取り組み、学習計画と成果、教員の指導等の評価と改善に有効であることから、継続して実施した。

本年度は、学生による授業評価アンケート項目の改善と対象の拡大、入試委員会との共催による講習会の実施を含む活動を行ったので報告する。

2. 学生による授業・実習評価アンケート

平成 26 年度も、前年度と同様に全学年の全科目を対象として学生による授業・実習評価アンケートを実施した。レポートによる評価を行っている科目も含め 1 年から 4 年までの全専門科目 49 科目を対象とした。学習と授業に対する無記名のアンケート用紙を教務係より科目担当者に配布し、科目終了直後の試験時、あるいは授業最終日に担当者がアンケート用紙を配布、回収した。

1 年から 4 年までのアンケート用紙は、学生の学習の実態とカリキュラム、教員の指導方法について具体的な改善点を明らかにするためのアンケートとして検討し、学生自身の学習に対する自己評価 4 項目、科目について 8 項目、講師の指導について 5 項目、全体評価 1 項目とし、各項目について 5 段階の評定尺度で回答し、さらに自由記述欄に自由な意見を記載してもらった。アンケートは学生が記入後、医学教務係に届けられ、速やかに集計して結果と自由記載内容を科目責任者に報告した。

5 年の臨床実習では実習オリエンテーション時に評価の目的、内容、方法を説明した後に、2 週間毎に小グループでの実習が終了するたびにアンケートを実施

した。アンケートは無記名で、学生が記入後、学生自身で学務課医学教務係に届けられ、教員や指導医の目に触れることはない状態で実施した。

6年の選択実習では、3ヵ月間の実習の後に各自が選択をした実習先（学内、鹿児島県内、県外、海外）について、アンケートを実施、それぞれ集計をした。

5年から6年までのアンケート用紙は、自身の学習に対する評価6項目、実習計画・実施について5項目、指導について1項目、全体評価1項目とした。項目毎に3～11段階での評定尺度における回答を集計し、自由記述欄に自由な意見を記載してもらった。

アンケート結果

1～4年の49科目から4037枚（平均82枚/科目）、5年次臨床実習では2248枚（平均98枚/診療科）、6年次臨床実習では326枚（平均8枚/診療科）の回答が得られた。1～4年の科目では自身の学習に対する評価4項目、科目について8項目、講師の指導について5項目、全体評価1項目のアンケートを、それぞれの項目について5段階評価で行った。

5年の臨床実習では前期・後期に分けて各期毎に集計し、全てのアンケート結果は医学科FD部会、医学部教務委員会医学科部会、医学科会議に報告した。医学科のアンケート項目には、学生の自主的な学習への取り組みを評価する項目がある。1～4年次科目において4（質問内容の活動について行ったかの問いに対し、「どちらともいえない」～「非常に行った」の間の評価）の回答は44.4%、5（「非常に行った」の評価）の回答は12.9%であり、自主的な学習が十分に行われているとは言えない状況であった。

5年の臨床実習では回答4が54.3%、5の回答32.6%となり、非常に自主的に臨床現場での学習に取り組んでいることが明らかになった。

1-4年 講義・実習等 49科目平均	1 全く行わ なかった	2	3 どちらとも いえない	4	5 非常に 行った	平均	SD
積極的に学習した(質問・予習・復習)	1.1%	6.1%	35.5%	44.4%	12.9%	3.02	0.68
教科書や参考文献で広く、深く学習した	1.7%	10.0%	35.5%	41.0%	11.8%	2.90	0.71
原理の理解や臨床への応用を考えながら学習した	1.1%	5.6%	33.0%	46.2%	14.1%	3.06	0.68

5年 臨床実習 全体平均	1 全く行わ なかった	2	3 どちらとも いえない	4	5 非常に 行った	平均	SD
積極的に学習した(質問・予習・復習)	0.1%	1.4%	9.7%	54.3%	34.6%	4.22	0.06
教科書や参考文献で広く、深く学習した	0.1%	1.4%	9.5%	55.1%	33.9%	4.21	0.06

臨床実習では診療参加型実習の比率を増やすことが求められているが、アンケート結果では診療参加型の割合は39.3%で、この3年で上昇し改善が認められており、アンケート集計とフィードバックの効果が推測されるため、次年度

も同様に継続していけばさらなる改善が予想される。

なお、26年度はアンケート未回収の科目が3科目あり、今後のアンケート実施、回収の方法について検討が今後必要と考えられた。また、授業評価アンケート結果に対する担当科目へのフィードバックについても今後の検討課題と考えられる。

5年 臨床実習 平均	H24			H25		H26	
	1期	2期	3期	前期	後期	前期	後期
診療参加型(割合)	3.56	3.62	3.45	3.6	3.8	3.98	3.89
この実習を来年度の学生にも勧めたいと思う	4.44	4.57	4.61	4.46	4.44	4.55	4.58

3. 授業公開

医学科で本学の医学教育に関わる教員が希望し、科目責任者が了承した場合は、授業参観が可能であるが、平成26年度の授業公開、授業参観は実施していない。

4. 入学試験における面接の評価方法についての講習会

日時：2014年12月22日(月)15:00～17:00

主催：医学部FD委員会医学科FD部会

共催：医学部入試委員会医学科部会

会場：保健学科会議室

講師：佐野輝、

金蔵拓郎（入試委員会医学科部会長）

医学部FD委員会医学科部会委員

上村裕一、小片守、矢沢和人、田川まさみ

参加者：医学部入試面接試験担当予定教員

（前年度までの講習会を未受講のもの）

概要：受験生の能力を引き出す面接を行い、医学部医学科のアドミッション・ポリシーに基づいた評価基準に従った、公平で信頼性の高い評価を行う方法を講義とロールプレイで習得した。

総評：入試委員会医学科部会と協同で企画し、開催した講習会には多くの参加が得られ、参加者の感想も大変有意義であったという意見が多く、評価も非常に良好であった。そのため次年度以降も講習会を実施していくのが望ましいと考えられる。

講習会では、面接時間が2～3分長くなっただけでも、例年とは時間が長く感じられたという意見が多く出され、質問内容について対応が必要なのが判明した。本講習会の開催により、2段階選抜を実施した場合の面接に対して課題を見つけることができ、今年度の入試面接に大いに役立ったのではないかと推測される。

5. おわりに

平成26年度は、昨年度と同様に学生による授業・実習評価アンケートを行い、平成25年度は開催できなかった入試委員会医学科部会と共同で企画・共催した面接の評価方法についての講習会を開催した。面接試験担当教員の面接能力の向上に非常に有意義であったが、26年度から面接時間が延長することに対する対応の検討にも意義があった。授業・実習評価アンケートの結果からは、これまでと同様に未だ自主的な学習が十分に行われているとは言えない状況が判明し、今後の重要な課題と考えられる。また、臨床実習に関しては、診療参加型実習の比率がこの3年で上昇しているが、さらに改善が求められると考えられた。

FD委員会の活動は、当学科の大学教育及び医学教育の現状の実態を測定してその結果を情報提供し、さらに入試面接を含む医学教育に関する情報と技術を提供することにより、教員の教育改善に寄与していると考えられた。

平成26年度 医学部保健学科 FD 活動報告

1. はじめに

平成26年度医学部FD委員会保健学科部会の活動として、平成25年度に引き続き

- 1) 学生による授業評価アンケート
- 2) 教員による授業公開・授業参観
- 3) 講演会

を実施した。それぞれの活動について、以下に概略を述べる。

2. 学生による授業評価アンケートの実施とその結果の検討並びに授業評価結果の教員へのフィードバック

1) 対象科目と方法

実習、演習と非常勤講師による授業を除く、全ての授業科目を対象に、学生による授業評価を例年通り実施した。学生による授業評価は各授業の最終日に学生にアンケート票を配布し、無記名で記載してもらい、学生代表に回収し、封筒に入れ、厳封し、学務課に提出してもらった。授業評価の中の評価項目は以下の通りである。「学生自身の自己評価」、「授業について」、「教員について」、そして「自由記述」から構成されている。

授業評価アンケート

学生自身の自己評価

101 出席状況は良好だった。

(5:非常に良好だった、4:かなり良好だった、3:良好だった、2:良くなかった、1:非常に良くなかった)

102 授業に意欲的に取り組む努力をした。

(5:非常に努力した、4:かなり努力した、3:努力した、2:あまり努力しなかった、1:努力しなかった)

103 授業の予習あるいは復習をした。

(5:非常に予習復習をした、4:かなり予習復習をした、3:予習復習をした、2:あまり予習復習をしなかった、1:予習復習をしなかった)

授業について

201 授業科目にふさわしい内容だった。

(5:非常にふさわしかった、4:かなりふさわしかった、3:ふさわしかった、2:あまりふさわしくなかった、1:ふさわしくなかった)

202 シラバスの内容は明確だった。

- (5：非常に明確であった、4：かなり明確であった、3：明確であった、2：あまり明確でなかった、1：明確でなかった)
- 203 授業内容はシラバスに沿ったものであった。
(5：非常に沿っていた、4：かなり沿っていた、3：沿っていた、2：あまり沿って
いなかった、1：沿っていなかった)
- 204 授業の難易度は以下の通りだった。
(5：丁度良かった、4：やや簡単だった、3：簡単だった、2：かなり難しかった、1：
非常に難しかった)
- 205 この授業を他の学生にも勧めたいと思う。
(5：非常にそう思う、4：かなりそう思う、3：そう思う、2：あまり思わない、1：
思わない)
- 206 この授業は自分にとって価値があった。
(5：非常にそう思う、4：かなりそう思う、3：そう思う、2：あまり思わない、1：
思わない)

教員について

- 301 話し方は明瞭で聞きやすく、説明も分かりやすかった。
(5：非常にそう思う、4：かなりそう思う、3：そう思う、2：あまり思わない、1：
思わない)
- 302 授業は時間どおり行われた。
(5：非常にそう思う、4：かなりそう思う、3：そう思う、2：あまり思わない、1：
思わない)
- 303 教師の授業に対する熱意を感じた。
(5：非常に感じた、4：かなり感じた、3：感じた、2：あまり感じなかった、1：感
じなかった)
- 304 授業中、オフィスアワー等で、質問や相談に丁寧に応じてくれた。
(5：非常にそう思う、4：かなりそう思う、3：そう思う、2：あまり思わない、1：
思わない)

自由記述

この授業をより良くするための意見や要望、受講者としての自分を省みた上での感想などを自由に書いてください。

2) 学生による授業評価アンケートの結果

前期開講分は 60 科目に依頼し、59 科目からアンケートを回収した (回収率 98%)。後期開講分は 58 科目に依頼し、全科目から回答を回収し得た (回収率 100%)。前期開講、後

期開講別にアンケートの中の各項目について評価点（1～5）の平均値と標準偏差を求めた。点数が高いほど評価が良いことを示している。また、前期開講科目と後期開講科目を合わせた全体での評価点の平均値も求め、過去5年間との比較を行った。26年度前期開講科目の平均点と26年度後期開講科目の平均点を表1に示す。表2には、26年度を含めた6年間における前期・後期を合わせた科目全体での平均点の推移を示した。

表1. 平成26年度学生による授業評価の前期・後期別の点数の比較（平均点）

質問項目	前期開講科目	後期開講科目
出席状況は良好であった	4. 6 7	4. 6 2
授業に意欲的に取り組む努力をした	4. 3 2	4. 2 9
授業の予習あるいは復習をした	3. 6 0	3. 5 5
授業科目にふさわしい内容だった	4. 4 9	4. 5 2
シラバスの内容は明確だった	4. 3 8	4. 4 3
授業内容はシラバスに沿ったものであった	4. 3 9	4. 4 4
授業の難易度は丁度良かったか	4. 3 1	4. 3 8
この授業を他の学生にも勧めたいと思う	4. 2 5	4. 3 0
この授業は自分にとって価値があった	4. 3 7	4. 4 2
教員の話し方は明瞭で聞きやすく、説明も分かりやすかった	4. 3 1	4. 3 6
授業は時間どおり行われた	4. 4 0	4. 4 4
教師の授業に対する熱意を感じた	4. 4 2	4. 4 6
授業中、オフィスアワー等で、質問や相談に丁寧に応じてくれた	4. 2 5	4. 2 9

*各質問項目に対して1点から5点の5段階で評価

表2. 過去5年間の学生による授業評価の点数の推移（平均点）

質問項目	21年度	22年度	23年度	24年度	25年度	26年度
出席状況	4. 6 5	4. 6 6	4. 6 7	4. 6 2	4. 6 8	4. 6 7
意欲的な取り組み	4. 2 4	4. 1 9	4. 2 3	4. 2 1	4. 3 3	4. 3 2
予習・復習	3. 2 4	3. 2 9	3. 3 6	3. 3 7	3. 6 6	3. 6 0
内容のふさわしさ	4. 4 6	4. 4 7	4. 5 0	4. 4 8	4. 4 9	4. 4 9
明確なシラバスの内容	4. 2 7	4. 3 4	4. 3 8	4. 3 8	4. 3 6	4. 3 8
授業内容とシラバスの整合	4. 2 8	4. 3 4	4. 3 6	4. 3 9	4. 3 6	4. 3 9
適切な難易度	4. 3 9	4. 3 0	4. 2 6	4. 3 3	4. 3 3	4. 3 1
他学生への履修の勧め	4. 2 0	4. 2 2	4. 2 1	4. 2 2	4. 2 5	4. 2 5
自分にとっての価値	4. 3 4	4. 3 8	4. 3 6	4. 3 4	4. 3 8	4. 3 7

わかりやすい説明	4. 2 8	4. 2 9	4. 2 6	4. 2 7	4. 3 0	4. 3 1
時間どおりの開講	4. 3 4	4. 3 7	4. 4 5	4. 4 2	4. 4 0	4. 4 0
授業に対する熱意	4. 4 0	4. 4 0	4. 3 9	4. 3 8	4. 4 0	4. 4 2
質問や相談への対応	4. 2 6	4. 2 7	4. 2 7	4. 2 4	4. 2 6	4. 2 5

*各質問項目に対して1点から5点の5段階で評価 質問項目の文言は表1と同じ。

3) 結果の解釈

①「学生自身の自己評価」について

平成26年度の前期と後期の比較では、後期では前期に比べ学生自身の授業に対する自己評価が3つの項目全てで低下していた。また、「授業の予習あるいは復習をした」という項目は前期、後期いずれも低い点数であったこと(3.60と3.55)は特筆すべきであると思われた。学生の授業への積極的な取り組みが十分になされていないことがうかがえる。なお、この26年度に見られた結果は25年度でも同様にみられていた。

②「授業について」と「教員について」

「学生自身の自己評価」についてとは対照的に、平成26年度の前期と後期の比較では、後期では前期に比べ学生自身の授業に対する自己評価が全てで高かった。6年間の推移については大きな変動はみられていない。

4) 学生による授業評価結果アンケート結果の教員へのフィードバック

各授業科目についての各学生からのアンケート票(自由記述も記載されたものあり)は当該科目の担当教員に返して、今後の授業方法についての参考資料としてもらった。自由記述には、特に教員に伝えたメッセージが具体的に記載されており、教員にとって貴重なフィードバックとなっていると思われた。

3. 教員による授業公開・授業参観

1) 方法

各学期(前期・後期)が始まってから、授業を担当する保健学科全教員に対して、“他の教員に自分の授業を公開することを希望するか(複数科目可)、希望する場合はその日時を提示して下さい”と依頼し、公開授業科目の日時を記したリストを作成し、次に、そのリストを全教員に示し、“公開希望が出された授業科目のうち、どの参観を希望するか(複数参観可)”を募った。

授業参観をした教員には「授業参観報告書」に意見を記載し、学務課に提出してもらった。報告書の記載項目は、「本日の講義の狙いをどのように受け取りましたか」、「講義の分かりやすかった点についてお聞かせください」、「工夫していると感じた点、自分の授業に参考になると感じた点などについてコメントして下さい」、「その他コメントがあったらお書きください」であった。

平成26年度は教員による授業公開・授業参観がより多くの教員により行えることを目指

して、授業公開の希望とりを例年より早め、前期は4月25日に、後期については9月25日にそれぞれ授業公開を募るメールを送った。

2) 結果

26年度前期は26年5月13日より7月22日までの期間で、授業公開希望教員数は14名、公開授業科目延べコマ数は47であった。一方、授業参観希望教員数はその間10名で、参観希望延べコマ数は15コマであった。

後期については、26年10月20日より27年1月20日の期間に開講された授業について、授業公開希望教員数は10名、延べ公開授業コマ数は42であった、一方、授業参観希望教員は3名で、参観希望延べコマ数も3コマであった。

表3に、過去4年間における前期・後期合わせた公開希望授業科目（延べコマ数）と参観希望科目（延べコマ数）を示す。26年度は公開希望コマ数は増えたが、参観授業コマ数は減少した。

表3. 授業公開延べコマ数と授業参観延べコマ数の推移

	22年度	23年度	24年度	25年度	26年度
延べ公開授業科目数（コマ）	84	84	95	80	89
延べ参観授業数（コマ）	26	43	28	24	18

3) 結果の解釈

授業公開・授業参観をFD部会長が教員に働きかけてはいるが、功を奏していないことが明らかである。

4) 教員へのフィードバック

授業参観報告書はそれぞれ当該公開科目の担当教員にフィードバックした。

4. 講演会

医学部保健学科では平成24年度から看護学専攻・理学療法学専攻・作業療法学専攻の3専攻合同授業として、1年次から4年次にわたる「チーム医療授業科目群」をカリキュラムの中に組み込んでいる。

「チーム医療授業科目群」のさらなる充実に向けて、25年度はチーム医療教育の先進大学である北里大学から講師を招き、講演会を開催したが、平成26年度も引き続き「チーム医療」に関する講演会を25年度とは異なる講師を招き、開催した。

講演会名：長崎大学におけるチームアプローチ教育

～導入の背景と改訂作業を振り返って～

講師：長崎大学理事（教学担当）・副学長 松坂誠應先生

日時：平成26年10月31日 17時～19時

場所：鹿児島大学医学部鶴陵会館 中ホール

主催：鹿児島大学医学部FD員会保健学科部会、共催：鹿児島大学医学部FD員会医学科

部会

講演内容：英国サウザンプトン大学でのチーム医療教育、並びに長崎大学における多職種連携プログラム（特に統合ケア科目群の中でのチームアプローチ）について紹介され、その有用性と今後の課題が述べられた。佐野医学部長、木佐貫保健学科長をはじめ、57名の教員・学生が聴講した。講演会の後、活発な質疑・応答がなされ、鹿児島大学医学部における今後のチーム医療教育推進に向けてのFD活動に寄与するところが大きであった。



講演会の演者 松坂誠應先生



挨拶をする佐野医学部長



講演の後の質疑・応答

5. 平成26年度に特に行った取組

教員による授業公開・授業参観こそが教員自身が行える最も身近で自発的なFD活動であると考え、FD委員2年目は、この授業公開・授業参観をより一層推進するよう取り組んだ。具体的には、授業公開・授業参観への参加要請の通知を例年より1ヶ月以上早くした。しかし、授業公開コマ数は前年度より9コマ増加したものの、授業参観コマ数は前年度より6コマ減少した。

6. 終わりに

授業公開・参観は教員が容易にかつ独自で行うことができ、しかも直接学生への教育効果に影響することより、最も重要なFD活動であると考えられるが、公開科目及び参観教員ともに少なく、かつ参加教員も固定化する傾向があるようである。

教員はまずは学生のためにある、との自覚に基づき、全学的な運動とするとともに、部局内でFD委員会が中心となり、FD活動の意義をより強く広報していくことが必要であると2年間FD委員を務めて感じた。

(文責 医学部FD委員会保健学科部会長 藤野 敏則)

歯学部

歯学部 FD 活動報告

1. はじめに

歯学部 FD 委員会では、学部教育や学部組織、病院組織運営に関わる多面的な領域について、教員の能力開発に関わる様々な活動を企画、実施している。本年度は、従来からの全学的な取り組み以外に、今年度からの新規取り組みとして教員の「教育業績評価」の試行等を行った。主な活動項目リストを下記に記す。本報告では各活動について、その概要を記載する。

1) 平成 27 年度の事業リスト

- ・ 学生による授業評価
- ・ 授業公開・授業参観による教員相互の評価
- ・ 学部 6 年生対象の卒前教育に対する卒業時アンケート調査
- ・ 外部講師を招いての FD 講習会
会（計 6 回実施）
- ・ 共用試験歯学系 CBT 作問スキルアップに関する講習会
- ・ 共用試験歯学系 CBT 作問スキルアップに関する研修会
- ・ 外部教育系セミナーへの参加者または指導者としての教員派遣
- ・ 教員の「教育業績評価」の試行

2. 歯学部 FD 委員会の活動状況

1) 平成 26 年度歯学部 FD 委員会 委員構成

委員長：田口則宏（歯科医学教育実践学分野 教授）

委員：小松澤均（口腔微生物学分野 教授）

宮脇正一（歯科矯正学分野 教授）

後藤哲哉（歯科機能形態学分野 教授）

事務所掌：歯学教務係

2) 平成 26 年度歯学部 FD 委員会 開催状況

①第 1 回歯学部 FD 委員会（平成 26 年 4 月 4 日開催）メール会議

- 議題
- ・ 平成 25 年度歯学部 FD 活動報告について
 - ・ 平成 26 年度第 1 回 FD 講習会の開催について

②第 2 回歯学部 FD 委員会（平成 26 年 4 月 21 日開催）

- 議題
- ・ 平成 26 年度歯学部 FD 活動計画について
 - ・ 平成 26 年度歯学部 FD 活動経費要求について

報告

- ・ 平成 25 年度歯学部 FD 委員会予算執行状況報告

③第 3 回歯学部 FD 委員会（平成 26 年 6 月 10 日開催）メール会議

- 議題
- ・ 平成 26 年度第 2 回 FD 講習会の開催について
 - ・ 平成 26 年度第 3 回 FD 講習会の開催について
 - ・ 授業公開・授業参観について

- ④第4回歯学部FD委員会（平成26年7月10日開催）
 - 議題 ・授業評価（期末）の実施について
 - ・「ベストティーチャー賞（仮称）」について
- ⑤第5回歯学部FD委員会（平成26年7月30日開催）メール会議
 - 議題 ・医歯研FDの共催について
- ⑥第6回歯学部FD委員会（平成26年10月16日開催）メール会議
 - 議題 ・教員の教育業績評価について
 - ・FD活動としての歯科医師国家試験問題の模擬受験について
- ⑦第7回歯学部FD委員会（平成26年12月10日開催）
 - 議題 ・授業評価アンケートについて
 - ・教育業績評価の方法について
 - ・第4回FD講習会の開催について
 - ・第5回FD講習会の開催について
 - ・医歯研FDの共催について
- ⑧第8回歯学部FD委員会（平成27年2月5日開催）メール会議
 - 議題 ・平成26年度第6回FD講習会の開催について
 - ・平成26年度第7回FD講習会の開催について

2. 学生による授業評価

歯学部FD委員会では、年間のFD活動の一環として「学生による授業評価」について、一昨年度に更新した新しい評価票を用いて実施した。この授業評価は平成26年度に開講した全ての授業を対象に、各授業の終了時に適宜実施した（評価への参加は各教員の自由意思に任せた）。評価対象者は各授業担当教員であり、職位は教授、准教授、講師、助教であった。本調査票は記名式とし、学生が評価記入後、各学年のクラス委員が回収し、学務課歯学教務係へ提出してもらった。また無記名での提出を希望する場合は、所定のボックスへ各自で提出してもらうよう依頼した。得られた記入済み調査票はOCRにより読み込み処理後、集計作業が行われた。

次表に調査結果を示す。集計の結果、本調査に参加した授業数は前年度より7件増え、合計37件であった。個別の数値については、各授業の難易度や背景、授業担当者もばらばらのため、総体としての数値で論ずることは避ける。個別のデータは集計直後、各授業担当者に生の調査票をPDF化し返送することにより、学生の意見や指摘事項について、次の授業へすぐに生かせるような体制を、昨年度より構築した。そのため、教員も調査に参加するモチベーションが上がり、調査の手法としてはある程度機能したと考えられる。また、自由記載欄には多くのコメントが寄せられており、授業改善に直接つながるような内容が多かった。今年度までは、本授業評価の実施は各教員の判断にゆだねていたが、次年度以降は、全ての授業において学生からの授業評価を得て、個々の授業において学生視点のフィードバックをもとに授業内容、方法等を見直すとともに、学部全体として本質的な教育改善に結びつくような体制に変更する予定である。

	2年生	3年生	4年生	6年生
回答数	8	10	17	2
1. 今日の授業はあなたにとって有益と感じましたか？	3.79	3.79	3.7	3.52
2. 今日の授業は理解できましたか？(分かりやすかったですか？)	3.64	3.65	3.6	3.67
3. 教員の声や話し方は聞き取りやすかったですか？	3.71	3.72	3.7	3.75

3. 授業公開・授業参観における教員相互の評価

歯学部教員による授業公開・授業参観による相互評価は、全学的な取り組みの一環として例年実施しており、平成26年度については6月30日(月)～7月11日(金)、および11月25日(月)～12月5日(金)の2度の期間で行われた。この期間の歯学部における授業は原則として全て公開とし、教員はFD活動の一環として、随時授業参観することを可能とした。授業を参観した教員は、授業修了後に次のアンケートへの記載を行った。質問項目は下記の14項目とし、5：極めて優れている、4：良い、3：普通、2：やや劣る、1：よくない、の5段階での評価とした。結果を下記に示す。

	A	B	C	D	E
シラバスに沿った授業がなされたか	3	4	4	3	3
授業の主題・概要・到達目標等の説明があったか	2	3	4	3	3
授業の準備がよくなされていたか	3	4	4	4	3
教材(プリント, スライド, 教科書, 参考書, 板書等)は適切であったか	4	3	4	4	3
実習器具・材料は適切であったか	0	0	0	0	0
実習は授業内容の理解に役立ったか	0	0	0	0	0
明瞭で聞き取りやすい話し方であったか	3	4	4	4	3
質問や学生による発表の機会を与えたか	3	3	4	4	2
質問をしやすい雰囲気であったか	2	3	4	4	2
適切な難易度であったか	3	4	4	4	3
学習意欲が刺激されたか	3	4	4	4	3
教員が学問分野の専門家として信頼できたか	4	4	4	4	3
教育に対する熱意が感じられたか	3	4	4	4	3
上記項目以外の観点も含めた「総合的な評価」	3	4	4	4	3

授業参観に参加した教員数は5名であり、極めて少ない結果となった。本データは調査数が少なく個別の項目について具体的に論じるには限界があるため、避けることとする。この取り組みを通じて、教員が同僚の授業を見学することにより様々な意味で刺激を受け、よりよい授業の作り方を考え、自己の授業方法のあり方を再考するきっかけになればよいのであるが、未だ十分その趣旨や意義が各教員に浸透しておらず、本事業に対する広報のあり方についても見直しが迫られている。教員が相互の授業を見学し互いを評価・批判し合うには、互いの遠慮もあり、それ相応の環境整備が必要不可欠である。そのためには今後、本活動の目的や意義を広く周知する手段を検討するとともに、より多くの教員の本取り組みへの参加を促す必要があると考えられた。

4. 学部6年生対象の卒前教育に対する卒業時アンケート調査

歯学部 FD 委員会では歯学部教育委員会とともに、学部 6 年生の卒業時に、6 年間受けてきた教育全体の振り返りという意味で、各種教育内容、活動、施設などについて、「歯科医師になる立場」から有効であったかどうかについて、無記名式アンケート調査を実施している。本年度は、平成 26 年度学位記授与式が挙行された平成 27 年 3 月 25 日に、歯学部 6 年生を対象に行った。調査項目は下表の 18 の各種教育内容、活動、施設などについて、5：極めて有効であった、4：どちらかと言えば有効であった、3：どちらとも言えない、2：どちらかと言えば無意味であった、1：全く無意味であった、の 5 段階で評価を行うよう依頼した。以下にその結果を示す。

<回答者に関する事項>

	鹿児島県	鹿児島以外の九州	左記以外
出身	11	26	9
卒業研修先	20	10	15

<鹿児島大学入学後の教育内容、活動、施設などについて、歯科医師になる立場で、あなたにとって有効であったかどうか、回答してください>

	5:極めて有効であった	4:どちらかと言えば有効であった	3:どちらとも言えない	2:どちらかと言えば無意味であった	1:全く無意味であった	平均
オリエンテーション	4	14	20	5	3	3.24
共通教育	4	14	19	7	2	3.24
導入系科目	7	25	10	3	1	3.74
基礎系科目	17	22	7	0	0	4.22
臨床系科目	25	15	6	0	0	4.41
医系科目	11	21	13	1	0	3.91
統合系科目	9	23	12	2	0	3.85
臨床実習	25	15	6	0	0	4.41
選択科目	10	14	18	2	1	3.67
共用試験CBT	15	25	6	0	0	4.20
共用試験OSCE	12	25	8	1	0	4.04
総合歯科学	8	23	12	1	1	3.80
チューター制度	7	17	13	7	1	3.49
課外活動	15	19	10	0	1	4.04
学術情報基盤センター	6	14	21	3	0	3.52
図書館	22	20	4	0	0	4.39
学習室	19	16	6	4	1	4.04
学生控室	12	16	14	3	1	3.76
学務課	19	15	10	2	0	4.11

調査の結果、評価の平均値が「4」を超えた項目は、「基礎系科目」、「臨床系科目」、「臨床実習」、「共用試験 CBT」、「共用試験 OSCE」、「課外活動」、「図書館」、「学習室」、「学務課」であった。質問が「歯科医師になる立場で」ということであり、また調査時期が歯科医師国家試験合格発表直後であったことから、特に「臨床実習」や「臨床系科目」の項目が高く評価されたことは理解しやすい。相対的に評価が低い傾向であった教育内容は、教育を行った時期と調査時期のずれによる影響の可能性はあるが、学生のニーズに合っていない教育内容や改善の必要なカリキュラムや組織であった可能性もあり、今後詳細に検討していく必要がある。

5. 平成 26 年度第 1 回歯学部 FD 講習会

- 1) 講 師：河野文昭先生（徳島大学病院 総合歯科診療部教授、病院情報センター長）
- 2) 講演タイトル：「電子カルテで変わること、変えること」
- 3) 日 時：平成 26 年 5 月 9 日（金）18：00～19：30
- 4) 場 所：歯学部第 3 講義室
- 5) 参加者：歯学部教職員 63 名
- 6) 内 容

徳島大学病院総合歯科診療部教授、病院情報センター長の河野文昭先生を招聘し、FD講習会を開催した。河野先生は歯科医師でありながら、大学病院全体の医療情報を統括する病院情報センター長を担当しており、歯科医師の立場から病院情報システムを理解している全国でも数少ない先生である。病院医療情報の概要や特性等を解説して頂くとともに、本院で近い将来導入が検討されている電子カルテに関して、その導入のプロセスや運用方法、効果や、それらに付随する問題点、注意点等について、経験に基づき詳細に情報提供頂いた。

6. 平成 26 年度第 2 回歯学部 FD 講習会

- 1) 講 師：前田健康先生（新潟大学歯学部長）
- 2) 講演タイトル：「日本における歯学教育認証評価の方向性と今後の課題」
- 3) 日 時：平成 26 年 6 月 19 日（金）18：00～19：30
- 4) 場 所：歯学部第 3 講義室
- 5) 参加者：歯学部教職員 90 名
- 6) 内 容

新潟大学歯学部長の前田健康先生を招聘し、FD講習会を開催した。前田先生は文部科学省補助事業「歯学教育認証制度等の実施に関する調査研究」における歯学教育認証評価検討WG幹事会メンバーであり、この領域における全国的な先駆者である。今回の講演では、歯学国際認証評価制度導入研究の背景と認証評価項目案、および今後の展望について、極めて明快で具体的な情報提供を頂いた。先行する薬学系、医学系とともに、近い将来に導入が予定されている「歯学教育認証評価制度」を本学において検討する上で大変貴重な機会となった。

7. 平成 26 年度第 3 回歯学部 FD 講習会

- 1) 講 師：平田雅人先生（九州大学歯学研究院 口腔常態制御学講座 教授）
- 2) 講演タイトル：「科研費獲得のポイント」
- 3) 日 時：平成 26 年 8 月 29 日（金）18：00～19：30
- 4) 場 所：歯学部第 3 講義室
- 5) 参加者：歯学部教職員 55 名
- 6) 内 容

講演者の九州大学歯学研究院口腔常態制御学講座教授の平田雅人先生は、長年にわたり世界的に著名な研究を推進されており、科研費をはじめ数多くの外部資金を獲得した実績をお持ちである。本講習会では、科学研究を円滑にかつ効率的に推進するための、外部資金獲得に関する具体的な情報についてご講演頂いた。

8. 平成 26 年度第 4 回歯学部 FD 講習会

(共用試験歯学系 CBT 作問スキルアップに関する講習会)

1) 目的

共用試験歯学系 CBT において、より質の高い作問を行うとともに、作問の教育活動上の意義に対する認識を深め、教員の教育能力開発に資するために、学内の CBT 作問委員会コアメンバーおよびアドバイザーが講師を務める講習会を開催した

2) 日時

平成 27 年 1 月 14 日 (水) 18:00~19:30

3) 場所

歯学部第 3 講義室

4) 進行

菊地聖史先生 (歯科生体材料学分野)

5) 講師

田口則宏先生 (歯科医学教育実践学分野)

梶山加綱先生 (歯科麻酔全身管理学分野)

村口浩一先生 (冠ブリッジ科)

犬童寛子先生 (顎顔面放射線学分野)

田松裕一先生 (人体構造解剖学分野)

岩下洋一朗先生 (歯科医学教育実践学分野)

6) 参加者

歯学部教員: 65 名

7) 講演テーマおよび内容

本学部では共用試験歯学系 CBT の作問を、全講座を挙げて取り組んでいる。本年度は平成 26 年 12 月より作問を開始し、例年通り共用試験実施評価機構からの正式な作問依頼が来る前にある程度の作業を進めておくようスケジュールを組んだ。各講座への作問依頼は 12 月下旬、提出締め切りを 2 月上旬とし、その作問作業に直接的な参考となるように本講習会を企画した。過去数年間、本学の共用試験歯学系 CBT 作問の採択率が全国で上位であったが、前年度は全国平均を上回ってはいたものの、結果としては低下していた。そこで本年度は、より丁寧な作問を心掛ける方針とした。

「モデル・コア・カリキュラムと具体的な作問方法について」

- ・モデル・コア・カリキュラム改訂と作問の割り振り
- ・PC・セキュリティ
- ・画像の取り扱い

・作問のコツ

9. 平成 26 年度第 5 回歯学部 FD 講習会

- 1) 講 師：古屋 保先生（鹿児島大学 学術情報基盤センター 准教授）
- 2) 講演タイトル：「新メールシステムへの移行について」
- 3) 日 時：平成 27 年 1 月 20 日（金）17：30～18：30
- 4) 場 所：歯学部第 3 講義室
- 5) 参加者：歯学部教職員 52 名
- 6) 内 容

平成 27 年 2 月に鹿児島大学全体で運用を開始予定の新メールシステムについて、移行作業の具体的な方法や、新メールシステムの設定法や利用法、トラブルを回避するための方策等について、詳しい解説を行っていただいた。

10. 平成 26 年度第 6 回歯学部 FD 講習会

- 1) 講師および講演タイトル
樋口勝規先生（九州大学病院 口腔総合診療科 教授）
「周術期口腔機能管理 ― 医科歯科連携医療への取り組み」
梅田正博 教授（長崎大学大学院医歯薬学総合研究科 口腔腫瘍治療学分野）
「周術期口腔機能管理の標準化とエビデンス ～大学歯学部の役割～」
- 2) 日 時：平成 27 年 3 月 3 日（火）17：00～19：00
- 3) 場 所：歯学部第 3 講義室
- 4) 参加者：歯学部教職員 83 名、歯学部 5 年生 45 名
- 5) 内 容

鹿児島大学病院で、昨年末より医科病棟で実施している歯科医師による周術期口腔管理について、先行している九州大学および長崎大学の教員にお越しいただき、極めて具体的かつエビデンスに基づく貴重な情報を数多く頂いた。現時点での本院の周術期口腔管理実施体制のあり方について、多面的に検討する機会となった。

11. 平成 26 年度第 7 回歯学部 FD 講習会

- 1) 講師および講演タイトル
坪井明人先生（東北メディカル・メガバンク機構 教授）
「東日本大震災における歯科医療支援について」
緒方 隆先生（鹿児島県 保健福祉部保健医療福祉課 課長補佐）
「鹿児島県における災害対策について」
- 2) 日 時：平成 27 年 3 月 16 日（月）18：00～20：00

- 4) 場 所 : 歯学部第3講義室
- 5) 参加者 : 歯学部教職員 35 名
- 6) 内 容

豊かな自然に囲まれている鹿児島県は、一方で自然災害の多い地域でもある。本講演会では、東日本大震災における東北大学の歯科医療支援に関する具体的な取組について情報提供をいただき、鹿児島大学における災害医療のあり方について検討する機会となった。また、鹿児島県における大規模災害時の大学と行政とのかかわり、連携について考える機会となった。

1 2. 共用試験歯学系 CBT 作問スキルアップに関する研修会

1) 目的

共用試験歯学系 CBT において、作問における基本的事項の理解を深めるとともに、より質の高い作問を行うために、教育委員会共用試験実施部会における CBT 作問委員会主催のグループ内ブラッシュアップに参加し、作問作業の実際を体験する。

2) 日時および場所

<第1回>

平成 27 年 2 月 3 日 (火) 18:00~20:00

C グループ : 医歯学総合研究科棟 1 (歯学系) 9 階 第 3 示説室

平成 27 年 2 月 4 日 (水) 18:00~20:00

A グループ : 医歯学総合研究科棟 1 (歯学系) 9 階 第 3 示説室

平成 27 年 2 月 9 日 (月) 18:00~20:00

B グループ : 医歯学総合研究科棟 1 (歯学系) 9 階 第 3 示説室

<第2回>

平成 27 年 2 月 23 日 (月) 18:00~20:00

B グループ : 医歯学総合研究科棟 1 (歯学系) 9 階 第 3 示説室

平成 27 年 3 月 4 日 (水) 18:00~20:00

A グループ : 医歯学総合研究科棟 1 (歯学系) 9 階 第 3 示説室

平成 27 年 3 月 5 日 (木) 18:00~20:00

C グループ : 医歯学総合研究科棟 1 (歯学系) 9 階 第 3 示説室

3) 対象者および参加者

<対象者>

歯学部教員全員

<参加者>

第 1 回 A グループ・ブラッシュアップ : 12 名

B グループ・ブラッシュアップ : 21 名

C グループ・ブラッシュアップ : 13 名

第 2 回 A グループ・ブラッシュアップ : 20 名

B グループ・ブラッシュアップ : 16 名

C グループ・ブラッシュアップ：17名

4) 内容

本学部では共用試験歯学系 CBT の作問を、全講座を挙げて取り組んでいる。歯学部 FD 委員会では、教育委員会共用試験実施部会とともに CBT 問題作成過程を歯学部 FD 活動の一環としてとらえ、歯学部教職員に対して各 CBT 作問グループ (A、B、C グループ) で行われるブラッシュアップに参加してもらい、問題作成上の基本的事項の確認とともに、自らの作問能力向上へ向けて取り組んでもらう機会を設けた。

1.3. 教員の外部研修会への派遣報告

平成 26 年度 文部科学省・大学改革推進等補助金「歯学教育認証評価制度等の実施に関する調査研究」平成 26 年度事業報告 公開シンポジウムへの教員派遣報告

- 1) 参加者：小松澤 均 (口腔微生物学分野 教授)
- 2) 日 時：平成 27 年 2 月 28 日 (土)
- 3) 場 所：リーガロイヤルホテル小倉 (福岡県北九州市)
- 4) 概 要：

本事業は、日本の歯学部が国際標準の教育を実施していることを証明するとともに、国際標準を超えるグローバルかつ優れた歯科医師を養成するために、日本における国際標準の歯学教育認証評価制度等の基盤を構築する目的で実施されている。平成 24 年度より始まった本事業は 3 年目が終了し、一定の成果を見つつある。今回の公開シンポジウムでは、今年度に行ってきた歯学教育認証評価トライアル (九州歯科大学、大阪歯科大学) の実施状況について、評価者側および受審者側双方からの報告があった。この結果をふまえて、評価項目に関する問題点、今後の認証評価制度実施にあたっての体制整備等に関する討論が行われた。

5) スケジュールと講演タイトル：

講演 1：「平成 26 年度歯学教育認証評価事業実施報告」

中嶋正博 (大阪歯科大学)

講演 2：「歯学教育認証評価トライアル基準の紹介」

一戸達也 (東京歯科大学)

講演 3：「歯学教育認証評価トライアル」

前田健康 (新潟大学)、細川隆司 (九州歯科大学)、荒木孝二 (東京医科歯科大学)、田中昭男 (大阪歯科大学)

1.4. 歯学部 FD 委員会委員による学外施設への FD および教育研修活動協力実績

- 1) 「平成 26 年度 プログラム責任者講習会」 歯科医療振興財団主催
平成 26 年 9 月 7～10 日 富士教育研修所 (静岡県裾野市)
参加者：田口則宏 役割：タスクフォース

- 2) 「第6回 歯学教育者のためのワークショップ」日本歯科医学教育学会主催
平成26年12月1～5日 富士教育研修所（静岡県裾野市）
参加者：田口則宏 役割：タスクフォース
- 3) 「第17回 中国・四国地区歯科医師臨床研修指導歯科医講習会」徳島大学病院主催
平成26年12月20～21日 広島大学病院（広島市）
参加者：田口則宏 役割：タスクフォース
- 4) 「平成26年度 鹿児島大学医学部・歯学部附属病院歯科医師臨床研修指導歯科医講習会」
鹿児島大学医学部・歯学部附属病院主催
平成26年11月15～16日 鹿児島大学医学部・歯学部附属病院
参加者：田口則宏 役割：ディレクター

15. 教員の「教育業績評価」の試行

医療系学部教員の業務は一般に、「教育」、「研究」、「診療」に大別される。教員の業績評価を行う際、「研究」活動であれば発表論文、学会報告、特許、外部資金の獲得状況などで評価することができ、また「診療」活動は診療件数、治療実績や保険点数等で比較することが可能である。一方教育業績評価を行うにあたって数値での比較が難しい領域であるため、全国的にあまり行われていないのが現状である。しかしながら高等教育機関の教員の重要な役割は「教育」であり、熱心に教育活動を行っている教員を正しく評価することは極めて重要であると考えられる。また、教員の教育活動を適正に行うことは、近いうちに実施が予定されている「分野別認証評価」においても大切な要素の一つになることが予想されている。

そこで、歯学部FD委員会では、教員の教育活動をできるだけ適正に評価することを目的に、評価方法の開発を検討してきた。今回は、日本医学教育学会業績評価委員会が発表した「教育業績評価シート」のサンプルをベースに、鹿児島大学歯学部版評価シートを作成したので、今回はこれを用いて教育業績評価を進めていくこととした。

なお、今回はトライアルとしての実施であり、評価はあくまで自己申告制とした。本格的な実施に向けて精度を高めていく必要があるため、評価後、多くの情報を集め、改善に結び付けていく予定である。

- 1) 対象：歯学部教員
- 2) 方法：記名式アンケート調査（電子媒体による配布、回収）、自己申告制
- 3) 実施時期：平成27年3月下旬
- 4) 調査項目

【学部教育】

- ① 授業・セミナーの年間コマ数
- ② 授業・セミナー（統合系科目、選択科目以外）への関わり
- ③ 基礎実習への関わり
- ④ 早期体験実習・臨床予備実習・臨床実習・離島実習への関わり

- ⑤ 統合系科目への関わり
- ⑥ 選択科目（研究室配属）への関わり

【大学院教育】

- ① 大学院生指導

【臨床研修・卒後研修】

- ① 研修歯科医指導
- ② 各分野における卒後研修

【試験】

- ① 実施・問題作成

【共用試験、臨床技能試験】

- ① OSCE 運営
- ② CBT 試験問題作問数
- ③ CBT 運営

【FD、教育ワークショップ】

- ① 教育企画および運営（FDなど）

【教育関連外部資金】

- ① 公的助成金

【教育管理】

- ① 大学院・学部教育管理
- ② 教育制度（カリキュラムなど）・環境整備（情報環境含む）
- ③ 初期研修・後期研修教育管理

【広報活動・高大連携】

- ① 高大連携・オープンキャンパス

【学生・研修歯科医支援】

- ① 学生・研修歯科医支援

【表彰・評価・医学業績】

- ① 表彰または業績
- ② 学習者からの自授業・教育評価

【特筆すべき業績（アピールポイント）】

自由記載

工学部

平成26年度 鹿児島大学工学部
ファカルティ・ディベロップメント委員会報告書
(平成27年3月)

鹿児島大学工学部
ファカルティ・ディベロップメント委員会

はじめに

鹿児島大学のFDの方向性を再確認するうえで明示された「鹿児島大学ファカルティ・ディベロップメントに関する指針」が平成26年7月に制定され、目的、定義、大学の責務、部局等の責務、教職員の責務が明確になった。指針に基づく教育の質の向上及び学生支援の円滑な遂行を図る高等教育研究機関としての自覚と、教育と研究が車の両輪のごとく協調的に機能させ、学部教育全体の質の向上と研究の活性化を維持させるシステムの構築は、この指針に基づき、今後、各教職員の工夫がより重要となるだろう。

工学部FD委員会の使命は、上記のことを鑑み、個々の教職員が限られた時間の中で行う教育効果の改善の試みを支援することにより、学部教育全体の質を向上させることにある。

工学部では先進の国際的に通用する分かりやすい教育課程を体系化させるように、①厳格なGPA制度に基づく成績評価、②キャップ制(履修登録単位上限)、③プログラム・シラバスマップ、ナンバーリングの導入、④アドバイザー制による学修指導、⑤チューター(学生相談員)制による学生指導を早い時期から進めてきた。平成26年度にこれらのシステムの体系化が完結し、各制度を有機的に結び付け、効果的なFD活動に繋げる必要がある。本報告は、教職員各位が、FD講演会、授業参観、学生授業アンケートなどのFD活動を通して、教育効果の効率的な改善に利用していただければ、本委員会の使命が果たせたことになる。

本報告書は平成26年度のFD活動報告である。忙しい時期に各委員と学生係員が協力して作成した。評価アンケートのデータ処理等は学科事務支援室の皆さんに作業していただいた。これらさまざまな協力に感謝を申し上げる。なお、従来年度報告書は冊子体として印刷されてきたが、22年度分より恒常的にweb上にPDFで公開されている。本報告書を読んでいただき、工学部FD活動の改善のために委員会活動に関する忌憚のない意見をお寄せいただければ幸いである。

平成26年度鹿児島大学工学部ファカルティ・ディベロップメント委員会
委員長 本間 俊雄

平成26年度 鹿児島大学工学部ファカルティ・ディベロップメント委員会委員

委員長	本間 俊雄	(工学部副学部長, 全学FD委員会委員)	H25. 4. 1 ~ H27. 3. 31)
委員	上谷 俊平	(機械工学科委員, 専門委員会委員)	H25. 4. 1 ~ H27. 3. 31)
委員	寺井 慶和	(電気電子工学科委員, 専門委員会委員)	H26. 4. 1 ~ H27. 2. 28)
	八野 知博	(電気電子工学科専門委員会委員)	H27. 3. 1 ~ H27. 3. 31)
	川越 明史	(電気電子工学科専門委員会委員)	H27. 3. 1 ~ H27. 3. 31)
委員	黒川 善幸	(建築学科委員, 専門委員会委員)	H25. 4. 1 ~ H27. 3. 31)
委員	中里 勉	(環境化学プロセス工学科委員, 専門委員会委員)	H26. 4. 1 ~ H28. 3. 31)
委員	三隅 浩二	(海洋土木工学科委員, 専門委員会委員)	H25. 4. 1 ~ H27. 3. 31)
委員	塗木 淳夫	(情報生体システム工学科委員, 専門委員会委員)	H26. 4. 1 ~ H28. 3. 31)
委員	上田 岳彦	(化学生命工学科委員, 専門委員会委員)	H26. 4. 1 ~ H27. 3. 31)
委員	山本 高師	(理工学研究科等事務部長)	H25. 4. 1 ~ H27. 3. 31)
事務	坂口 智子	(工学系学務課長)	H26. 4. 1 ~)
事務	吉村 大作	(工学系学務課学生係長)	H24. 4. 1 ~)

目次

はじめに

第1章 鹿児島大学の中期目標と工学部のFD活動

第2章 学生による授業評価とそれを生かした授業

- 2.1 学部授業評価アンケート分析結果
 - 2.1.1 学部平均値の推移とその分析結果
 - 2.1.2 機械工学科の推移とその分析結果
 - 2.1.3 電気電子工学科の推移とその分析結果
 - 2.1.4 建築学科の推移とその分析結果
 - 2.1.5 環境化学プロセス工学科の推移とその分析結果
 - 2.1.6 海洋土木工学科の推移とその分析結果
 - 2.1.7 情報生体システム工学科の推移とその分析結果
 - 2.1.8 化学生命工学科の推移とその分析結果
- 2.2 授業計画改善書の各学科の活用状況
 - 2.2.1 機械工学科
 - 2.2.2 電気電子工学科
 - 2.2.3 建築学科
 - 2.2.4 環境化学プロセス工学科
 - 2.2.5 海洋土木工学科
 - 2.2.6 情報生体システム工学科
 - 2.2.7 化学生命工学科

第3章 学科におけるFDとJABEEへの取り組み

- 3.1 機械工学科
- 3.2 電気電子工学科
- 3.3 建築学科
- 3.4 環境化学プロセス工学科
- 3.5 海洋土木工学科
- 3.6 情報生体システム工学科
- 3.7 化学生命工学科

第4章 平成26年度工学部のFD活動の総括と今後のFD活動

- 4.1 平成26年度の工学部のFD活動の総括
 - 4.1.1 平成26年度のFD活動
 - 4.1.2 授業アンケートの実施と授業計画改善書の作成
 - 4.1.3 公開と授業参観の実施
 - 4.1.4 FD講演会の実施
 - 4.1.5 学習成果と質の向上の検討
- 4.2 今年度の工学部FD活動の特徴と今後

第1章 鹿児島大学の中期目標と工学部のFD活動

鹿児島大学の中期計画には、「『進取の精神』(時代を先取りし、物事に果敢に挑戦する気風)を有する人材を育成するためにFD活動等を充実し、教員の教育力向上に向けた取り組みを展開する」と定められており、充実したFD活動の実施を求められている。工学部FD委員会では平成26年度もこの中期計画に沿って活動を行った。

工学部では、全7学科の教育が日本技術者教育認定機構(JABEE)の認定プログラム教育、あるいはJABEEに準拠した国際的に通用する教育を行っている。これまで継続的に実施してきた授業アンケートによる授業改善などのFD活動は、JABEEの求める教育改善のためのPDCAサイクルにうまく取り入れた形で実施されている。平成26年度の第1回工学部FD委員会において、既に学部に着したFD活動を本年度も継続して遂行することが確認され、年度内に次の6つの活動を実施した。

1) 授業アンケートの実施と授業計画改善書の作成

工学部の学生による授業評価アンケートは、平成26年度も例年通り前期7月、後期1月に実施した。また期中頃に中間アンケートも実施した。期末アンケートは、5段階のリッカート尺度評価による15項目の質問と自由記述欄で構成されている。5段階評価(「大いに思う」、「思う」、「どちらとも言えない」、「そうは思わない」、「全くそうは思わない」)は5から1までの値で数値化し、科目ごとの各項目の平均値を評点として集計後、担当教員に学生の記入したアンケート用紙とともに印刷して返却した。評価印刷物には、各学科の評点平均も一緒に記載されており、各授業の評価位置が認識できる。また、各教員は、授業評価を受けて既定のフォーマットに沿って授業計画改善書を提出した。授業計画改善書には平成26年度、25年度、24年度の三年間の各項目の評点の推移と26年度の評価値に対する自己評価と改善対策案を記入することになっている。この改善書は全7学科で学科内での自由な閲覧を可能にしており、各教員の教育の質改善のみならず、各学科の教育の質改善にも利用されている。

2) 授業公開と授業参観の実施

平成26年度は、前期55科目、後期38科目が公開科目となった。これは授業を担当している工学部担当教員のほとんどが自身の担当科目の一つを公開科目としたことを意味する。これらの公開科目に対して、工学部教員による授業参観が前期11件、後期11件実施された。このように平均で公開科目の約24%で実際に参観が行われた。ただし参観の実施は学科間で差が大きい。

3) FD講演会の実施

平成26年度の工学部FD講演会は2回開催された。1回目は理工学研究科と理学部との共催で、稲盛会館ホールにて平成26年10月29日(水)13時30分から15時00分まで、稲盛会館ホールで開催された。講師としてお招きした同志社大学社会学部の山田礼子教授は、鹿児島大学も参加している大学IRコンソーシアムの代表でもあり、「教学IRの役割と可能性」という演題で講演をしていただいた。その詳細な記録は理工学研究科のFD報告書に記載されている。2回目のFD講演会は機械工学科1号棟11教室にて平成26年12月3日水曜日14時30分から16時00分まで、京都工芸繊維大学

教授・柴山 潔 先生を講師に招いて、「エンジニアリングデザイン教育のすすめ」という演題で講演をしていただいた。

4) 学外FD 研修会への教員派遣

平成26年度より、学外の先進的なFD活動を学部教員に体験してもらうために、全学FD委員会に学外FD研修会等への学部教員の派遣の予算を申請することとした。申請は採択され、環境プロセス工学科から中里准教授を昨年に引き続き大学コンソーシアム京都主催のFDフォーラムに派遣した。

5) 授業評価アンケートの分析

工学部においては授業評価アンケートを平成16年度より11年間継続して実施しており、多くの項目の評点についての経年的な変化やトレンドを把握することが可能となっている。各学科のFD委員は、学科ごとの評点の分析を詳細に行った。

6) 報告書の作成

本FD報告書は、上記1)～5)の報告の他に、FDとJABEEへの取り組みやGPA制度の現状と学習成果を学科ごとに現状報告や分析をまとめている。最後に、平成26年度工学部のFD活動の総括と今後のFD活動について整理した。なお、全学FD委員会主催で、工学部教員が参加した新任教員FD研修会あるいはFD・SD講演会が開催されている。新任教員FD研修会についても出席工学部教員から報告書を提出していただいた。

第2章 学生による授業評価とそれを生かした授業

2. 1 学部授業評価アンケート分析結果

2. 1. 1 学部平均値の推移とその分析結果（黒川善幸）

ここでは、講義・演習科目の授業評価アンケート結果の工学部全体の平均値に関して、平成16年度前期～平成26年度後期までの22期分の授業評価の推移をもとに分析する。なお、「工学部平均値」は、まず各設問に対する講義・演習科目の評点を学科毎に平均し、さらに学科平均値を単純に平均し、得られた値であり、学科ごとの科目数の違いは考慮されていない。

まず、15項目の授業評価アンケート項目の内、特に重要な次の6項目に着目して分析を行う。

設問4：授業は理解できた

設問6：宿題・レポート・小テストなどは授業の理解に役立った

設問7：シラバスに記載された授業目標を達成できそう

設問11：講義中やオフィスアワーで質問などに対する教員の対応に満足した

設問14：1コマ（90分）の授業に対して、予習と復習の時間を合わせてどれ位をかけたか

設問15：この授業は総合的に見て満足できた

これら6項目を以下では簡単のため、「④理解」、「⑥宿題」、「⑦目標」、「⑩質問」、「⑭自習」、「⑮満足度」と記すことにする。図2.1.1(1)～(6)に上記6項目について、また図3.1.1(7)にその他の9項目について、工学部全体における授業評価アンケート評点の推移をそれぞれ示す。

図2.1.1(1)より、「④理解」に関しては、前期は平成21年度ぐらいまで上昇傾向のあとは3.6～3.7程度でほぼ横ばいを続けていることが解る。後期は平成23年度がピークであった。平成

26年度は25年度に比べてほぼ横ばいである。全体的に頭打ちの傾向を示している。

図 2.1.1(2)より、「⑥宿題」に関しては、平成23～24年度ぐらいがピークであったことが解る。授業担当教員による継続的な改善努力が行われているがそれも限界に近づいていると解釈できる。平成26年度では25年度に比べほぼ横ばいであるが、評点は3.9以上と依然高く、現状では適切と判断できる。

図 2.1.1(3)より、「⑦目標」に対しては、前期は平成21年度ぐらいまで上昇傾向のあと3.7前後でほぼ横ばいを続けていることが解る。後期は平成23～24年度がピークであった。平成26年度は25年度に比べて若干上昇した。「④理解」とほぼ同様の値で同様の推移を示している。

図 2.1.1(4)より、「⑩質問」は、近年ほとんど変化が見られず、3.6～3.7の間を推移していることがわかる。学生が授業中やオフィスアワーにおける教員の対応にあまり満足できなかったのか、質問やオフィスアワーの利用自体が少なかったのかは判らないが、設問が教員限定であり、演習等で実際に接することの多いTAに対する評価が含まれていないことの影響も考えられる。

図 2.1.1(5)より、「⑭自習」は平成23年度ぐらいまで上昇傾向のあとは3.1前後でほぼ横ばいを続けている。この項目の評点は低いが他の項目と違って定量的な評価であるため直接比較はできない。しかし、90分の講義に対し3時間の自主学習が求められている以上、選択肢3の「1～2時間」に近い現状は改善の必要がある。演習課題やレポートの質の改善、演習書の適切な選定等を工夫して、学生の理解向上に反映させていく必要がある。ただし、この項目は科目間のばらつきが大きく、標点が4.0を超えている科目も少なくない。選択肢5が「3時間以上」と打ち切っているため、実際の自習時間はもう少し多いものと考えられる。

図 2.1.1(6)より、授業の総合的評価である「⑮満足度」も「④理解」、「⑦目標」と同様のやや頭打ち傾向を示しているが、評点は3.8～4.0と低くない。理由は解らないが、常に「④理解」<「⑦目標」<「⑮満足度」であり、理解が不足していても満足している層があることが判る。今後も高い評点を維持しつつ学生の理解を引き上げる方法を検討することが望まれる。

上記の6項目以外については、図 2.1.1(7)から、前期に関しては、「⑫返却」以外は平成21年度が突出しているものの、これを除くとおおむね後期同様平成20～22年度まで上昇の後に鈍化し、平成24年度をピークとしていることが解る。平成26年度は25年度に比べてほぼ横ばいである。「⑫返却」以外は評点は4.0前後で高いが、「⑫返却」は3.6前後で推移している。これは、他の項目が比較的曖昧な印象で評価されているのに対して、「⑫返却」はアンケート時点での実際の返却の有無のみで判断されるため、評価がシビアになっているものと考えられる。

全体的に頭打ちの傾向にあるので、今後全体の評点を上げるには評点の低い「⑪対応」「⑫返却」「⑭自習」などを伸ばす必要があると思われる。

その他、全ての項目で工学部全教職員の改善努力が続けられていることが分かる。先の重視した6項目とこれら9項目とは、言うまでもなく密接に関連しており、今後、頭打ちの傾向を打開するためには、これまでに気づかなかった要改善点を見出す努力が必要である。

自学自習の能力の育成については、これまで重要な項目として指摘されていることであるが、充分とは言えないまでもこの3年間の間に徐々に増加していることを示している。各科目の掲げる学習目標の達成度については、学生の評価点は昨年度と変化は見られないが、授業を受けての全体としての満足度については、僅かながら向上を示していることが分かる。

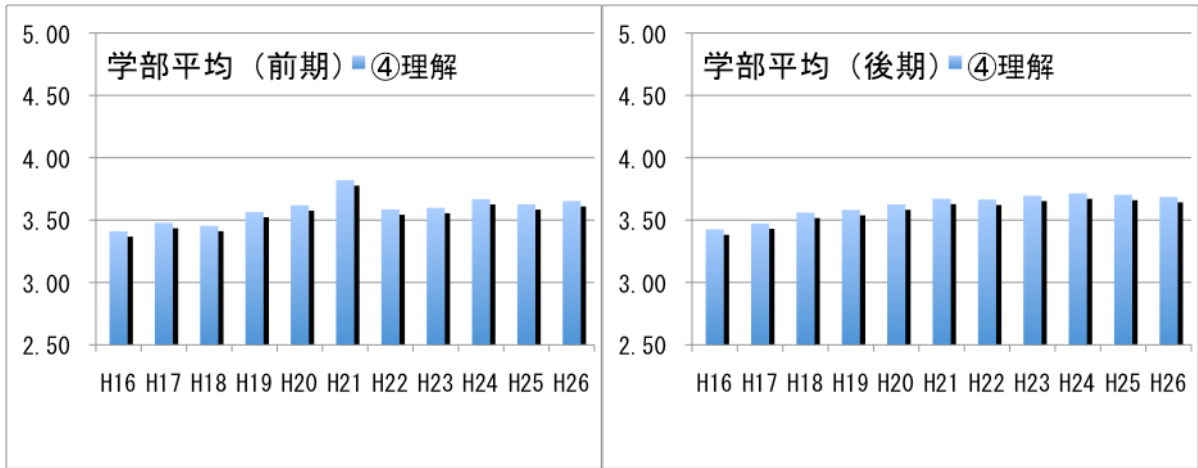


図 2.1.1 (1) 工学部全体の平均値 (④理解)

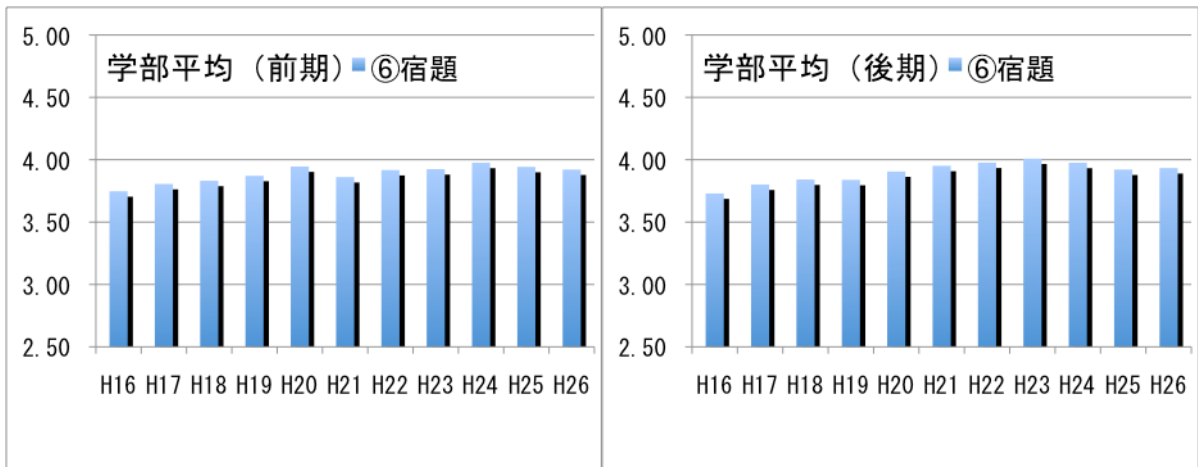


図 2.1.1 (2) 工学部全体の平均値 (⑥宿題)

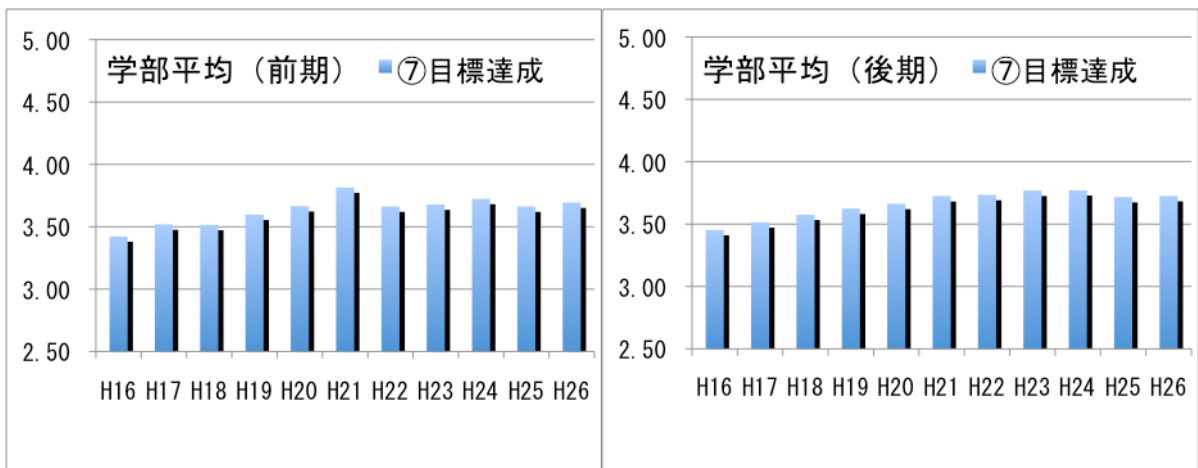


図 2.1.1 (3) 工学部全体の平均値 (⑦目標)

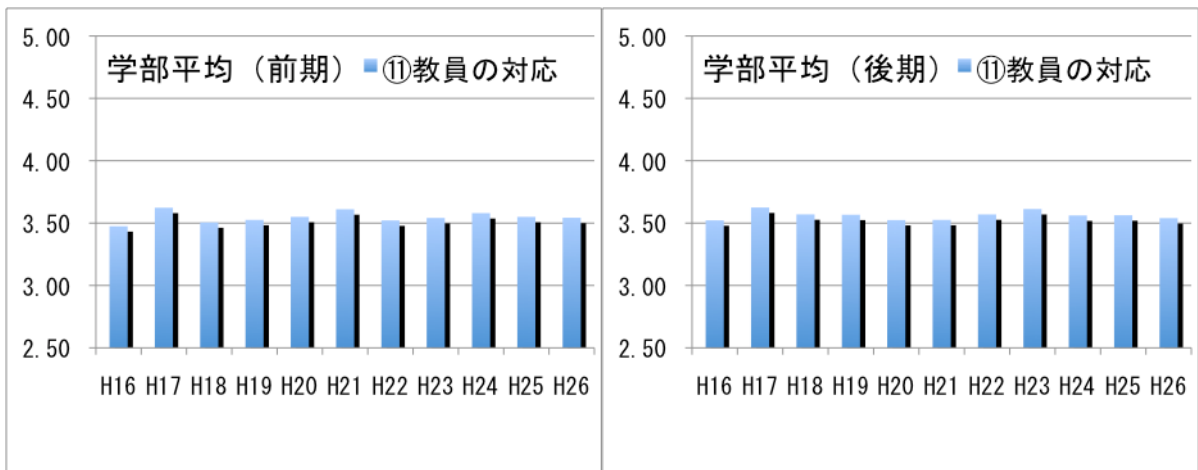


図 2.1.1(4) 工学部全体の平均値（⑪質問）

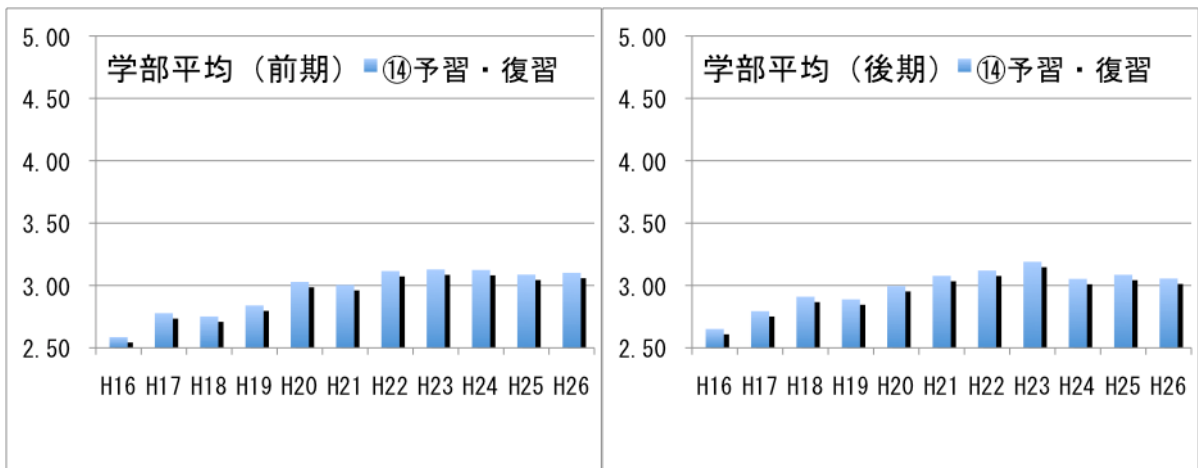


図 2.1.1(5) 工学部全体の平均値（⑭自習）

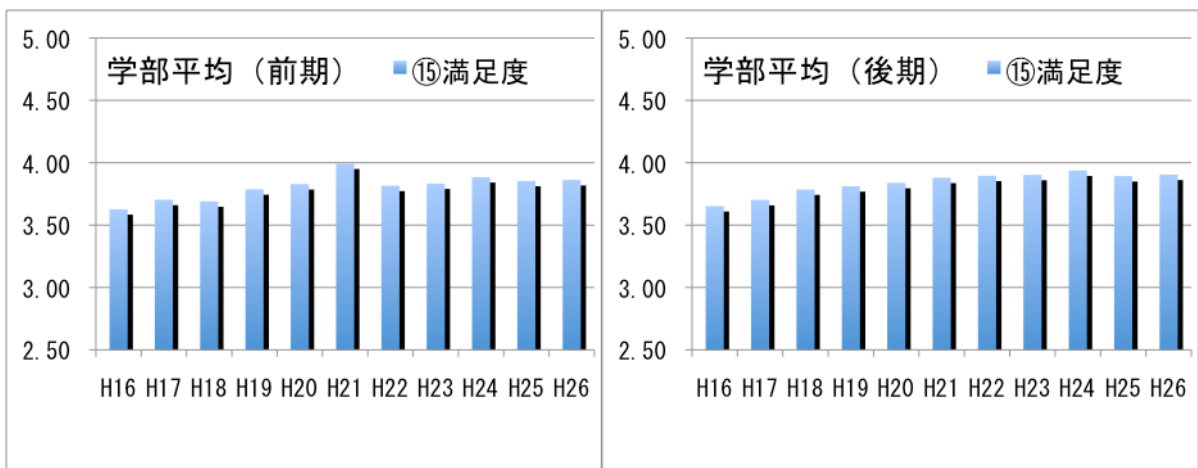


図 2.1.1(6) 工学部全体の平均値（⑮満足度）

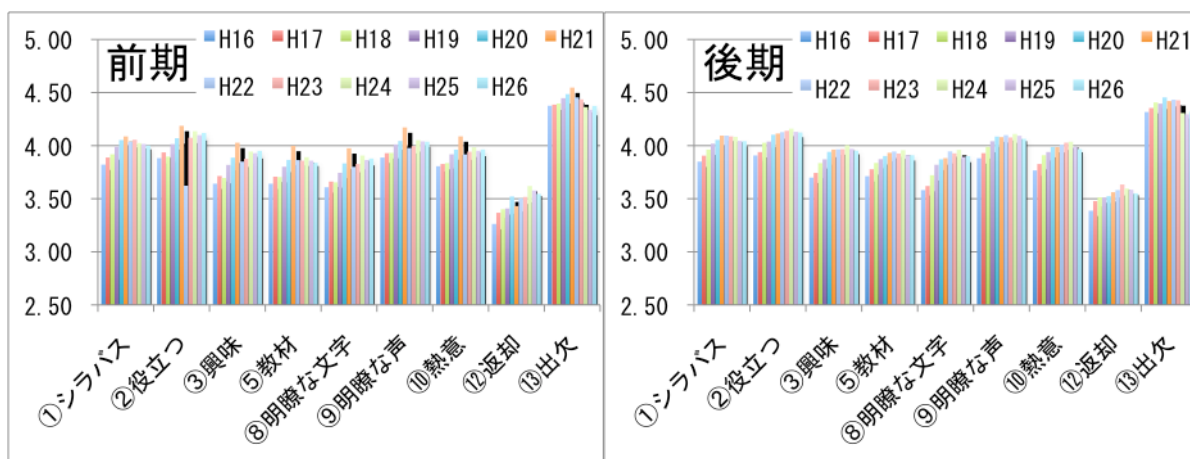


図 2.1.1(7) 工学部全体の平均値（その他）

2. 1. 2 機械工学科の推移とその分析結果

機械工学科の講義科目に対して実施された授業評価アンケートの評価結果を図 3.1.2(1)に示す。この図は、前期及び後期（1年間）に開講された科目に対する各アンケート項目の評点の平均点について、平成17年度から平成26年度（10年間）までの評点の推移を示している。表 3.1.2 及び図 2.1.2(2)は平成26年度の評点のばらつきを表す。

図 2.1.2(1)から、各評点は、「⑩教員の対応」についてはあまり変化がなく横ばいであるが、平成17年度から全体的に右上がりの増加傾向を示している。ただ、この数年間はその増加割合は横ばいの傾向にある。その中で「④理解」は、学生の基礎学力の低下が懸念される中、今後低下していくと予想されていたが、緩やかに増加の傾向を示している。「⑫返却」についても同様に増加の傾向を示している。「⑬出欠」については、平成20年度以降に低下傾向にあったが、昨年から増加の傾向に転じている。これらは、各教員による継続的な授業改善の成果であると判断できる。今後も授業評価アンケートの推移を確認しながら授業改善を継続することが重要である。

表 2.1.2 及び図 2.1.2(2)は、平成26年度開講科目の評点の平均値、最高点及び最低点を表す。これらの表及び図から、ほとんどのアンケート項目の最大値は4.0～5.0の範囲、平均値は3.5～4.0の範囲にあり、高い評価であることが分かる。また、昨年度の平均点と比較して本年度は平均点が向上しており、各教員が授業内容等の改善や学生に勉強する時間を確保させる工夫を行い努力していると判断される。なお、「⑫返却」については、最高点と最低点の差が大きい。今後も、平均点より大幅に低い科目の担当教員には、その事実を認識してもらい、授業改善を積極的に実施し、努力してもらう必要がある。

2. 1. 3 電気電子工学科の推移とその分析結果

図 2.1.3(1)および図 2.1.3(2)に、電気電子工学科の過去4年分（平成23～26年度）の授業評価アンケート結果の推移を示す。ほぼ同じ講義科目で比較できるように、項目毎学科平均点の推移を、前期については図 2.1.3(1)に、後期については図 2.1.3(2)に示している。これらの図から、ほぼ全ての項目で過去4年間大きな変化が見られないことがわかる。このことは、特に学科で重

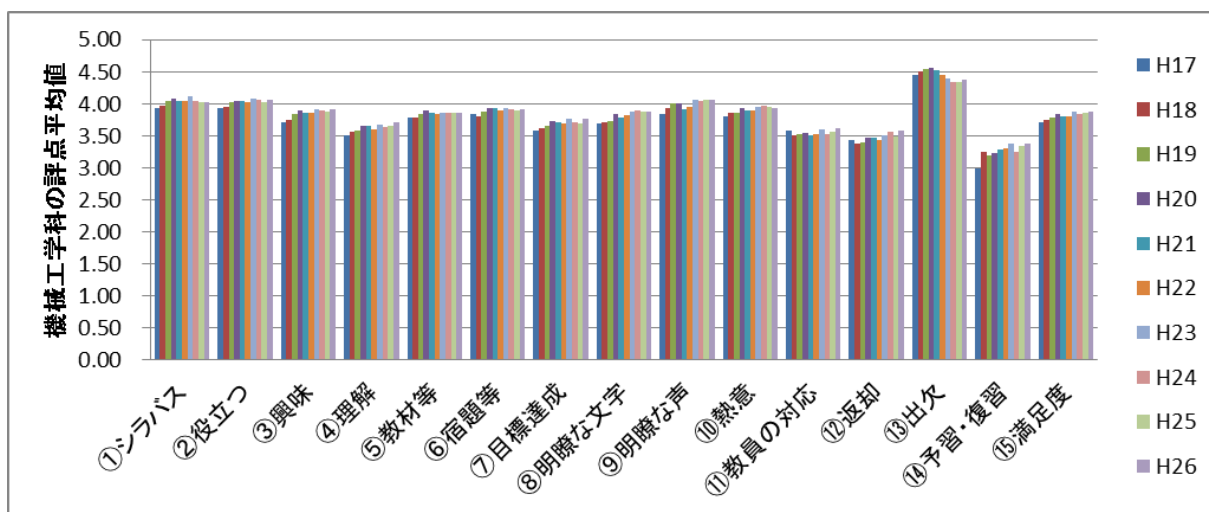


図 2.1.2(1) 過去10年間の開講科目における評価点の推移(機械工学科)

表 2.1.2 平成26年度開講科目における評価点のばらつき(機械工学科)

項目	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮
平均値	4.02	4.06	3.92	3.72	3.86	3.92	3.77	3.88	4.07	3.94	3.62	3.59	4.37	3.39	3.88
最高点	4.47	4.51	4.36	4.25	4.41	4.41	4.26	4.82	4.65	4.47	4.06	4.37	4.80	4.42	4.39
最低点	3.00	3.00	3.00	2.38	3.00	2.96	3.00	2.40	2.50	2.83	3.00	1.67	3.00	2.45	2.76
昨年度の平均値	4.02	4.03	3.88	3.65	3.86	3.90	3.70	3.87	4.07	3.95	3.56	3.49	4.33	3.34	3.86

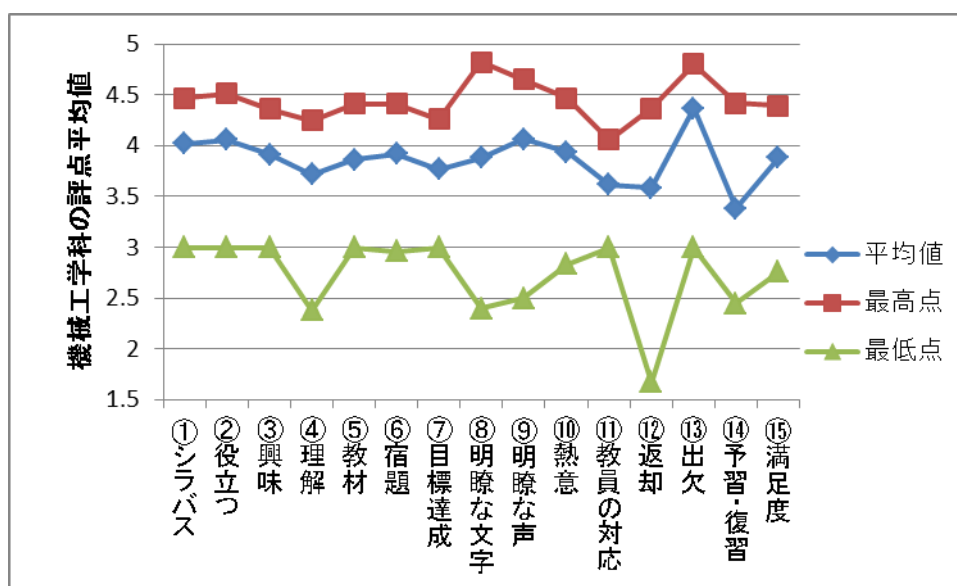


図 2.1.2(2) 平成26年度開講科目における評価点のばらつき(機械工学科)

視している四つの設問項目③興味深い授業、④理解、⑩熱意、⑮満足度においても同じである。この数年来、教員は授業改善の努力を続けてきたが、授業評価アンケート結果からみれば、全体的にやや飽和気味となってきたことがうかがえる。特筆すべき点は、設問⑭予習・復習の評点が低いことである。設問⑭の評点（前期 3.19、後期 3.39）は予習・復習 1～2 時間程度を意味しており、満足できる水準とは言えない。設問⑭の評点をさらに改善していくことで、設問④理解の評点の飽和状態を改善できる可能性もある。設問⑭の評点は当面少なくとも 3.5 を目指すべきであり、担当教員によるレポートや演習課題の質と量の検討、適切な参考書選定などの努力を継続していく必要があると考えられる。

図 2.1.3(3)は、設問③興味深い授業、④理解、⑩熱意、⑮満足度の 4 項目について、電気電子工学科平均と工学部平均の評点の推移を比較したものである。電気電子工学科平均は工学部平均と同じような推移を示しているが、特に前期については工学部平均よりも低い傾向である。学科によって学生の傾向、講義内容や教育方法等が異なるため、工学部平均と比較することの意味は必ずしも明確ではないが、すべての設問で工学部平均以上を目標としていくべきであろうし、工学部平均との距離を把握し、その推移を監視しておくことは重要であると考えられる。

以上、本年度は授業評価アンケート評点の面からは飽和傾向が継続しているが、少なくとも現状維持程度に授業改善が進んでいると評価できる。今後とも現状に甘んじることなくさらに講義の質を向上させるために、JABEE への取り組みや FD 活動を通して各教員の不断の努力が求められる。

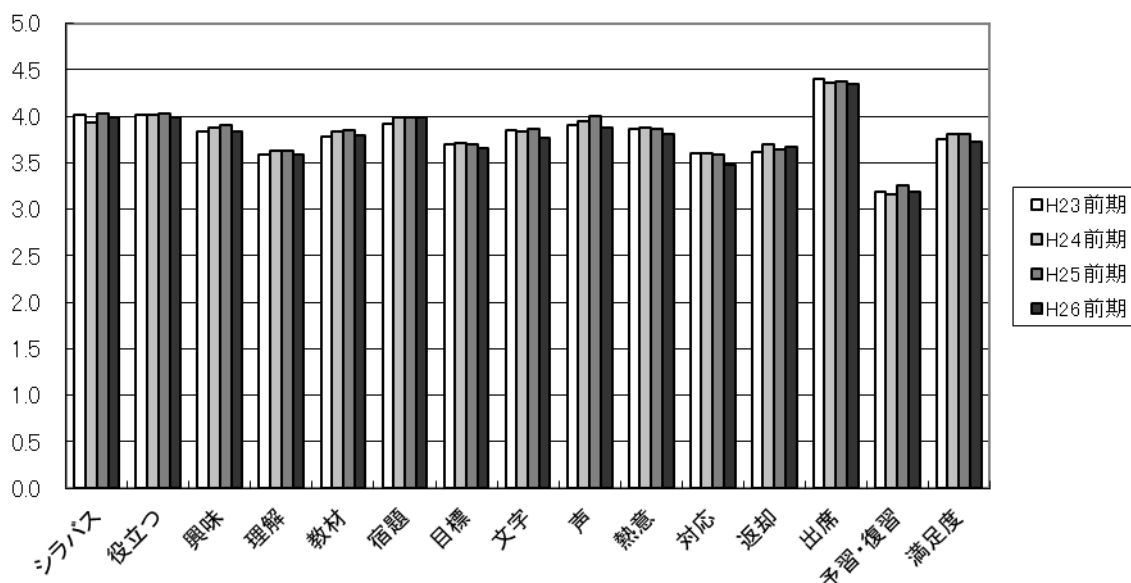


図 2.1.3(1) 平成 23～26 年度の授業評価アンケート結果の推移 (前期) (電気電子工学科)

2. 1. 4 建築学科の推移とその分析結果

建築学科には建築設計演習の科目が全学年にあり、この講義の形態は講義科目とも実験科目とも異なるが、授業アンケートではこれを講義科目に含めている。実験の科目は 1 科目だけで比較しにくいので、講義科目について授業アンケートの結果を分析する。

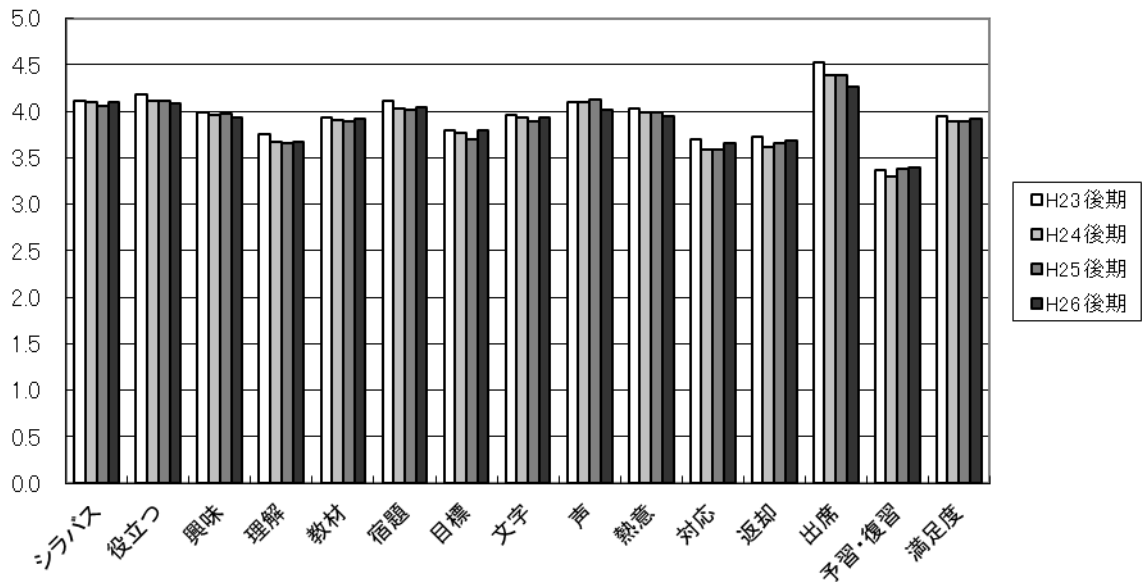


図 2.1.3(2) 平成23～26年度の授業評価アンケート結果の推移(後期) (電気電子工学科)

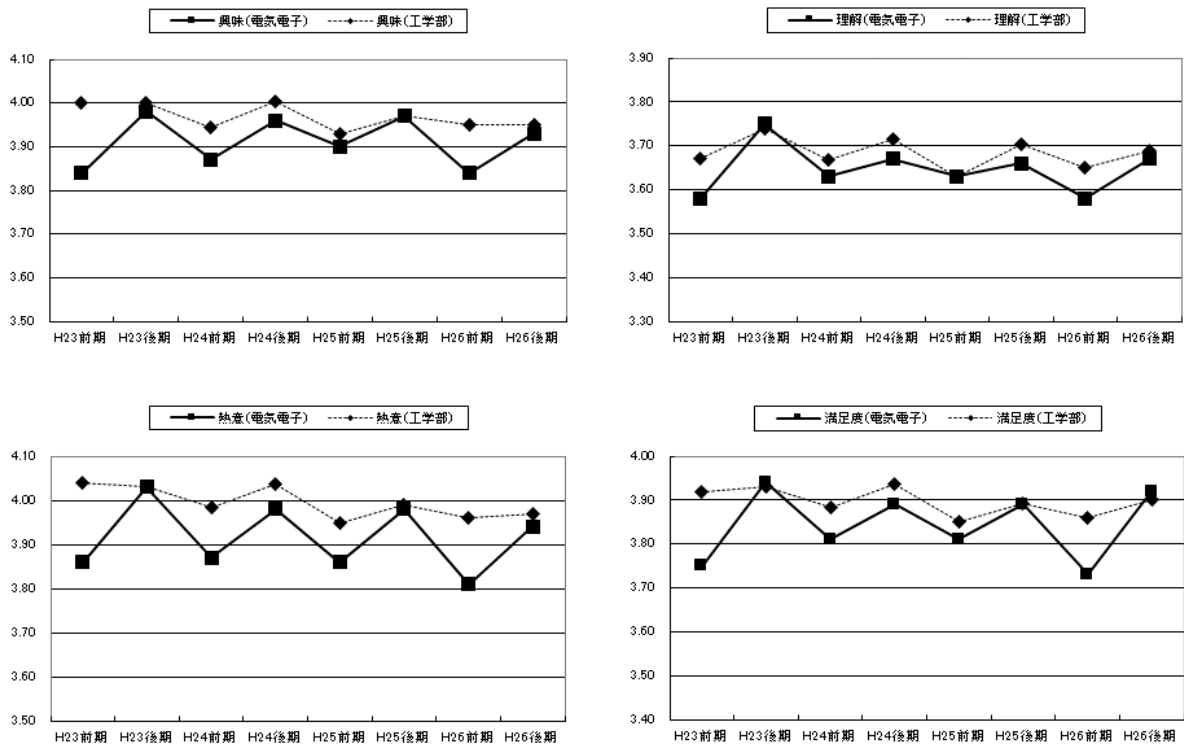


図 2.1.3(3) 電気電子工学科平均と工学部平均との比較

平成26年度の授業アンケートから得られた、各評点の値を図2.1.4(1)と図2.1.4(2)に示す。工学部全体のアンケートの評点の平均と比較すると、項目13など若干の例外を除きほとんどの項目が、前期・後期とも工学部の平均よりも高いか、ほぼ同様となっている。特に、前期では項目2(役立つ)、項目3(興味)、項目4(理解度)、項目5(教材)、項目15(満足度)の比率が大きい。これに対し、前後期とも平均を下回っているのは項目13(欠席)である。設計課題の〆切が近いと欠席が増えることが反映されていると思われる。以上の結果を見ると、建築学科の授業では特に大きな問題となるものは見あらず、どちらかといえば教員の努力により適切な教育がなされていると評価できる。

過去二年からの推移を項目別にみると、先に見た項目13がここ数年4.5近くであったものが4.1近くに低下している。これは欠席が1回程度という結果を示している。項目14は3.5未満で推移していたものが3.0に近づいており予習復習時間が2時間程度であることを示している。

表 2.1.4 平成26年度開講科目における評価点(建築学科)

年度・学期	項目	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
平成26年度前期	学部平均	4.00	4.12	3.95	3.65	3.84	3.92	3.69	3.88	4.04	3.96	3.54	3.55	4.37	3.10	3.86
	建築学科	4.09	4.24	4.09	3.81	4.02	3.97	3.75	3.89	4.06	4.04	3.62	3.49	4.10	2.98	3.96
	学部比	1.02	1.03	1.04	1.04	1.05	1.01	1.02	1.00	1.01	1.02	1.02	0.98	0.94	0.96	1.03
平成26年度後期	学部平均	4.04	4.12	3.95	3.69	3.91	3.93	3.73	3.90	4.06	3.97	3.54	3.55	4.32	3.06	3.90
	建築学科	4.05	4.18	3.99	3.76	3.96	3.92	3.73	3.87	4.01	3.93	3.58	3.47	4.12	3.03	3.89
	学部比	1.00	1.01	1.01	1.02	1.01	1.00	1.00	0.99	0.99	0.99	1.01	0.98	0.95	0.99	1.00

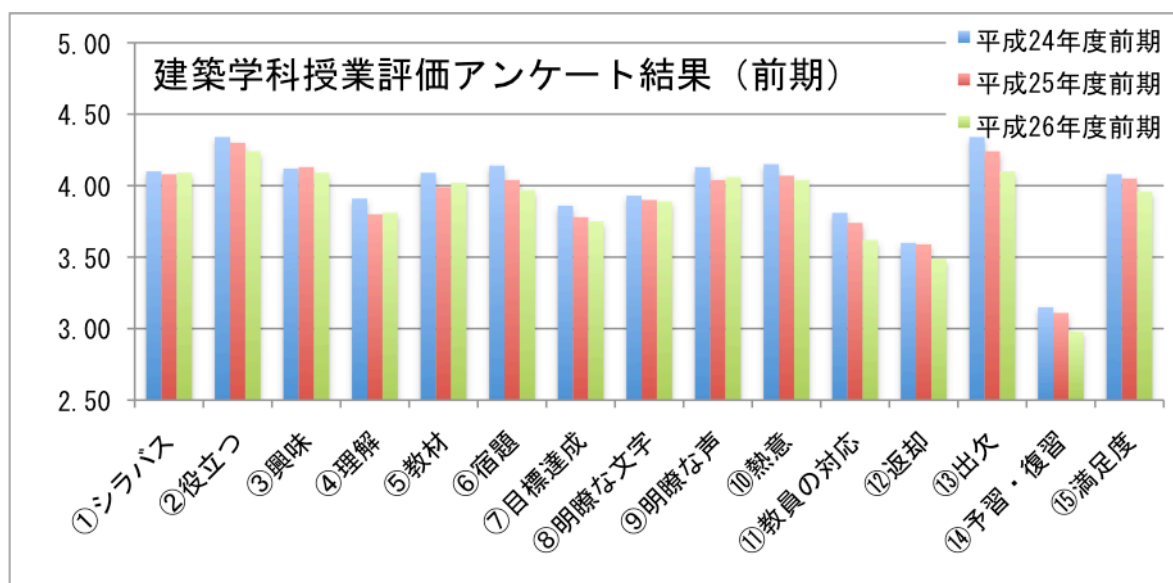


図 2.1.4(1) 平成24～26年度の授業評価アンケート結果(前期)(建築学科)

90分講義科目で期待される自主学習時間は3時間であり、若干不足気味となる。ただし、設計演習の平均が4.08、それ以外の講義・演習科目の平均が2.85と科目間で大きな偏りがある。この項目の選択肢5は「3時間以上」と3時間で打ち切られているため、多数が5と回答している設計演習の自主学習時間は実際には3時間を大幅に超えていることが考えられる。したがって、全科目の平均時間も実際には充分高い可能性が高く、科目間の偏りこそが課題といえる。

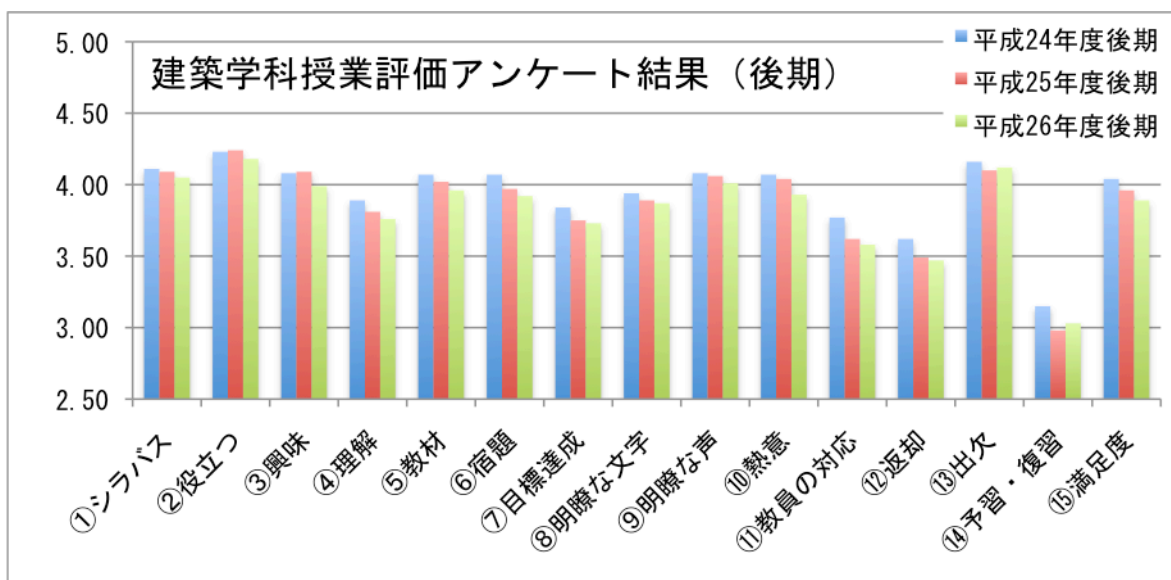


図 2.1.4(2) 平成24～26年度の授業評価アンケート結果(後期)(建築学科)

その他の項目の経年的推移では顕著な点は見受けられず、高い水準を維持しているものの、若干の低下傾向を示している。ただし、昨年度と比較して低下している項目もそれ以前と比較すると大きな低下ではない。

以前から課題となっていた項目12（返却）については、3.5を下回っている。今後引き続き改善する取組みが望まれる。

2. 1. 5 環境化学プロセス工学科の推移とその分析結果

図 2.1.5(1)は、最近3年間（平成24～26年度）の環境化学プロセス工学科の開講科目（講義・演習）に対する授業評価アンケート結果を評価項目別に比較したものである。

平成24～26年度の各項目の評価値は、ほぼ飽和傾向にある。前後期ともに年々評価が減少している項目は①シラバス、⑥宿題、⑧明瞭な文字、⑨明瞭な声であった。特に後期は他にも②役立つ、③興味、④理解、⑦目標達成、⑩熱意、⑫返却、⑮満足度において評価の減少傾向が確認された。前期は後期に比べやや高度な専門科目が多いため、学生の学習能力による格差が拡大しやすい。また、少人数の学生数に合致しない広い講義室の利用により、教室の後ろの方の席に座る学生が目立つのに加え、オフィスアワーを学生が利用しない（⑪教員の対応が⑭予習・復習に次いで低い）ことも減少に拍車をかけている可能性がある。授業ではなるべく前の方の席に座らせる、オフィスアワーを積極的に活用させるなど、教員個々での働きが必要と言える。また、⑭予習・復習に関して、学生への適切な課題を与えるなどの対策も重要な課題である。

図 2.1.5(2)は、当学科のアンケート評価結果のうち、③興味、④理解、⑩熱意、⑮満足度を工学部全体の評価結果と比較したものである。③興味、⑩熱意、⑮満足度において、過去に工学部平均を大きく上回っていたが、平成26年度後期ではほとんど変わらなかった。④理解については工学部平均並みである。教員数が少ない本学科では教員の負担は大きく、学生の理解度をさらに高めていくためにも、質の高い非常勤講師の確保などの方策が必要であろう。

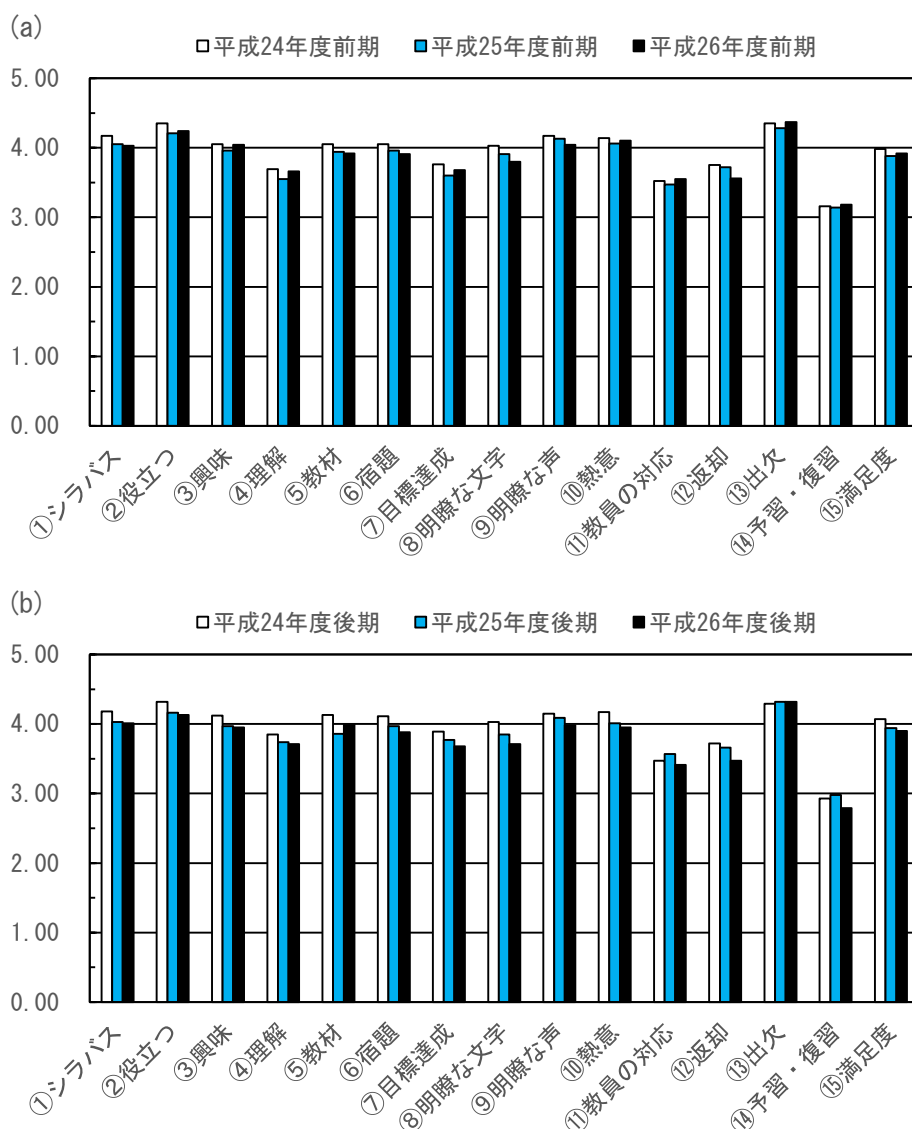


図 2.1.5(1) 平成24～26年度の授業評価アンケート結果（講義・演習）
：(a)前期, (b)後期(環境化学プロセス工学科)

本学科は平成26年度入学生より、新カリキュラムへ移行した。アンケート結果が今後どのように推移していくか、冷静に見守りながら必要に応じて対策を講じていきたい。

2. 1. 6 海洋土木工学科の推移とその分析結果

海洋土木工学科では、授業評価アンケート結果を各授業担当教員から提出される授業計画改善書と合わせて、授業改善の自己点検の資料として活用されている。図 2.1.6 は平成26年度の海洋土木工学科の前期・後期授業に対する評価値を講義・演習科目と実験科目に分けて示したものである。実験科目はいずれの項目に対しても、4程度の高い評価が得られている。講義・演習科目についても、大半の項目について4程度の評点を得られているが、講義・演習科目の「⑪教員の対応」、 「⑫返却」、 「⑭予習・復習」において、3～3.5程度の比較的低い評点を得られている。

「⑪教員の対応」については、学生がオフィスアワーなどに来やすくする対策が必要と思われる。「⑫返却」については、教員側のさらなる努力が必要である。「⑭予習・復習」については、予習すべき内容の周知と小テストの実施による復習の徹底などが効果的だと思われる。

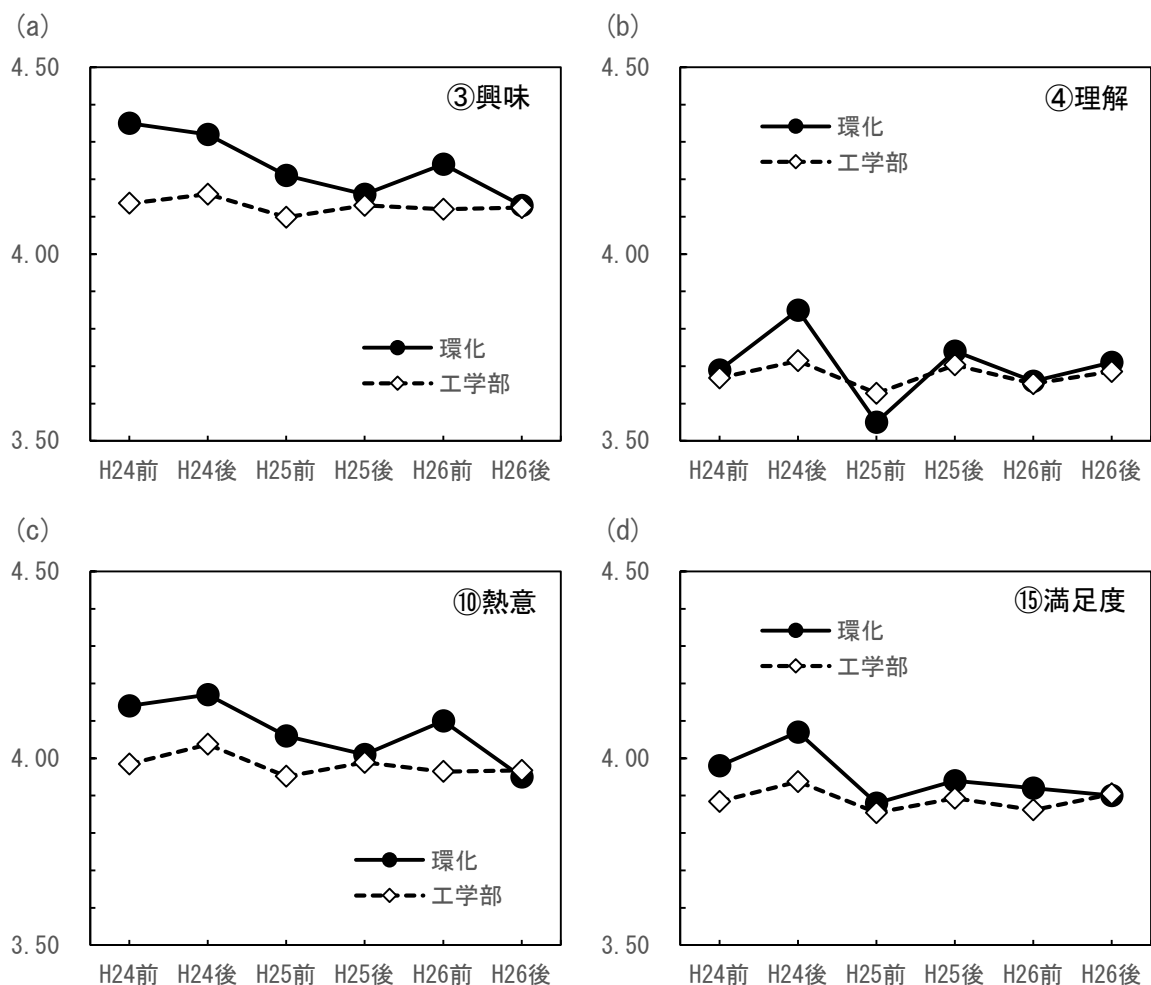


図 2.1.5(2) 環境化学プロセス工学科平均と工学部平均との比較（平成24～26年度）：
 (a)③興味, (b)④理解, (c)⑩熱意, (d)⑮満足度

2. 1. 7 情報生体システム工学科の推移とその分析結果

平成21年度の改組により情報工学科と生体工学科・生体電子工学コースが統合されて誕生した情報生体システム工学科が、卒業生を送り出したのは今年度で3回目となる。FD 授業評価アンケートは、平成21～26年度の6年間収集されており、これらのデータから経年変化の分析と今年度の工学部平均値との比較分析を行うこととする。

講義系科目に関するアンケートの質問項目は、①シラバスの内容と実際の授業との一致性、②授業の今後の有用性、③授業の興味深さ、④授業の理解度、⑤教材等の適切性、⑥レポート等の理解への効果度、⑦授業目標の達成感、⑧文字の明瞭性、⑨声の明瞭さ、⑩教員の熱意度、⑪質問等に対する教員の対応度、⑫レポート等の評価への満足度、⑬出席回数、⑭予習・復習の時間数、⑮総合的満足度であった。

講義系科目の集計結果を前期と後期に分けて、図 3.1.7(a)及び図 3.1.7(b)にそれぞれ示す。前期・後期ともに、「⑪教員の対応」、「⑫レポート等の評価への満足度」、「⑭予習・復習の時間数」を除く項目の評価は、3.5を超えておりほぼ満足できる水準である。また、「④授業の理解度」と「⑤教材等の適切性」の2項目以外では、前期と後期による評価の差は0.1未満でありほとんど

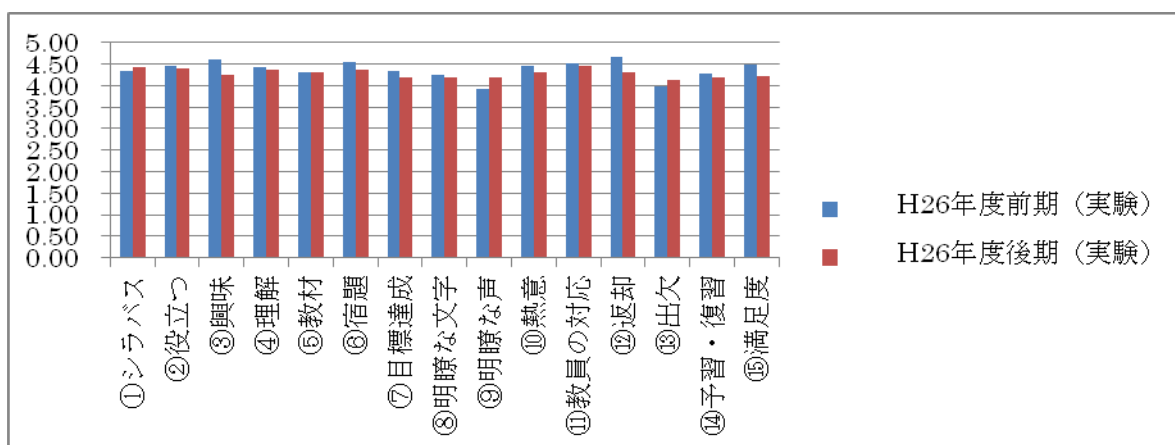
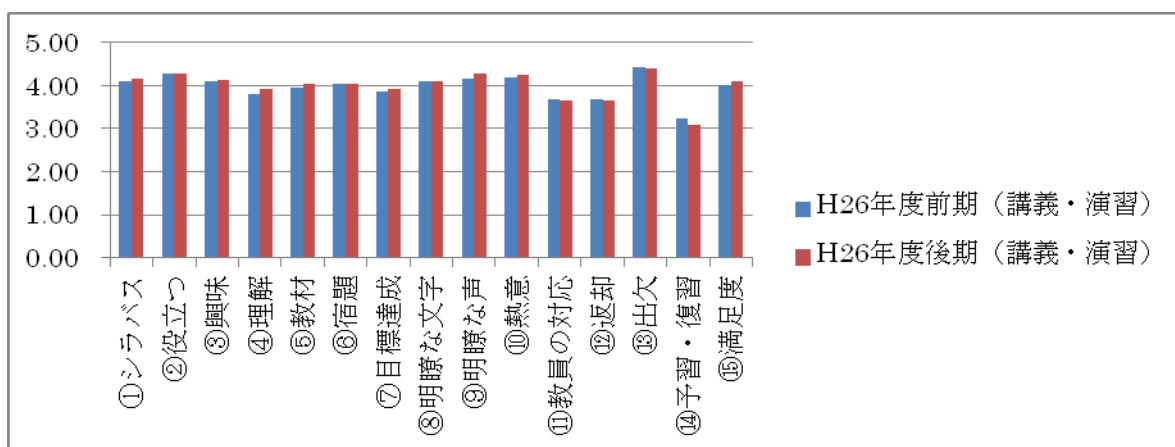


図 2.1.6 平成26年度海洋土木工学科の授業評価アンケート結果

違いがない。また、今年度の「⑭予習・復習の時間数」の評価は、前期と後期ともに3.0に達しておらず、まだまだ改善の余地が残されていると考えられる。

今年度の工学部平均値と比較すると、前期のみ、「⑬出欠」の項目では、学科平均の評価が工学部平均の評価より上回っているが、それ以外の項目の評価は、わずかであるが低くなっている。実験系科目の質問項目は、①シラバスの内容と実際の実験との一致性、②実験グループの人数の適切さ、③実験装置の適切さ、④実験時間の適切さ、⑤教材の理解への貢献、⑥講義との関連、⑦理解度、⑧目標達成、⑨教員の対応、⑩教員の熱意、⑪安全教育の実施、⑫TAの熱意、⑬予習の度合い、⑭主体的に実験に取り組めたか、⑮総合的満足度であった。

実験系科目の集計結果を前期と後期に分けて、図2.1.7(c)及び図2.1.7(d)にそれぞれ示す。

今年度の評価は、前期の「⑨教員の対応さ」以外の項目の評価は、3.5以上であり満足できる水準である。また、前年度前期の「⑫TAの熱意」の項目は3.27であり、とても低い評価となっていたが、TAへの指導を徹底したために、今年度は4.10に改善が見られた。後期は、前期と比べて「④実験時間の適切さ」以外の項目は向上している。

今年度の工学部平均値と比較すると、講義系科目と同様に評価が低く、改善の余地があると考えられる。

以上のように、講義系科目及び実験科目の前期・後期のアンケート結果の推移及び分析から、今年度も昨年度と同様に情報生体システム工学科での授業は、教員及びTAの努力により十分な水準

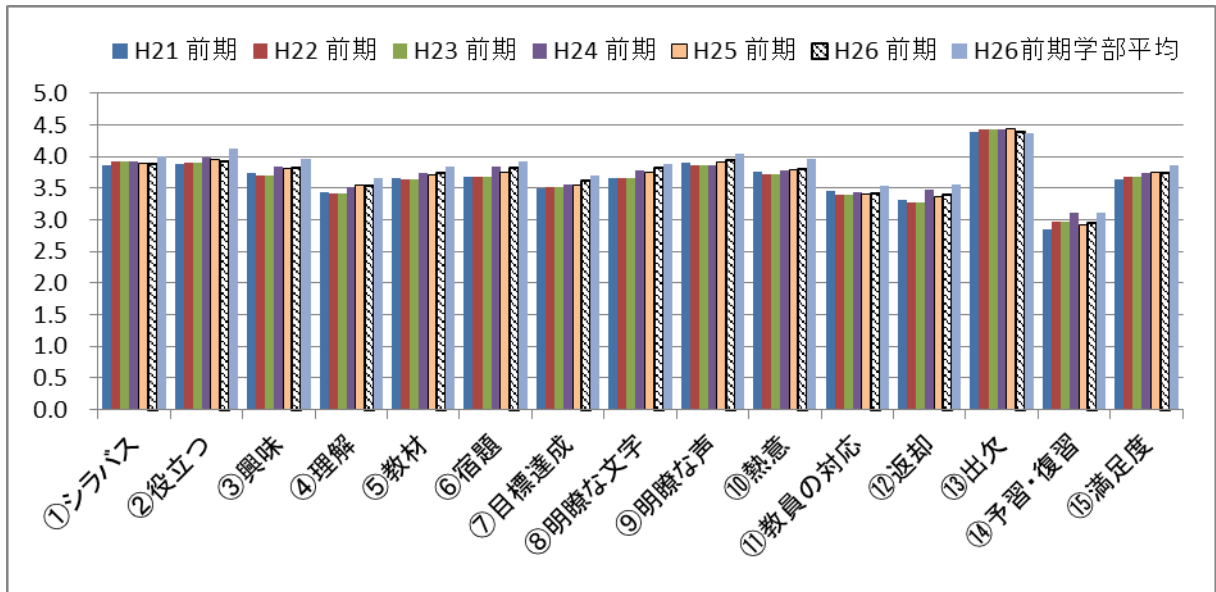


図 2.1.7(a) 情報生体システム工学科の授業評価アンケート結果の推移
(平成21～26年度前期 講義科目)

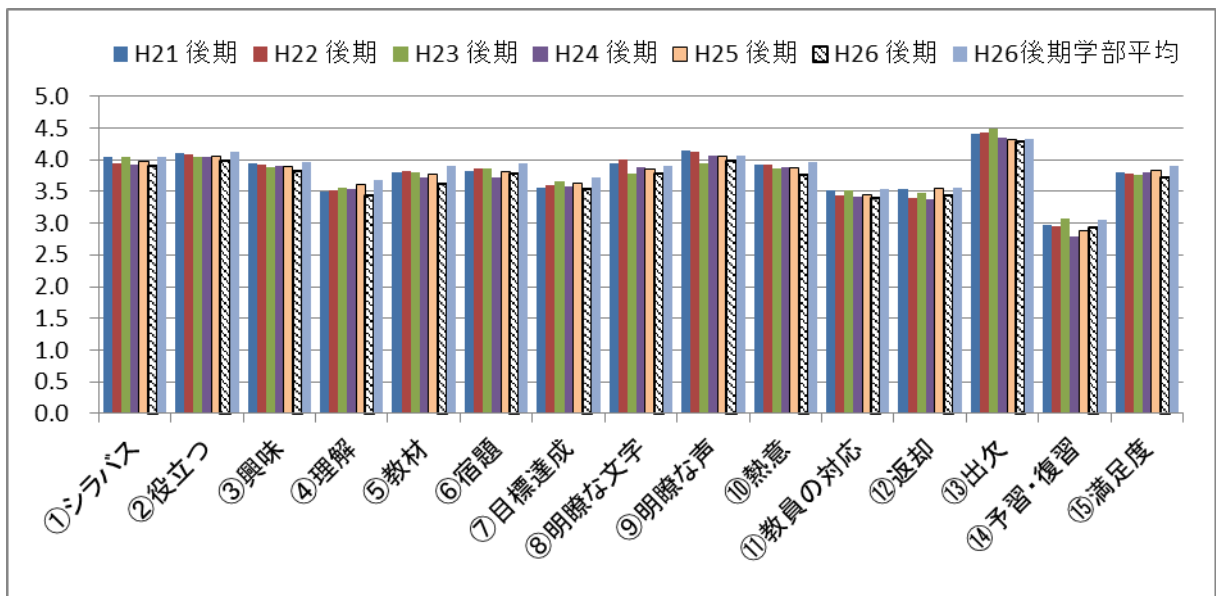


図 2.1.7(b) 情報生体システム工学科の授業評価アンケート結果の推移
(平成21～26年度後期 講義科目)

を保っていること分かった。また、全体的に前年よりも評価が向上していたが、来年以降も工学部平均値に近づけるように改善が必要である。

2. 1. 8 化学生命工学科の推移とその分析結果

アンケートの集計結果を平成23年度から直近の平成26年度まで集計・比較したグラフを図2.1.8に示す。図は、上段が前期実施科目、下段が後期実施科目についての集計結果を示している。

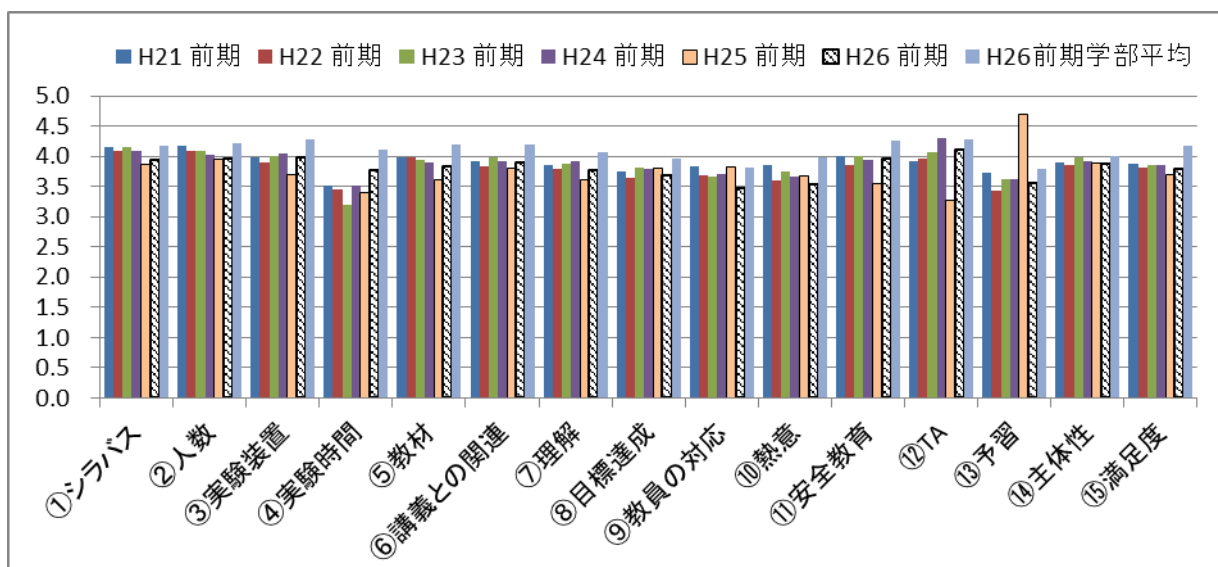


図 2.1.7(c) 情報生体システム工学科の授業評価アンケート結果の推移
(平成21～26年度前期 実験科目)

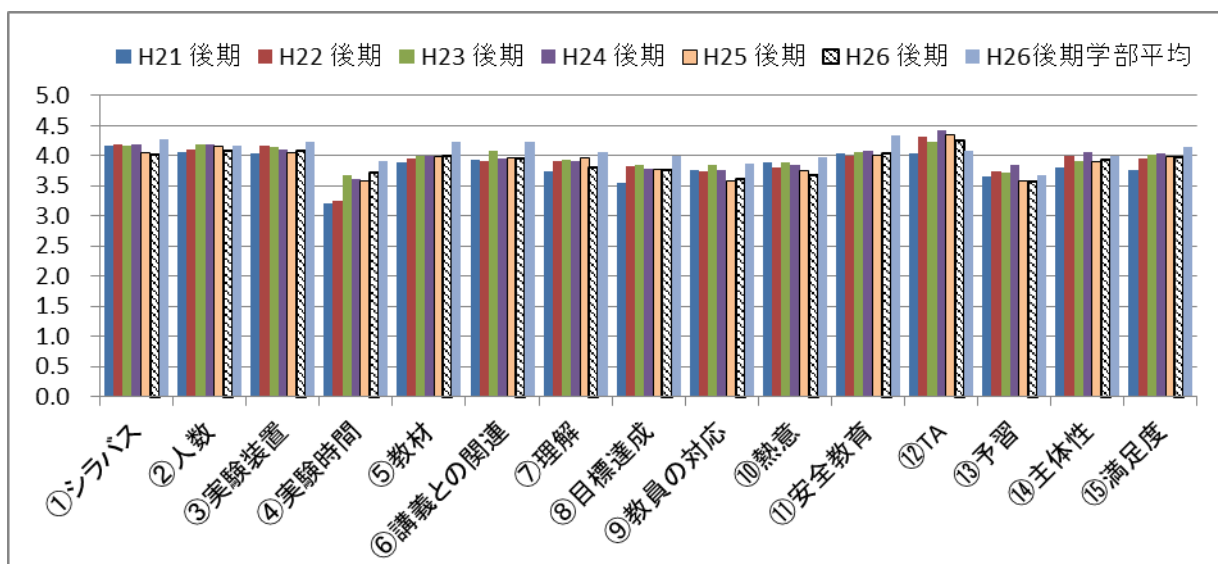


図 3.1.7(d) 情報生体システム工学科の授業評価アンケート結果の推移
(平成21～26年度後期 実験科目)

る。図を見ると、一部の評価項目を除き、すべての評価項目で概ね4点前後の評点となっており、他学科と比較しても遜色のない結果であった。また、前期と後期で比較しても、際だった差は認められなかった。前期、後期ともに、評価項目⑭の「予習・復習」の評点が相対的に低いが、多くの学科で同様の傾向があり、大きな問題とは考えにくい。いくつかの評価項目において、見かけ上評価が低下傾向にあったことを踏まえ、平成26年度には教員全員が改善に取り組んだ結果、評価は一転して上昇傾向となった。しかしながら他学科の傾向から見ても、同一項目の評点が年度により0.3ポイント程度増減することがあり、有意な差であると判断できる程の変化でない。

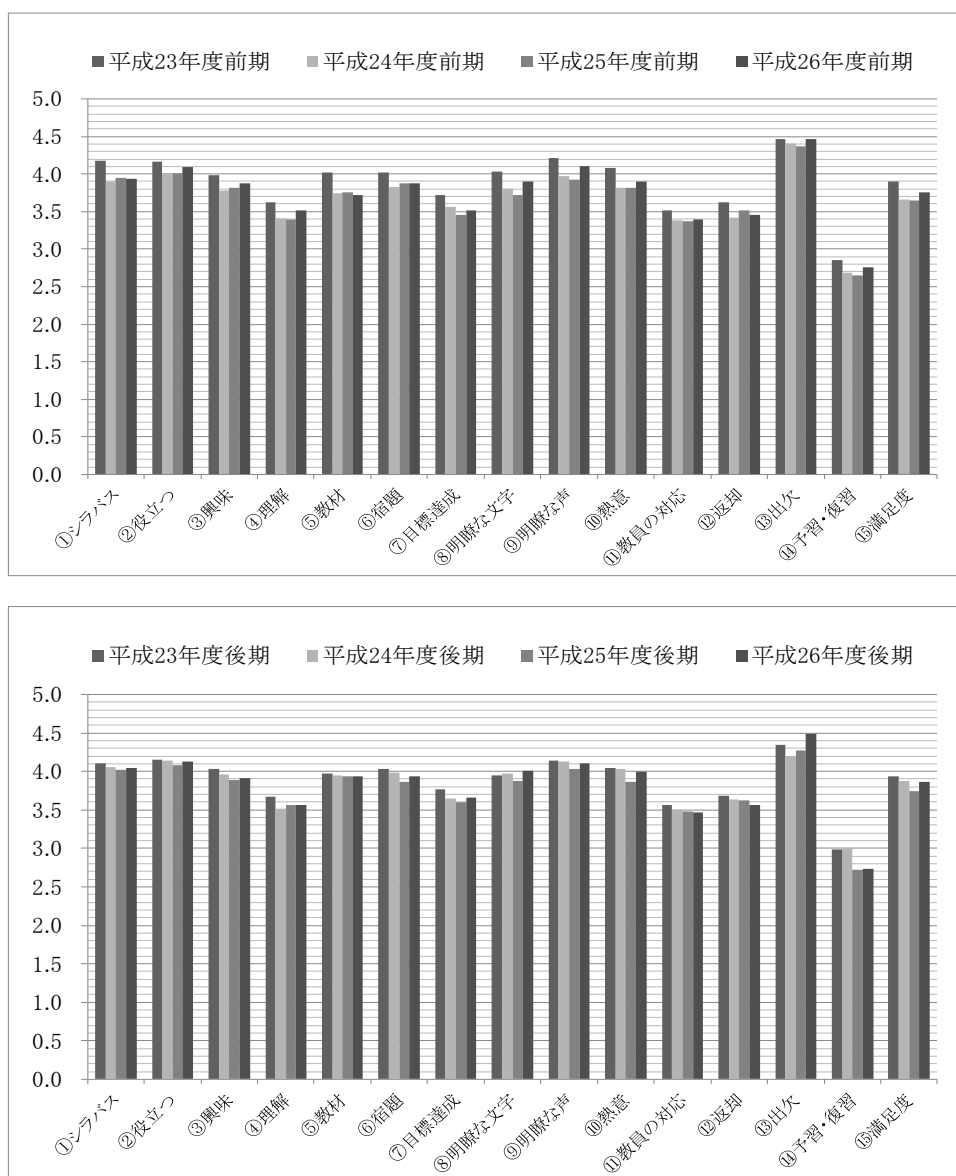


図 2.1.8 平成23～26年度の授業評価アンケート結果 (化学生命工学科)

2. 2 授業計画改善書の各学科の活用状況

2. 2. 1 機械工学科

学科のFD委員が収集した授業計画改善書は、授業評価アンケートの評価点や科目GPAとともに専攻教育評価委員会が整理して分析を行っている。専攻教育評価委員会は、整理した内容と分析した結果を「専攻教育評価委員会報告書」としてまとめている。授業計画改善書は、専攻内に設置されたパソコンのフォルダ内に各年度、各期ごとに整理され、全教職員に閲覧できるように公開されている。また、専攻教育評価委員会報告書は冊子とCD-ROMの形で保管され、授業改善を実施する際の資料として利用できるように全教職員に公開されている。

3. 2. 2 電気電子工学科

授業計画改善書は、各科目の授業評価アンケート評点とそのレーダーチャート、および授業評

価アンケート回答用紙（実施済みのもの）と共に学科事務室や会議室の JABEE 用保管庫にて保管され、教員はいつでも閲覧できる。主として工学部 FD 委員が管理し、JABEE 活動の一環として、専攻（学科）FD 委員会において授業改善に取り組む資料として活用している。

3. 2. 3 建築学科

授業計画改善書に関して、全科目の評点を学科内で公開して問題点を共有することになっている。具体的には、全科目の全項目の評点の一覧表と、全項目の目標とする評点の一覧表を作成して、全科目がどのような状況になっているかが簡単に分かるようにしている。また、本学科では平成 19 年より授業満足度の評点と授業担当時間を用いて教員の教育貢献度を評価するシステム導入している。この結果も学科内で公開している。

3. 2. 4 環境化学プロセス工学科

年 2 回学期末に開催される学科の教員間ネットワーク会議において、FD 委員会のアンケート調査より返却された前期／後期授業科目のレーダーチャートおよびこのチャート結果に基づく授業改善書の提示を行っている。また同時に次学期開講予定科目のシラバスも提示し、メンバーとの意見交換を通じて、授業内容や授業方法の改善のために利用している。授業計画改善書は、学科内の資料室にエビデンスとして保管しており、教員は自由に閲覧することができる。このように授業計画改善書は本学科の教育点検・継続的改善を図る上で大いに活用されている。このような継続的な取り組みの結果、評価は毎年改善されていると考えられる。

3. 2. 5 海洋土木工学科

海洋土木工学科における授業計画改善書の活用方法は既にシステムされている。具体的には、授業計画改善書は授業評価アンケートの集計結果に基づいて作成され、学科の FD 委員に提出することが義務付けられている。そして、学科内に設置されている教育システム評価委員会が、授業計画改善書および専門科目の学習目標達成度に基づいて、授業改善状況の点検を行うことになっている。さらに、その点検結果は教育システム評価委員会から学科会議に報告されることになっている。最終的に、学科会議において、この報告書に示された改善点に関して、審議して必要な措置をとることになっている。以上のように、学科としては PDCA の点検システムを構築しており、授業計画改善書は、その中で重要な役割を果たしていると言える。

3. 2. 6 情報生体システム工学科

情報生体システム工学科では平成 22 年度より、授業計画改善書を学科事務室に保管し、全ての教員が閲覧可能な状態で管理を行っている。各教員による授業改善への取り組みおよび結果を教員全員で共有することで、学科全体の教育内容の継続的な改善に貢献している。また、改組のために JABEE 申請は再出発となったが、学科 JABEE 委員会の下に作られている教科グループ WG において、科目の内容の見直しなどの検討の際に、資料として活用している。

3. 2. 7 化学生命工学科

授業計画改善書は応用化学工学科応用化学コースと同一の理念の下で活用を図っている。すなわち、授業計画改善書を、卒業生アンケート集計結果、授業参観報告書およびそれに対する回答書等とともに、各教員が分析、評価し、続いて互いに連携する科目の担当教員グループで作るカリキュラム小委員会において十分な教育効果が達成されているかどうかを討論してカリキュラムの向上に努めている。検討した結果や問題に対する対策は学科内教育プログラム改善検討委員会において報告され、全体のカリキュラムの運営上最も効率が良い方法で運用できているかどうかの評価され、必要な指導がなされている。このように授業計画改善書等のFD 活動書類を資料として、教員間で協力・連携そして切磋琢磨するシステムが構築され、その中で授業内容・方法の改善もなされている。

第3章 学科におけるFDとJABEEへの取り組み

3. 1 機械工学科

機械工学科は、平成16年度にJABEE認定の審査を受けた。平成18年度のJABEE中間審査において、平成16年度に評価Wの指摘を受けていた全ての評価項目を改善している。さらに、平成21年度実施のJABEE再審査では、評価Cを受けた項目が10箇所あったが、W以下の評価を受けた項目は無く、6年間のJABEE認定継続が認められた。

本学科は、平成22年度から広範囲にわたる機械工学領域の教育研究を3つのコース（生産工学コース、エネルギー工学コース、機械システム工学コース）で分担実施している。各コースは、複数の研究室により構成され、それぞれにコース長をおいている。この3名のコース長と副専攻長から組織される「専攻教育委員会」において、学科の教育プログラムを点検していたが、平成25年度からその役割は「コース長会議」に移管された。この「コース長会議」を基に、学科の教育環境のさらなる改善と実施体制の強化が図られている。学科内には、さらに、教務委員会委員、FD委員会委員、JABEE委員会委員等からなる教育の現状を分析する委員会としての「専攻教育評価委員会」と、JABEE認定のための審査資料作成を行う「専攻JABEEワーキンググループ」があり、現在、平成27年度にJABEE認定の再審査を受けるため審査項目や評価項目の確認などを検討している。今年度は、「専攻教育評価委員会」において、PDCAサイクルの「評価」を実践強化するために運営規程の検討・修正を行うとともに、教育環境に関するアンケートを実施した。また、「専攻JABEEワーキンググループ」では、学習・教育到達目標の達成度評価方法を提案して、4年生の卒業時におけるJABEE修了判定の評価を行った。これらの委員会およびワーキンググループによって、教育方法や教育改善に関する実質的に活動が実施され、促進するように継続的に検討が行われている。

3. 2 電気電子工学科

電気電子工学科では、平成19年10月にJABEE中間審査を受け、平成20年5月に3年間の継続認定を受けた。その後、平成22年11月にJABEE継続審査を受け、平成23年5月に6年

間の継続認定を受けた。次回は平成28年度にJABEE継続審査を受ける予定になっている。

今年度は、専攻（学科）FD委員会を計2回開催し、その他専攻会議や電子メールでの議論、シラバス点検などで学科の教育改善に取り組んできた。今年度の専攻FD委員会を含む学科の教育改善活動は以下の通りである。

(1) シラバス点検

専攻FD委員会において、全てのシラバスの記述方法や評価方法・基準が妥当であるかを点検し、不備や問題がある場合は担当教員にフィードバックすることにより、シラバスの整備を行っている。

(2) 授業評価アンケート結果等を活用した授業改善

専攻FD委員会において、全ての科目の授業評価アンケート結果、合格率や各評価割合のデータ、および授業計画改善書をもとに講義の検証を行なっている。特に授業評価アンケートの項目のうち、③興味深い授業、④理解、⑩熱意、⑮満足度の4項目を重点的に検証し、著しく評点の低い科目については専攻FD委員長（専攻長）が担当教員と面談し、原因の分析と今後の改善策等について話し合うことにより授業改善を進めることにしている。また、全ての科目の授業評価アンケート結果は学科内で閲覧可能とし、情報と問題点の共有を図っている。

(3) 新入生アンケートと追跡アンケートの実施

新入生オリエンテーション特別企画の際に、新入生に対して学習姿勢、将来の進路希望、電気電子工学分野への関心・認知度、JABEEに対する認知度等を問うアンケートを実施し、「フレッシュマン・セミナーⅠ、Ⅱ」の受講等により、どれだけ改善・向上したか検証するための追跡アンケートを約1年後実施している。

(4) 学生定期面談の実施

各期末の指導教員による学生定期面談を義務化し、履修上の問題点の把握やその解決方法などを指導・助言する体制を整えている。

(5) 教員間連絡ネットワークの構築

平成20年度より専攻FD委員会が専門基礎科目連携、デバイスコース専門科目連携、電気エネルギー専門科目連携、通信システム専門科目連携会議を取りまとめ、教員間で講義における問題点とその改善策等を議論している。また、その結果を踏まえて、具体的なカリキュラム変更等を専攻教務委員会で検討している。

(6) 卒業生アンケートの検討

大学教育への社会からの要請を探るため、電気電子工学科の卒業生を対象にアンケートを定期的（3年毎）に実施することになっている。本年度は平成28年度実施に向けて、実施時期、質問内容、アンケート対象者等について専攻FD委員会で検討した。

3.3 建築学科

建築学科は平成26年度にJABEEの中間審査を受審した。建築学科では全教員で構成する学科会議を原則として毎週開催して情報の共有を図っているため、JABEEの活動は実務組織である「授業改善委員会」のみでカバーしている。その中で実務的な作業はJABEEの基準1から基準6に対応するWG（Working Group）で行うこととし、教授2名、准教授4名をそれぞれのWGの主査

に割り当てて、他の教員とともに作業を分担した。具体的には以下のような活動を行った。

- ① 教員の教育負担を調べて教育貢献度を評価し、資料に基づいて授業の分担を検討した。
- ② 科目別の資料を調べて問題点と改善策を検討した。
- ③ 中間授業アンケートをグループ形式で実施し、進行中の授業の改善を促した。
- ④ 学生の学習授業時間の達成度を調査して問題点を検討した。
- ⑤ 修得単位数および GPA の結果を分析して問題点と改善策を検討した。
- ⑥ カリキュラムマップを整備し、問題点を検討し、共通教育改革や新任教員の着任に伴って一部内容を変更した。

現在は、平成27年度の JABEE 審査に向けて、上記の項目を中心に新基準への対応等を行っているところである。

3. 4 環境化学プロセス工学科

本学科では、前身である応用化学工学科化学工学コース時代から平成16年度より継続してきた JABEE 認定を平成26年度に終了し、継続しないこととした。その理由は、化学系 JABEE プログラムではこれまで「化学および化学関連分野（応用化学コース）」と「化学および化学関連分野（化学工学コース）」の2つがあったが、平成24年度より適用された新基準ではこれらが統合され「化学及び関連のエンジニアリング分野」となり、化学工学の強みを発揮できなくなったこと、また全学科中最も教員数および非常勤講師手当額が少なく、他学科に比べ各教員の講義の負担が大きい上、これまで以上の労力が必要な新基準での JABEE 認定プログラムの申請およびその実施が本学科教員の研究と教育を両立させる上で極めて困難になったことによる。

JABEE 認定プログラムに代わる取り組みとして、平成26年度入学生より公益社団法人化学工学会の認定資格である「化学工学技士(基礎)」の取得を意識した新カリキュラムを実施している。この資格の取得は現在、多くのエンジニアリング系大企業にとって学生採用時の重要な指標となっている。そのような世界に通用する企業が採用する資格を取得できる学生を育て、その目的を達成できるカリキュラムとしている。平成26年度においては団体受験を実施し、本学を試験会場として旧カリキュラムの学部3年生以上の希望者25名が受験した。合格者は11名であり、うち7名は学部3年生であった。

一方、個人の学習達成目標の到達度を再確認・自己評価させる意味で「単位修得状況確認表」の作成ならびに提出を学部2、3年生に義務づけている。学部4年生には、日々の卒業研究の従事記録表の作成を義務づけている。なお、学部1、2年生には年2回、教員が面談員となり定期個別指導（学生面談）を実施し、学生と教員との間のコミュニケーションを通して学修指導ならびに生活指導を行っている。平成26年度入学生（学部1年生）より「アドバイザー制と学生相談員制」が導入され、学部1年生のアドバイザー（教員）には助教も含めることとした。本学科ではチーフアドバイザー学生相談員の雇用を一括管理するとともに、アドバイザーへの担当学生の割り当てと学生相談員の配置、定期個別指導（学生面談）の日程調整と学生への周知、定期個別指導結果の取りまとめと全アドバイザーへの情報提供を行っている。

本学科においては、学期末および学期中間に行われる学生授業アンケートやその結果に対する授業改善計画書の作成、FD講演会への参加などのFD活動に取り組んでいる。また必要に応じて

教室会議から附託を受け、個別の授業科目の講義内容についてのワーキンググループを開催している。その成果として、平成26年度は学部3年次の専門教育の英語科目（工学英語Ⅰ，工学英語Ⅱ）の授業内容を大幅に見直し、TOEICに特化する授業内容の導入を行った。本学科の受験者の平均点が向上するなど、一定の成果を挙げている。

3. 5 海洋土木工学科

JABEEプログラムの実施・点検にともなう教育改善の一環として学科のFD活動が実施されている。工学部のFD委員会で実施している授業アンケートの実施結果に関して各授業担当教員は授業計画改善書を作成してFD委員に提出することが義務付けられている。FD委員はこの結果を学科の教育システム評価委員会に提出することになっている。さらに、各授業科目の担当教員は、専門科目の学習目標の達成度評価を作成して学科の教育システム評価委員会に提出することになっている。教育システム評価委員会では、学生による授業評価である授業計画改善書と、教員による評価（学習目標達成度の結果）とを比べて検討することになっている。その検討結果は学科会議に報告され、提起された問題点や改善点について、担当する学科内の委員会で検討や実施方法が策定される。このようなFDやJABEEに対する取り組みが仕組みとして確立されている。

なお、本学科ではエンジニアリングデザインに関する科目の充実をはかっている。「海洋土木デザイン工学Ⅰ」では、エンジニアリングデザインの実例を学ばせながら、数値解析やCADによる図面作製法などのスキルを身に付けさせ、実際のプロジェクトの調査・代替案の立案・発表を行わせている。「海洋土木デザイン工学Ⅱ」では、学生が自ら持っている知識・情報・技術を用いて社会的・技術的な問題点を自ら発見し自ら解決することを学習・体験させることにより、課題発見ならびに問題解決能力の高い技術者の養成を試みている。学生の得た最終的な成果は3名程度の小グループに分けてポスターセッション形式で発表させている。

3. 6 情報生体システム工学科

情報生体システム工学科は、平成21年度に情報工学科と生体工学科・生体電子工学コースが統合されて新学科となり6年間の経過した。今年度は、新学科の卒業生を送り出して32年目となる。JABEEへの取り組みは平成21年度より新たにスタートしており、6年間の資料の収集が終了したこととなる。

情報生体システム工学科では、教育企画委員会と、FD推進委員会により、学科の教育改善などのFD活動を担っている。FD推進委員会の下には、教科グループWG（情報基礎科目，ソフトウェア科目，工学基礎・教養科目，語学科目，実験科目）があり、学科の教育内容について検討を行っている。ここ数年、学生の数学の学力低下が懸念されており、工学基礎・教養科目WGでは、数学に関する授業の内容を科目間で調整している。また、ソフトウェア科目WGでも同様に、プログラミング言語に関する講義や演習の内容を検討し、科目間での調整を行っており、開講期の変更を決定した。さらに、実験科目WGでは、昨年度末の計算機システムの導入に伴い、実験機器の更新や内容の見直しを検討し、次年度での実施を決定しその準備を行った。

情報生体システム工学科では、授業計画改善書を教員間で互いに閲覧し、各教科グループWG

で積極的に活用できるように学科事務室に保管・管理している。また、1年生には、高校における数学・理科の詳細な履修状況、志望動機、進路希望などを調査する新入生アンケートを実施して、学生への指導の参考にするとともに、カリキュラム改善に役立てている。

3. 7 化学生命工学科

化学生命工学科の前身である応用化学工学科応用化学コースが、平成18年度の審査によりJABEE認定を受け、平成29年3月31日まで継続して認定されている。JABEEに関する情報は学科ホームページを通じて広く公開されており、学習・教育目標とJABEE基準との対応、学習・教育目標を達成するための授業課題の流れ、授業時間などの情報を閲覧することが可能になっている。また、卒業生に対するアンケート調査が継続的に実施され、結果は学科ホームページを通じて公表されている。さらに、自己点検表（ポートフォリオ）を学生自らが作成して継続して改善する仕組みを導入している。新入生については初年度に重点的なケアが必要であると考え、平成25年度までは後期が開始される時期に全学生の面談を教員が行い、単位の取得状況、サークル活動やアルバイトと勉学との両立状況、進路の検討状況についてインタビューを実施してきた。これらの活動は平成26年入生に対するアドバイザー制度・学生相談員制度に先んじて行ってきたものであり、これらの新制度とも矛盾の無いように自己点検表制度を継続的に運用し、かつ今までのインタビュー活動から得たノウハウを活用することで、平成26年入生に対して行う学生相談員の活動を効果的に指導することができた。

また、授業公開・参観についても積極的に取り組んでいる。具体的には、各教員が年間1科目は必ず講義を公開し、どの科目に誰が参観するかを定め、全教員が必ず他の教員の参観を受ける仕組みを導入している。

以上のような取り組みを継続的に実施しているが、更なる改善を目指し、学科内に教育プログラム改善検討委員会を設置して検討を重ねており、PDCAサイクルを構築している。

第4章 平成26年度の工学部FD活動の総括と今後のFD活動

4. 1 平成26年度のFD活動の総括

4. 1. 1 平成26年度のFD活動

工学部では先進の国際的に通用する教育を目指し、日本技術者教育認定機構（JABEE）の認定プログラム教育、もしくはJABEEに準拠した教育を実施している。これまで継続的に工学部FD委員会が実施してきた授業アンケート等によるFD活動を通じた教育改善のPDCAサイクルは、比較的良好に機能してきた。平成26年度の第1回工学部FD委員会において、既に学部に着したこのような活動を本年度も継続して遂行することが決定され、年度内に以下の活動を実施した。

- 1) 授業アンケートの実施と授業計画改善書の作成
- 2) 授業公開と授業参観の実施
- 3) FD講演会の実施

4) 学習成果と質の向上の検討

4. 1. 2 授業アンケートの実施と授業計画改善書の作成

工学部の学生による授業評価アンケートは、平成26年度も例年通り前期は7月、後期は1月に実施した。また各期中頃に中間アンケートも実施した。期末アンケートは、5段階のリッカート尺度評価による15項目の質問と自由記述欄で構成されている。5段階評価（「大いに思う」、「そう思う」、「どちらとも言えない」、「そうは思わない」、「全くそうは思わない」）は5から1までの値で数値化し、科目ごとの各項目の平均値を評点として集計後、担当教員に学生の記入したアンケート用紙とともに印刷して返却した。各教員は授業評価を受けて、授業計画改善書を提出した。授業計画改善書には直近三年間の各項目の評点の推移と当該年度の評価値に対する自己評価と改善対策案を記入する。この改善書は系列科目担当の教員間で共有されたり、学科内での自由な閲覧を可能にするなど、各教員の教育の質改善のみならず、各学科の教育の質改善にも利用されている。

4. 1. 3 公開と授業参観の実施

平成26年度は、前期・後期合計93科目を公開科目とした。これらの公開科目に対して、工学部教員による授業参観が22件実施された。ただし参観の実施は、学科間で大きな差がある。また、共通教育科目の実態を調べるため、建築学科では前後期に一人の教員が最低1つの共通教育科目の授業参観の実施している。

4. 1. 4 FD講演会の実施

平成26年度の工学部FD講演会は、2回開催された。1回目の講演は、理工学研究科、理学部との共同共催で、同志社大学社会学部の山田礼子教授に講師を依頼し、「教学IRの役割と可能性」という演題で講演が行われた。山田先生のご講演は鹿児島大学が所属しているIRコンソーシアムの代表であり、IRの意義と今後の展開について述べた非常に興味深いものであった。講演終了後の質疑応答も活発であった。2回目の講演は、工学部独自に工学部が当面大きな課題としているエンジニアリング・デザイン教育法に関する講演を京都工芸繊維大学 教授・柴山 潔 先生に依頼した。聴講者は教職員合わせて67名があった。エンジニアリング・デザイン教育の実践の話は、工学部の今後の実践に結びつく貴重な内容であった。

4. 1. 5 学習成果と質の向上の検討

工学部FD委員会では、平成21年度から学習成果と教育の質の向上の定量的な評価のために、学生による授業評価アンケートの評点と科目GPAとの相関を吟味してきた。平成26年度も過去のデータと同様の検討を行った。授業内容の理解、授業目標の達成、満足度と行った項目の評点は、受講生の成績の平均値と相関があることが26年度のデータでも示された。つまりアンケート

トという学生の主観的評価が、特定の項目においては成績という学生の理解度の客観的評価とも相関があることが見いだされ、アンケートデータの有用性が改めて確認された。

4. 2 今年度のFD活動の特徴と今後

工学部は、JABEEに基づくあるいは準拠する教育を行っており、学生アンケートの集計結果やGPA等の分析結果より、教育改善のPDCAサイクルが比較的良好に機能していると考えている。しかし、現状では教育システムが完成されるに連れて、学生は受け身になるという皮肉な傾向も見られる。また、GPAの推移を追跡すると、若年学年が年ごとに学力が低下する傾向が読み取れ、今後の工学教育の質や水準の維持に対して危惧する。さらに、エンジニアリング・デザイン教育とも関連して、教員が多くのレポートを課して半ば強制的に学習させること以外に、自主的な問題解決能力育成の検討も求められている。そのような自主性の育成などに関して各学科、各教員の効果の見られた様々な取り組みや工夫について、学部の全教員で情報共有できるようにする仕組みづくりを検討する必要がある。特に、平成26年度より始まったアクティブ・ラーニングに代表される能動的授業法の検討に関連するWG等の活動は始まったばかりであり、取組内容に関する報告が待たれる。

工学部では、上記の仕組み創りを含め、先進の国際的に通用する分かりやすい教育課程を体系化させるよう、はじめにで説明したように①厳格なGPA制度に基づく成績評価、②キャップ制(履修登録単位上限)、③プログラム・シラバス マップ、ナンバーリングの導入、④アドバイザー制による学修指導、⑤チューター(学生相談員)制による学生指導のすべてのシステムが、平成26年度に完成した。今後、これらの各制度を有機的に結び付け、有効的な活用と的確な学生指導により教育の効果向上を目指し、現状の問題点の洗い出しとその原因究明を含め、工学部の特徴的なFD活動を創り上げるスタート点に就いたと考えている。したがって、増々工学部FD委員会のFD活動と各教員の密な情報共有が重要な位置づけになると考えている。

農学部・ 農学研究科

平成26年度
鹿児島大学農学部・農学研究科 **FD** 活動報告書
(概要)

鹿児島大学農学部 **FD** 委員会

平成27年3月

第1節 平成26年度農学部FD活動の記録

まえがき

農学部 FD 委員会は、委員長、副委員長（教務副委員長が兼任）、および各学科から選出された委員 4 名、および、教務係長で構成されている。委員会では、さまざまな FD 活動計画や取りまとめ、また、全学 FD 委員会や、全学 FD 活動への対応について協議した。

今年度の農学部の FD 活動の特筆すべき点 は、授業公開・授業参観の参加率を上げることを目指した点である。また、例年通り学生による授業評価アンケートの集計の分析にも力を入れた。授業公開・授業参観の予約、学生による授業評価アンケートの集計は、農学部 FD-WEB（現：Agri-Fish-Web）システムが利用できるため、授業公開・参観期間の調整および授業評価アンケートの集計も容易であった。その他に、例年行っている農学部 FD 講演会を今年は教務委員会、国際交流委員会と共催として、ノースダコタ大学の国際交流担当学長補佐の先生をお招きして「教育スキルアップセミナー」と題しておこなった。

1. 農学部 FD 活動組織（FD 委員会の構成と活動状況）

委員長 坂巻祥孝

副委員長 侯 徳興

委員 山本雅史

委員 渡部由香

委員 鶴川 信

事務担当者 河本政展（教務係長）

FD-WEB 管理・データ処理 池田日出男（技術専門職員）

第1回農学部 FD 委員会 平成 26 年 4 月 28 日（水）

議題：1. 平成 26 年度 FD 委員会の活動計画について

1) 平成 26 年度農学部授業公開・授業参観の実施について

2) 平成 26 年度 FD 報告書作成の分担について

2. その他

第2回 農学部 FD 委員会 平成 26 年 10 月 8 日（水）（メール会議）

議題：1. 後期授業公開（FDウィーク）期間について

2. FD-WEB システム上の授業参観予約システム確認

1-1) 平成 26 年度農学部授業公開・授業参観

農学部では、平成 15 年度後期より公開授業・授業参観の取り組みを実施している。平成 22 年度からは、授業公開科目と授業参観参加希望科目の登録を FD-WEB で行うようにし、今年度もこの FD-WEB を活用することとした。その使用法は教授会ならびにメールにて説明し、周知した。今年度の授業公開は、例年参観率の向上を目指すため、授業公開期間（通称：農学部 FD ウィーク）を 2 週間に延長した。これは、参観希望の講義公開日に出張など入った場合、FD ウィークが 1 週だけでは、参観をあきらめてしまう教員もいるだろうという配慮からである。また、FD-WEB シ

システム上での参観予約なので、講義の当日まで参観予約期間としても問題ないとの意見が、農学部 FD 委員会で挙げられたため、参観予約期間は 3 週取った。その 授業公開と授業参観のスケジュールは以下のとおりであった。

(前期)

- 5 月 21 日 (水) : 公開授業の実施についてのお知らせ (教授会)
- 6 月 9 日 (月) ~6 月 13 日 (金) : 公開不可能な授業科目調査
- 6 月 23 日 (月) ~7 月 11 日 (金) : 授業参観予約
- 6 月 30 日 (月) ~7 月 11 日 (金) : 授業公開 (農学部 FD ウィーク)
- 6 月 30 日 (月) ~7 月 18 日 (金) : 授業参観報告書作成・提出

(後期)

- 10 月 15 日 (水) : 授業公開の実施についてお知らせ (教授会)
- 11 月 4 日 (火) ~11 月 7 日 (金) : 公開不可能な授業科目調査
- 11 月 17 日 (月) ~12 月 5 日 (金) : 授業参観予約
- 11 月 25 日 (火) ~12 月 5 日 (金) : 授業公開 (農学部 FD ウィーク)
- 11 月 25 日 (火) ~12 月 12 日 (金) : 授業参観報告書作成・提出

授業担当者と授業参観者には、可能な限り、授業参観終了後に意見交換をお願いした。また、参観者には、FD-WEB を通じて、授業参観報告書を作成・提出いただいた。

本年度の授業参観には、前期 48 名、後期 34 名の参加があった。これらの内一人で複数の授業を参観する教員も多く、のべ参加人数は 96 名であったが、参加名簿から実参加者を数えると農学部全教員 77 名中 58 名が授業参観をしたことが分かった。有意義な取り組みであった。参観した全教員の参観報告書は Agri-Fish-Web(平成 27 年 3 月より FD-WEB から新システムへ移行)が集められているが紙面の都合で、以下に、農学部 FD 委員による参観報告・感想を掲載した。

公開授業参観報告

生物環境学科 鶴川 信

生物環境学科森林科学コース 2 年生の必修科目「森林政策学 I」(遠藤日雄教授)を参観した。教室は 203 号室で、学生数に対して十分な広さが確保されていた。講義の前半は、学生が提出したレポートを紹介する形で、その内容について学生に問いかけるとともに、その問いの答えを示していくという内容であった。後半は、現場の写真をパワーポイントで示しながら、当該現場の問題点や課題を学生に問いつつ、その答えを論理的に説明するという内容であった。これらの講義の中で、特筆すべきは、教員と学生の対話形式で講義が進められる点であった。学生が注目する先は、正面のスクリーンではなく、担当教員そのものであり、対話を通して学生が“考える”ようにする工夫がなされていた。また、学生の授業態度もよく、集中して講義を受けているという印象を受けた。講義の内容自体も、時事問題を中心に組み立てられており、先進的かつ現実的な情報の提供が行われていた。今後、学生を飽きさせない工夫として、対話のウェートを重くする点を自分の講義にも取り入れたいと思う。

公開授業参観所感

生物資源化学科 侯 徳興

金曜日2限目にある境 雅夫教授の「土壌科学」を拝聴させていただきました。「土壌科学」は、生物資源化学科食糧生産化学コースの必修科目であり、生命機能化学コースや焼酎学コース等の選択科目でもある。受講学生は40～50名で、学生の授業態度が良く、集中して受講しているという印象を受けた。講義の基本的な資料は開講始めに配り、パワーポイントと板書の併用で進められた。特に、項目ごとに意識的にスローペースで丁寧に分かり易く説明された。授業参観で参考になった点を今後の自身の担当する講義に生かしたいと思う。

公開授業参加報告

生物生産学科 山本雅史

前期は高山耕二准教授の「動物行動学」、後期は坂上潤一教授の「熱帯作物学」を参観させていただきました。専門分野は異なるものの、両授業には共通するところが多かった。いずれの授業においても、パワーポイントが有効に活用されていた。スライドによる写真、動画などは、学生の理解を深めることに有効であることを痛感した。「熱帯作物学」では実際の植物等の例示もあり、学生の興味も高いように感じた。また、両授業ともに講義内容に関連して、担当教員が実際に実施している研究や活動についても紹介されていた。実際の体験からの説明は非常に説得力が高いだけでなく、講義と研究等との関連を理解するうえでも効果的であった。さらに、両先生ともに一方的な講義でなく、双方向授業を実践することを心掛けられていた。以上のことは、私自身の授業に欠けているものであるので、今年度の授業参観は非常に有意義であった。最後に、公開授業期間が延長されたことで、参観可能な授業が増えた。来年度も今年度の方式を踏襲していただきたい。

公開授業参加報告

生物資源化学科 渡部由香

佐藤宗治教授の「植物情報管理学」を参観させていただきました。研究における実験データの解析には統計処理が欠かせません。このことは卒論研究を行っている学生が経過報告を行う際にも口を酸っぱくして言っておりますが、今回は当コースの学生が統計に関してどのような授業を受けているのか興味があったこともあり、この授業を参観させていただきました。どちらかという参観というより自分が授業を受け、概念の再確認を行ったような気がします。佐藤教授は今年3月でご退官ですが、大変お世話になった先生で名残惜しいです。ありがとうございました。

今回の授業参観ウィークは参観しやすく改善され、助かりましたが、オムニバス形式や2名で授業を分担する授業などでは、期間中に講義をされる先生がほぼ決まってしまう。これは今後、検討しなければならない点かと考えております。

1-2) 農学部 FD 講演会 (農学部教務委員会、国際交流委員会と共催)

「教育スキルアップセミナー」

日時：平成 26 年 7 月 25 日 (金) 16 時 30 分から 18 時

会場：101 講義室 (農・共同獣医学部共通棟 1 階)

講師： Dr. Kalidas SHETTY 教授 (ノースダコタ州立大学) 国際交流担当副学長補佐

- 演題：1. グローバルな食品安全に向けてのシステム戦略と教育プログラムの紹介
2. ダブルディグリー制度の紹介
3. 英語による授業の紹介

1-3) 平成 25 年度後期および平成 26 年度前期 農学部授業評価アンケートの結果とりまとめ

本授業評価アンケートの結果は、農学部水産学部共通の

Agri-Fish-Web(<http://staff.agri-fish-web.jp/base/login/login.php>)上でも閲覧できるが、この Agri-Fish-Web システム上で閲覧できる結果は、授業形態別 (講義か演習かの比較) および(実験か実習かの比較)、授業規模別 (5 人以下、6-10 人、11-30 人、31-50 人、51-100 人の比較) にとりまとめている。このデータは 2008 年から 2014 年前期までが同システム上に蓄積されている。

しかし、本稿では学科別にこのアンケートを比較して、学科ごとの授業、実習などの特徴と学科ごとの受講学生の特徴を浮き彫りにすることを目指した。

図 1-2 は平成 26 年度後期の講義・演習に関するアンケート、図 3-4 は同期の実験・実習に関するアンケートの結果を学科別にまとめたものである。また、図 5 はこれらのアンケートの際の実験・実習調査用紙である。同アンケートは後期の講義・演習、実験・実習についても集計を行ったが、グラフの傾向については、全く前期と同様な傾向のため、紙面の都合で掲載を省略する。ただし、自由記述欄については、前・後期、それぞれの特徴が認められたため、どちらも掲載した。

結 果

平成 26 年度前期講義・演習について(図 1-2)

図 1 の 101 を見ると授業の出席状況は生物生産学科・生物環境学科では「すべて出席」が約 50% ではほぼ同様であるが、生物資源化学科では 60%、獣医学科では「すべて出席」が約 70%とやや出席状況が良かった。102 のグラフでは、授業に関連のある参考書、論文、雑誌を読んだ受講生の割合が、獣医学科のみ 50%とやや高めである。1 コマあたりの予習・復習時間はいずれの学科も 60 分以上の受講生が約 30%であったが、獣医のみで 60 分以上が 40%を超えた(103)。授業内容に関する質問(201-207)では、この授業から新しい関心が生まれ、関連分野の勉強をしたくなったと思った受講生の比率は、「どちらかといえばそう思う」を含めれば、いずれの学科でも 80%を超えて高かった(201)。授業の水準(202)や分量(203)はいずれの学科でも約 80%が妥当だったとしており、学科間の差はあまりない。授業が知力学力の向上に役立ったか(204)および将来役立つと思うか(205)という問いに対しては、「そう思う」という回答が生物生産、生物資源、生物環境の 3 学科では 40-50%であったが、獣医学科では 70%を超えた。学習目標達成感(206)と総合的満足感(207)は「そう思う」「どちらかといえばそう思う」を足し合わせればいずれの学科でも 90%を超えている。教員の姿勢や授業進行等に関する質問(301-305)では、「302 板書や使用した教科書と教材は授業の理解に役立ちましたか」「303 教員の話し方は明瞭で聞き易く、説明はわかりやすいと思いませんか」などいずれの問いでも約 90%が「そう思う」あるいは「ど

ちらかといえそう思う」と答えており、教員の説明や態度に満足していることが垣間見える。そして、特に獣医学科ではいずれの質問についても「そう思う」と答える受講生が 60%を超えて高めであった。

平成 26 年度前期実験・実習について(図 3-4)

101-104 は受講生自身の出席状況や自習状況を問う設問である。図 7 の 101 は実験・実習の出席状況を示しており、生物資源化学科で「すべて出席」が 90%以上ととびぬけて、その割合が高い。実験・実習に関連のある参考書、論文、雑誌等を読みましたかという問い(102)に対しては、「はい」と答えた割合が獣医学科で約 60%と高く、続いて生物環境学科、生物資源化学科、生物生産学科の順であった。一方、予習復習にかけた時間については 1 コマあたり 60 分以上が生物環境学科のみで 50%を超えた。この傾向が平成 25 年度後期と同じである。これに対応して、「104 この実験・実習を理解するための基礎学力はあったと思いますか」という問いに対して、「そう思う」「どちらかといえばそう思う」の合計が生物環境学科でのみ 60%を下回っていた。これらから、生物環境学科では受講生のこれまでの基礎学力よりも高めの新たな課題を実験・実習で課し、受講生が予習・復習をすることで、この課題を消化していたのではないかと推測される。

実験実習内容に関する質問(201-207)では、「202 この実験・実習のレベルはどうでしたか」および「203 この実験・実習の分量はどうでしたか」の設問で生物環境学科だけで「高かった」「多かった」の回答が 20%を超えた。これは、前述の 基礎学力よりも高めの新たな課題を実験・実習で課したという推測を裏づける結果と考えられる。

「この実験・実習が知力や学力向上に役立ったか」(204)、「この実験・実習が将来役立つと思うか」(205)、「この実験・実習の学習目標は達成できたか」(206)という問いに対しては、いずれも獣医学科で「そう思う」の回答がやや多かった。

教員の姿勢や実験・実習の進行等に関する質問(301-305)では平成 25 年後期の実験・実習の場合と同じで、いずれの問いでも約 90%が「そう思う」あるいは「どちらかといえばそう思う」と答えており、教員の説明や態度に満足していることが垣間見える。とくに、生物資源化学科と獣医学科ではいずれの質問についても「そう思う」と答える受講生が約 70%かそれ以上と高めであった。

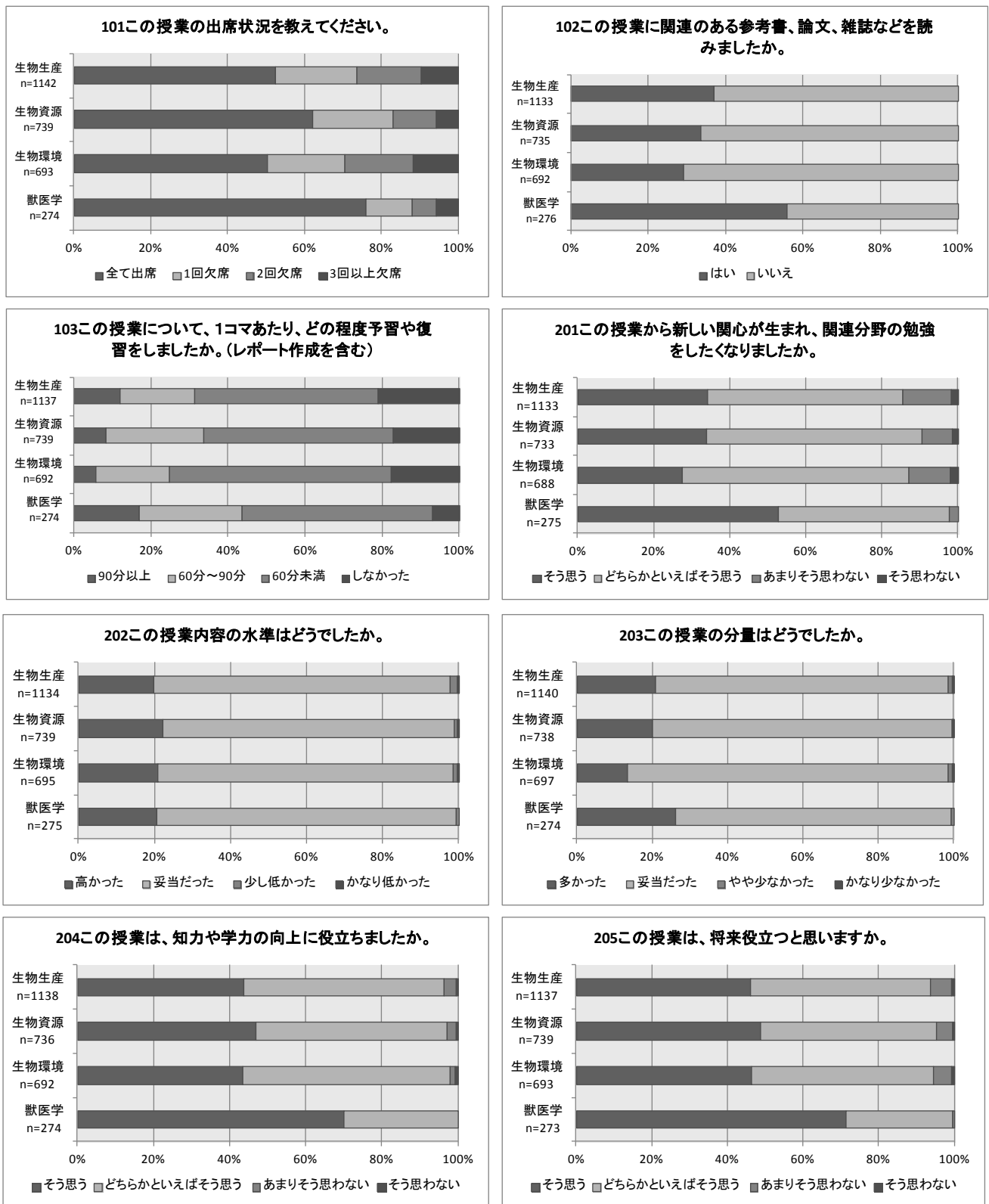


図 1. 平成 26 年度前期 授業評価アンケート（講義・演習）の学科間比較[質問 101-205]

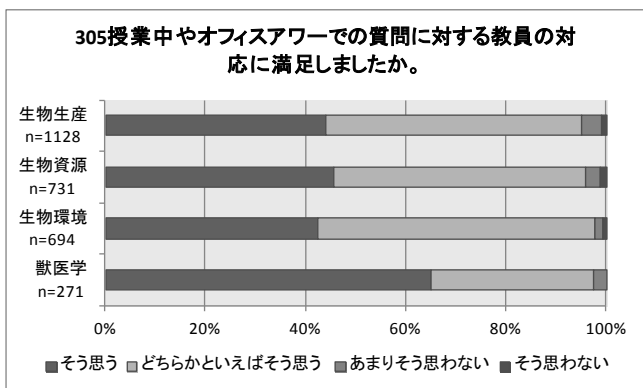
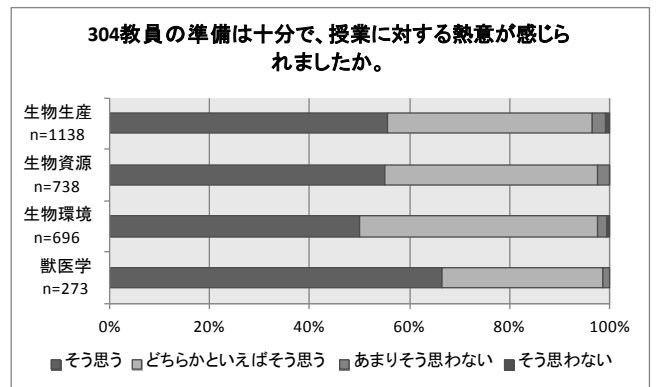
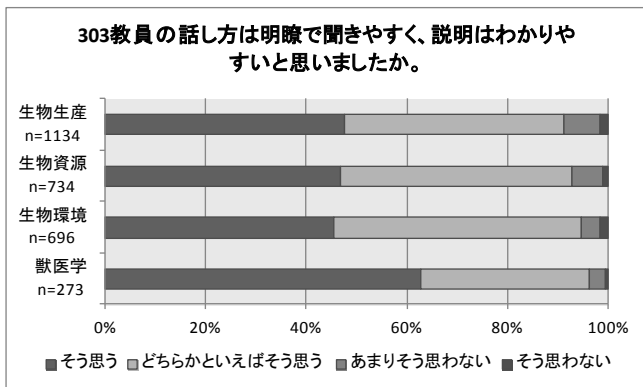
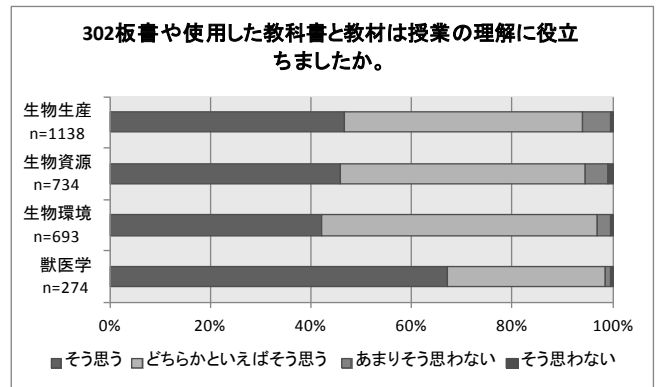
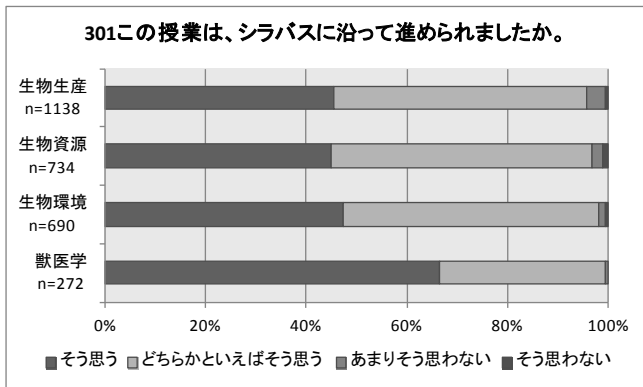
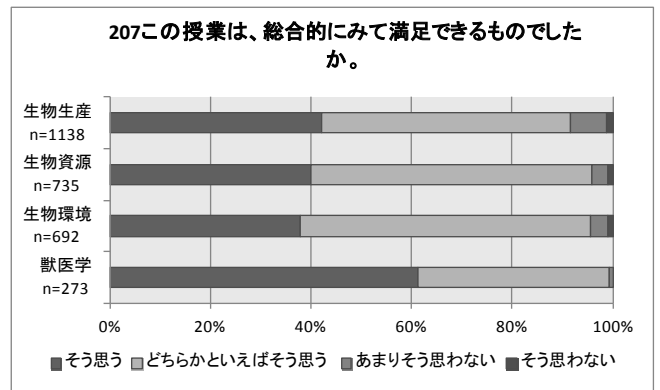
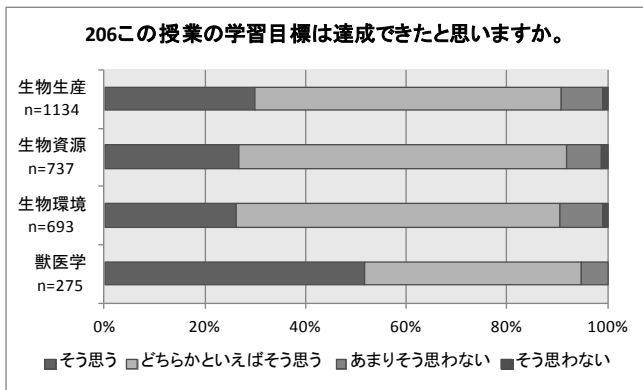


図2. 平成26年度前期 授業評価アンケート（講義・演習）の学科間比較[質問206-305]

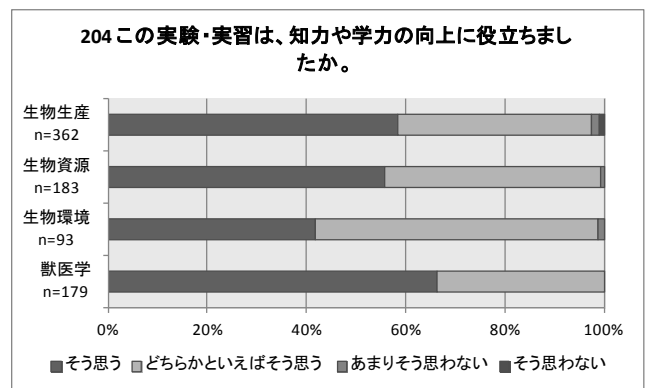
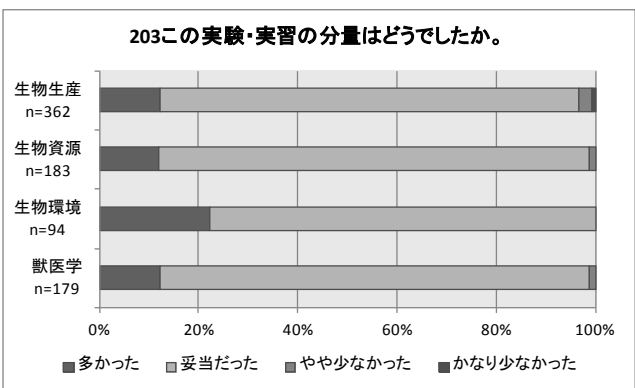
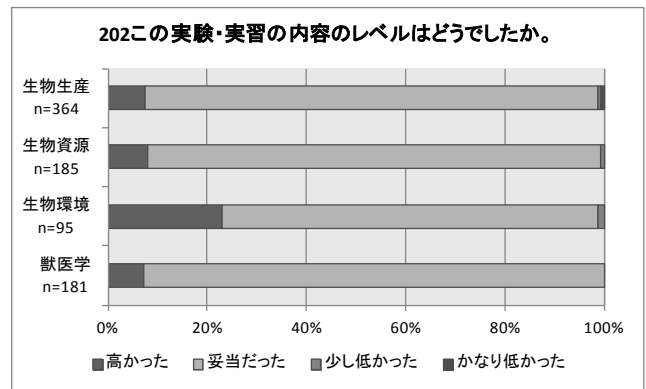
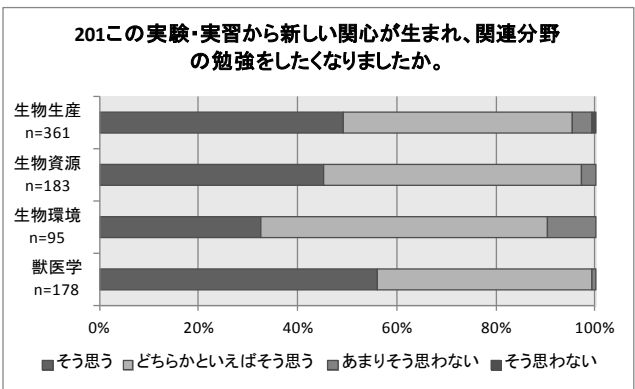
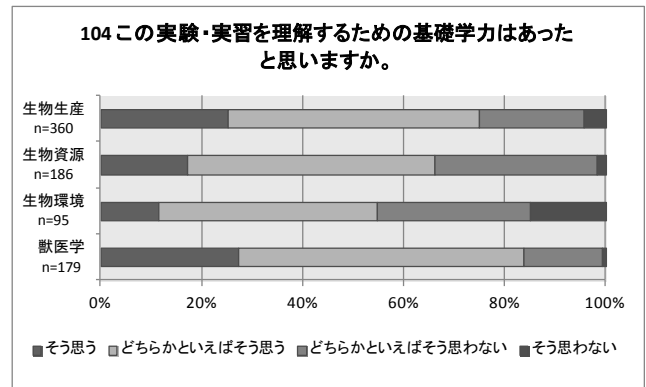
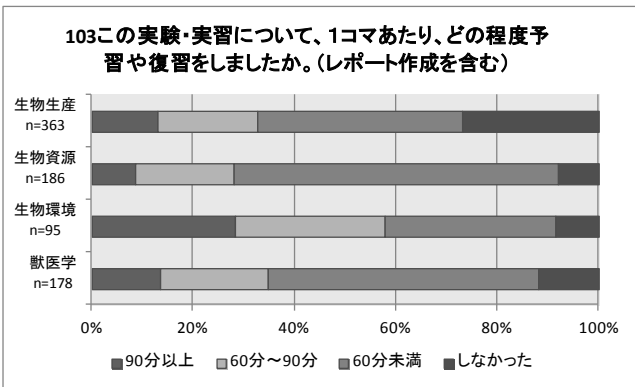
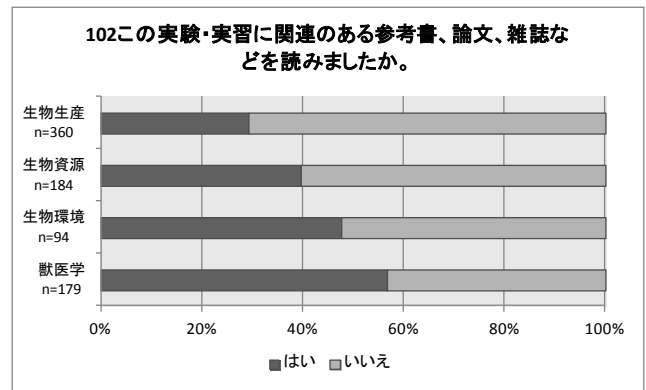
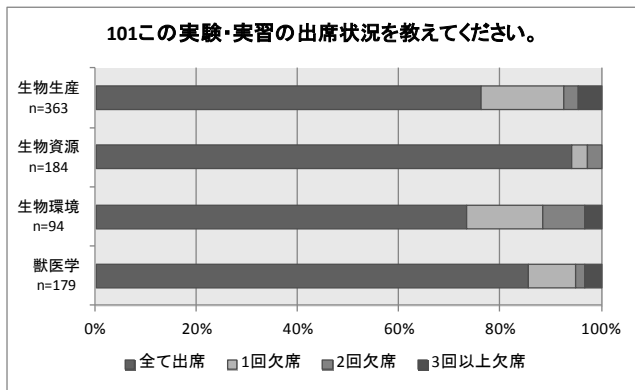


図 3. 平成 26 年度前期 授業評価アンケート (実験・実習) の学科間比較[質問 101-204]

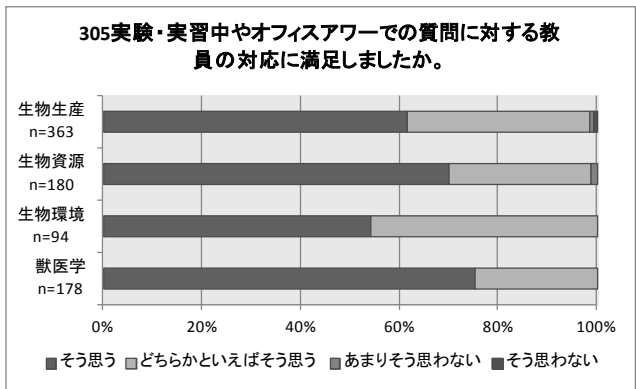
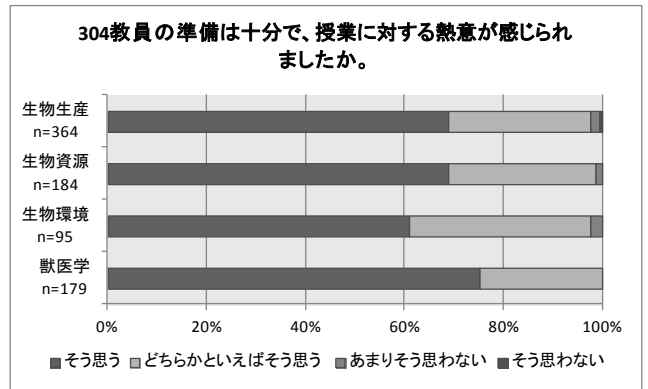
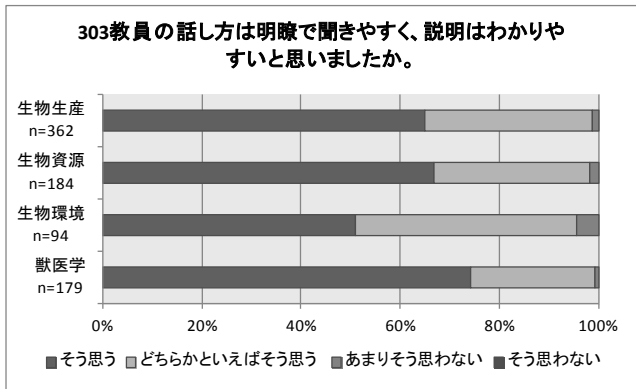
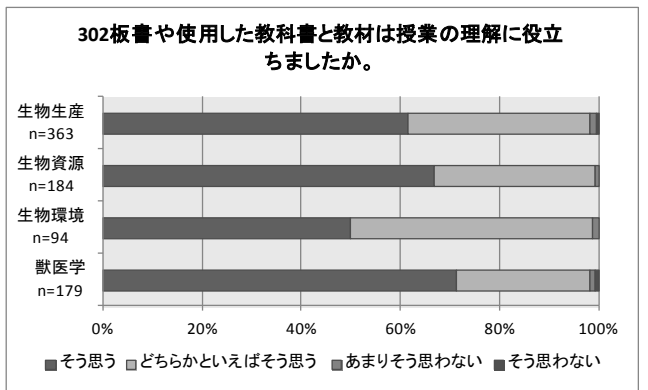
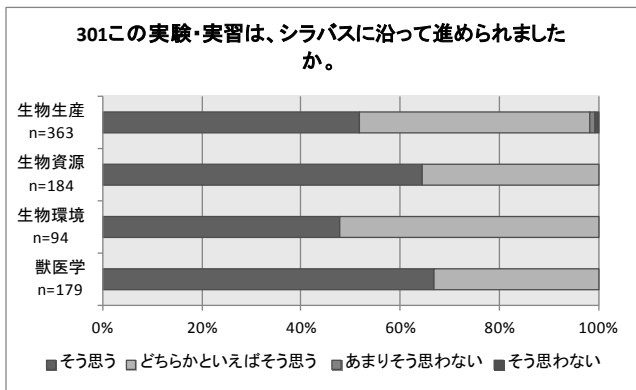
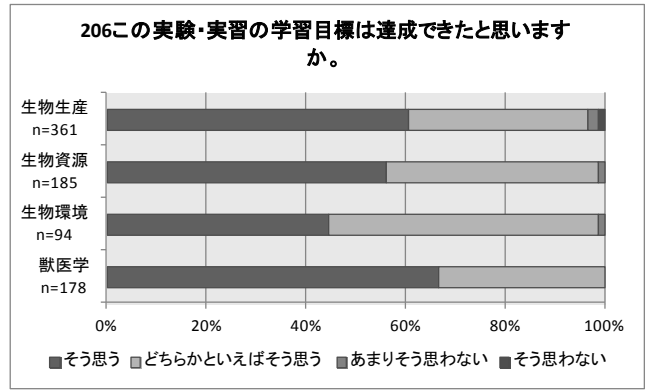
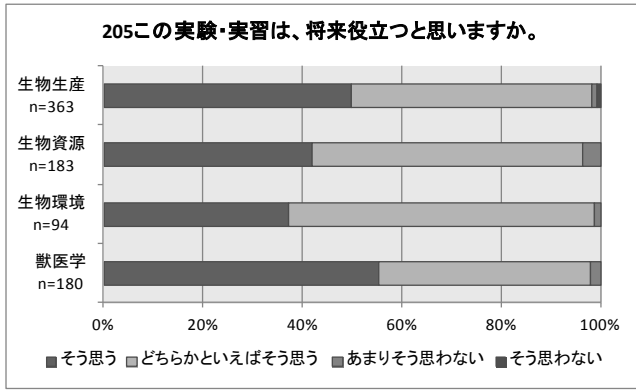


図 4. 平成 26 年度前期 授業評価アンケート（実験・実習）の学科間比較[質問 205-305]

授業評価アンケート(実験・実習用)【学部】

授業科目番号:

受講者氏名

(氏名の記載は任意です。)

授業科目名 :

教員名:

40人

- * このアンケートは、実験・実習をより良くするために行うものであり、受講者氏名の記載は任意です。回答者の成績に影響することは全くありませんので、あなたの考えを率直に記入してください。
- * この回答用紙は機械(OCR)で読み取り集計しますので、該当する番号の前の○印を塗りつぶしてください。

- 101 この実験・実習の出席状況を教えてください。
(○4:全て出席 ○3:1回欠席 ○2:2回欠席 ○1:3回以上欠席)
- 102 この実験・実習に関連のある参考書、論文、雑誌などを読みましたか。
(○4:はい ○3:いいえ ○2:) ○1:)
- 103 この実験・実習について、1コマあたり、どの程度予習や復習をしましたか。(レポート作成を含む)
(○4:90分以上 ○3:60分～90分 ○2:60分未満 ○1:しなかった)
- 104 この実験・実習を理解するための基礎学力はあったと思いますか。
(○4:そう思う ○3:どちらかといえばそう思う ○2:どちらかといえばそう思わない ○1:そう思わない)
- 201 この実験・実習から新しい関心が生まれ、関連分野の勉強をしたくなりましたか。
(○4:そう思う ○3:まあそう思う ○2:あまりそう思わない ○1:そう思わない)
- 202 この実験・実習の内容のレベルはどうかでしたか。
(○4:高すぎた ○3:妥当だった ○2:少し低かった ○1:かなり低かった)
- 203 この実験・実習の分量はどうかでしたか。
(○4:多かった ○3:妥当だった ○2:やや少なかった ○1:かなり少なかった)
- 204 この実験・実習は、知力や学力の向上に役立ちましたか。
(○4:そう思う ○3:どちらかといえばそう思う ○2:あまりそう思わない ○1:そう思わない)
- 205 この実験・実習の学習目標は達成できたと思いますか。
(○4:そう思う ○3:どちらかといえばそう思う ○2:あまりそう思わない ○1:そう思わない)
- 206 この実験・実習は、総合的にみて満足できるものでしたか。
(○4:そう思う ○3:どちらかといえばそう思う ○2:どちらかといえばそう思わない ○1:そう思わない)
- 301 この実験・実習は、シラバスに沿って進められましたか。
(○4:そう思う ○3:まあそう思う ○2:あまりそう思わない ○1:そう思わない)
- 302 板書、配布資料、実験マニュアルなどは実験・実習の内容理解と実施に役立ちましたか。
(○4:そう思う ○3:どちらかといえばそう思う ○2:どちらかといえばそう思わない ○1:そう思わない)
- 303 教員の話し方は明瞭で聞きやすく、説明はわかりやすいと思えましたか。
(○4:そう思う ○3:どちらかといえばそう思う ○2:どちらかといえばそう思わない ○1:そう思わない)
- 304 教員の準備は十分で、実験・実習に対する熱意が感じられましたか。
(○4:そう思う ○3:どちらかといえばそう思う ○2:どちらかといえばそう思わない ○1:そう思わない)
- 305 実験・実習中やオフィスアワーでの質問に対する教員の対応に満足しましたか。
(○4:そう思う ○3:どちらかといえばそう思う ○2:どちらかといえばそう思わない ○1:そう思わない)

自由記述

この実験・実習についての意見・要望・感想などを自由に書いてください。(例えば、実験・実習の進め方、プレゼンテーションを含む)

ご協力ありがとうございました。

農学部FD委員会

図 5. 平成 26 年度後期 授業評価アンケートに使用したアンケート用紙(実験・実習用)

授業評価アンケート自由記述欄

以下に平成 26 年度前・後期の授業評価アンケートの自由記述欄(図 5)の記載を学科別に列挙した。それぞれの授業の受講者でなければ分からない事情もあるが、以下の自由記述欄を読むだけで、どういう点で学生が授業に対して、興味を抱いたり、不便を感じるのかがうかがえる。不便を感じる点について一般的なものとしては、「声が小さい」「黒板・白板の字が読みにくい」「スライドを配布資料化したものの配色が悪くてメモが取れない」「分量が多すぎ」「しゃべるのが早すぎる」「パワーポイントなのに、資料がなく板書が追いつかない」「実験の説明不足」「教員と TA の説明が食い違う」などが読み取れる。これらは、比較的容易に修正できるものであり、常に注意が必要な点と考えられる。

平成 26 年度前・後期

生物生産学科(講義・演習)

<前期>

- ・教材や説明もわかりやすく、授業外での質問も詳しく答えてくださり、助かりました。
- ・細菌についてより生物的防除について研究段階から考えられてよかった。
- ・資料をたくさん用意して頂いたことはありがたかったです。正直、寝てしまうことが多かったですが、自分の専門分野に関する、興味深いお話はしっかり聞けました。
- ・経済系の英語なこともあり、訳すのは結構難しかった。
- ・難しいところもわかりやすい説明でした。質問にも丁寧に答えてくださいました。
- ・あまり経営学らしいことを講義でやらなかったなと感じた。専門科目なのでもっと専門的やってほしかった。
- ・板書ばかりでなく、もう少しスライドを用いて説明してほしい。
- ・パワーポイント? の資料プリントが欲しかった。
- ・声がききとりにくかった。
- ・声が聞こえないことが多々あり、教科書のどこをやっているかわからないことがよくあったので困りました。
- ・専門なのになぜ 15 回目までテストではないのですか。
- ・テストを 15 回目にしてください。
- ・とにかく声が聞こえにくかったです。もう少し大きな声で話していただくとありがたいです。
- ・とてもわかりやすかったです。範囲は広いですが試験がんばります。
- ・生物的防除の様々な方法を学んだが、実際に生物的防除が使われている所をあまり見ないので、地域単位での取り組みがもっと行われれば普及が進むと思った。
- ・実習の次に起きていた授業でした。
- ・話が長い。まわりくどく同じ話が多い。端的に述べてほしい。
- ・授業の進み具合(進め方)が自分合っていてよかった。理解しやすかった。
- ・授業での質問をプリントにのせて配布して下さったのは、とても良いと思った。
- ・わかりやすい授業でした。
- ・授業を進めつつも、途中で質疑応答が入ったりしていて良かったと思います。説明はわかりやすく、パワーポイントも見やすく作られていたので、とても集中して授業に取り組むことが出来ました。
- ・毎回毎回授業がちがうのでおもしろかったです。統一性もあってもいいんじゃないかなとは思いました。
- ・レジュメにおいて、どこがポイントなのかわからないことが多

かった。

- ・分かりやすい授業でした。
- ・さつまいもコロケの話がとても興味深かったです。
- ・同じ内容のスライドがいくつもあるのが多くて自分でまとめるのに無理がある。判定が努力相応じゃない。評価が低くてやる気が失せる。
- ・ノートまとめは大変ですが、理解を深めるのに役立ちます。
- ・ノート作成は大変だったが、講義内容と特に冒頭で話された最近の話題などとても興味深く、面白いと感じた。ただ講義内容が何回か重複していると思った。
- ・ノート作成することで、復習や発展した内容を学習するのに役立ちました。
- ・スライドが似たようなものが多くて、ノート作りに書くことがなかった。
- ・ノートの作成に毎週毎週多くの時間を使い、努力したにもかかわらず、それにみあう評価がもらえなかった。
- ・1つ1つのスライドと説明がとてもわかりやすかった。
- ・授業中先生のことわりなしでトイレに行かせてほしいです。恥ずかしいと思います。
- ・難しい内容が多かった。これからの品種を作ることにについて考えられた。
- ・僕のくだらない質問にも答えてくれるので嬉しかった。
- ・とても興味をもてました。おもしろかったです。
- ・熱帯作物より深く、工芸作物について知ることができた。
- ・たまに聞きとれないときがありました。
- ・いい勉強になりました。ありがとうございました。
- ・講義用ノートがわかりやすく、使いやすかった。
- ・農業への見方が大きく変わりました。
- ・毎回の授業コメントにかかる時間が多い。
- ・めっちゃ良い講義でした。
- ・ムードルでの課題提出は便利でした。
- ・英文理解よりパワーポイントにまとめる方が難しかった。
- ・論文の読み方が分かりました。
- ・ブタの論文も、1 つはあるとブタ班の理解も深まるのではないかと思います。
- ・英語だけでなく論文に関係する知識を学べたのがよかった。

<後期>

- ・興味深いことばかりで面白く、今後役に立つと感じました。
- ・板書の速度が早く、書く前に消すのはやめてほしい。
- ・プリントに第何回目のものか書いてほしかった。
- ・図や写真があるとやはり見やすいです。先生の研究室など、鹿大で行っていることも興味があるため、もっと混ぜてほしいと思います。

- ・復習をしっかりすればよかったです。
- ・この授業により新たな関心がうまれました。
- ・家畜についての理解度が深まりました。やはり、家畜には多くの魅力があるなど感じ、また専門的に学びたいという気持ちが大きくなりました
- ・ノートの空欄を埋めるやり方は良かった。しかしテンポが速いこと、どこを説明しているのか分かりにくいことが相まって聞き逃しやすく、そのうえ板書がないことから後にメモをとることもできないのでついていけなかった
- ・写真があるとより分かりやすいです。
- ・行動観察は大変だったけど行動を理解するのに非常に役立ちました。
- ・家畜の管理の方法などが良く分かりました
- ・卒論でのデータまとめに有効な授業だと思いました。
- ・声が小さくて分かりにくかった
- ・プロフェッショナルがよかった
- ・普通に生活していても知りえない日本や世界の現状やその裏側を知ることができて楽しかったです。農業はそれ単体としてではなく、多くの事柄が結びつきながら存在していると感じました。
- ・テストの分量に対して時間が足りなさすぎると思う。
- ・テストですが、期末は全範囲から出題されると明示してくださいがあればありがたかったです。
- ・白板に青字は読めないんですけど 日本が嫌いならもといた企業に帰って、どうぞ。
- ・頭の体操ということで抜き打ち試験みたいなものが出されたが参考資料等を見ずに解くなんて不可能だろう
- ・いろいろな設備や施設が紹介されていたが、写真などで示してもらえると分かりやすかったと思う。少ない図と文章ではあまりイメージがわかず、分かりにくかった。
- ・復習のために試験問題の返却や解答例を示してほしいです
- ・もう少し大きな声で講義してもらえるとうれしいです。少しなんですけど聞こえづらいです。
- ・テストの難易度が高い。せめて持ち込み有りにすべき
- ・配布資料の色字の部分が見えにくいです。
- ・試験範囲が広く細かいので勉強が難しい。
- ・出席や授業の音が小さくて聞こえにくい、授業プリントに記載していない内容を授業で扱う。シラバスの成績のつけ方が分かりにくい、ひとりでボソボソと授業をしているだけで生徒がほぼ聞いていない
- ・小テストの内容が重すぎるし、スライドや資料を見ても、どこが大切な部分なのか分かりにくかったです。
- ・前の席に座っていても声が聞こえないことが多いので、マイクを使って授業をしてもらいたい。スライドの説明が聞こえないのでうける意味がないように感じる
- ・スライドの枚数が多すぎる。
- ・授業のスライドでは赤字であるものが、配布プリントでは薄字となり、プリントが読みにくい。印刷がうすいため所々読み取れない字があって授業に集中できなかった。
- ・何が重要なのかよく分からなかった。授業に興味を持たせようとしているのか、自身の体験談を話すのは構わないが同じ話ばかりでつまらなかった
- ・特に理由のない昔話が講義時間を襲う
- ・博多で何をされているんですか
- ・興味深い内容ばかりだった。毎回の講義でさまざまな資料をもらえて、より広く学ぶことができた
- ・板書をしたあと説明等をする際に、真ん中に立って話をされるため、板書が隠れてしまいノートがとりづらい時がけっこうあっ

たので少しの間でいいのでどちらかによってもらえるとありがたいなと思いました。

- ・お世話になりました ありがとうございます
- ・研究室に入ったらどんどん使うと思うのでとても為になる講義でした
- ・板書の字がもう少し大きかったら良かったです
- ・紙を見たら分かる内容だったのが良かった
- ・毎回スライドに応じたプリントが配られるので勉強しやすかった。
- ・自分の進みたい分野なのでいい勉強になった
- ・その事柄についてのビデオなどが見たかった。
- ・レポートを書く時間が少なかったような気がします
- ・今まで曖昧だったところも詳しく学べた。
- ・内容によって難しかったり、簡単だったりバラツキが多かったが、基礎が分かったのでよかったです。
- ・実際にノートをとってみるとより理解が深まったと思う。

生物生産学科(実験・実習)

<前期>

- ・各分野、果樹、野菜、熱帯作物、堆肥など様々な内容が深く学べてよかったです。
- ・雨が強いときは他の実習と変えてほしい。
- ・苦しいことも楽しいこともたくさんあり、学生の思い出の中で一番濃いものになったと思う。先生たちの指示通り動けないことがあったり、不十分なところもあったと思いますが、後半はさぼらずに行動するように心がけていきました。今まで話したことなかった同級生や先生、技術職の方々と実習を通して話すようになり、友情を育むよい機会となり、うれしかったです。今回でこのメンバー全員と作業することが最後になり、さみしく思いますが本当に楽しい実習でした。ありがとうございます。
- ・自主栽培が楽しかったです。
- ・私の最も濃い”青春”でした。もう一回もう一年やりたい。
- ・実習の合間に休みが欲しかった。
- ・1年間とても楽しかったです。ありがとうございます。
- ・全ての実習がいい経験でした。ありがとうございます。
- ・1年間ありがとうございます。先生方、コースのみならず行う実習とても楽しく、ためになることばかりでした。今後生かしていければと思います。
- ・教員の方々はみんな優しく、楽しく学ぶことができました。履修登録の時間とかぶってしまい、上手く登録することができませんでした。
- ・新たな分野に興味をもてたのでよかったですと思う。
- ・先生達がとても優しく、丁寧に分かりやすく教えて下さり、とても楽しく実習を行えました。
- ・この実習を通して、家畜を扱うことの大変さが身をもってわかったのと同時に、もっと詳しく学んでいきたいと思った。
- ・実習で作業する上で大変なことはたくさんありましたが、すべてが良い経験となり特にサツマイモの収穫は今まで何も思わず食べていた食物は大変な苦勞・労働があることを身をもって知ることができました。
- ・教員の方々の話を興味深く聞くことができた。実習はきつかったが、農学に関して関心が深まった、更に興味を持つことができた。
- ・大変だったけどゴーカートで一気に疲れがふきとんだ。とてもためになったと思う。

- ・ていねいなご指導ありがとうございました。
- ・集中講義でしか実習はしていなかったのですべてが興味深いことばかりでした。ぜひ1月にはトマトをもらいにきたいと思います。
- ・3日間とても充実していました。高校とはまた違った道具や栽培方法であったり、新しいことを知ることができたりと楽しかったです。
- ・高校ではしたことのない分野で、新たな発見もあり、植物っておもしろいと感じました。とても充実した3日間で、もっと、実習したかったなという気持ちになりました。
- ・水耕栽培がすごく革命的だと思った。
- ・302 宿泊室のドアに油をさしてほしいです。
- ・暑かった。お茶があって助かった。
- ・家畜について興味をもつ、いききっかけになりました。多くの貴重な体験ができました。
- ・ウズラが残念でした。
- ・実験に失敗はつきものということが分かった。
- ・基礎事項を復習しなければなと思った。

<後期>

- ・繁殖学についての理解が深まり、新たな関心が生まれた。
- ・解剖実験や除核の実験がとてもいい経験になったし、思い出になりました。
- ・なかなか本物の動物を使う機会にめぐまれなかったのでおもしろかった。
- ・グループ作業だと順番が回ってこなかったりするのでもっと個人でも作業を体験してみたかったです。
- ・三日間ありがとうございました 二年生でもよろしく願います。
- ・レポート作成の時間がもう少しあるといいです。
- ・大変充実した実習を行うことができました。
- ・とても楽しい実習で良い経験になりました
- ・三日間ありがとうございました
- ・自分にとっていい経験になりました
- ・先生方とても質問しやすい環境づくりであり、実習を通して多くのことを学べたと思う。
- ・三日間お世話になりました。ありがとうございました
- ・普段講義ばかりなのですごく実習は楽しかったし、体を使って学ぶことの大切さを知りました。もっと実習があればいいのになと感じました。
- ・説明が詳しくて分かりやすかったです。

生物資源化学科(講義・演習)

<前期>

- ・時間ないときなどメールで相談のつてくれ、助かった。
- ・北原先生、本当にお世話になりました。クラス全体のチューターのように私生活まで気にくださって本当に嬉しかったです。テストは良くなかったですがもっと努力します。本当にありがとうございました。先生の授業を受けることができて良かったです。
- ・前回の復習を毎回の講義の始めにしてくれたのはとてもありがたかった。
- ・授業も資料も分かりやすかったです。質問への回答もありがとうございました。
- ・今までテストは普通くらいの結果だったので最後は頑張って勉強したので良い点がとれれば良いと思います。
- ・分かるように丁寧に説明してくださってとても分かりやすかつ

た。もう少し予習して受けるべきだった。反省している。

- ・説明がわかりやすくてとても楽しい授業でした。ありがとうございました。
- ・有機化学について多くのことを学ぶことができました。ありがとうございました。説明も授業資料も分かりやすかったです。ただ、このアンケートの塗りつぶし方式は少し面倒くさいかなと思います。全15回本当にありがとうございました。
- ・素晴らしい授業をありがとうございました。
- ・説明が細かくしてあってわかりやすかった。
- ・メールでの質問にていねいに答えてもらってありがたいです。
- ・楽しい授業ありがとうございました。
- ・授業を丁寧に進めてくれた。
- ・テストができませんでした。
- ・授業内容がわかりやすかった。
- ・スライドも見やすく、とても分かりやすかったです。
- ・進路に対する視野が広がった。
- ・物理選択者にとっては生物の用語の知識が乏しいので、その用語についての説明が加われば良いと思いました。
- ・1年生には難しい部分もあったのでコース配属前にも同じような授業があれば、よりコース分けの際に役に立つのではないかと思います。
- ・4つのコースそれぞれの説明が聞いて、自分の進路を決める参考になったので良かった。
- ・農学部のホームページを見てもよく研究室のことがわからないので助かる。
- ・先生によってスライドのプリントを配らない先生がいたので参考資料としてプリントは配布してほしいです。
- ・様々な研究内容に触れることができ2年後の目安ができた。
- ・先生が毎回熱意をもって話をしてくださるので、どの分野にも興味を引かれた。もう少し集中して聞けばまだいろんなことに興味を持てると思った。後悔している。すごく良い講義だったと思う。
- ・この講義を受けたことで生物資源化学科の研究や学習内容について詳しく学ぶことができたのでとても良い講義だった。自分の興味がある分野やもっと詳しく学びたい分野も見つけることもできてとても有意義だった。この講義で学んだことをこれからの三年半にしっかり生かしていけるように頑張りたい
- ・黒板に書いてある文字に解読できないものがあって困った。
- ・テストや出席での成績のつけ方を統一してほしいです。
- ・いろいろな糖を味わうことができて良かった。
- ・シラバスが配布してあれば達成目標を確認しやすかったです。先生の口調が時々強すぎるがあったので、もう少し柔らかくしていただきたいです
- ・講義で様々な糖サンプルの実物を見せてくれたりしてくれたおかげで分かりやすかった。
- ・乳酸菌や食物繊維でのヨーグルトやきなこの話は面白かったです。自分でも試してみようと思いました！
- ・前半の講義内容も復習のためにレジュメが欲しかった。
- ・南先生の授業はもう少しゆっくりしてほしいです。
- ・ありがとうございました。どうしても欠席せざるをえなかったのが今もって残念。最終の講義がよかった。
- ・小テストの答えを知りたかった。
- ・テストがわかかっていても間違ってしまう時があったのでそれが嫌でした。
- ・実際の市場でどのように保蔵しているのか知ることができたら良かった。

- ・先生がジャム好きだとよくわかりました。

時々、説明が聞き取りにくいことがあった。

- ・配布されていたスライドのプリント内容が分かりにくかった。もっと分かりやすいプリントを配布してほしい。授業内容が漠然としていてどこが大切なかがよくわからないまま授業が進められていた。要点をもっとわかりやすく説明してほしい。
- ・もっと分かりやすくしてほしい。スライド、説明、ともに質問の回答ばかりでなくもっと重要な部分の説明をしてほしい。
- ・授業内容でいまどこを学んでいるのかわかりにくい時があったのでもっとポイントを強調して指導していただきたいです。

宿題などの形で良いので各章？ポイントごとに例題として問題を一問程度出して答え合わせをすればもっと理解が深まると思います。

- ・しゃべるのが早かった。
- ・時々メモが追いつかない時があり、後日プリントを見直すとか何のことも全くわからない時があります(図のみだったり英語しか書いてなかったり)もっとしっかり授業を聞けば良い話なのですがプリントに見出し等を入れるかももう少しゆっくり話していただけるととてもありがたいです。
- ・食品が私たちの健康においてどれだけ重要であるかが化学的な観点から見えてよくわかった。
- ・教科書に詳しく載っていないところも学習できたので良かった。
- ・スライドを日本語にしてほしいです。スライドの順番をちゃんとしてほしいです。
- ・授業のスライドがプリントアウトできませんでした。
- ・HPにスライドがあがっていなかった。
- ・レジュメを配ってほしい。難しい割に量が多い。
- ・スライドを書き写す作業が多すぎる。人数が多くてスライドが見にくく量が多かったので文章まるごとではなく語句などのみ空欄にしてほしい。
- ・土壌について深く知ることができた。日頃植物を育てている土壌について知るにはどうしたらいいのかわかりたかった。
- ・シュレッダーにかけた紙を施肥したら植物がかれてしまう現象の原理を知れてなるほどなと思いました。とても面白かったです。
- ・土壌についてはとても興味があって集中して受けたいと思いましたが、復習不足だったことを後悔しています。何か土壌に関する最新情報など教えていただけると嬉しかったです。
- ・土壌科学という学問を初めて学び、とても楽しかった。土壌を知るということは地球の歴史や惑星の生物の有無を知るといった、興味深い話をされ、この授業が毎週楽しみだった。質問にも納得のいく分かりやすい説明をしてくださったので知的好奇心は満たされた。この先生の授業をまた受講したいと思いました。

<後期>

- ・テストが簡単すぎてあまり差がつかないように感じた。
- ・最後のテスト範囲のスライドをプリントにして配って欲しかった。メモが間に合わず、よくわからないで終わることが多かった。
- ・まとめの授業があり、整理しやすく大変ありがたかったです。
- ・高校時代、生物をとってなかった自分にとっては非常に難しい内容だった。
- ・進むのが早くてついていくのがやっとなかった。
- ・分量の多さによりスライドが変わるのが早かった。板書をとるのが至極困難であった。
- ・前期の時からこの授業について楽しみにしていました。実際に始めてみると全くついていけず、もっと勉強すればよかったと思います。本を読んだり、友人に教えてもらったりしましたが、テストになって上がってしまい、覚えたことを全て忘れてしまい、テストでは先生に申し訳ないような解答用紙ばかりお見せしていたこと、本当に申し訳ありません。このままでは、学校に入れないので、卒業して自分の夢をかなえるためにももっと頑張る

うと思います。

- ・難しいけど理解するにつれて楽しくなった。
- ・説明は時々わからなかったが、大体は分かりやすかった。
- ・授業は非常に分かりやすく、質問の対応も非常にしてくださってありがたかったのですが、もう少しだけ声を大きくしゃべってもらえると嬉しいなと思います。
- ・個別の質問に対して熱心に答えてくださると同時に、ホームページにも他の質問にも答えていて毎週納得がいき勉強がはかどりました。
- ・早口で聴きづらかったです。
- ・授業の内容が難しくまた話の内容がすぐ変わって、授業の内容の話だったのにいきなり、将来の話だったり、就職の話になったりすることがたびたびあり、話についていけない時が何度もありました。
- ・とても素晴らしい授業でした。これからもこの授業が継続することを願います。
- ・プレゼンテーション能力が初めよりは高まり、より練習になったと思う。
- ・先輩方、同期の発表を聞くことができ、文献の発表の練習・スライドの作り方を学ぶことができ役に立った。
- ・初めての論文検索からプレゼンテーションまで、勉強になる内容でした。1回の論文発表のために多くの論文を読み、質問対策するのは大変でしたが、勉強が身になるのが実感できていい授業でした。
- ・すごく詳しく説明されるのでありがたいが、もう少し簡潔であれば進度も遅れないかなと思いました。
- ・資料が分かりやすい。質問に対して分かりやすく説明をしてもらえた。初めてもっと勉強したいと思った。
- ・とても分かりやすかった。
- ・時々字が小さくて見えづらい時がありました。
- ・プリントは前から配っていく方式が効率がいいと思う。テスト前にテスト前授業の内容が出てくるのはやめてほしい。
- ・難しい内容が多かった。
- ・スライド移動が速いのでノートをとるのが大変だったときがあった。
- ・出欠確認・プリント配布の時間で1コマ分は潰れていると感じます。テスト当日にやった内容をテストに出す形式をとられるなら、毎時間小テストにした方がよいと思います。
- ・スライドを読むだけの授業に感じた。プリントを裏表印刷にしてほしかった。早口だった
- ・文が長すぎて大事なところから分からないところもあった。テスト前に大事なところをするのはどうかと思った。
- ・まれにスライドの字が小さく、最前列に座っていても見えないことがあります。また出来ればテスト当日にテスト範囲の学習を行うのはやめていただきたいです。余裕がありません。
- ・身近なものから応用的なものまで、非常に興味深い内容でした。ありがとうございました。
- ・微生物、面白いと思えることができました。
- ・講義はまるで Wikipedia をコピペしたかのようなスライドをただ読み上げられるだけ、レジュメの誤字脱字も多く図もただどこからか引っ張ってきたものを張り付けただけであり、字が小さくて読めない。これどうやって勉強しろというのが理解に苦しむ。要所や重要点を示すことなく、ただの朗読を聞かされる講義だった。院生の方がまだ興味関心を持たせ有意義な講義ができるのではないかと思った。研究者としては腕があるのかもしれないが教育に携わる者としては底辺だと思ふ。
- ・パワーポイントの赤字を移す時間が欲しかったです。移すだけなら問題はありますが、書きながらだとなんか解説を聞くことができずなかなか頭に入りませんでした。

- ・マイクを使うかももう少し声を張った方が良いと思いましたたまたま聞きづらい時があります。
- ・花城先生ありがとうございました。
- ・シラバスに小テストの記載があったにもかかわらず実施されなかった
- ・覚えることは多くて大変でしたが楽しかったです。ありがとうございました。
- ・卒論など他の授業の役に立った。

生物資源化学科(実験・実習)

<前期>

- ・一人の先生はとてもよい指導をしていただきましたが、もう一人の先生はあまり説明がなく先生が内容を進めてしまう感じで内容を捉えづらかった。
- ・さすがです！！
- ・分からないところがあれば丁寧に質問に答えてくださりこの実験に意欲が衰えることはありませんでした。本当に楽しい実験でした。
- ・とてもわかりやすい授業でした。ありがとうございました。
- ・分からないところは丁寧に解説して下さり、理解しやすかったです。
- ・どの先生も質問にしっかり答えてくださってすごく良かった。
- ・化学実験は苦手と思っていたけど、とても楽しくて好きになった。
- ・試薬が足りなくなることが多かったので改善してもらいたい。最後の電気泳動が全然理解できなかつた。
- ・声が小さくて聞き取りづらかったです。
- ・一人の先生はとても良い指導をしていただきましたが、もう一人は口調が命令口調で過ごしにくかったです。

<後期>

- ・天秤の数を増やしてほしいです。
- ・楽しかったです。
- ・TAの人がすごく動いてくださったので初めての実験でもてこらずにできた。
- ・分光光度計などの操作を理解することができてよかった。
- ・実験をもう少し丁寧にすればよかったと思います。
- ・もう少しマニュアルを分かりやすくしてほしい。授業前に変更点をしっかりと伝えてほしい。

生物環境学科(講義・演習)

<前期>

- ・提出すべきレポートの例が間違っていたり、集中講義の場所の連絡がなかったりしました。選択授業でもあるのに、他学科への配慮が全くなかったです。
- ・急に専門的な内容になって、もう少し導入部分が欲しかった。
- ・テストのほとんどが予告なしで行われ、対策が全くできなかつた。
- ・確認試験および小テストなどの告知を前もってやってほしかった。
- ・映像とか見るのが楽しかったです。
- ・高校時代に物理を履修してない自分でも分かりやすかった。
- ・先生の話が速かったし、板書を消すのも速かったので、説明に集中しにくかったです。

- ・スライドのコピーを毎回欲しかったです。
- ・ムードルで質問できるのがよかったですと思います。
- ・淡々と進むので分かりにくい所が少しありました。
- ・3限でなければきっと眠らなかつた。
- ・プリントがまとまっているので、これからの勉強にも使えそうなので大切にします。
- ・プリントの両面印刷は、ファイルに保存するのに不便なのでやめてほしい。
- ・資料の文の量が多くて毎回驚いていました。
- ・プリント配布ではなく、指定教科書などで講義してほしい。
- ・moodleのレポート提出は忘れることがあるので、他の方法があればうれしい。
- ・moodleでの課題提出の期限をもう少し長くしたほうがと思います。
- ・ムードルの提出を授業後すぐできるようにしてほしい。
- ・IもIIもですがもう少しプリントを見やすくしてほしい。あと、外国の動向のところをもっとやってほしかったです。
- ・英語のプレゼンテーションの映像がとても印象的でした。今でもテレビをつけたときにあつたら見てしまいます。
- ・話がおもしろく、説明も大変わかりやすく講義が楽しかったです。あと、説明の際実物を見せてもらったことでより理解できました。

- ・最後2回の講義が駆け足で終わったので理解できてないままでテストを受けることになって苦労した。土砂災害で死なないような人生にします。

- ・図のみの資料はあとで見返した時に分かりにくいので、少し説明文が欲しい。

- ・今回注目されているであろう新エネルギーについての知識を得ることができたと思います。関連した映像などもあつて分かりやすく、より一層知識を深められた気がします。

- ・テストの予告がないため対策のしようがなかった。

- ・後期もよろしくお願いします。

- ・テストの分量が多すぎると思います。

<後期>

- ・レポートの提出は成人式なども踏まえて考えてほしかった。

- ・2年の頃にこのような授業を受けたうえで研究を選んで良かつたと思う。

- ・説明がわかりやすく研究内容がよく分かつた。

- ・理解しやすかつたです。

- ・コースの先輩が授業に来て話してくれたのがよかつたと思います。

- ・紹介された研究内容も興味深いものばかりで自分の進路選択に役立つと思った。

- ・コース内容の説明は非常に分かりやすいので良かつたと思いました。

- ・スライド方式で非常に分かりやすかつた。

- ・授業時間をオーバーしすぎ。

- ・小テスト後の復習の時間が長かつたと思う。

- ・板書がとてもしやすかつたです。

- ・分かりやすかつたです。

- ・もう少し取り扱う量を増やしてほしいです。

- ・自分のコース選びをする手助けになつたと思うし、新しく関心が生まれた分野などもあり充実した講義だと感じた。

- ・実際に研究室に行くことができ、より分かりやすかつた。どんなことをしているのか想像がつきやすく、興味を持つ内容も多かつた。

った。

- ・環境システムコースについて詳しく知ることができました。
- ・概論を受けていいなと思う部分があり迷います。
- ・とても分かりやすいコース説明があり、どこの研究室に行けば何をするのかなどを知ることができました。また、これまで詳しく知らなかったことに興味を待たせてくれるような講義だったのですごく良かったと思います。
- ・正誤問題について部分点がほしい。出席点もほしい。
- ・レポートの答え合わせが無いのはなかなかきつかったです。
- ・最終課題が多いと思います。
- ・森林科学コースで研究されている内容がよく分かった。
- ・時々難しい用語についていけなくなることがありました。先生方の話を聞いて、林業、農業の必要性を感じることができました。
- ・研究室の見学もしたかった。
- ・自分のコースを決める一つの要因になった。
- ・声が聞きとりづらい時があった。
- ・マイクがあったほうがよいと思いました。
- ・物理を習ったことがないがわかりやすいとおもった。
- ・時間内に終わってほしい。
- ・写真を撮る際、青字が全く見えないです。
- ・パワーポイントの文字が青だと写真を撮って後日確認したら見にくかったのが多くありました。
- ・最初の小テストの返却方法を変えたほうがよいと思う。一人ひとり返すのではなくまとめて返却したほうがよい。そうしたら時間オーバーしないと思う。
- ・パワーポイントや例などがとても分かりやすかったです。
- ・分かりやすい説明をしてくださったので理解しやすかったです。
- ・途中から授業で使うスライドの冊子を配ってもらえたのでわかりやすかった。絵や図などでわかりやすく説明をしてもらえたので興味が持て、理解することができた。
- ・声が小さく後ろのほうまできちんと聞き取れない。説明不足なところがたくさんある。自分のスピードで進めないでほしい。

生物環境学科(実験・実習)

<前期>

- ・TA とか分かりやすくてよかったです。

<後期>

- ・十分な説明もないのにプリントの内容が理解しにくく、実験にすぐに取り掛かれない。チューターと先生の言っていることがバラバラで誰の言ったことをすればいいのかわからないため事前にきちんと打ち合わせしておいてほしい。ろくに説明もしないで実験中にプリントに書いていないことで怒られても理解できるはずがない。主に説明不足がひどかった。
- ・この実習では技術だけではなく人の使い方というのも学べました。私は今まで自分ができることは自分でやったほうが実力もわかってくるし、早く終わると思って何でも自分だけで作業しがちでしたが、この実習で最初こそ時間がかかるけど、最終的な作業スピードは一人でするよりも断然早くなることを学びました。あたりまえなことではあるのですが、目先の早さのために自分一人

ですのではなく、長い目で見てみんなで技術を高めあい、作業効率を上げることが重要だと教えられました。

- ・資料を読んで予習するだけではあまりわからないと思うので先生やTAが見本を見せたほうが要領よく進められると思いました。

獣医学科(講義・演習)

<前期>

- ・養鶏に興味が出ました。
- ・馬に関する様々な裏事情が開けて面白かったです。とても勉強になりました。
- ・授業の中で大事な部分が分かりにくかったです。大事な部分(国試や現場で)を強調していただきたいです。

<後期>

- ・スライドをダウンロードできるようにしてもらえるとありがたいです。
- ・説明が分かりやすかったと思う。
- ・カラー版の教科書が欲しかった。そちらの方がわかりやすい。
- ・とても話がわかりやすくてためになりました。ありがとうございました。
- ・スライド以外の話も聞いて、より専門的に学べたと思います。

獣医学科(実験・実習)

<前期>

- ・非常に身になる実習でした。今後の人生に活かせるように頑張りたいと思いました。
- ・土、日や 19:00 以降、病院に入ることができない点について、臨時的なカードの発行などがあると助かると感じた。
- ・2 週間の内、1 週間は大学の動物病院ではなくて、動物愛護センターなどの一次診療を経験するようになってみてもいいのではないかと思う。
- ・板書はできれば PowerPoint にしてほしいです。
- ・板書の文字をもう少し丁寧に書いていただきたい。図が小さく青色の為さらにみにくいため、改善を願いたい。解説は非常に分かりやすかった。

<後期>

- ・麻酔器が各班に一台ずつ使用できるようになり、よかったです。どんどん新しく使える道具が増えました。
- ・スライドをもっとゆっくり見たかった。
- ・スライドを配ってもらえると助かります。メモする時間が短かったのだ。
- ・オペ実習の回数がたくさん設けられたので為になりました。
- ・お世話になりました。良い経験、学習ができたので活かしていきたいと思います。
- ・循環器の授業があまり知識にならなかったことが不安に残ります。
- ・スライドの背景が青だと書き込みにくいです。

第2節 全学 FD 活動への参加

全学 FD 委員会には、農学部 FD 委員長が出席し、また、多くの教職員、学生が、平成 25 年度の様々な全学 FD 活動に参加し、全学 FD 活動の一翼を担った。平成 25 年度全学 FD 活動参加者のリストは以下のとおりである。また、これらの全学 FD 活動の参加者の感想を以下に挙げた。

平成 26 年度 全学 FD 活動参加者

研 修 名	開催年月日	曜日	参 加 者		
			学 科	職	氏 名
平成 26 年度新任教員 FD 研修会	平成 26 年 9 月 25 日	木	環境	准教授	加治佐剛
			環境	准教授	神田英司
			資源	准教授	二神泰基
FD・SD 合同フォーラム 2014	平成 26 年 10 月 4 日	土	生産	准教授	山本雅史
			環境	准教授	服部芳明
学生・教職員ワークショップ	平成 26 年 12 月 9 日	火	生産	3 年	窪田信伍
			環境	教授	寺岡行雄
			生産	教授	坂上潤一
			生産	准教授	山本雅史
			生産	准教授	坂巻祥孝

学生・教職員ワークショップ「英語を学ぶ」から「英語で学ぶ」に参加して

生物生産学科 山本雅史

最近、英語での授業実施について話題になることが多いので本ワークショップに参加した。今までも何回かは FD ワークショップには参加したが、いずれも教職員のみを対象としたものであり、学生も参加できるという点に新規性を感じた。FD 活動は教職員だけで完結するものでなく、学生の積極的な関与が必要であるので、今後もこのようなワークショップを継続することが必要だと思う。特にグループ討議では、学生の意見を知ることができ、教員サイドからの発想の限界も知ることができた。事例紹介およびグループ討議ともに有意義で参加して良かったが、まだその後の授業には活かしていない。ただし、本ワークショップに参加したことで、英語による授業に対する抵抗感はやや弱くなったように感じる。「英語で学ぶ」ことを実践するには個々の教職員の努力が必要であることは当然であるが、大学としてもこのようなワークショップを含めた様々な取り組みを継続することが必要であろう。

学生・教職員ワークショップ「英語を学ぶ」から「英語で学ぶ」に参加して

生物生産学科 坂巻祥孝

今年度、大学院の授業でインドネシアからの留学生が受講してくれたため、他の日本人受講生と相談して、授業を英語で行うことにした。その中で、日本語でやっていたころのように進まない歯がゆさから、他の人の意見はどうなのだろうと思い、このワークショップに参加した。鹿児島大学で日本語で教鞭をとる外国人教員、英語授業経験のある日本人教員、英語授業に興味のある日本人学生、日本語を片言程度にしか使用できないハンガリー人留学生の皆さんとグループを組んで「英語で学ぶ」授業を実施する際の問題点とその解決方法は何か？についてディスカッションを行った。テーマが非常に大きく漠然としていたためか、話し合いはまとまりを欠いたものの、「英語の授業だからより良いのか？」「英語で学ぶ授業の目標、目的は何か？」という根源的な問題も含めて、それぞれの立場の意見を聞くことができた。私自身、待ったなしで、英語授業を始めてしまって、こういった問題を考え直すことがなかったので、大変良い機会になった。また、自分の担当学生ではない他学部の率直な学生の意見を聞きながらディスカッションが進められ、「進められるなら英語授業の導入を進めた方が良い」と思う自分の思いが学生のニーズには近いという感触を得ることができた。

水産学部・ 水産学研究科



よりよい教育環境を創るために

学生の、学生と教職員による、学生のための
ファカルティ・ディベロップメントの取り組み



2014

鹿児島大学水産学部FD委員会

1. はじめに

水産学部では、教育に対する学生満足の実現を目的として、水産学部教育システム運用マニュアルを策定し ISO9001 を取得しています。このマニュアルに基づいて、水産学部ファカルティ・ディベロップメント委員会（以下、FD 委員会）は、教職員の力量を維持し高めるための教育訓練、学生満足度を把握するための授業アンケートを実施し、その評価を行っています。FD 委員会は、ISO9001 が求める PDCA サイクルの Check（授業アンケート）を中心に Action（教育訓練の実施）にも関わり、授業改善、教育改善において重要な役割を担っています。

本年度、FD 委員会が策定した年間教育訓練計画は以下のとおりです。

- 第 1 回 平成 26 年度前期授業公開・授業参観
- 第 2 回 水産学部 FD 講習会「不適應学生の背景と心性」
- 第 3 回 水産学部 FD ワークショップ「英語による授業、学生対応のスキルアップを図ろう」
- 第 4 回 平成 26 年度後期授業公開・授業参観

以下に、それぞれの概要とその成果を報告します。

2. 授業アンケートと授業改善

FD 委員会では、受講生に対し、各学期末に授業アンケートを行っています。学生の抱く満足度を計ることを中心に据えて質問して、各科目の評価を行いました。ここでは、平成 25 年度後期および平成 26 年度前期の授業アンケートについてまとめます。

本アンケートでは、受講生の満足度に応じ、満足した点あるいは満足できなかった点について具体的な記述を求める様式としました。各質問項目における科目の平均値を図 2.1～図 2.2 に示します。科目種（講義・演習、実験・実習、乗船実習）別の満足度では、いずれの科目種でも満足したと答えた割合は平均で 80% を超えており、ほとんどの受講生が学部で実施している科目に満足していることが分かります。

表 2.1 水産学部授業アンケートの質問項目

Q1: 当該科目を履修した動機 (答) この授業に興味を持ったので この授業に学習意欲が引き立てられたから 履修しやすい曜日や時間帯だったから 必修科目だから 単位取得の為	回答 1 回答 2 回答 3 回答 4 回答 5
Q2: 授業内容に満足した はい or いいえ はいの場合 → Q3 へ いいえの場合 → Q4-1、Q4-2 へ	
Q3: 満足した点 (答) この授業は興味や関心を抱かせる内容だった この授業によって学習意欲が引き立てられた 授業の内容が理解できた 教員の説明が分かりやすかった 学習について教員からのアドバイスやサポートがあった その他	回答 1 回答 2 回答 3 回答 4 回答 5 回答 6
Q4-1: この科目の学習への取り組み態度 (答) 強くそう思う、そう思う、あまりそう思わない、そう思わない	
Q4-2: 満足できなかった点 (答) 授業の内容がよく理解できなかった 授業の内容に興味や関心がわかかなかった 教員の説明が分かりにくかった 学習について教員からのアドバイスやサポートがなかった その他	回答 1 回答 2 回答 3 回答 4 回答 5

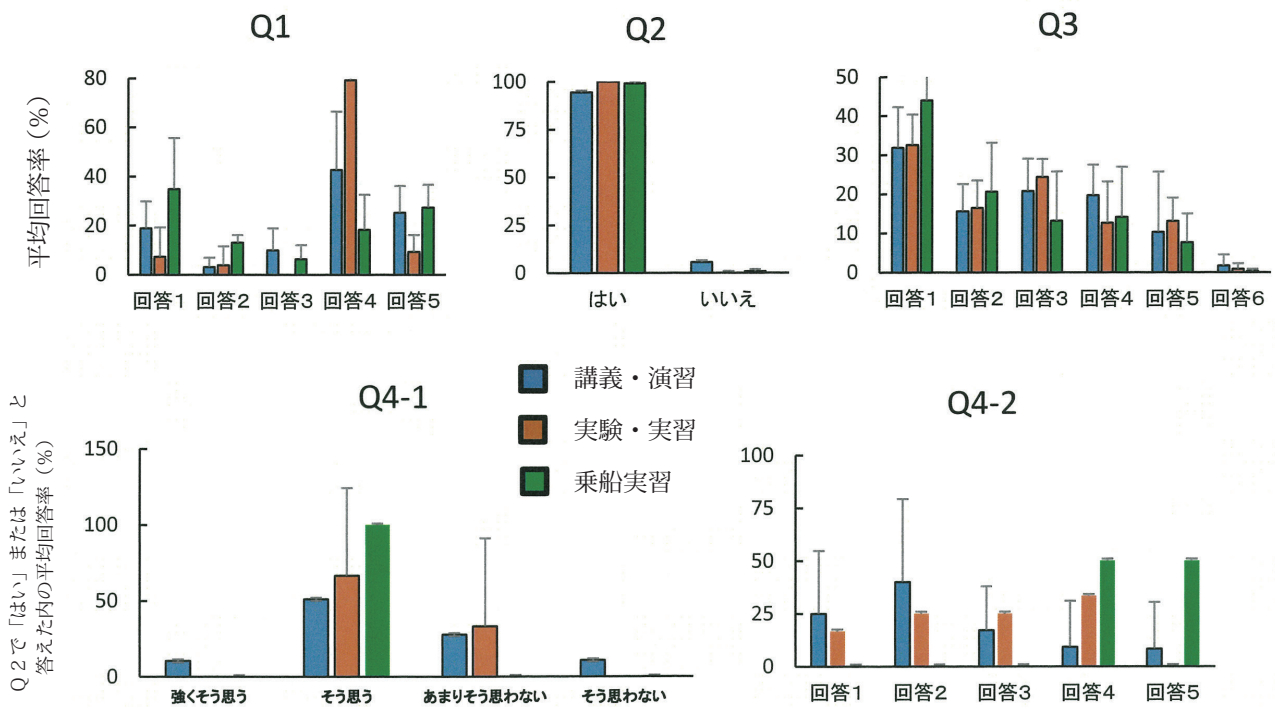


図 2.1 平成25年度 後期開講科目の授業アンケートの集計結果

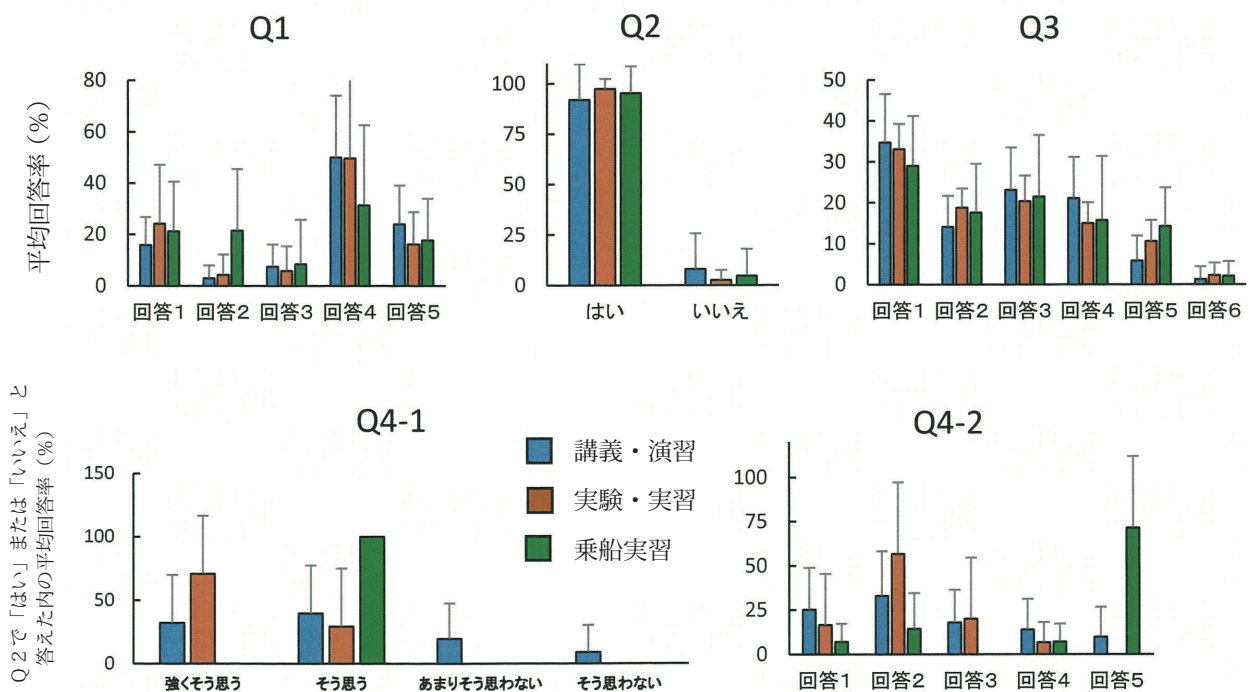


図 2.2 平成26年度 前期開講科目の授業アンケートの集計結果

講義・演習科目では、受講の動機を尋ねる質問において、平成 25 年度後期でも平成 26 年度前期でも「必修科目だから」、「単位修得のため」と答える割合が多く、「この授業に興味を持ったので」と積極的な動機を持つ受講生は前述の回答よりも少ないか「単位修得のため」とほぼ同程度の傾向でした。一方で、満足した点について「この授業は興味や関心を抱かせる内容だった」と答えた割合が最も多く、動機が積極的でない割には、各科目で受講生の興味や関心を喚起させることに成功していたことが窺えます。また、「授業の内容が理解できた」あるいは「教員の説明がわかりやすかった」「この授業によって学習意欲がかき立てられた」と答えた受講生が比較的多かったことから、教員の指導方法の改善に対する効果が現れていたことが示唆されています。

講義・演習科目で満足していないと答えた受講生の中で、講義への取り組みが積極的であったかどうかについては、回答にばらつきがみられました。また、満足できなかった点も平成 25 年度後期では「授業の内容がよく理解できなかった」、「授業の内容に興味や関心がわかかなかった」とする意見が多く見られました。これは、履修した動機で「必修科目だから」「単位取得のため」とする意見が多く、これを反映したものと考えられ、科目に満足できなかった受講生は、履修の動機の時点で科目に興味があるわけではなく、そのまま興味や関心を持ってないまま過ごしてしまったものと考えられます。しかし、多くの学生は履修登録の時点では興味や関心を持っていなかったのにも関わらず、科目履修を続けるうちに興味や関心が湧き、科目の内容に満足したものと考えられます。また、この興味や関心が湧いてきた要因としては、授業の内容を理解でき、かつ教員の説明が分かりやすかったことに起因するものと考えられました。これに対して平成 26 年度前期では「教員の説明が分かりにくかった」と回答した学生が多く見受けられ、今後の動向に注視すべきと思います。

一方で、満足であるとした点で「学習について教員からのアドバイスやサポートがあった」と答えた受講生の割合がいずれの科目種でも低く、講義・演習科目、実験・実習科目、ならびに乗船実習科目の満足できなかった点で「学習について教員からのアドバイスやサポートがなかった」と答えた割合が平成 25 年度後期では高く、アドバイスおよびサポートの印象が薄いと受け取ることも出来ます。各科目でさらに積極的に学生へのアドバイスやサポートに取り組む必要があると思われる。

一部の科目を除いて、Moodle を利用してアンケートを実施しました。授業アンケートの Moodle での実施については、学生部教務課の特任専門員（Moodle 担当）である榮徳啓介氏に大変ご尽力いただきました。ここに厚くお礼を申し上げます。

3. 授業公開・参観と授業改善

FD 委員会では、教育従事者の教育訓練の一環として授業公開・授業参観を行っています。各学期の初めに授業公開への協力を依頼し、公開可能との回答をいただいた科目について授業公開をします。水産学部に限らず、全学の教職員の参観も可としています。授業公開にご協力いただいた担当教員には授業公開・授業参観報告書を提出いただき、授業改善の基礎資料としています。本年度は、前期で 14 科目、後期で 18 科目の授業公開を行い、前期は 3 名（5 科目）、後期は 1 名（1 科目）授業参観がありました。なお、より多くの授業への参加を促進することを目的として、赴任後 3 年以内の教員および技術職員という授業参観対象者の範囲を拡大し、水産学部の全教員および技術職員を授業参観の対象としました。

授業参観後アンケートの記載内容を以下にまとめます。本年度の特徴として、受講生の理解度の向上と受講生に興味を持たせることを目的とした取り組みが挙げられます。たとえば、ミニッツペーパーに書かれた疑問に対して丁寧に授業時間中に解答し、パワーポイントを使って要点を抽出する、あるいは注意を引くような工夫をするなど、各教員が苦労を重ねている様子がうかがえます。アンケートの回答からは、個別の工夫だけでなく、受講生にとって分かり易く、かつ考えながら講義を受けられるような方向に、各教員の意識が向いていることが示唆されていました。

一方で、授業参観者数は、授業公開・授業参観報告書が提出された公開授業 1 科目当たり平均 0.2 名と少なく、授業参観者がなかった公開授業は 81.3% と高い割合を示していました。このため、授業公開・授業参観の効果的な実施方法についても議論が必要である、と思われます。

4. FD 講習会「不適應学生の背景と心性」

教育従事者教育訓練の一環として、平成 26 年 9 月 2 日に FD 講習会「不適應学生の背景と心性」を開催しました。近年大学進学率が 50% を超え、学生の多様化が進んでいます。大学入学までの経歴や学力の問題から授業についていけない学生も増え、それが原因で不適應や留年、中退といった事態が引き起こされることもあります。また、大学での生活環境や人間関係に馴染めず、孤立してしまう学生も少なくありません。問題を深刻化させないためには、教職員等による適切な支援が必要になります。そこで、学生の学修成果向上や学生生活の充実に向けて教職員に期待される役割や適切な支援方法について理解していただくことを目的に、FD 講習会を開催しました。講師には、病院等での臨床経験が豊富な精神科医である保健管理センターの川池陽一先生をお招きして、ご講演いただきました。

川池陽一先生のご講演では、保健管理センターの業務紹介の後、学生を対象にした分析として「つまりき・悪循環モデル」の紹介がありました。つまりきは、①一人暮らし学生の私生活破綻型、②

大学生生活の戸惑い型、③不本意入学型、④基礎学力不足型、⑤大学の学問への戸惑い型の5種類に類型化でき、それぞれについての説明がありました。また、悪循環には、①学内での孤立化、②情報不足による二次的な不適応、③家族との関係悪化という悪循環の流れがあり、それぞれについての説明がありました。また、相談を聴くときのコツとして、①拝聴の姿勢、②オープンクエスチョン、③伝え返しの3点を挙げ、指導のコツとして、①具体的な指示を紙に書いて伝える、②何からすべきかという優先順位を伝える、③スケジュールを組んであげることの重要性を示されました。いずれにおいても教員、大学、ならびに家族が連携を図り、「みんなであなたの将来を考えている」という姿勢を本人に伝えることが大切であると締めくくられました。

講演後の質疑では、不適応学生との接し方等に関する多くの質問や意見交換がなされました。先生のご回答の中では、不登校学生等との連絡が付かない場合は親に連絡を取ることが効果的であり、状況によっては学生に内緒で親に連絡することもやむを得ない、という内容が印象的でした。親と大学が情報共有を図り、連携して学生が相談しやすい環境を整えることの重要性を再認識しました。

5. FD ワークショップ「英語による授業、学生対応のスキルアップを図ろう」

平成27年度より農学部と連携した「国際食料資源学特別コース」および大学院「熱帯水産学国際連携プログラム」がスタートします。また、国際感覚と英語でのコミュニケーション能力を涵養する教育を行う水産学部「グローバル人材養成プログラム」も始動します。水産学部では英語で授業を行う教員が増え、教職員も留学生に英語で対応する機会も増えると予想されるため、英語での教授能力やコミュニケーションスキルの向上が求められます。

FD委員会では、教員、事務職員、技術職員が英語による授業、学生対応のスキルアップを図り、グローバル化の理解を深めることを目的としたFDワークショップを、水産学部教員、事務職員、技術職員を対象に平成27年1月21日に開催しました。ワークショップでは、FD委員会副委員長より上記の趣旨説明が行われ、国際事業課の黒川かおる氏、水産学部長の松岡達郎教授の講演の後に、総合討論が行われました。

黒川氏の講演では、鹿児島大学の留学生データ、外国人教員・研究員データ、世界各国の協定校、グローバル人材、鹿児島大学のグローバル化への取り組み、留学生との交流についてご説明いただきました。事務職員の留学生対応として、英語・日本語の指さし対応表を準備することや、職員が留学生の立場を理解して相手を思いやる気持ちが大切などのアドバイスをいただきました。また、国際事業課の国際交流スペースでは定期的にイベントを開催しており、これに教員が参加し留学生との親睦を深める機会も作れることをご紹介いただきました。

松岡教授の講演では、留学生と日本人学生が混在する模擬授業を通して、授業の英語対応のポイ

ントをご解説いただきました。日本語・英語をセットにした教材の事前配布で予習効果を高めること、留学生のコメントに限って日本人学生にその内容を日本語で教えること、ひとつのトピックの導入と議論を2週間に亘って実施することなどの事例が紹介され、何よりトピックの組み立てが重要であることをご解説いただきました。また、英語を不得意とする学生には、放置せずに丁寧に教育することが必要であり、実際に品詞、時制、動詞の活用などの基礎的な文法から教育する取り組みもご紹介いただきました。

総合討論では、英語を苦手とする教職員の恐怖感はどのように克服できるか？日本人に対して英語を使うのは教育効率が悪いのでは？グローバル化をどのように捉えているのか？英語対応による教職員・学生のメリット、「英語の授業」・「英語を使った授業」のどちらに主眼をおくのか？英語対応に向けた事務部の取り組みの把握や、英語対応の授業を担当した教員と受講学生を対象としたアンケートの実施などの意見や提案が出ました。

平成27年度から英語対応化した授業がスタートし、新水産学研究科カリキュラムPDMには「高度な水産技術者に必要な英語の運用能力を持つ」と記載されています。運用能力には多様なイメージがあるため、来年度の授業を経験して「英語の運用能力」のコンセプト・焦点をしぼることが今後の課題といえます。

6. 大学院授業アンケートの実施

水産学部では、学部で開講される全科目について授業アンケートを行っています。一方で、一昨年度までは水産学研究科（修士課程）の大学院生にはアンケートは行っておらず、大学院におけるFD活動は停滞した状態でした。昨年度から大学院修士課程の授業アンケートを実施しており、アンケートの様式を図6.1に示します。近年の留学生の増加なども考慮し、今年度からはアンケートの質問文を日英併記に修正しました。現状では各科目の受講人数が少ないため、今後は授業アンケートの信頼性について吟味することも必要である、と思われます。

7. 卒業時アンケート・修了時アンケートの実施

水産学部では教育PDMの中で掲げられている学部教育目標及び各分野のカリキュラム目標に対する達成度の調査として、卒業時アンケートを卒業式直前に実施しています。アンケートでは、学部教育目標及び各分野のカリキュラム目標に基づく質問、及び卒業後の進路決定に際して情報収集や相談をどのようにして行ったかを併せて質問するような設問としました。平成25年度には大学院生に対しても修了時アンケートを実施しました。ここでは、平成25年度の卒業時・修了時アンケート

についてまとめます。

卒業時アンケート及び修了時アンケートの設問項目を図 7.1 及び図 7.2 に示します。各質問は「①十分にそう思う」「②ある程度そう思う」「③少しそう思う」「④全く思わない」の 4 段階で評価してもらいました。質問Ⅰでは学部の教育目標に対する満足度を図るために全員共通で 6 つの質問を行い、質問Ⅱでは分野ごとに質問を変えて、満足度を 4 段階で評価してもらいました。最後に質問Ⅲでは希望通りの就職ができたかについて調査を行いました。アンケートは、質問ⅠとⅢは全体で、質問Ⅱは分野ごとに集計しました。結果を図 7.3 及び図 7.4 に示します。

大学院水産学研究科 授業アンケート
(Graduate school of fisheries class questionnaire)

このアンケートは、受講生の皆様とともに授業改善に取り組むための基礎資料として活用します。集計結果のみを授業担当者にお知らせしますので、回答内容が成績に影響することはありません。あなたの考えを率直に記入して下さい。(This survey will be used to improve the class. This survey will never be connected with your grading. Only a summary of the questionnaire will be given to the teacher.)

受講科目名： _____ 学籍番号： _____ 氏名： _____
(Class name) (Student number) (Name)

所属分野（該当する□にレ点）：
(Please check your field)

- 水産生物・海洋学 (Fisheries biology and oceanography)
- 養殖学 (Aquaculture)
- 漁業工学 (Fishing technology)
- 水産経済学 (Fisheries economics)
- 食品・資源利用学 (Biochemistry and technology of marine food and resources)

Q1. この科目を履修して良かったと思う点を自由に記述してください。
(Please describe the good points in this class freely.)

Q2. この科目の改善すべき点について自由に記述してください。
(Please describe the improvable points in this class freely.)

図 6.1 大学院修士課程の授業アンケート様式

平成25年度 卒業時アンケート

I. 水産学部が掲げる下記の教育目標について、貴方自身が修得できたかどうかを総合的な観点から評価してください。①～④を選び、カッコ内に数値を書き入れてください。

① 十分にそう思う ② ある程度思う ③ 少し思う ④ 全く思わない

質問項目（全員回答）	評価
1. 地域・国際両面で、資源・環境・食料分野に関する知識を修得した	
2. 基礎学力が身につく、生涯学べる能力を習得した	
3. 水産技術者として必要な英語能力が向上した	
4. 情報処理能力が身に付いた	
5. 報告書作成、プレゼンテーション能力が身に付いた	
6. 現場対応能力が備わった	

II. 貴方が所属している分野の項目についてのみ、ご回答ください。評価は、上に示した①～④を選んで書き入れてください。

専門分野別の質問項目（1つ回答）	評価
A. 水産生物・海洋学分野 水圏資源生物の維持・管理を資源生物とそれを取りまく海洋環境の両面から総合的に理解できる必要で実践的な知識・技術が身に付いた	
B. 養殖学分野 水産生物の養殖分野において必要で実践的な知識・技術が身に付いた	
C. 食品・資源利用学分野 食品に関する利用開発・品質管理、バイオマス資源としての水産物の有効利用に必要で実践的な知識・技術が身に付いた	
D. 漁業工学分野 漁業・船舶・海事分野に必要で実践的な知識・技術が身に付いた	
E. 水産経済学分野 水産物流通・経済関連の分野に必要で実践的な知識・技術が身に付いた	
F. 海洋センター 海洋生態系の多様性あるいは漁場の環境保全、海洋環境の開発と管理に関する分野に必要で実践的な知識・技術が身に付いた	
G. 水産教員養成課程 水産教員またはそれに近い分野の教員になるための必要で実践的な知識・技術が身に付いた	

III. 就職・進学について、ご回答ください。（全員回答）

① 十分にそう思う ② ある程度思う ③ 少し思う ④ 全く思わない ⑤ 未決定

1. 貴方が修得した知識や技術が活かして、希望する職種等に就職・進学できた	
---------------------------------------	--

ご協力、ありがとうございました。

図 7.1 卒業時アンケートの様式

平成25年度 修了時アンケート

I. 水産学研究科が掲げる下記の教育目標について、研究科入学時と比較して貴方自身が修得できたかを総合的な観点から評価し、①～④を選んでカッコ内に数値を書き入れてください。

① 十分にそう思う ② ある程度思う ③ 少し思う ④ 全く思わない

質問項目（全員回答）	評価
1. 地域・国際両面で、資源・環境・食料分野に関する高度な知識を修得した	
2. 基礎学力が向上し、生涯学べる能力を修得した	
3. 水産技術者として英語論文などの内容を正確に理解し、要約できた	
4. 情報活用能力が向上し、自ら学ぶ技術が身に付いた	
5. 調査・研究のプロセス全体を進めることができた	
6. 就職のメリットとなるビジネス知識等を学んだ	

II. 貴方が所属している分野の項目についてのみ、ご回答ください。評価は、上に示した①～④を選んで書き入れてください。

専門分野別の質問項目（1つ回答）	評価
A. 水産生物・海洋学分野 水圏資源生物の維持・管理を資源生物とそれを取りまく海洋環境の両面から総合的に理解できる高度で実践的な知識・技術を身に付けた	
B. 養殖学分野 水産生物の養殖分野において高度で実践的な知識・技術を身に付けた	
C. 食品・資源利用学分野 食品に関する利用開発・品質管理、バイオマス資源としての水産物の有効利用に高度で実践的な知識・技術を身に付けた	
D. 漁業工学分野 漁業・船舶・海事分野に高度で実践的な知識・技術を身に付けた	
E. 水産経済学分野 水産物流通・経済関連の分野に高度で実践的な知識・技術を身に付けた	
F. 海洋センター 海洋生態系の多様性あるいは漁場の環境保全、海洋環境の開発と管理に関する分野に高度で実践的な知識・技術を身に付けた	

III. 就職・進学について、ご回答ください。（全員回答）

① 十分にそう思う ② ある程度思う ③ 少し思う ④ 全く思わない ⑤ 未決定

1. 貴方が修得した知識や技術が活かして、希望する職種等に就職・進学できた	
---------------------------------------	--

ご協力、ありがとうございました。

図 7.2 修了時アンケートの様式

質問Ⅰに関して全体として教育目標に掲げた各能力を修得できたと考える学生がほぼ全員であり、修了生のアンケート結果では「十分にそう思う」の回答数が半数を超えており、全体的に見て評価レベルがよくなっていることがわかります。特に質問Ⅰ-3で、学部生の回答からは「水産技術者として必要な英語能力が向上した」項目に対しては「少しそう思う」「全く思わない」を選択する学生が目立つ一方で、修了生に対するアンケートでは「十分にそう思う」「ある程度そう思う」がほとんどとなり、評価が大きく上がっていることがわかります。評価が大きく上がった理由として、修士課程で進んだ勉強をすることで英語力の必要性をより理解した一方で、学部生はまだ英語力の重要性をよく理解できていないか少々不満を抱いていることが考えられます。「全く思わない」の回答が目立つ英語力の項目に関して少し改善の余地があると感じました。また、質問Ⅰ-6では学部生の回答に「全く思わない」が数件見られました。以上から、水産学部の教育目標はおおむね達成されていると考えられます。

質問Ⅱの結果に関しては卒業生、修了生ともに「十分にそう思う」「ある程度そう思う」の回答が大部分を占めていることから、各専門分野での教育目標をおおむね達成できていることが示唆されます。

質問Ⅲの結果に関しては、卒業生、修了生ともに傾向が似ており、「十分にそう思う」「ある程度そう思う」が過半数を占めており、希望する職種に就くことができた学生が大半である一方で、諸事情により不本意な就職先を選ばざるを得なかった学生もいることを示唆しています。

以上から、卒業時・修了時アンケートを行った結果、学部の教育目標はおおむね達成できていると考えます。しかし、英語に関する教育については改善が必要であると考えます。そのような事情を考慮し、平成26年度から卒業時・修了時アンケートに国際化に関する項目を追加する予定です。

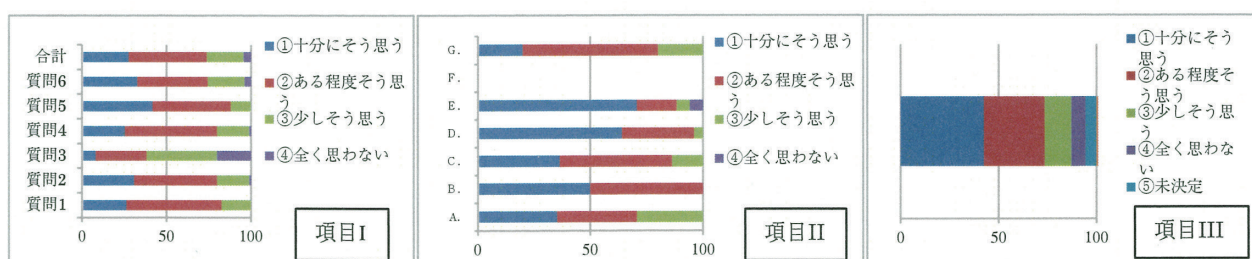


図 7.3 卒業生に関する集計結果

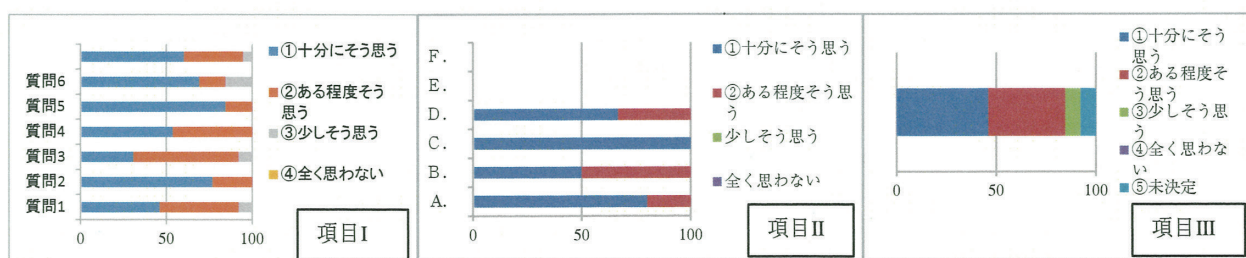
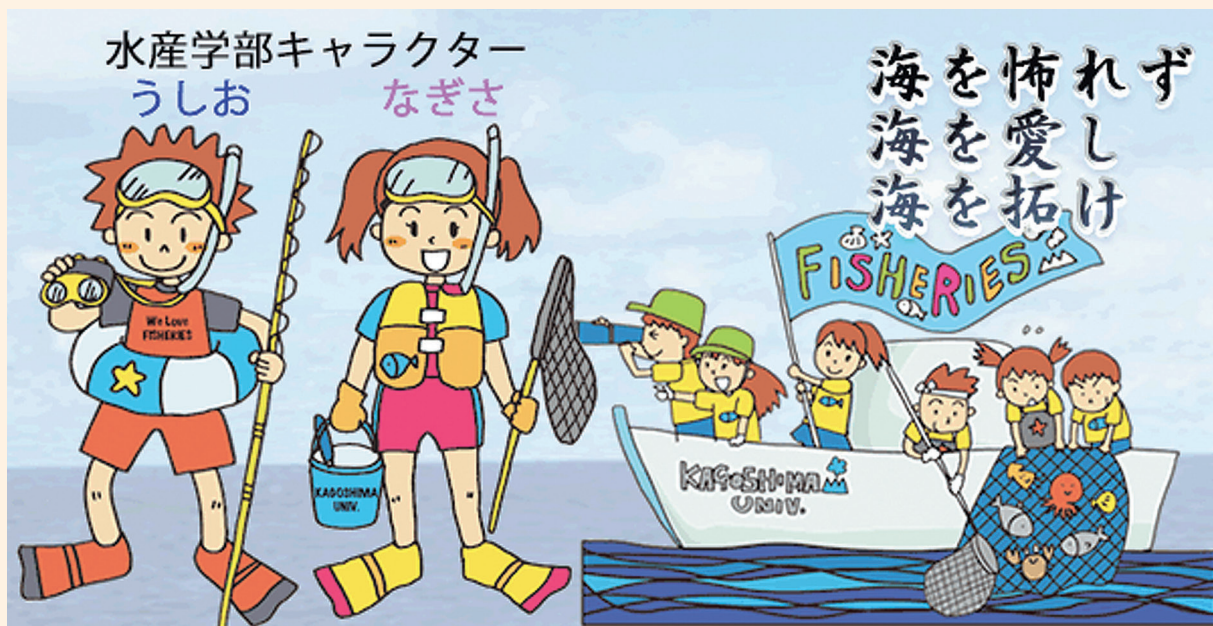


図 7.4 修了生に関する集計結果

8. 終わりに

FD委員会では、教育システム運用マニュアルに規定された教職員の力量の維持、向上を実現するために、授業公開・授業参観を企画し、FD講習会、FDワークショップを開催しています。また、学生満足度の調査を目的として授業アンケートを行い、その結果を教職員にフィードバックすることにより、授業改善に役立てていただいています。しかしながら、近年、FDの意義や重要性が十分に認識され、教員が自ら授業改善、教育改善を進めているなかで、FD委員会の提供するFD活動が形骸化しつつある印象も否めません。本年度は、今後のグローバル化に備えて大学院水産学研究科（修士課程）における授業アンケート文章の英語化（日英併記）の実施に取り組みました。今後の課題として、これらの成果を検証するのに加え、授業改善やカリキュラム改善に資するような授業公開・授業参観の実施方法の検討、修士課程のFD活動の充実が挙げられると思います。その実現のために、他の教育関連の委員会との連携も図りながら、教職員が積極的に関与し議論できるような仕組み作りをめざしたいと考えています。



鹿児島大学水産学部では教育全般に対する満足度を向上させるため、ファカルティ・ディベロップメント（FD）に関する様々な取り組みを行っています。例えば、品質のマネジメントに関する国際標準規格である ISO9001 を教育分野に国立大学として初めて導入し、授業アンケートも他学部に先駆けて導入しました。水産学部および大学院水産学研究科の教職員は、ISO9001 教育マネジメントシステムの運用により、より良い教育を学生に提供することを目的に、日々教育の質の向上に努めています。FD パンフレットが教育や授業の質の向上に役立てば幸いです。

編集：鹿児島大学水産学部FD委員会

委員長：大富 潤

副委員長：庄野 宏

委員：板倉隆夫、米山和良、須本祐史、池上 潤

鹿児島県鹿児島市下荒田 4-50-20

099-286-4111（代表）

共同獣医学部

第1節 平成26年度共同獣医学部FD活動の記録

I. 共同獣医学部FD活動組織（FD委員会の構成と活動状況）

委員長 大和 修 教授
委員 白石光也 准教授
委員 小澤 真 准教授
委員 安藤貴朗 准教授
事務担当者 西郷 豊 学務課長
郡山 茂 教務係長(6月まで)、河本政展 教務係長(7月から)
東屋敷貴宏（教務主任）

第1回共同獣医学部FD委員会

日時：平成26年4月21日（月）16：10～17：15、場所：農・獣医共通棟2階22セミナー室

出席者：大和、白石、小澤、安藤、陪席者：事務部（西郷、郡山、東屋敷）

議題 1. 平成26年度FD委員会の活動計画について
2. 平成26年度共同獣医学部各種委員会活動経費要求書の提出について

報告事項 1. 平成25年度FD委員会の活動実績について
2. 平成25年度鹿児島大学FD報告書について
3. 平成25年度FD経費執行状況報告書について

第2回共同獣医学部FD委員会

日時：平成26年5月22日（木）13：00～13：48、場所：農・獣医共通棟2階22セミナー室

出席者：大和、白石、小澤、安藤、陪席者：事務部（西郷、東屋敷）

議題 1. 平成25年度学長と学部卒業予定者との懇談会における学生からの要望・意見に対する対応等について
2. 平成26年度前期授業参観および授業公開について

報告事項 1. 全学FD委員会からの報告

第3回共同獣医学部FD委員会

日時：平成26年10月27日（月）14：30～14：58、場所：農・獣医共通棟3階31セミナー室

出席者：大和、白石、小澤、安藤、陪席者：事務部（西郷、東屋敷）

議題 1. 大学IRコンソーシアムにおける学生調査2014の実施について
2. 2大学共同で実施するFD研修会について
3. 後期授業参観および授業公開について

報告事項 1. 前期授業参観実施状況について
2. FD研修会（今年度および来年度）について

第4回共同獣医学部FD委員会

日時：平成27年1月13日（火）14：30～15：00、場所：農・獣医共通棟2階24セミナー室

出席者：大和、白石、小澤、安藤、陪席者：事務部（西郷、東屋敷）

議題 1. 本年度のFD研修会（参加者および役割分担）について
2. 来年度のFD研修会の日程および内容について

報告事項 1. H26年全学FDワークショップについて

II. 授業公開と授業参観の取り組み

共同獣医学部では、農学部所属の平成15年度後期より授業公開・授業参観の取り組みを実施している。平成24年度より共同獣医学部が発足し、本年度は共同獣医学部所属の学生が1-3年生となったが、4年生から6年生までは農学部所属となるため、授業公開と授業参観のスケジュールは農学部と同様であった（農学部報告書参照）。しかしながら、共同獣医学部科目に関してはFD-WEBを利用していないため、今後FD-WEBを使用しない授業参観の実施が必要となる。そのため、本年度は授業公開科目の周知は事務経由でメールにて、授業参観参加希望申込みは授業担当者と参観希望者間のメールのやりとりで行われた。授業担当者と授業参観者には、可能な限り、参観後に意見交換をお願いすると共に、参観者には様式の配布を行って、授業参観報告書を作成・提出してもらった。26年度からは授業担当者に参観者からの報告書に対する対策書を作成・提出してもらった。

本年度の獣医学科教員の授業参観参加者数は、前期12名、後期16名、のべ28名の参加があった。平成25年度はのべ14名、平成24年度はのべ21名の参加者であったため、平成26年度は例年以上に有意義な取り組みであった。

III. 学生による授業評価

平成26年度前期・後期の2回、学生による授業評価のアンケートを実施した。これについては、前述の通り、4年生から6年生までは農学部としてアンケートを行っているため割愛させていただく（農学部報告書参照）。

しかしながら、共同獣医学部としては、今後徐々に学年毎の新カリキュラムへの移行を進めていく。その中で、山口大学と共通の授業評価アンケートを作成し、実施していく

（様式は右のとおり）。本年度は共同獣医学部所属の1-3年生のみであったが、実施した授業評価アンケート結果（実習科目は省略）は下記の表のとおりであった。

メディア授業とは、遠隔授業システムを使って、教員の映像や音声、授業の資料等をリアルタイムで送信あるいは受信して行う授業である。

専門教育科目は全科目について、授業評価アンケートを実施した。

平成24年度共同獣医学部

授業評価アンケート(講義・演習用)

授業科目番号: _____ 受講者氏名: _____

授業科目名: _____ () 遠隔授業システム 教員名: _____

※このアンケートは、授業をより良くするために行うものです。回答者の成績に影響することはありませんので、あなたの考えを率直に記入してください。

※この回答用紙は機械(OCR)で読み取り集計しますので、該当する番号の○印を塗りつぶしてください。

1 あなたは、この授業にどれくらい出席しましたか？(括弧の数字は15回授業の場合の出席回数です)

○1. 90%以上(14回以上) ○2. 80~90%(12~13回) ○3. 60~80%(9~11回) ○4. 40~60%(6~8回) ○5. 40%未満(6回未満)

2 あなたはこの授業において、時間外学習(予習・復習・宿題やレポート作成・試験勉強)をどれくらい行いましたか？総時間を平均し、授業1回あたりの時間に換算してお答えください。

○1. 3時間程度または以上 ○2. 2時間程度 ○3. 1時間程度 ○4. 30~50分程度 ○5. 30分未満

3 この授業内容の水準はどうでしたか？

○1. 高かった ○2. やや高かった ○3. 妥当だった ○4. やや低かった ○5. 低かった

4 この授業の分量はどうでしたか？

○1. 多かった ○2. やや多かった ○3. 妥当だった ○4. やや少なかった ○5. 少なかった

5 教員の話し方は明確で聞きやすく、専門用語や理論などの説明はわかりやすいと思いませんか？

○1. そう思う ○2. ややそう思う ○3. どちらとも思えない ○4. あっさり思わない ○5. そう思わない

6 板書やビデオ、コンピュータ並びに教科書やプリントなどの教材は、効果的に使われていましたか？

○1. そう思う ○2. ややそう思う ○3. どちらとも思えない ○4. あっさり思わない ○5. そう思わない

○6. この授業は該当しない

7 授業中やオアスアワでの質問に対する教員の対応に満足しましたか？

○1. そう思う ○2. ややそう思う ○3. どちらとも思えない ○4. あっさり思わない ○5. そう思わない

8 この授業はシラバスに沿って進められましたか？

○1. そう思う ○2. ややそう思う ○3. どちらとも思えない ○4. あっさり思わない ○5. そう思わない

9 あなたは、シラバスに記載された学習目標を達成したと思いますか？

○1. そう思う ○2. ややそう思う ○3. どちらとも思えない ○4. あっさり思わない ○5. そう思わない

○6. 答えられない

10 あなたは、この授業の内容を理解できましたか？

○1. そう思う ○2. ややそう思う ○3. どちらとも思えない ○4. あっさり思わない ○5. そう思わない

11 この授業は、あなたにとって満足いくものでしたか？

○1. そう思う ○2. ややそう思う ○3. どちらとも思えない ○4. あっさり思わない ○5. そう思わない

※以下は、遠隔授業システムに関する質問です。該当する場合(授業科目名の横にチェックあり)のみ回答してください。

12 教員の音声は聞き取りやすかったと思いませんか？

○1. そう思う ○2. ややそう思う ○3. どちらとも思えない ○4. あっさり思わない ○5. そう思わない

13 教員やモニター画面の映像は見やすかったと思いませんか？

○1. そう思う ○2. ややそう思う ○3. どちらとも思えない ○4. あっさり思わない ○5. そう思わない

14 教員の授業の進め方はスムーズでしたか？

○1. そう思う ○2. ややそう思う ○3. どちらとも思えない ○4. あっさり思わない ○5. そう思わない

15 授業中は、授業中できる環境や雰囲気であったと思いませんか？

○1. そう思う ○2. ややそう思う ○3. どちらとも思えない ○4. あっさり思わない ○5. そう思わない

16 対面式の講義と遜色ない、一体感・臨場感のある授業だったと思いませんか？

○1. そう思う ○2. ややそう思う ○3. どちらとも思えない ○4. あっさり思わない ○5. そう思わない

自由記述

この授業についての意見・要望・感想などを自由に書いてください。

ご協力ありがとうございました。 共同獣医学部ファカルティ・ディベロップメント委員会

〈授業評価アンケート結果〉

※数字は%。回答6には「無回答」を含む。設問12~16は遠隔授業システムに関する質問。

【1年次科目】

講義名：基礎生物学（共通教育科目等、前期開講、メディア授業（山口大学から受信））

	回答1	回答2	回答3	回答4	回答5	回答6		回答1	回答2	回答3	回答4	回答5	回答6
設問1	35.1	5.4	24.3	5.4	29.7	0.0	設問9	21.6	18.9	40.5	8.1	10.8	0.0
設問2	29.7	2.7	13.5	13.5	40.5	0.0	設問10	21.6	24.3	29.7	8.1	16.2	0.0
設問3	24.3	0.0	54.1	13.5	8.1	0.0	設問11	13.5	13.5	45.9	16.2	10.8	0.0
設問4	32.4	5.4	48.6	13.5	0.0	0.0	設問12	48.6	10.8	35.1	5.4	0.0	0.0
設問5	16.2	5.4	48.6	13.5	8.1	0.0	設問13	48.6	16.2	29.7	2.7	2.7	0.0

設問 6	24.3	8.1	56.8	5.4	5.4	0.0	設問 14	32.4	5.4	54.1	2.7	5.4	0.0
設問 7	13.5	8.1	67.6	10.8	0.0	0.0	設問 15	37.8	13.5	40.5	2.7	5.4	0.0
設問 8	29.7	16.2	48.6	5.4	0.0	0.0	設問 16	24.3	10.8	51.4	8.1	5.4	0.0

講義名：基礎化学（共通教育科目等、前期開講、メディア授業（山口大学から受信））

	回答 1	回答 2	回答 3	回答 4	回答 5	回答 6		回答 1	回答 2	回答 3	回答 4	回答 5	回答 6
設問 1	77.1	8.6	0.0	2.9	2.9	8.6	設問 9	25.7	34.3	25.7	5.7	5.7	2.9
設問 2	45.7	5.7	37.1	5.7	5.7	0.0	設問 10	22.9	42.9	22.9	8.6	2.9	0.0
設問 3	51.4	31.4	17.1	0.0	0.0	0.0	設問 11	37.1	37.1	22.9	2.9	0.0	0.0
設問 4	37.1	22.9	40.0	0.0	0.0	0.0	設問 12	51.4	22.9	22.9	2.9	0.0	0.0
設問 5	42.9	14.3	31.4	11.4	0.0	0.0	設問 13	51.4	20.0	25.7	2.9	0.0	0.0
設問 6	48.6	17.1	25.7	8.6	0.0	0.0	設問 14	45.7	22.9	22.9	8.6	0.0	0.0
設問 7	45.7	14.3	34.3	5.7	0.0	0.0	設問 15	48.6	20.0	31.4	0.0	0.0	0.0
設問 8	54.3	25.7	20.0	0.0	0.0	0.0	設問 16	31.4	25.7	31.4	8.6	2.9	0.0

講義名：情報セキュリティ・モラル（共通教育科目等、前期開講、メディア授業（山口大学から受信））

	回答 1	回答 2	回答 3	回答 4	回答 5	回答 6		回答 1	回答 2	回答 3	回答 4	回答 5	回答 6
設問 1	92.9	7.1	0.0	0.0	0.0	0.0	設問 9	35.7	42.9	17.9	0.0	3.6	0.0
設問 2	7.1	0.0	7.1	17.9	67.9	0.0	設問 10	28.6	50.0	17.9	0.0	3.6	0.0
設問 3	14.3	17.9	67.9	0.0	0.0	0.0	設問 11	35.7	46.4	7.1	3.6	7.1	0.0
設問 4	10.7	10.7	78.6	0.0	0.0	0.0	設問 12	57.1	28.6	10.7	3.6	0.0	0.0
設問 5	32.1	32.1	28.6	7.1	0.0	0.0	設問 13	64.3	32.1	3.6	0.0	0.0	0.0
設問 6	35.7	39.3	14.3	3.6	7.1	0.0	設問 14	53.6	35.7	7.1	3.6	3.6	0.0
設問 7	32.1	25.0	39.3	0.0	3.6	0.0	設問 15	53.6	28.6	17.9	0.0	0.0	0.0
設問 8	46.4	35.7	17.9	0.0	0.0	0.0	設問 16	28.6	28.6	25.0	10.7	7.1	0.0

講義名：コミュニケーション論（共通教育科目等、前期集中講義）

	回答 1	回答 2	回答 3	回答 4	回答 5	回答 6		回答 1	回答 2	回答 3	回答 4	回答 5	回答 6
設問 1	96.9	0.0	0.0	0.0	0.0	3.1	設問 7	59.4	18.8	21.9	0.0	0.0	0.0
設問 2	0.0	3.1	6.3	3.1	84.4	3.1	設問 8	65.6	12.5	21.9	0.0	0.0	0.0
設問 3	34.4	12.5	53.1	0.0	0.0	0.0	設問 9	43.8	37.5	18.8	0.0	0.0	0.0
設問 4	0.0	0.0	100	0.0	0.0	0.0	設問 10	75.0	25.0	0.0	0.0	0.0	0.0
設問 5	78.1	18.8	3.1	0.0	0.0	0.0	設問 11	78.1	21.9	0.0	0.0	0.0	0.0
設問 6	81.3	15.6	3.1	0.0	0.0	0.0							

講義名：生命倫理学（共通教育科目等、前期集中講義）

	回答 1	回答 2	回答 3	回答 4	回答 5	回答 6		回答 1	回答 2	回答 3	回答 4	回答 5	回答 6
設問 1	96.9	0.0	0.0	0.0	3.1	0.0	設問 7	78.1	9.4	9.4	3.1	0.0	0.0
設問 2	6.3	0.0	3.1	6.3	84.4	0.0	設問 8	71.9	12.5	15.6	0.0	0.0	0.0
設問 3	46.9	18.8	34.4	0.0	0.0	0.0	設問 9	46.9	43.8	6.3	0.0	0.0	3.1
設問 4	15.6	15.6	68.8	0.0	0.0	0.0	設問 10	53.1	40.6	3.1	0.0	0.0	0.0
設問 5	75.0	21.9	0.0	3.1	0.0	0.0	設問 11	78.1	18.8	0.0	0.0	0.0	3.1
設問 6	56.3	21.9	15.6	0.0	0.0	6.3							

講義名：獣医学概論 A（専門教育科目、前期集中講義、山口大学で実施）

	回答 1	回答 2	回答 3	回答 4	回答 5	回答 6		回答 1	回答 2	回答 3	回答 4	回答 5	回答 6
設問 1	96.9	0.0	0.0	0.0	0.0	3.1	設問 7	59.4	18.8	21.9	0.0	0.0	0.0
設問 2	3.1	6.3	9.4	12.5	68.8	0.0	設問 8	68.8	25.0	6.3	0.0	0.0	0.0
設問 3	37.5	6.3	9.4	12.5	68.8	0.0	設問 9	56.3	31.3	12.5	0.0	0.0	0.0
設問 4	6.3	21.9	68.8	3.1	0.0	0.0	設問 10	59.4	40.6	0.0	0.0	0.0	0.0
設問 5	62.5	34.4	3.1	0.0	0.0	0.0	設問 11	71.9	25.0	3.1	0.0	0.0	0.0
設問 6	62.5	25.0	9.4	3.1	0.0	0.0							

講義名：獣医学概論 B（専門教育科目、前期集中講義）

	回答 1	回答 2	回答 3	回答 4	回答 5	回答 6		回答 1	回答 2	回答 3	回答 4	回答 5	回答 6
設問 1	93.8	3.1	0.0	0.0	0.0	3.1	設問 7	56.3	18.8	25.0	0.0	0.0	0.0
設問 2	3.1	0.0	6.3	9.4	78.1	3.1	設問 8	68.8	25.0	6.3	0.0	0.0	0.0
設問 3	50.0	12.5	34.4	0.0	3.1	0.0	設問 9	56.3	34.4	9.4	0.0	0.0	0.0
設問 4	12.5	9.4	78.1	0.0	0.0	0.0	設問 10	53.1	46.9	0.0	0.0	0.0	0.0
設問 5	65.6	25.0	9.4	0.0	0.0	0.0	設問 11	71.9	28.1	0.0	0.0	0.0	0.0
設問 6	59.4	31.3	9.4	0.0	0.0	0.0							

【2 年次科目】

講義名：獣医解剖学 A（専門教育科目、前期開講、メディア授業（山口大学へ送信））

	回答 1	回答 2	回答 3	回答 4	回答 5	回答 6		回答 1	回答 2	回答 3	回答 4	回答 5	回答 6
設問 1	77.4	19.4	0.0	0.0	0.0	3.2	設問 9	16.1	61.3	19.4	0.0	0.0	0.0
設問 2	54.8	19.4	22.6	3.2	0.0	0.0	設問 10	32.3	67.7	0.0	0.0	0.0	0.0
設問 3	41.9	35.5	22.6	0.0	0.0	0.0	設問 11	64.5	35.5	0.0	0.0	0.0	0.0
設問 4	48.4	38.7	12.9	0.0	0.0	0.0	設問 12	32.3	25.8	3.2	0.0	0.0	38.7
設問 5	71.0	22.6	6.5	0.0	0.0	0.0	設問 13	22.6	29.0	6.5	3.2	0.0	38.7
設問 6	45.2	41.9	9.7	3.2	0.0	0.0	設問 14	29.0	32.3	0.0	0.0	0.0	38.7
設問 7	71.0	12.9	16.1	0.0	0.0	0.0	設問 15	32.3	25.8	3.2	0.0	0.0	38.7
設問 8	48.4	32.3	19.4	0.0	0.0	0.0	設問 16	22.6	25.8	9.7	3.2	0.0	38.7

講義名：獣医解剖学 B（専門教育科目、前期開講、メディア授業（山口大学から受信））

	回答 1	回答 2	回答 3	回答 4	回答 5	回答 6		回答 1	回答 2	回答 3	回答 4	回答 5	回答 6
設問 1	66.7	21.2	9.1	0.0	0.0	3.0	設問 9	12.1	57.6	30.3	0.0	0.0	0.0
設問 2	18.2	33.3	27.3	21.2	0.0	0.0	設問 10	12.1	75.8	12.1	0.0	0.0	0.0
設問 3	27.3	27.3	45.5	0.0	0.0	0.0	設問 11	42.4	54.5	3.0	0.0	0.0	0.0
設問 4	27.3	39.4	33.3	0.0	0.0	0.0	設問 12	72.7	24.2	3.0	0.0	0.0	0.0
設問 5	66.7	30.3	3.0	0.0	0.0	0.0	設問 13	51.5	30.3	18.2	0.0	0.0	0.0
設問 6	42.4	45.5	9.1	0.0	0.0	3.0	設問 14	51.5	39.4	9.1	0.0	0.0	0.0
設問 7	36.4	39.4	24.2	0.0	0.0	0.0	設問 15	57.6	30.3	12.1	0.0	0.0	0.0
設問 8	48.5	27.3	21.2	3.0	0.0	0.0	設問 16	42.4	27.3	12.1	15.2	3.0	0.0

講義名：獣医解剖学 C（専門教育科目、後期開講、メディア授業（山口大学へ送信））

	回答 1	回答 2	回答 3	回答 4	回答 5	回答 6		回答 1	回答 2	回答 3	回答 4	回答 5	回答 6

設問 1	74.2	16.1	9.7	0.0	0.0	0.0	設問 9	16.1	64.5	12.9	6.5	0.0	0.0
設問 2	9.7	22.6	51.6	9.7	6.5	0.0	設問 10	29.0	61.3	9.7	0.0	0.0	0.0
設問 3	19.4	16.1	61.3	0.0	0.0	3.2	設問 11	45.2	51.6	3.2	0.0	0.0	0.0
設問 4	22.6	45.2	32.3	0.0	0.0	0.0	設問 12	16.1	9.7	0.0	0.0	3.2	71.0
設問 5	41.9	48.4	6.5	3.2	0.0	0.0	設問 13	16.1	9.7	0.0	3.2	0.0	71.0
設問 6	41.9	35.5	16.1	6.5	0.0	0.0	設問 14	19.4	6.5	0.0	3.2	0.0	71.0
設問 7	65.4	22.6	12.9	0.0	0.0	0.0	設問 15	16.1	9.7	0.0	3.2	0.0	71.0
設問 8	58.1	29.0	12.9	0.0	0.0	0.0	設問 16	12.9	12.9	0.0	3.2	0.0	71.0

講義名：獣医解剖学D（専門教育科目、後期開講、メディア授業（山口大学から受信））

	回答 1	回答 2	回答 3	回答 4	回答 5	回答 6		回答 1	回答 2	回答 3	回答 4	回答 5	回答 6
設問 1	61.3	32.3	3.2	3.2	0.0	0.0	設問 9	35.5	41.9	22.6	0.0	0.0	0.0
設問 2	9.7	29.0	48.4	12.9	0.0	0.0	設問 10	41.9	45.2	9.7	0.0	0.0	3.2
設問 3	9.7	19.4	71.0	0.0	0.0	0.0	設問 11	58.1	32.3	9.7	0.0	0.0	0.0
設問 4	16.1	32.3	51.6	0.0	0.0	0.0	設問 12	74.2	16.1	3.2	6.5	0.0	0.0
設問 5	67.7	19.4	12.9	0.0	0.0	0.0	設問 13	58.1	25.8	12.9	3.2	0.0	0.0
設問 6	64.5	16.1	19.4	0.0	0.0	0.0	設問 14	64.5	19.4	12.9	3.2	0.0	0.0
設問 7	51.6	25.8	19.4	3.2	0.0	0.0	設問 15	67.7	12.9	12.9	6.5	0.0	0.0
設問 8	58.1	25.8	16.1	0.0	0.0	0.0	設問 16	51.6	22.6	12.9	12.9	0.0	0.0

講義名：獣医組織学A（専門教育科目、前期開講、メディア授業（山口大学から受信））

	回答 1	回答 2	回答 3	回答 4	回答 5	回答 6		回答 1	回答 2	回答 3	回答 4	回答 5	回答 6
設問 1	83.9	12.9	3.2	0.0	0.0	0.0	設問 9	19.4	64.5	16.1	0.0	0.0	0.0
設問 2	22.6	38.7	32.3	6.5	0.0	0.0	設問 10	25.8	61.3	6.5	6.5	0.0	0.0
設問 3	22.3	48.4	29.0	0.0	0.0	0.0	設問 11	29.0	64.5	3.2	0.0	0.0	3.2
設問 4	12.9	45.2	41.9	0.0	0.0	0.0	設問 12	48.4	45.2	6.5	0.0	0.0	0.0
設問 5	45.2	48.4	6.5	0.0	0.0	0.0	設問 13	51.6	38.7	6.5	3.2	0.0	0.0
設問 6	58.1	38.7	3.2	0.0	0.0	0.0	設問 14	38.7	58.1	3.2	0.0	0.0	0.0
設問 7	25.8	54.8	19.4	0.0	0.0	0.0	設問 15	45.2	51.6	3.2	0.0	0.0	0.0
設問 8	29.0	61.3	9.7	0.0	0.0	0.0	設問 16	22.6	51.6	12.9	9.7	3.2	0.0

講義名：獣医組織学B（専門教育科目、前期開講、メディア授業（山口大学へ送信））

	回答 1	回答 2	回答 3	回答 4	回答 5	回答 6		回答 1	回答 2	回答 3	回答 4	回答 5	回答 6
設問 1	65.6	25.0	0.0	0.0	0.0	9.4	設問 9	15.6	46.9	31.3	6.3	0.0	0.0
設問 2	18.8	25.0	50.0	3.1	3.1	0.0	設問 10	15.6	34.4	43.8	3.1	3.1	0.0
設問 3	31.3	43.8	25.0	0.0	0.0	0.0	設問 11	25.0	43.8	12.5	9.4	3.1	6.3
設問 4	59.4	21.9	18.8	0.0	0.0	0.0	設問 12	6.3	0.0	6.3	0.0	0.0	87.5
設問 5	28.1	46.9	9.4	12.5	3.1	0.0	設問 13	6.3	0.0	6.3	0.0	0.0	87.5
設問 6	37.5	25.0	25.0	12.5	0.0	0.0	設問 14	6.3	3.1	3.1	0.0	0.0	87.5
設問 7	46.9	25.0	21.9	6.3	0.0	0.0	設問 15	6.3	3.1	3.1	0.0	0.0	87.5
設問 8	46.9	40.6	12.5	0.0	0.0	0.0	設問 16	6.3	3.1	3.1	0.0	0.0	87.5

講義名：獣医組織学C（専門教育科目、後期開講、メディア授業（山口大学から受信））

	回答1	回答2	回答3	回答4	回答5	回答6		回答1	回答2	回答3	回答4	回答5	回答6
設問1	71.0	16.1	9.7	0.0	0.0	3.2	設問9	19.4	51.6	22.6	0.0	3.2	3.2
設問2	19.4	22.6	29.0	25.8	0.0	3.2	設問10	12.9	67.7	12.9	6.5	0.0	0.0
設問3	19.4	16.1	64.5	0.0	0.0	0.0	設問11	38.7	41.9	16.1	3.2	0.0	0.0
設問4	16.1	38.7	45.2	0.0	0.0	0.0	設問12	58.1	35.5	3.2	3.2	0.0	0.0
設問5	54.8	35.5	6.5	0.0	3.2	0.0	設問13	54.8	38.7	0.0	6.5	0.0	0.0
設問6	54.8	32.3	6.5	3.2	0.0	0.0	設問14	54.8	29.0	12.9	0.0	3.2	0.0
設問7	45.2	32.3	6.5	3.2	0.0	3.2	設問15	41.9	32.3	19.4	6.5	0.0	0.0
設問8	51.6	29.0	16.1	3.2	0.0	0.0	設問16	25.8	29.0	19.4	19.4	6.5	0.0

講義名：獣医組織学D（専門教育科目、後期開講、メディア授業（山口大学へ送信））

	回答1	回答2	回答3	回答4	回答5	回答6		回答1	回答2	回答3	回答4	回答5	回答6
設問1	73.3	20.0	6.7	0.0	0.0	0.0	設問9	23.3	46.7	30.0	0.0	0.0	0.0
設問2	3.3	10.0	76.7	10.0	0.0	0.0	設問10	33.3	50.0	16.7	0.0	0.0	0.0
設問3	10.0	20.0	70.0	0.0	0.0	0.0	設問11	43.3	46.7	10.0	0.0	0.0	0.0
設問4	16.7	36.7	46.7	0.0	0.0	0.0	設問12	16.7	3.3	6.7	0.0	0.0	73.3
設問5	46.7	36.7	13.3	3.3	0.0	0.0	設問13	20.0	0.0	6.7	0.0	0.0	73.3
設問6	43.3	40.0	13.3	3.3	0.0	0.0	設問14	13.3	6.7	3.3	3.3	0.0	73.3
設問7	56.7	26.7	16.7	0.0	0.0	0.0	設問15	13.3	6.7	3.3	3.3	0.0	73.3
設問8	56.7	26.7	16.7	0.0	0.0	0.0	設問16	13.3	6.7	3.3	3.3	0.0	73.3

講義名：獣医生理学B（専門教育科目、後期開講）

	回答1	回答2	回答3	回答4	回答5	回答6		回答1	回答2	回答3	回答4	回答5	回答6
設問1	66.7	33.3	0.0	0.0	0.0	0.0	設問7	16.7	33.3	33.3	11.1	5.6	0.0
設問2	5.6	50.0	38.9	5.6	0.0	0.0	設問8	27.8	38.9	33.3	0.0	0.0	0.0
設問3	33.3	38.9	27.8	0.0	0.0	0.0	設問9	5.6	33.3	38.9	11.1	11.1	0.0
設問4	50.0	44.4	5.6	0.0	0.0	0.0	設問10	5.6	22.2	38.9	27.8	5.6	0.0
設問5	16.7	44.4	22.2	5.6	11.1	0.0	設問11	22.2	16.7	33.3	11.1	16.7	0.0
設問6	16.7	27.8	22.2	11.1	22.2	0.0							

講義名：生化学I（専門教育科目、前期開講、メディア授業（山口大学から受信））

	回答1	回答2	回答3	回答4	回答5	回答6		回答1	回答2	回答3	回答4	回答5	回答6
設問1	43.8	21.9	21.9	3.1	9.4	0.0	設問9	18.8	25.0	37.5	18.8	0.0	0.0
設問2	18.8	15.6	50.0	12.5	3.1	0.0	設問10	15.6	18.8	34.4	31.3	0.0	0.0
設問3	50.0	25.0	15.6	9.4	0.0	0.0	設問11	15.6	15.6	28.1	37.5	0.0	3.1
設問4	53.1	18.8	28.1	0.0	0.0	0.0	設問12	18.8	37.5	25.0	15.6	3.1	0.0
設問5	15.6	21.9	15.6	40.6	3.1	3.1	設問13	18.8	28.1	34.4	15.6	3.1	0.0
設問6	12.5	15.6	40.6	21.9	9.4	0.0	設問14	21.9	31.3	34.4	6.3	6.3	0.0
設問7	15.6	28.1	43.8	9.4	3.1	0.0	設問15	18.8	37.5	18.8	18.8	6.3	0.0
設問8	31.3	31.3	28.1	9.4	0.0	0.0	設問16	15.6	21.9	25.0	18.8	18.8	0.0

講義名：生化学II（専門教育科目、後期開講、メディア授業（山口大学へ送信））

	回答1	回答2	回答3	回答4	回答5	回答6		回答1	回答2	回答3	回答4	回答5	回答6
--	-----	-----	-----	-----	-----	-----	--	-----	-----	-----	-----	-----	-----

設問 1	60.7	21.4	10.7	0.0	0.0	7.1	設問 9	7.1	50.0	42.9	0.0	0.0	0.0
設問 2	10.7	32.1	53.6	3.6	0.0	0.0	設問 10	3.6	60.7	32.1	3.6	0.0	0.0
設問 3	28.6	50.0	21.4	0.0	0.0	0.0	設問 11	17.9	67.9	14.3	0.0	0.0	0.0
設問 4	53.6	28.6	17.9	0.0	0.0	0.0	設問 12	7.1	14.3	0.0	0.0	0.0	78.6
設問 5	42.9	50.0	3.6	3.6	0.0	0.0	設問 13	3.6	17.9	0.0	0.0	0.0	78.6
設問 6	42.9	53.6	3.6	0.0	0.0	0.0	設問 14	7.1	10.7	3.6	0.0	0.0	78.6
設問 7	28.6	57.1	14.3	0.0	0.0	0.0	設問 15	0.0	21.4	0.0	0.0	0.0	78.6
設問 8	28.6	60.7	7.1	0.0	0.0	3.6	設問 16	0.0	21.4	0.0	0.0	0.0	78.6

講義名：動物遺伝学（専門教育科目、後期集中開講、メディア授業（山口大学から受信））

	回答 1	回答 2	回答 3	回答 4	回答 5	回答 6		回答 1	回答 2	回答 3	回答 4	回答 5	回答 6
設問 1	90.6	3.1	0.0	3.1	0.0	3.1	設問 9	40.6	43.8	15.6	0.0	0.0	0.0
設問 2	6.3	3.1	21.9	28.1	40.6	0.0	設問 10	56.3	40.6	3.1	0.0	0.0	0.0
設問 3	6.3	9.4	68.8	12.5	3.1	0.0	設問 11	53.1	31.3	9.4	6.3	0.0	0.0
設問 4	6.3	6.3	81.3	6.3	0.0	0.0	設問 12	81.3	15.6	3.1	0.0	0.0	0.0
設問 5	59.4	31.3	9.4	0.0	0.0	0.0	設問 13	65.6	25.0	3.1	6.3	0.0	0.0
設問 6	50.0	40.6	6.3	3.1	0.0	0.0	設問 14	59.4	31.3	3.1	6.3	0.0	0.0
設問 7	65.6	21.9	12.5	0.0	0.0	0.0	設問 15	53.1	28.1	12.5	6.3	0.0	0.0
設問 8	56.3	25.0	18.8	0.0	0.0	0.0	設問 16	34.4	34.4	15.6	9.4	6.3	0.0

講義名：動物行動学（専門教育科目、後期開講、メディア授業（山口大学へ送信））

	回答 1	回答 2	回答 3	回答 4	回答 5	回答 6		回答 1	回答 2	回答 3	回答 4	回答 5	回答 6
設問 1	52.2	34.8	4.3	0.0	0.0	8.7	設問 9	13.0	21.7	52.2	13.0	0.0	0.0
設問 2	4.3	26.1	47.8	21.7	0.0	0.0	設問 10	8.7	30.4	30.4	26.1	4.3	0.0
設問 3	26.1	43.5	26.1	0.0	0.0	4.3	設問 11	17.4	17.4	39.1	17.4	8.7	0.0
設問 4	60.9	26.1	13.0	0.0	0.0	0.0	設問 12	13.0	4.3	0.0	0.0	0.0	82.6
設問 5	30.4	34.8	21.7	4.3	8.7	0.0	設問 13	8.7	8.7	0.0	0.0	0.0	82.6
設問 6	13.0	26.1	26.1	17.4	17.4	0.0	設問 14	4.3	4.3	8.7	0.0	0.0	82.6
設問 7	21.7	17.4	43.5	8.7	8.7	0.0	設問 15	4.3	8.7	4.3	0.0	0.0	82.6
設問 8	26.1	34.8	34.8	4.3	0.0	0.0	設問 16	0.0	13.0	4.3	0.0	0.0	82.6

講義名：免疫学Ⅰ（専門教育科目、後期開講、メディア授業（山口大学へ送信））

	回答 1	回答 2	回答 3	回答 4	回答 5	回答 6		回答 1	回答 2	回答 3	回答 4	回答 5	回答 6
設問 1	71.0	12.9	9.7	0.0	0.0	6.5	設問 9	16.1	38.7	35.5	6.5	0.0	3.2
設問 2	16.1	25.8	45.2	12.9	0.0	0.0	設問 10	16.1	67.7	16.1	0.0	0.0	0.0
設問 3	16.1	25.8	58.1	0.0	0.0	0.0	設問 11	16.1	67.7	12.9	0.0	3.2	0.0
設問 4	41.9	32.3	25.8	0.0	0.0	0.0	設問 12	16.1	9.7	6.5	0.0	0.0	67.7
設問 5	32.3	45.2	12.9	6.5	3.2	0.0	設問 13	12.9	12.9	6.5	0.0	0.0	67.7
設問 6	29.0	35.5	25.8	3.2	6.5	0.0	設問 14	9.7	19.4	3.2	0.0	0.0	67.7
設問 7	32.3	29.0	38.7	0.0	0.0	0.0	設問 15	9.7	19.4	3.2	0.0	0.0	67.7
設問 8	61.3	19.4	19.4	0.0	0.0	0.0	設問 16	6.5	19.4	6.5	0.0	0.0	67.7

講義名：免疫学Ⅱ（専門教育科目、後期開講、メディア授業（山口大学から受信））

	回答1	回答2	回答3	回答4	回答5	回答6		回答1	回答2	回答3	回答4	回答5	回答6
設問1	66.7	20.0	10.0	3.3	0.0	0.0	設問9	13.3	43.3	33.3	10.0	0.0	0.0
設問2	10.0	16.7	46.7	23.3	3.3	0.0	設問10	6.7	63.3	20.0	6.7	3.3	0.0
設問3	10.0	16.7	73.3	0.0	0.0	0.0	設問11	26.7	43.3	20.0	6.7	3.3	0.0
設問4	10.0	6.7	83.3	0.0	0.0	0.0	設問12	50.0	30.0	10.0	10.0	0.0	0.0
設問5	16.7	33.3	33.3	16.7	0.0	0.0	設問13	46.7	36.7	6.7	10.0	0.0	0.0
設問6	26.7	30.0	30.0	13.3	0.0	0.0	設問14	43.3	33.3	20.0	3.3	0.0	0.0
設問7	30.0	16.7	50.0	3.3	0.0	0.0	設問15	36.7	36.7	20.0	6.7	0.0	0.0
設問8	43.3	26.7	23.3	0.0	0.0	6.7	設問16	13.3	26.7	43.3	13.3	3.3	0.0

講義名：獣医微生物学 I（専門教育科目、後期開講）

	回答1	回答2	回答3	回答4	回答5	回答6		回答1	回答2	回答3	回答4	回答5	回答6
設問1	77.3	22.7	0.0	0.0	0.0	0.0	設問7	31.8	40.9	27.3	0.0	0.0	0.0
設問2	0.0	13.6	45.5	18.2	22.7	0.0	設問8	45.5	40.9	27.3	0.0	0.0	0.0
設問3	31.8	27.3	40.9	0.0	0.0	0.0	設問9	9.1	36.4	45.5	9.1	0.0	0.0
設問4	22.7	45.5	31.8	0.0	0.0	0.0	設問10	4.5	45.5	31.8	18.2	0.0	0.0
設問5	18.2	45.5	27.3	9.1	0.0	0.0	設問11	18.2	27.3	36.4	13.6	0.0	4.5
設問6	13.6	50.0	27.3	9.1	0.0	0.0							

講義名：獣医臨床栄養学（専門教育科目、前期開講、メディア授業（山口大学から受信））

	回答1	回答2	回答3	回答4	回答5	回答6		回答1	回答2	回答3	回答4	回答5	回答6
設問1	71.9	18.8	9.4	0.0	0.0	0.0	設問9	12.5	34.4	43.8	6.3	0.0	3.1
設問2	21.9	12.5	28.1	21.9	15.6	0.0	設問10	9.4	46.9	31.3	12.5	0.0	0.0
設問3	3.1	40.6	53.1	3.1	0.0	0.0	設問11	15.6	37.5	31.3	12.5	3.1	0.0
設問4	62.5	12.5	25.0	0.0	0.0	0.0	設問12	34.4	40.6	9.4	12.5	3.1	0.0
設問5	25.0	31.3	28.1	9.4	6.3	0.0	設問13	28.1	37.5	25.0	6.3	3.1	0.0
設問6	12.5	25.0	25.0	31.3	6.3	0.0	設問14	34.4	31.3	21.9	9.4	3.1	0.0
設問7	12.5	31.3	28.1	9.4	6.3	0.0	設問15	28.1	28.1	21.9	18.8	3.1	0.0
設問8	37.5	31.3	31.3	0.0	0.0	0.0	設問16	6.3	15.6	37.5	25.0	15.6	0.0

【3年次科目】

講義名：獣医キャリア形成論（専門教育科目、後期開講）

	回答1	回答2	回答3	回答4	回答5	回答6		回答1	回答2	回答3	回答4	回答5	回答6
設問1	62.5	25.0	8.3	0.0	0.0	4.2	設問7	33.3	45.8	20.8	0.0	0.0	0.0
設問2	12.5	12.5	0.0	4.2	70.8	0.0	設問8	45.8	37.5	16.7	0.0	0.0	0.0
設問3	12.5	20.8	66.7	0.0	0.0	0.0	設問9	33.3	45.8	20.8	0.0	0.0	0.0
設問4	12.5	12.5	75.0	0.0	0.0	0.0	設問10	29.2	58.3	4.2	0.0	0.0	8.3
設問5	29.2	58.3	12.5	0.0	0.0	0.0	設問11	41.7	45.8	4.2	0.0	0.0	8.3
設問6	37.5	50.0	12.5	0.0	0.0	0.0							

講義名：獣医発生学（専門教育科目、前期開講、メディア授業（山口大学から受信））

	回答1	回答2	回答3	回答4	回答5	回答6		回答1	回答2	回答3	回答4	回答5	回答6
設問1	86.2	10.3	0.0	0.0	0.0	3.4	設問9	13.8	48.3	34.5	3.4	0.0	0.0

設問 2	17.2	27.6	41.4	13.8	0.0	0.0	設問 10	13.8	55.2	24.1	6.9	0.0	0.0
設問 3	6.9	37.9	55.2	0.0	0.0	0.0	設問 11	20.7	55.2	20.7	3.4	0.0	0.0
設問 4	13.8	51.7	34.5	0.0	0.0	0.0	設問 12	37.9	41.4	17.2	0.0	0.0	3.4
設問 5	27.6	41.4	27.6	3.4	0.0	0.0	設問 13	34.5	51.7	6.9	3.4	0.0	3.4
設問 6	31.0	41.4	24.1	0.0	0.0	0.0	設問 14	34.5	37.9	20.7	3.4	0.0	3.4
設問 7	37.9	37.9	24.1	3.4	0.0	0.0	設問 15	31.0	51.7	13.8	0.0	0.0	3.4
設問 8	34.5	44.8	20.7	0.0	0.0	0.0	設問 16	17.2	44.8	20.7	3.4	10.3	3.4

講義名：獣医薬理学A（専門教育科目、前期開講、メディア授業（山口大学から受信））

	回答 1	回答 2	回答 3	回答 4	回答 5	回答 6		回答 1	回答 2	回答 3	回答 4	回答 5	回答 6
設問 1	93.3	3.3	0.0	0.0	0.0	3.3	設問 9	30.0	43.3	23.3	3.3	0.0	0.0
設問 2	36.7	33.3	30.0	0.0	0.0	0.0	設問 10	33.3	53.3	13.3	0.0	0.0	0.0
設問 3	10.0	26.7	63.3	0.0	0.0	0.0	設問 11	50.0	40.0	10.0	0.0	0.0	0.0
設問 4	0.0	20.0	80.0	0.0	0.0	0.0	設問 12	70.0	16.7	6.7	3.3	0.0	3.3
設問 5	53.3	36.7	10.0	0.0	0.0	0.0	設問 13	66.7	23.3	6.7	0.0	0.0	3.3
設問 6	56.7	30.0	10.0	3.3	0.0	0.0	設問 14	63.3	23.3	10.0	0.0	0.0	3.3
設問 7	40.0	30.0	26.7	0.0	3.3	0.0	設問 15	60.0	30.0	6.7	0.0	0.0	3.3
設問 8	56.7	26.7	10.0	3.3	0.0	3.3	設問 16	40.0	33.3	16.7	6.7	0.0	3.3

講義名：獣医薬理学B（専門教育科目、前期開講、メディア授業（山口大学へ送信））

	回答 1	回答 2	回答 3	回答 4	回答 5	回答 6		回答 1	回答 2	回答 3	回答 4	回答 5	回答 6
設問 1	86.7	3.3	6.7	0.0	0.0	3.3	設問 9	16.7	50.0	20.0	6.7	6.7	0.0
設問 2	26.7	36.7	33.3	0.0	3.3	0.0	設問 10	20.0	40.0	26.7	10.0	3.3	0.0
設問 3	16.7	46.7	36.7	0.0	0.0	0.0	設問 11	33.3	43.3	23.3	0.0	0.0	0.0
設問 4	46.7	23.3	30.0	0.0	0.0	0.0	設問 12	23.3	16.7	10.0	3.3	0.0	46.7
設問 5	53.3	30.0	16.7	0.0	0.0	0.0	設問 13	23.3	16.7	13.3	0.0	0.0	46.7
設問 6	43.3	43.3	13.3	0.0	0.0	0.0	設問 14	20.0	23.3	10.0	0.0	0.0	46.7
設問 7	46.7	30.0	23.3	0.0	0.0	0.0	設問 15	23.3	23.3	6.7	0.0	0.0	46.7
設問 8	50.0	36.7	13.3	0.0	0.0	0.0	設問 16	20.0	13.3	20.0	0.0	0.0	46.7

講義名：獣医薬理学C（専門教育科目、後期開講、メディア授業（山口大学から受信））

	回答 1	回答 2	回答 3	回答 4	回答 5	回答 6		回答 1	回答 2	回答 3	回答 4	回答 5	回答 6
設問 1	89.7	10.3	0.0	0.0	0.0	0.0	設問 9	31.0	48.3	17.2	0.0	3.4	0.0
設問 2	48.3	17.2	34.5	0.0	0.0	0.0	設問 10	34.5	51.7	6.9	6.9	0.0	0.0
設問 3	20.7	51.7	27.6	0.0	0.0	0.0	設問 11	44.8	37.9	17.2	0.0	0.0	0.0
設問 4	34.5	27.6	34.5	0.0	0.0	3.4	設問 12	65.5	17.2	10.3	0.0	0.0	6.9
設問 5	48.3	41.4	10.3	0.0	0.0	0.0	設問 13	48.3	34.5	10.3	0.0	0.0	6.9
設問 6	41.4	41.4	13.8	3.4	0.0	0.0	設問 14	58.6	24.1	10.3	0.0	0.0	6.9
設問 7	55.2	34.5	10.3	0.0	0.0	0.0	設問 15	55.2	24.1	13.8	0.0	0.0	6.9
設問 8	44.8	41.4	13.8	0.0	0.0	0.0	設問 16	37.9	24.1	24.1	6.9	0.0	6.9

講義名：獣医薬理学D（専門教育科目、後期開講、メディア授業（山口大学へ送信））

	回答 1	回答 2	回答 3	回答 4	回答 5	回答 6		回答 1	回答 2	回答 3	回答 4	回答 5	回答 6
--	------	------	------	------	------	------	--	------	------	------	------	------	------

設問 1	93.1	3.4	3.4	0.0	0.0	0.0	設問 9	37.9	44.8	10.3	6.9	0.0	0.0
設問 2	27.6	44.8	17.2	10.3	0.0	0.0	設問 10	41.4	41.4	10.3	6.9	0.0	0.0
設問 3	17.2	31.0	51.7	0.0	0.0	0.0	設問 11	44.8	41.4	13.8	0.0	0.0	0.0
設問 4	31.0	37.9	31.0	0.0	0.0	0.0	設問 12	24.1	24.1	6.9	0.0	0.0	44.8
設問 5	65.5	31.0	3.4	0.0	0.0	0.0	設問 13	31.0	20.7	3.4	0.0	0.0	44.8
設問 6	62.1	27.6	10.3	0.0	0.0	0.0	設問 14	34.5	17.2	3.4	0.0	0.0	44.8
設問 7	62.1	20.7	17.2	0.0	0.0	0.0	設問 15	31.0	17.2	6.9	0.0	0.0	44.8
設問 8	69.0	20.7	10.3	0.0	0.0	0.0	設問 16	20.7	24.1	10.3	0.0	0.0	44.8

講義名：実験動物学A（専門教育科目、前期開講、メディア授業（山口大学へ送信））

	回答 1	回答 2	回答 3	回答 4	回答 5	回答 6		回答 1	回答 2	回答 3	回答 4	回答 5	回答 6
設問 1	93.1	6.9	0.0	0.0	0.0	0.0	設問 9	17.2	55.2	27.6	0.0	0.0	0.0
設問 2	24.1	20.7	44.8	3.4	6.9	0.0	設問 10	31.0	58.6	10.3	0.0	0.0	0.0
設問 3	6.9	10.3	79.3	0.0	0.0	3.4	設問 11	65.5	27.6	6.9	0.0	0.0	0.0
設問 4	0.0	10.3	86.2	0.0	0.0	3.4	設問 12	41.4	6.9	0.0	0.0	0.0	51.7
設問 5	62.1	31.0	3.4	0.0	0.0	3.4	設問 13	34.5	6.9	6.9	0.0	0.0	51.7
設問 6	37.9	58.6	3.4	0.0	0.0	0.0	設問 14	37.9	10.3	0.0	0.0	0.0	51.7
設問 7	44.8	48.3	6.9	0.0	0.0	0.0	設問 15	34.5	13.8	0.0	0.0	0.0	51.7
設問 8	48.3	34.5	17.2	0.0	0.0	0.0	設問 16	37.9	10.3	0.0	0.0	0.0	51.7

講義名：実験動物学B（専門教育科目、前期開講、メディア授業（山口大学から受信））

	回答 1	回答 2	回答 3	回答 4	回答 5	回答 6		回答 1	回答 2	回答 3	回答 4	回答 5	回答 6
設問 1	82.8	10.3	6.9	0.0	0.0	0.0	設問 9	13.8	55.2	27.6	3.4	0.0	0.0
設問 2	10.3	20.7	37.9	13.8	17.2	0.0	設問 10	6.9	65.5	24.1	3.4	0.0	0.0
設問 3	6.9	31.0	62.1	0.0	0.0	0.0	設問 11	20.7	41.4	27.6	10.3	0.0	0.0
設問 4	20.7	34.5	41.4	0.0	0.0	3.4	設問 12	51.7	31.0	13.8	0.0	3.4	0.0
設問 5	10.3	51.7	24.1	3.4	6.9	3.4	設問 13	55.2	27.6	13.8	0.0	3.4	0.0
設問 6	24.1	44.8	20.7	10.3	0.0	0.0	設問 14	37.9	34.5	17.2	3.4	6.9	0.0
設問 7	13.8	44.8	41.4	0.0	0.0	0.0	設問 15	37.9	41.4	17.2	3.4	0.0	0.0
設問 8	34.5	44.8	20.7	0.0	0.0	0.0	設問 16	27.6	31.0	13.8	17.2	10.3	0.0

講義名：獣医微生物学ⅡA（専門教育科目、前期開講）

	回答 1	回答 2	回答 3	回答 4	回答 5	回答 6		回答 1	回答 2	回答 3	回答 4	回答 5	回答 6
設問 1	67.9	25.0	0.0	0.0	0.0	7.1	設問 7	32.1	42.9	25.0	0.0	0.0	0.0
設問 2	25.0	25.0	28.6	14.3	3.6	3.6	設問 8	28.6	53.6	17.9	0.0	0.0	0.0
設問 3	10.7	35.7	53.6	0.0	0.0	0.0	設問 9	14.3	60.7	21.4	0.0	3.6	0.0
設問 4	21.4	39.3	39.3	0.0	0.0	0.0	設問 10	17.9	57.1	17.9	7.1	0.0	0.0
設問 5	25.0	46.4	25.0	3.6	0.0	0.0	設問 11	28.6	50.0	14.3	3.6	0.0	3.6
設問 6	32.1	46.4	21.4	0.0	0.0	0.0							

講義名：獣医微生物学ⅡB（専門教育科目、後期開講）

	回答 1	回答 2	回答 3	回答 4	回答 5	回答 6		回答 1	回答 2	回答 3	回答 4	回答 5	回答 6
設問 1	70.0	23.3	6.7	0.0	0.0	0.0	設問 7	43.3	23.3	33.3	0.0	0.0	0.0

設問 2	33.3	16.7	33.3	13.3	0.0	3.3	設問 8	40.0	43.3	16.7	0.0	0.0	0.0
設問 3	13.3	33.3	53.3	0.0	0.0	0.0	設問 9	26.7	53.3	20.0	0.0	0.0	0.0
設問 4	26.7	30.0	43.3	0.0	0.0	0.0	設問 10	26.7	53.3	20.0	0.0	0.0	0.0
設問 5	40.0	40.0	20.0	0.0	0.0	0.0	設問 11	33.3	46.7	20.0	0.0	0.0	0.0
設問 6	43.3	40.0	16.7	0.0	0.0	0.0							

講義名：獣医病理学A（専門教育科目、前期開講、メディア授業（山口大学からの受信））

	回答 1	回答 2	回答 3	回答 4	回答 5	回答 6		回答 1	回答 2	回答 3	回答 4	回答 5	回答 6
設問 1	82.8	10.3	3.4	0.0	0.0	3.4	設問 9	13.8	20.7	27.6	27.6	10.3	0.0
設問 2	34.5	13.8	31.0	13.8	3.4	3.4	設問 10	10.3	31.0	17.2	37.9	3.4	0.0
設問 3	34.5	24.1	31.0	6.9	0.0	3.4	設問 11	10.3	24.1	34.5	20.7	10.3	0.0
設問 4	65.5	27.6	6.9	0.0	0.0	0.0	設問 12	37.9	37.9	17.2	6.9	0.0	0.0
設問 5	10.3	24.1	41.4	13.8	10.3	0.0	設問 13	34.5	37.9	17.2	10.3	0.0	0.0
設問 6	13.8	27.6	37.9	13.8	6.9	0.0	設問 14	37.9	24.1	27.6	6.9	3.4	0.0
設問 7	10.3	37.9	44.8	6.9	0.0	0.0	設問 15	34.5	37.9	24.1	3.4	0.0	0.0
設問 8	31.0	48.3	20.7	0.0	0.0	0.0	設問 16	17.2	24.1	34.5	3.4	20.7	0.0

講義名：獣医病理学B（専門教育科目、前期開講、メディア授業（山口大学へ送信））

	回答 1	回答 2	回答 3	回答 4	回答 5	回答 6		回答 1	回答 2	回答 3	回答 4	回答 5	回答 6
設問 1	75.9	6.9	0.0	0.0	0.0	17.2	設問 9	13.8	27.6	41.4	10.3	3.4	3.4
設問 2	17.2	24.1	44.8	10.3	3.4	0.0	設問 10	13.8	48.3	27.6	6.9	3.4	0.0
設問 3	20.7	37.9	41.4	0.0	0.0	0.0	設問 11	27.6	51.7	17.2	3.4	0.0	0.0
設問 4	41.4	27.6	31.0	0.0	0.0	0.0	設問 12	31.0	20.7	6.9	0.0	0.0	41.4
設問 5	27.6	48.3	24.1	0.0	0.0	0.0	設問 13	31.0	17.2	6.9	3.4	0.0	41.4
設問 6	27.6	41.4	31.0	0.0	0.0	0.0	設問 14	34.5	13.8	10.3	0.0	0.0	41.4
設問 7	31.0	41.4	27.6	0.0	0.0	0.0	設問 15	27.6	20.7	10.3	0.0	0.0	41.4
設問 8	44.8	41.4	13.8	0.0	0.0	0.0	設問 16	24.1	13.8	17.2	0.0	3.4	41.4

講義名：獣医病理学C（専門教育科目、後期開講、メディア授業（山口大学へ送信））

	回答 1	回答 2	回答 3	回答 4	回答 5	回答 6		回答 1	回答 2	回答 3	回答 4	回答 5	回答 6
設問 1	69.6	26.1	0.0	0.0	0.0	4.3	設問 9	21.7	34.8	43.5	0.0	0.0	0.0
設問 2	26.1	30.4	30.4	13.0	0.0	0.0	設問 10	13.0	47.8	39.1	0.0	0.0	0.0
設問 3	17.4	30.4	52.2	0.0	0.0	0.0	設問 11	21.7	39.1	39.1	0.0	0.0	0.0
設問 4	43.5	30.4	26.1	0.0	0.0	0.0	設問 12	34.8	17.4	8.7	0.0	0.0	39.1
設問 5	26.1	52.2	21.7	0.0	0.0	0.0	設問 13	34.8	21.7	4.3	0.0	0.0	39.1
設問 6	43.5	43.5	13.0	0.0	0.0	0.0	設問 14	30.4	26.1	4.3	0.0	0.0	39.1
設問 7	43.5	26.1	30.4	0.0	0.0	0.0	設問 15	30.4	21.7	8.7	0.0	0.0	39.1
設問 8	43.5	39.1	17.4	0.0	0.0	0.0	設問 16	26.1	21.7	13.0	0.0	0.0	39.1

講義名：獣医病理学D（専門教育科目、後期開講、メディア授業（山口大学からの受信））

	回答 1	回答 2	回答 3	回答 4	回答 5	回答 6		回答 1	回答 2	回答 3	回答 4	回答 5	回答 6
設問 1	72.0	20.0	4.0	0.0	0.0	4.0	設問 9	12.0	48.0	32.0	8.0	0.0	0.0
設問 2	28.0	36.0	24.0	8.0	4.0	0.0	設問 10	12.0	56.0	28.0	4.0	0.0	0.0

設問 3	16.0	32.0	48.0	4.0	0.0	0.0	設問 11	16.0	32.0	40.0	12.0	0.0	0.0
設問 4	28.0	32.0	40.0	0.0	0.0	0.0	設問 12	24.0	40.0	24.0	8.0	0.0	4.0
設問 5	16.0	28.0	24.0	32.0	0.0	0.0	設問 13	20.0	36.0	28.0	12.0	0.0	4.0
設問 6	20.0	28.0	32.0	8.0	12.0	0.0	設問 14	24.0	28.0	32.0	12.0	0.0	4.0
設問 7	16.0	36.0	44.0	4.0	0.0	0.0	設問 15	28.0	36.0	32.0	0.0	0.0	4.0
設問 8	32.0	40.0	28.0	0.0	0.0	0.0	設問 16	20.0	24.0	36.0	8.0	4.0	8.0

講義名：寄生虫学Ⅰ（専門教育科目、前期開講）

	回答 1	回答 2	回答 3	回答 4	回答 5	回答 6		回答 1	回答 2	回答 3	回答 4	回答 5	回答 6
設問 1	86.2	3.4	0.0	0.0	0.0	10.3	設問 7	51.7	31.0	17.2	0.0	0.0	0.0
設問 2	20.7	31.0	37.9	6.9	3.4	0.0	設問 8	44.8	41.4	13.8	0.0	0.0	0.0
設問 3	17.2	37.9	44.8	0.0	0.0	0.0	設問 9	24.1	41.4	24.1	6.9	3.4	0.0
設問 4	41.4	13.8	41.4	0.0	0.0	3.4	設問 10	27.6	41.4	20.7	6.9	3.4	0.0
設問 5	55.2	34.5	10.3	0.0	0.0	0.0	設問 11	44.8	34.5	20.7	0.0	0.0	0.0
設問 6	44.8	41.4	13.8	0.0	0.0	0.0							

講義名：寄生虫学Ⅱ（専門教育科目、後期開講）

	回答 1	回答 2	回答 3	回答 4	回答 5	回答 6		回答 1	回答 2	回答 3	回答 4	回答 5	回答 6
設問 1	89.7	10.3	0.0	0.0	0.0	0.0	設問 7	55.2	31.0	13.8	0.0	0.0	0.0
設問 2	51.7	27.6	17.2	3.4	0.0	0.0	設問 8	58.6	27.6	13.8	0.0	0.0	0.0
設問 3	34.5	44.8	20.7	0.0	0.0	0.0	設問 9	20.7	37.9	34.5	6.9	0.0	0.0
設問 4	72.4	13.8	13.8	0.0	0.0	0.0	設問 10	27.6	51.7	17.2	3.4	0.0	0.0
設問 5	75.9	20.7	3.4	0.0	0.0	0.0	設問 11	48.3	27.6	20.7	0.0	0.0	3.4
設問 6	69.0	27.6	3.4	0.0	0.0	0.0							

講義名：臨床獣医学総論（専門教育科目、後期開講、メディア授業（山口大学へ送信））

	回答 1	回答 2	回答 3	回答 4	回答 5	回答 6		回答 1	回答 2	回答 3	回答 4	回答 5	回答 6
設問 1	89.3	7.1	3.6	0.0	0.0	0.0	設問 9	21.4	46.4	28.6	3.6	0.0	0.0
設問 2	10.7	7.1	32.1	35.7	14.3	0.0	設問 10	25.0	60.7	14.3	0.0	0.0	0.0
設問 3	3.6	3.6	92.9	0.0	0.0	0.0	設問 11	35.7	50.0	10.7	3.6	0.0	0.0
設問 4	3.6	3.6	92.9	0.0	0.0	0.0	設問 12	32.1	14.3	7.1	0.0	0.0	46.4
設問 5	57.1	32.1	10.7	0.0	0.0	0.0	設問 13	28.6	21.4	3.6	0.0	0.0	46.4
設問 6	46.4	39.3	10.7	3.6	0.0	0.0	設問 14	25.0	21.4	7.1	0.0	0.0	46.4
設問 7	32.1	35.7	28.6	3.6	0.0	0.0	設問 15	28.6	17.9	7.1	0.0	0.0	46.4
設問 8	39.3	35.7	17.9	0.0	0.0	7.1	設問 16	21.4	7.1	21.4	3.6	0.0	46.4

IV. 合同 FD 研修会

1. はじめに

平成 24 年度から設置された鹿児島大学および山口大学共同獣医学部は、双方向遠隔授業システムを導入して、両大学の教員によるオムニバス形式の教育を実施しており、次年度 4 年生となる平成 24 年度入学者が獣医臨床科目を履修し始めるため、カリキュラムの大部分が共同獣医学部の新課程に移行する時期となる。ま

た一方、平成 25 年からは欧州獣医学教育認証機構（EAEVE）による認証獲得に向けた教育改革事業が開始されている。これらはいずれも質の高い世界標準の教育の上で成り立つものであり、教員の技術の向上、すなわち FD がより一層求められることとなる。そこで、通常両大学で独自に行う FD 活動に加えて、本年度より合同で行う研修会を実施することとなった。これによって、両大学教員のコミュニケーションをより深めるとともに、共通あるいは個別に抱える課題や問題点を把握し、相互の協力あるいは補完によって、教育レベルを向上させることが可能となる。

本年度は、山口大学共同獣医学部主催により、山口大学で実施され、それに鹿児島大学共同獣医学部教員および事務職員計 10 名が参加した。鹿児島大学からの参加者（敬称略）は、FD 委員会委員の大和、安藤（貴）、小澤、教務係の東屋敷、その他に山口大学からワーキンググループ討議への参加を求められた窪田、三好、中馬、安藤（匡）、藤木であった。また、FD 委員の白石は双方向システム接続のため、鹿児島大学側で参加して本研修会の運営にあたった。両大学を合わせると 50 名余りが本研修会に参加した。以下に、本年度実施された合同 FD 研修会について報告する。

2. 研修会次第

日時：平成 27 年 2 月 17 日（火）13 時 30 分～17 時 00 分

場所：山口大学共同獣医学部（山口大学主催）

13:30～14:30 5 番および 4 番教室（遠隔システムにより鹿児島大学に配信）
EAEVE 認証に関する概要説明（鹿児島大学 獣医学教育改革室 有村卓朗）

14:30～15:15 5 番および 4 番教室（遠隔システムにより鹿児島大学に配信）
遠隔講義、実習に関する留意点ならびに問題点（山口大学 森本将弘）

15:30～17:00 カリキュラム・遠隔講義 WG 小会議室、連獣会議室、研究科長室、106 号室
公衆衛生、臨床分野の共同獣医学部カリキュラムの調整ならび遠隔講義に関して
公衆衛生分野（鹿大：中馬、安藤（匡）、小澤、山大：豊福、度会、清水、渡邊）
産業動物分野（鹿大：窪田、安藤（貴）、山大：田浦、奥田）
伴侶動物分野（鹿大：藤木、大和、山大：中市、水野）
遠隔講義関連（鹿大：三好、東屋敷、山大：森本、佐藤）

3. 各部の内容

1) 開会および学部長挨拶（13:30～13:34）

山口大学共同獣医学部の 5 番教室で実施されて、同時に隣接する 4 番教室にも接続された。13 時 30 分から山口大学共同獣医学部 FD 委員会委員長の森本教授が進行し、木曾学部長の挨拶により研修会が開始された。山口大学での参加者は三十数名（うち 10 名は鹿児島大学からの参加者）であった。鹿児島大学では前半の 2 講演を 303 教室で受信し、参加者は 16 名であった。両大学を合わせると 50 名余りが本研修会に参加した。



EAEVE認証のための具体的な基準

一般課題: 1) 授業計画の柔軟性
2) 教育方法は、対面式の授業のみならず、教員や講師ほかどのようなものか?
3) 評価と試験
4) 試験の形式

実地教育: 1) 産業地帯訪問
2) 学生(特に) 動物病院
3) 実習内容
4) パオセキテクノロジーの活用
5) 農産物の生産の理解が促進されること
6) 動物保健の向上に貢献する能力を育成すること
7) 動物保健の向上に貢献する能力を育成すること
8) 移動診療車(ワゴン)について

カテゴリー1(主要な) 評価事項 (1/2)

A. 施設関連の「主要な実地教育」
1) 実地教育の施設は、環境が安全で清潔で適切な設備を備えていることである。
2) 実地教育の施設は、環境が安全で清潔で適切な設備を備えていることである。実地教育の施設は、環境が安全で清潔で適切な設備を備えていることである。
3) パオセキテクノロジーは、実地教育の施設に活用されていることである。実地教育の施設は、環境が安全で清潔で適切な設備を備えていることである。
4) 動物保健の向上に貢献する能力を育成することである。

カテゴリー1(主要な) 評価事項 (2/2)

B. 教員
1) 教員は、実地教育の施設に活用されていることである。実地教育の施設は、環境が安全で清潔で適切な設備を備えていることである。
2) 教員は、実地教育の施設に活用されていることである。実地教育の施設は、環境が安全で清潔で適切な設備を備えていることである。
3) 教員は、実地教育の施設に活用されていることである。実地教育の施設は、環境が安全で清潔で適切な設備を備えていることである。

Final Report の例 (抜粋, 1/3)

イタリア・Bolegno大学 (2014, Approved Accreditation)

- 小動物、大動物、産科、公衆衛生と食品衛生の分野では、必ず適切なHands-on実習が行われるべきである。基礎知識から専門知識まで、十分な数でHands-onを行い、実習は動物病院での実習と同等である。実習は、動物保健の向上に貢献する能力を育成することである。

Final Report の例 (抜粋, 2/3)

フランス・Nantes大学 (2014, Non-Approved)

- 目標と教員に関して、グローバルに完全な実地教育が欠けている。
2) 動物の取り扱い方に関する知識(20%)は、スタッフの知識を評価することによって行われるべきである。これは、動物の取り扱い方に関する知識を評価することによって行われるべきである。これは、動物の取り扱い方に関する知識を評価することによって行われるべきである。

Final Report の例 (抜粋, 3/3)

英国



- 執行委員会によって作成された学部の長期戦略計画が十分に更新できなかった。
2) 学生の代表(学生協会)に課せられていない、または更新されておらず、動物保健の向上に貢献する能力を育成することである。

EAEVE認証評価システムのメリット・デメリット

A) メリット

- 評価が客観的であり、効果的かつ透明なシステムである。
2) 動物保健の向上に貢献する能力を育成することである。
3) 動物保健の向上に貢献する能力を育成することである。

米国獣医師協会 教育部門 (AVMA-COE)



AVMAは非営利組織として1863年に設立され、1921年から獣医学教育の質を維持し、1946年にCOEとして認定された。COEはAVMAの一部であり、獣医学教育の水準を維持する責任を負っている。COEは、獣医学教育の水準を維持する責任を負っている。COEは、獣医学教育の水準を維持する責任を負っている。

AVMA-COEによる評価システム

本学の大学は、自己評価報告書 (Self-Evaluation Report) を作成し、それをAVMA-COEへ提出する。COEは評価報告書を確認し、その結果に基づいて評価を行う。

A) 動物保健の向上に貢献する能力を育成することである。
B) 動物保健の向上に貢献する能力を育成することである。
C) COEの評価
D) 動物保健の向上に貢献する能力を育成することである。

国	認定校数	AVMA-COE	比率
アメリカ	10	30	100%
カナダ	5	2	100%
オーストラリア	7	4	87%
フランス	4	3	75%
イギリス	4	1	25%
オランダ	1	1	100%
メキシコ	19	1	5%
スペイン	1	1	100%
ニュージーランド	1	1	100%
インド	2	2	100%
韓国	4	2	50%
TOTAL	74	49	

注: 認定校数
非英語圏の獣医学大学のうち、AVMA-COE認定校は3校のみ
- VetAgri Sup (フランス)
- University of Utrecht Faculty of Veterinary Medicine (オランダ)
- National Autonomous University of Mexico Faculty of Veterinary Medicine and Zootechnology (メキシコ)

3) 遠隔講義、実習に関する留意点ならびに問題点 (14:38~15:15)

講演タイトル: 山口大学における獣医組織学講義・実習の実施 - 双方向システム・バーチャルスライドを利用し-

はじめに双方向遠隔講義システムの概要について説明があった。本システムは学術情報ネットワーク(SINET4)を介してVPN(バーチャルプライベートネットワーク)で山口と鹿児島を接続しているため安全性および安定性が高い一方、他大学とは逆に接続が困難であることが注意点として示された。続いてシステムの取り扱いでは、メニュー画面、カメラコントロール、多地点接続等について多くの写真を使用しその手順が詳細にかつ分かりやすく説明がされた。さらに講義をサポートする機器として、書画カメラ、ポインタ(エアビーム)、電子黒板、レスポンスツール等の紹介があり、これらのサポート機器を有効に利用することで遠隔講義における資料提示のデメリットを解消できることが示された。

次に実際の講義における留意点として、特にディスプレイのみならずパワーポイント等の資料を提示して講義を行う場合にはその文字サイズに注意が必要であり、実際に学生から文字が読めないなどの指摘が多いとのことであった。またこの問題は、学生に予め資料を配布することで改善が可能であり、そのための手段としてeラーニングサーバーであるGleixaやMoodleの利用が提案された。また、出席確認は遠隔講義における問題点の一つであるが、その対策の一つとして、学生の席を固定する方法が紹介された。

最後に、遠隔講義システムとバーチャルスライドシステムを利用した山口大学における組織学実習の実例が紹介された。バーチャルスライドシステムおよび情報教育支援システム(Wingnet)の説明の後、遠隔実習を円滑に実施するために重要な点として、実習日程やその内容について事前に打合せを十分にすることが示された。そのためには、両大学における担当教員間のコミュニケーションが非常に重要であり、これは授業

態度や出席状況に問題がある相手側学生の状況把握のためにも重要であることが強調された。

本講演はこれから遠隔講義を始める教員を対象としたものであったが、すでに遠隔講義を実践している教員にとってもさらなる講義の改善に非常に有益なものであった。また質疑の際には、鹿児島大学の大和先生より両大学における中間ディスプレイの有無についてコメントがあり、これを考慮した資料作成および授業進行の必要性が指摘された。



4) カリキュラム・遠隔講義 WG (15:15~17:00)

(1) 公衆衛生分野 (山大：豊福、度会、清水、渡邊、鹿大：中馬、安藤 (匡)、有村、小澤)

下記のような議題に沿って協議された。

A. 公衆衛生学実習について

- ・細菌分離の内容や手順などの具体的な内容について、今後両大学ですり合わせる。
- ・乳製品関連施設 (乳清工場など) の見学について

山口：すでに候補地を確保済み。

鹿児島：過去に同様の施設を見学していたが、現在見通しが立っていない。

B. 食品衛生学実習について

- ・食品加工に関する hands-on 実習について

山口：豚や鶏を数頭ずつ購入して県職員の方々の協力を得ながら学内で屠殺 (または臓器のみ入手) して、細菌数等の検査を実施する？

農業高校などにお邪魔して、食品加工 (ソーセージなど) を一緒に行う？

*いずれにせよ、外部の方々の協力が必須。

「環境衛生学」のコマ数を削って実施する。

鹿児島：「食肉衛生」は、病理や大動物臨床の教員が担当すべきでは？

公衆衛生学の担当教員が4名いる山口大と異なり、2名しか担当教員のいない鹿児島大は実施が難しい。

C. 総括

- ・実習室内で進める実習に関しては、両大学とも基本的に従来通りで問題はない。
- ・施設見学や hands-on の実習に関しては、両大学間の準備状況に大きな差がある。特に、食品加工に関する hands-on 実習については、鹿児島大の担当教員に関する議論を先に進めないと、山口大に対するカウンターパートナーさえ不明瞭なので、内容をすり合わせることは出来ない。



(2) 産業動物分野（山大：田浦、角川、奥田、鹿大：窪田、安藤(貴)）

山口大学から提案された下記のような議題で協議された。

A. 産業動物総合臨床実習の3単位化にむけた検討

a) 産業動物診断治療学実習Ⅱ、牛診療学Ⅲを廃止しその単位を使って実施することが報告された。

b) 3単位分の実施内容について検討を行った。

・1単位：NOSAI等の外部施設（機関）を利用する。

→それぞれの大学がNOSAI等を利用して実施する。

・1単位：各大学間を教員が移動しての実習を検討する。

→集中形式で馬（三角先生、帆保先生）が3日間、豚（田浦先生）が2日間、教員が両大学を移動して実施する。

・1単位：ブタ、ニワトリの実習実施内容の検討する、

→山口では豚、鶏を購入して実習を行うことを検討中、鹿児島も現在検討中であることが報告された。

c) 廃止予定の牛診療学Ⅲシラバスを他の科目へ移行できるか検討する。

獣医繁殖学総論、牛診療学Ⅰ、牛診療学Ⅱに牛診断学Ⅲの内容を含めることとした。窪田先生がシラバス作成を担当することとなった。

B. 牧場実習の検討

a) 実施内容の検討

・現在は両大学間の執行部レベルで協議中である。

・山口大学から鹿児島大学へ移動して附属牧場での実習が可能であるか検討を行っている。

b) 実施時期、学年の検討

現在の予定は以下であることが報告された。

※H27年度は4年後期（H28年春）実施。以降は、学年を変更でも可。

c) 獣医臨床基礎実習について

産業動物関連の6コマは産業動物診断治療学実習Ⅰの中を含め、田浦先生、高木先生を中心にシラバスを作成してもらうこととした。

C. 群管理実習について検討

a) 産業動物総合臨床実習（5年後期と6年前期）のシラバスの中に群管理を含めることで対応する。

D. その他

窪田先生から産業動物診断治療学実習Ⅰ（4年後期）と獣医繁殖学実習（5年前期）の配当期を逆にしたいとの提案があり、WG内では了承された。獣医繁殖学実習（4年後期）、産業動物診断治療学実習Ⅰ（5年前期）とすることを窪田先生から三好先生に提案してもらい、2大学間の協議会に諮ることとした。

(3) 伴侶動物分野（山大：中市、水野、鹿大：藤木、大和）

山口大学から提案された下記の協議事項について、中市教授が進行役となって話し合われた。

A. 夜間・救急病院総合臨床実習の検討

a) 実習内容（シラバス）と単位数

夜間を含む24時間診療に関しては、両大学ともに、教員によって考え方に大きな幅がある。すなわち、ある一定時刻（10時頃）までの診療を受け付けて、深夜から朝にかけては単に電話対応を行う程度の診療から、24時間体制に看護師や事務員を加えて考える考え方まで様々である。EAEVE認証の必須項目であるため、この診療形態については、各大学の改革室等を通じて、EAEVE関係者に意見を聞きながら、その意見等にしながら然るべき形態を取っていく必要があると確認された。

また、夜間診療に一次診療ないし二次診療をどこまで含むのかということについても意見を交換した。鹿大では、一般に一次診療的な内容を考えており、夜間（24時間）診療において、基礎的・予防医療的な症例を得て、学生の教育に当てる考えを持っているが、山大では一次・予防医学的症例を地域から受け入れるのは難しい現状があるため、現時点では、明確な考えには至っていないようであった。

夜間（24時間）診療におけるシラバス上の単位数は、最小単位で良いのではないと意見が一致した。

B. 伴侶動物総合臨床実習の3単位化にともなう臨床感染症学の廃止の検討

a) 臨床感染症学内容を他科目へ振り分け

臨床感染症学の廃止および他科目への振り分けについては、特に問題がなく、当該担当教員（鹿大の遠藤教授）と教務関係者との協議にゆだねることで意見が一致した。

C. 牧場実習の実施に伴う獣医臨床基礎実習の廃止の検討

a) 獣医臨床基礎実習の内容を他科目への振り分け

このことについての方針は妥当であると判断し、担当教員である山大の奥田教授および鹿大の遠藤教授に原案を作ってもらい、それを各担当で最終協議してシラバスを決定していくことで意見が一致した。

D. 1次診療実施に向けた検討

a) 鹿大は大学病院内で実施予定、山大は近隣獣医師へ派遣予定だが、シラバスは統一する必要がある

b) 去勢や避妊についての学内での事前実習が必要ではないか

両大学における1次診療に関連する症例について、現状と近い将来的な展望について意見交換を行った。各大学での事情や状況の違いなどを踏まえて、いくつかのアイデアが議論された。

E. 臨床獣医学特別実習

a) 山大はリニアックなどを使用した硬度獣医療実習が必要

単位数については両大学で一致させるが、その内容についてはある程度個別に考えるというこれまでのコンセンサスが確認された。

D. その他

外科系教員（中市、藤木）による来年度からの双方向授業の打合せが行われた。臨床病理担当教員（水野、大和）についてすでに協議済みであったため、最終的な確認を行った。



(4) 遠隔講義分野（山大: 佐藤(晃)、横田、國近、鹿大: 三好、東屋敷）

概要：EAEVE 認証取得に向け参加型臨床実習の強化、農・畜産系科目の実施など、カリキュラムの見直しが必要となってきた。先日（2月12日）実施された文科省への相談から、前向きなカリキュラム見直しはアフターケアで報告すれば良いとの見解をもらったことから、早急な見直しを検討することとなった。一部の科目は平成27年度からの変更になり、3月の教授会決議が必要であるため、2月の共同獣医学部協議会での頭出し、3月の両学部教授会並びに協議会で決議の流れとすることになった。

主な内容：

- ・アフターケア対応のため、まずはH27年度開講分（1年～4年）までの変更を優先する。
- ・新規立ち上げ科目を未受講となる学年は集中講義で対応する。
- ・〇〇I, IIを〇〇A, Bへ変更するのではなく、履修の手引き等の内規を変更して対応し、在学生にも適用する。ただし、これまでの学生でI, IIの縛りで留年している学生がいたらその対応を考える。



第2節 全学FD活動への参加

I. 鹿児島大学FD委員会への出席

第1回 日時：平成26年4月30日（水）16：30～、場所：稲盛アカデミー棟3F 展示・学生交流室

議題 1. 平成26年度FD委員会活動計画について

2. 平成26年度FD経費予算要求について

報告 1. 大学IRコンソーシアム学生調査の実施について

2. 平成25年度FD経費執行状況報告について

3. 平成26年度「大学教育再生加速プログラム」の公募について

第2回 日時：平成26年6月3日（火）16:20～、場所：稲盛アカデミー棟3F 展示・学生交流室

議題 1. 平成26年度FD活動計画・経費要求について

報告 1. 平成26年度FD委員会ワーキンググループについて

2. 平成26年度「大学教育再生加速プログラム」の申請について

3. 平成26年度FD・SD関連フォーラム・セミナー等の情報について

第3回 日時：平成26年7月1日（火）16:20～、場所：稲盛アカデミー棟3F 展示・学生交流室

議題 1. 新任教員FD研修会の開催について

2. FD・SD合同フォーラムの開催について

報告 1. 各WGの検討内容について

第4回 日時：平成26年7月30日（水）16:30～、場所：稲盛アカデミー棟3F 展示・学生交流室

議題 1. 新任教員FD研修会の開催について（継続審議）

2. FD・SD合同フォーラムの開催について（継続審議）

報告 1. 鹿児島大学ファカルティ・ディベロップメントに関する指針について

2. 各WGの検討内容について

3. 平成26年度地（知）の拠点整備事業の採択について

第5回 日時：平成26年9月5日（金）9:00～、場所：共通教育棟1号館5F 第1会議室

議題 1. FDガイド第8号の作成について

2. 学生・教職員ワークショップの開催について

報告 1. 大学IRコンソーシアム「学生調査2014年」の上級生調査について

2. 平成25年度FD報告書について

3. SPODフォーラム2014について

4. 部局開催のFD講演会について

第6回 日時：平成26年10月3日（金）9:00～、場所：共通教育棟1号館5F 第1会議室

議題 1. 学生・教職員ワークショップの開催について（継続審議）

報告 1. FD・SD合同フォーラムの開催について

2. 新任教員FD研修会について

第7回 日時：平成26年11月14日（金）9:00～、場所：共通教育棟1号館5F 第1会議室

議題 1. FDを推進していくための方策について

報告 1. FD・SD合同フォーラムについて

2. 学生・教職員ワークショップの開催について

第8回 日時：平成26年12月12日（金）9:00～、場所：共通教育棟1号館5F 第1会議室

議題 1. FDを推進していくための方策について（継続審議）

報告 1. 学生・教職員ワークショップについて

2. 大学IRコンソーシアム・アンケート2013調査報告について

3. WGの検討内容について

第9回 日時：平成27年1月30日（金）9:00～、場所：共通教育棟1号館5F 第1会議室

議題 1. FDを推進していくための方策について（継続審議）

2. FDガイド第9号の作成について

報告 1. 鹿児島大学COC事業キックオフシンポジウムについて

第10回 日時：平成27年2月27日（金）9:00～、場所：共通教育棟1号館5F 第1会議室

議題 1. FDを推進していくための方策について（継続審議）

2. 平成26年度FD活動報告について

報告 1. FD関連書籍について

II. 学生・教職員ワークショップWGの活動およびワークショップへの参加

第1回打合 日時：平成26年5月22日（木）9:00～、場所：学習交流プラザ2F グループ学習室5

第2回打合 日時：平成26年6月12日（木）9:00～、場所：学習交流プラザ2F グループ学習室5

第3回打合 日時：平成26年9月17日（水）9:00～、場所：共通教育棟1号館2F 第2会議室

第4回打合 日時：平成26年11月28日（金）9:00～、場所：共通教育棟1号館2F 第2会議室

平成26年度学生・教職員ワークショップ「英語を学ぶ」から「英語で学ぶ」へ

目的：ワークショップ参加者は、「英語で学ぶ」授業の必要性、問題点を理解し、学生のグローバル化を促す教育を計画できるようになることを目指す。

日時：平成26年12月9日（火）16:10～19:10

場所：郡元キャンパス 学習交流プラザ 中2階 学習交流ホール

対象：教育に関心のある学生、教育に関わっている全教職員

学生：各学部より推薦を受けた学生、自主参加希望者

教員：各学部、学共施設等の学生教育に関わっている教員、教務委員、FD委員

職員：各学部学生系職員、学生部職員

内容とスケジュール：

16:10 開会挨拶（清原理事、FD委員会委員長）

16:15 今なぜ「英語で学ぶ」なのか（富原FD委員）

16:20 事例紹介「ネイティブ教員と日本人教員が共同で運営する英語授業について」
（田中寿郎先生、愛媛大学共通教育センター長）

17:10 グループ討議

17:10 説明（青木FD委員）

17:15 グループ討議（8グループ）

18:30 発表（大和FD委員）

19:00 アンケート記入

19:05 まとめ

19:10 閉会（佐久間FD委員）

理工学研究科

平成26年度 鹿児島大学大学院理工学研究科

ファカルティ・ディベロップメント委員会報告書
(平成27年4月)

鹿児島大学大学院理工学研究科 ファカルティ・ディベロップメント委員

目次

はじめに	1
第1章 平成26年度鹿児島大学理工学研究科のFD活動	
1.1 鹿児島大学の中期目標・年次計画と理工学研究科のFD活動	4
1.2 理工学研究科FD委員会	4
第2章 理工学研究科FD講演会とFD活動	
2.1 理工学研究科FD講演会	7
2.2 海外実習報告	9
2.3 他機関主催FD研修会参加報告	9
第3章 学生による授業評価	
3.1 博士前期課程の授業評価アンケートの分析結果	11
3.1.1 工学系専攻の授業評価アンケートの結果報告	11
3.1.2 理学系専攻の授業評価アンケートの結果報告	12
3.2 博士前期課程の各専攻における授業評価アンケート分析結果	14
3.2.1 機械工学専攻	14
3.2.2 電気電子工学専攻	15
3.2.3 建築学専攻	17
3.2.4 化学生命・化学工学専攻	18
3.2.5 海洋土木工学専攻	19
3.2.6 情報生体システム工学専攻	20
3.2.7 数理情報科学専攻	22
3.2.8 物理・宇宙専攻	22
3.2.9 生命化学専攻	24
3.2.10 地球環境科学専攻	27
3.3 授業計画改善書の活用	29
第4章 学生の研究活動と教育成果	31
第5章 今後の理工学研究科FD活動への期待	33
参考資料-1	平成26年度理工学研究科FD委員会議事要旨
参考資料-2	授業評価アンケート質問様式（平成26年）
参考資料-3	授業評価アンケート質問回答用紙
参考資料-4	授業計画改善書の様式

平成26年度 鹿児島大学大学院理工学研究科FD委員会報告

はじめに

理工学研究科のFD委員会は、大学院設置基準の第14条の3（教育内容等の改善のための組織的な研修等）で「大学院は、当該大学院の授業及び研究指導の内容及び方法の改善を図るための組織的な研修及び研究を実施するものとする。」とされていることに基づき、昨年度に引き続いて以下のような活動を行った。

理工学研究科の教員は、研究科と併せて理学部と工学部を兼担し、教育・研究に当たっている。研究科におけるFD活動では、教育目標と

- (1) 入学者受入方針（アドミッション・ポリシー）
- (2) 教育課程編成・実施の方針（カリキュラム・ポリシー）
- (3) 学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）

の3ポリシーを明確にし、継続した点検の実施に基づいて、修了生の質と学位水準を保証している。

中央教育審議会の答申「グローバル化社会の大学院教育～世界の多様な分野で大学院修了者が活躍するために～」(2011)では、明確な学位プログラムとしての大学院教育を確立し、学生の質を保証する体系の整備が重要なものとして指摘されている。学生の質を保証する組織的な教育・研究指導體制の確立には、FD活動に関連する項目、FDの充実、ピアレビューの実施による教員の教育・研究指導能力の向上、教員の教育業績や能力の評価の充実、人事や処遇への反映などの推進、教員の教育研究活動の評価に関する指標の開発推進がある。さらに、「教員の教育・研究指導能力の向上」に関して、答申の中では、「体系的な大学院教育を充実させるためには、大学院教育に携わる教員の教育・研究指導能力の向上が不可欠である。FDや教育指導評価に関する取り組みは、学士課程段階が中心であるため、研究科や専攻の教員がお互いに教育について活発に議論するとともに、諸外国の大学院の教育・研究指導の経験を活用するなど大学院教育に関する組織的な研修体制を充実させる必要がある」としている。これまで大学院でのFD活動は、重要な項目として見なされてきたとは言い難い。しかし、FD活動が学生の質を保証する組織的な教育・研究指導體制の一環であるので、鹿児島大学の教育目標と3ポリシーの明確化に伴い、継続的に平成26年度に見直しを実施した。

理工学研究科博士前期課程における教育目標と3ポリシーは以下の通りである。

1) 教育目標

理工学研究科の理念は、「真理を愛し、高い倫理観を備え、自ら困難に挑戦する人格を育成し、時代の要請に対応できる教育研究の体系と枠組みを創成することによって、地域ならびに国際社会の進展に寄与する」と設定している。この理念を受け、「理工学に関する基礎から応用にわたる学術の真理と理論を教授研究し、その深奥を極めて文化の進展に寄与する人材の育成」を目的とし、「今日の諸課題に対応できる倫理的判断力及び人間生活を取り巻く自然についての総合的な知識をもち、自然科学に関する学問の高度化と多様化に幅広く柔軟に対応できる、次世代を担う技術者、研究者、さらには高度専門職業人を養成する」ことを教育目標としている。

2) 入学者受入方針 (アドミッション・ポリシー)

1. 求める人材像

ア) 理工学研究科の理念に共感し、それを実現できる基礎学力と意欲を持ち、科学的で合理的な思考ができ、コミュニケーション能力のある人。

イ) 理工学分野の諸課題に強い関心を持ち、強い探求心を持ってさまざまな課題にチャレンジする努力を惜しまない人。

ウ) 理工学分野のさまざまな現象を解析するため、科学的かつ多面的な観察計画を立案し、それを論理的に解析する能力の研鑽を目指す人。

エ) 理工学研究科で獲得する専門知識を基礎に、多様な価値観や文化を大切にしつつ、高い倫理観を持って地域並びに国際社会に貢献することを志す人。

2. 入学前に身につけておいて欲しいこと

理学又は工学において、志望する専攻の専門的知識・技術及び外国語（英語）の高い知識・能力が必要となる。

3. 入学者選抜の基本方針（一般選抜）

口述試験では、口頭試問を含む面接を課すとともに、出身学校の成績及び志望理由書等も踏まえ、教育目標に掲げる人材を育成する上で必要となる、志望する専攻の専門分野に関する知識・能力、適性・意欲等を評価する。また、筆答試験では、教育目標に掲げる人材を育成する上で必要となる、専門科目（理学又は工学において、志望する専攻の専門分野から出題）、外国語科目（英語）及び面接を課すとともに、出身学校の成績も踏まえ、志望する専攻の専門分野に関する知識・能力、外国語（英語）の読解能力、適性・意欲等を評価する。

3) 教育課程編成・実施の方針（カリキュラム・ポリシー）

科学・技術の専門家として、幅広い視野をもち、グローバル社会で活躍できる人材を育成するため、各専攻が編成した学位プログラムを構成する教育課程において、以下のような方針による質の高い教育を実践する。

- (1) 理工学の深奥を究めるために必要なそれぞれの専門領域の学力を習得させるための講義と演習を実施する。
- (2) 実践的な問題解決力を修得させるため、問題の多面的な理解に必要な幅広い専門学力、倫理観を修得させる教育を展開する。
- (3) それぞれの学生が確かな専門学力に基づく課題研究に積極的に取り組み、新たな方向性を見出す力を養成するための専門教育を実施する。
- (4) プレゼンテーション能力や討論の技術を養うため、学会等での研究成果の発表を通じた教育を実施する。
- (5) 国際的に通用するコミュニケーション能力を修得させるため、英語による授業等を実施する。

4) 学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）

博士前期課程は、本研究科所定の期間在学し、各専攻にもうけた学位プログラムを計画的に履

修し、所定の単位を所定のGPAで修得し、教育研究指導を受け、かつ、本研究科が行う修士論文の審査及び最終試験に合格した者に、修士の学位を授与する。

博士前期課程修了にあつては、次のような内容の学力基準に到達していることを評価する。

- (1) 自然科学と科学技術に係わる総合的かつ長期的視点の下、人類の幸福と福祉に貢献できる能力を身につけている。
- (2) 研究の急速な深化、複合化、学際化、総合化が生じている様々な自然科学分野で確かな専門学力に基づく実践的な問題解決力能力を修得している。
- (3) 専門領域において独創性の高い科学を担い、知識基盤社会を科学技術の立場から支えることが自らの使命であることを自覚している。
- (4) 科学創成の必然性を理解し、社会の急速な変貌に伴って起こる様々な問題克服に専門知識をもって寄与できる能力を修得している。
- (5) 高い倫理観を持って地域並びに国際社会の進展に主体的に取り組むことのできるコミュニケーション能力を身につけている。

理工学研究科では、入学後は学生の能力の向上を図ると共に各専攻の掲げる目標達成を目指し、カリキュラム・ポリシーとディプロマ・ポリシーに基づいた教育・研究指導に取り組んでいる。理工学研究科のFD委員会では、平成26年度の活動計画として、前年度に続いて(1)学生による授業評価とそれに基づいた授業改善、(2)FD講演会の実施(3)学生の研究活動と教育成果の点検を実施した。最後にFD報告書の作成によるPDCAの現状分析と総括をまとめた。

なお、本報告書は学部FD委員を兼務する理工学研究科FD委員各位のとりまとめや事務職員と事務支援室職員によるアンケート調査の整理等の協力により完成したことを明記し、深謝する。

平成26年度鹿児島大学理工学研究科ファカルティ・ディベロップメント委員会
委員長 本間俊雄(全学FD委員会委員)

平成26年度 鹿児島大学理工学研究科ファカルティ・ディベロップメント委員会委員

委員長	本間 俊雄	全学FD委員会委員（理工学研究科副研究科長）	H25. 4. 1～H27. 3. 31
委員	上谷 俊平	機械工学専攻,	H25. 4. 1～H27. 3. 31
委員	寺井 慶和	電気電子工学専攻,	H26. 4. 1～H27. 2. 28
委員	八野 知博	電気電子工学専攻,	H27. 3. 1～H27. 3. 31
委員	川越 明史	電気電子工学専攻,	H27. 3. 1～H27. 3. 31
委員	黒川 善幸	建築学専攻,	H25. 4. 1～H27. 3. 31
委員	中里 勉	化学生命・化学工学専攻,	H26. 4. 1～H27. 3. 31
委員	三隅 浩二	海洋土木工学専攻,	H25. 4. 1～H27. 3. 31
委員	塗木 淳夫	情報生体システム工学専攻,	H26. 4. 1～H27. 3. 31
委員	青木 敏	数理情報科学専攻,	H26. 4. 1～H27. 3. 31
委員	和田 桂一	物理・宇宙専攻,	H26. 4. 1～H27. 3. 31
委員	横川 由起子	生命化学専攻,	H26. 4. 1～H27. 3. 31
委員	小林 哲夫	地球環境科学専攻,	H26. 4. 1～H27. 3. 31
委員	山本 高師	理工学研究科事務部長	

第1章 平成26年度鹿児島大学理工学研究科のFD活動

1.1 鹿児島大学の中期目標・年次計画と理工学研究科のFD活動

理工学研究科のFD委員会では、昨年度に引き続き鹿児島大学の中期目標と25年度計画を参考にFD活動を行った。大学院教育におけるFD活動は、「教員が授業及び研究指導等の内容・方法を改善し向上させるための組織的な取り組みの総称」とされ、平成19年度から大学院設置基準の中で義務化が規定されている。学部のFD活動に比べて大学院に関するFD活動は低調の感がある。FD活動は大学院の学生数が増大したことにより多様な能力を有する学生の教育・研究指導に対応したような大学院教育の展開も必要になってきている。これまで各教員の能力に大きく依存してきた大学院の教育・研究を研究科として点検して改善していくことが必要になってきた。FD活動に関しても、大学院教育の共通認識として教育・研究指導の点検を行うことで、理工学研究科の目標の実現を図ることができると考える。

大学院教育の共通の認識として

- (1) 教育目標
- (2) 入学者受入方針（アドミッションポリシー）
- (3) 教育課程編成・実施の方針（カリキュラム・ポリシー）
- (4) 学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）

を明確にすると共に、継続して点検していくことが求められている（前期課程については、はじめに記載、後期課程は理工学研究科ホームページを参照のこと）。

全学のFD委員会では特別に大学院のFD活動についての議論はなされていないが、鹿児島大学の中期計画の中の平成26年度の実施計画について大学院のFDに関連が深い項目を見てみると、表1.1のような項目が上げられる。

表1.1 鹿児島大学の中期目標と26年度計画

中期目標	中期計画
知識社会を担う高度専門職業人や研究者等の育成をめざした大学院教育の質を向上する。	大学院教育カリキュラムを整備・拡充するなど、大学院課程における学位の質を保証する方法を確立する
グローバル化推進に対応した、国際的に活躍できる人材育成	幅広い国際的視野を育成する実践的な教育プログラムを実施する

教育目標と3ポリシーは、大学院における修了生の質の保証と学位水準と密接に関連しており、理工学研究科のFD委員会も含めて全体で取り組む問題である。理工学研究科のFD委員会ではこのような観点から、昨年度に続いて平成26年度の活動を行った。また、平成27年度より学年4期分割授業を実施し、学生が自らの判断で海外研修ができるように制度改革を行う。今後、グローバル化推進に向けた教員間の教育・研究指導向上の取組がより重要になってくる。

1.2 理工学研究科FD委員会

理工学研究科は平成21年度から部局化に伴って新しい理工学研究科としてスタートした。前期

課程は工学系が6専攻（機械工学専攻、電気電子工学専攻、建築学専攻、化学生命・化学工学専攻、海洋土木工学専攻、情報生体システム工学専攻）、理学系が4専攻（数理情報科学専攻、物理・宇宙専攻、生命化学専攻、地球環境科学専攻）の10専攻から選出された各委員から構成されている。

本年度は理工学研究科のFD委員会を2回行った。委員会の議事録は参考資料-1に示している。ここでは、委員会の活動について述べることにする。

第1回（5月15日）の委員会では以下のような議論を行った。

(1) 平成25年度研究科FD活動報告及び平成26年度FD活動計画について

1. FD講演会の実施
2. 海外実習報告
3. 学生による事業評価
4. 学生の研究活動と教育成果
5. 他大学主催のFD研修会参加及び調査

(2) FD経費予算要求について

(3) 委員の活動分担について

1. FD講演会の実施：青木委員、本間委員
2. 海外実習報告：横川委員、黒川委員
3. 学生による授業評価：小林委員、中里委員
4. 学生の研究活動と教育成果：和田委員、三隅委員、塗木委員

第2回（2月5日）の委員会では以下のような議論を行った。

(1) 平成25年度研究科FD活動報告書の作成について

はじめに：本間

第1章 平成26年度鹿児島大学理工学研究科のFD活動：本間

第2章 理工学研究科FD講演会とFD活動：青木、横川、黒川

第3章 学生による授業評価：各専攻担当委員

第4章 学生の研究活動と教育成果：和田、三隅、塗木

第5章 今後の理工学研究科FD活動への期待：本間

参考資料：研究科・工学系総務係

第2章 理工学研究科FD講演会とFD活動

2.1 理工学研究科FD講演会（青木 敏）

平成26年度の理工学研究科FD講演会は、理学部および工学部のFD委員会と理工学研究科FD委員会との共同主催として企画され、平成26年10月29日（水）13時30分から15時00分まで、稲盛会館ホールで開催された。講師としてお招きした同志社大学社会学部の山田礼子教授は、鹿児島大学も参加している大学IRコンソーシアムの代表でもあり、「教学IRの役割と可能性」という演題で講演をしていただいた。講演会への参加者は、教員68名（工系：48名，理系：15名，他学部5名）と事務・技術職員19名の合計87名であった。

講演に先立ち、近藤研究科長から開会挨拶があり、多くの教員にとってFD活動に関する認識は単なる授業改善とどまっている一方で、最近、FDとして扱う分野が広がっている背景が説明され、システムティックに教学関係を改善していくひとつの方法として、本講演でIRに関して基礎から学ぶことの重要性が説明された。引き続き青木FD委員長から講演者の経歴および所属等の紹介の後、講演が始まった。講演の概要を以下に示す。

IRとは、日本ではまだそれほど普及しておらず、分野により別の意味で使われることもあるが、本日の講演で扱うのは、機関研究と訳されるものであり、自分の大学を機関として見て、大学の中身をデータから分析するという意味で使われる。まず、高等教育政策との関連の話として、現在、高等教育に質的転換が求められているのはご存じのとおりである。法人評価では特に、経費の削減が求められ、例えば鹿児島大学では電気代の削減に桜島の動向が関わるように、事情は大学により異なり、評価する側はそれをよく認識していることが望ましいが、なかなか難しい。そのような状況では、データが重要な意味を持つ。特に、第2サイクルの認証評価では、学習成果の評価の重視と、内部質保証システムの評価が重要な転換点となっており、内部質保証とIRは切り離せない関係にある。IRは内部質保証を支えるシステムになり得るため、IRの機能の充実が、内部質保証の充実につながるといえる。IRが誕生した背景には、競争的環境の創出、教育成果の提示、研究の高度化、管理運営の組織化等の高等教育をめぐる状況の変化があり、これは日本だけに限らない、世界的な変化である。日本では国立大学の法人化により、中期目標、中期計画の策定と実行が不可欠になり、そのためには、財務、教学、学生といった大規模なデータの一元化と管理が大きな課題となり、統合データベースの構築は重要な戦略となりうる。さらに、情報公表の重要性と認証評価の関係も重要である。IRと情報公表は深い関連があり、IRの進捗状況によって、標準データベースにもなる可能性がある。答申のメッセージにある教育の質転換には、質を伴った学修時間の実質的な増加、確保を始点とした好循環の実現が謳われているが、そのために重要と考えているのが、教学IRの進展である。大学IRとは、大学運営や教育改革の効果を検証するために大学内のさまざまな情報を収集して数値化、可視化し、評価指標として管理し、その分析結果を教育、研究、学生支援、大学経営等に活用する活動をさす広い概念であるが、教学IRは、そうしたIR活動を教育面に焦点化し、教育の質保証をしていくための支援ツールである。

IRのもともとの定義は、何人かの研究者により1990年代後半から2000年代に与えられたが、

そのうちマッセンの定義には、データの分析と解釈、機関計画策定そして政策策定と意思決定支援情報への変換といったものが含まれ、たいへん複雑である。実際、アメリカにおける IR の活動は、非常に項目が多く複雑である。ボルクワインにより提唱されたゴールドトライアングルモデルは、「報告業務と政策分析」「計画策定、エンrollmentマネジメント、財務管理」「質保証、学習成果アセスメントプログラムの検討、効果測定、アクレディテーション」により IR が実現されるというものであるが、集権化、あるいは分散化の度合いにより差異が存在する。一方で日本の IR の現状は、2010年の調査では、IR 部門が設置されている大学は21%であるが、名称としては必ずしも IR に限らず、企画、評価、等の名称で実際には IR 活動を行っている。

教育の質保証には、段階があり、GPA, CAP 制等のこれまでの大学の取り組みは第1ステージといえる。第2ステージは IR 機能の充実や IR を活用した評価の段階であり、データの結果と評価を学生教育に還元するのが第3段階である。しかし日本の大学の現状では、第3段階まで到達しているところは少ない。IR に欠かせないのはデータの活用である。学生の現状をデータから把握するためには、現在のデータだけでなく、学生の高校時代の情報と現状とを関連付けて分析することも必要であるし、授業評価と学生データを関連付けて分析することも必要である。アウトカム、アセスメントには、標準テストや学修行動調査などの直接評価と、授業評価やレポートなどの間接評価があるが、それらの評価が連携していない大学は多い。各種の評価を連携することで、効果が表れやすくなり、そのための活動をしているのが、大学 IR コンソーシアムである。

大学 IR コンソーシアムは、2009年の戦略的大学連携という文科省のプロジェクトに4大学が連携して応募したのが発端であり、直接評価と間接評価を結び付けるための IR ネットワークシステムを構築した。さらに学生調査結果を自動化する分析システムを開発し、それにより、参加大学の分析負担を軽減することを目指した。自大学のデータとも連結可能としたが、情報セキュリティの確保のために、匿名化ツールを開発した。基本となる学生調査は、学修プロセスを測定するものであり、継続することで学生の経年変化、成長を把握することができる。その後、国公立8大学 IR ネットワークの活動として継続し、そこでは、教学評価体制の充実、グローバル化への対応、大学教育の職業的レリバンスの検証も行っている。IR コンソーシアムとしては、2012年9月から、活動を行っている。大学間連携による教学 IR には、大学の個別性を考慮しつつ標準性を活用することで、大学間連携教学 IR の仕組みを構築できるという意味がある。

さらに講演では、甲南大学、北海道大学での IR コンソーシアムの評価結果を認証評価に活用した実例などが紹介された。

講演後には5件の質問があり、講師の方から回答していただきました。



2.2 海外実習報告（横川 由起子、黒川 善幸）

鹿児島大学理工学研究科（工学系）では、学生の海外研修を支援するために、「岩崎国際学術交流基金」が設けられている。これらの基金等の助成によって実施された研修の内容を以下に紹介する。

国立カルナタカ工科大学（インド）での研修

平成26年12月6日～11日に、海洋土木工学専攻の浅野敏之教授と木村至伸准教授、同専攻大学院博士前期課程1年生3名、インド人ポストドク研究員1名の計6名が、学術交流協定機関であるインド・カルナタカ国立工科大学（NITK）を訪問し、テクニカル・プレゼンテーションとテクニカル・ツアーに参加した。テクニカル・プレゼンテーションは12月8日、マンガロール市Hotel Ocean Pearlでマンガロール市コンサルタント技術者協会の主催で開催された。NITKの教員、学生、現地のコンサルタント技術者等が出席する中、鹿児島大学から訪問した教員・大学院生の全員が英語による研究成果の発表とディスカッションを行った。さらにNITK学長・理事を表敬訪問、関連分野の研究者との学術交流を行った。

エチオピア国立博物館での研究

エチオピア国立博物館（アディスアベバ）において、地球環境科学専攻2年の伊藤麻祐子が2014年8月6日から20日にかけて、および2014年8月21日から30日にかけてケニア国立博物館（ナイロビ）において、第四紀更新世アフリカ産哺乳類化石の比較研究を行った。

ICRAR（オーストラリア）での研究

2015年2月16日から3月8日の期間、Gabor Orosz（博士後期課程1年）がJSPS「二国間共同研究」採択事業の支援を受けて、ICRAR（オーストラリア）で共同研究推進のためのデータ解析支援を行った。

2.3 他機関主催FD研修会参加報告（青木 敏）

平成26年8月29日に多摩大学（品川サテライト）にて開催された、公益社団法人・私立大学情報教育協会の主催による「統計学教育におけるアクティブ・ラーニングの事例研究」に参加したので、以下報告する。

まず、多摩大学経営情報学部の今泉忠教授より、本集会の開催趣旨説明と、これまでの研究の経緯が説明された。続いて、慶應義塾大学大学院健康マネジメント研究科の渡辺美智子教授の司会で、アクティブ・ラーニングの取り組みに関する3件の話題提供が行われた。それぞれの講演者と題目は以下の通りである。

1. 「体験と主体的参加を特徴とする統計活用教育」村上征勝教授（同志社大学文化情報学部）
2. 「産学連携によるデータサイエンス初年次教育」森川富昭准教授（慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科）

3. 「ゲーム感覚を取り入れた統計教育の動機付けへの試み」竹内光悦准教授（実践女子大学人間社会学部）

いずれの講演も興味深く、アクティブ・ラーニングの実践と問題点に関して、統計学教育に限定されない有益な示唆を含んでいた。村上教授からは、同志社大学文化情報学部が、アクティブ・ラーニングの実践がアドミッションポリシーの実現のための根幹をなすようなカリキュラムを整備している稀有な学部であることが紹介された。アクティブ・ラーニングへの取り組みとしてはひとつの理想形といえるが、一方で、このカリキュラムによる10年間の取り組みの中では、さまざまな問題点が認識されてきており、特に、成績評価の基準に関する問題は難しく、教員側の負担は相当大きいものであると感じた。森川准教授からは、慶應義塾大学 SFC に2013年に設立された、データビジネス創造・ラボの紹介が行われた。このラボが主催するデータビジネス創造コンテストは、高校生、大学生、大学院生がチームを組んで参加するものであり、学生が主体的に課題を設定し、研究に取り組むという意味で、アクティブ・ラーニングの実践に共通する側面が多いと思われる。竹内准教授からは、実践女子大学における統計学の講義で導入した「レゴロゴ」実習について紹介が行われた。前述のふたつの報告が、「学部をあげての取り組み」「目的意識のある学生を対象とした取り組み」だったことに比較すれば、この報告における実践女子大の事例は、本学の講義においてアクティブ・ラーニングを実践する際に最も近い状況と考えられる。教員が題材を選ぶ際に慎重さが求められる点など、多くの参考になる点があった。

以上3件の事例研究の後、中西寛子成蹊大学名誉教授を司会として、簡単な質疑応答が行われたあと、閉会となった。短時間の集会ではあったが、アクティブ・ラーニングの実践に関する実際の取り組みと、数々の問題点を知ることができ、有意義な研修であった。

第3章 学生による授業評価

3.1 博士前期課程の授業評価アンケートの分析結果

理工学研究科では、平成26年度も前年度と同様に授業評価アンケートを実施した。大学院の授業に対する学生の意見を適切に抽出するために授業アンケートの設問項目と内容は前年度と同様とした。

3.1.1 工学系専攻の授業評価アンケートの結果報告（中里 勉）

理工学研究科で実施されたアンケートの結果を表3.1.1に示す。大学院講義に対しての学生の満足度は総じて高く、項目②を除き、ほぼすべての項目で評価が4.0程度ないしはそれ以上が得られている。項目②は「予習と復習は毎週どれくらいしましたか。(レポート作成時間も含まれます)」であり、理工学研究科(工学系)は3.0程度、つまり1~2時間というのが学生の平均の回答である。

平成21年度から平成26年度までのアンケート結果を比較したものを図3.1.1に示す。平成26年度は総じて前年度より若干落ち込みを見せているものの、項目②を除きいずれも4.0付近を推移している。項目②の評価のみが低くなるのは毎年確認されており、修士論文の研究活動時間が大きく影響している可能性が高い。しかし、平成21年度と平成25年度を比較すると、項目②の評価の向上が項目③以降の評価を底上げしている傾向が見てとれる。学生の理解度を確実なものとするには、授業時間外学習をもっと積極的に取り入れていくことが推奨される。

表 3.1.1 理工学研究科授業評価アンケートの結果(平成26年度)

平成26年度前期											
項目	①出席	②予習と復習	③シラバス	④理解度	⑤研究に	⑥仕事に	⑦教養に	⑧教科書・教材	⑨レポート	⑩板書等の明瞭さ	⑪教員の熱意
機械工学専攻	4.54	3.5	4.19	4.07	4.12	4.26	4.36	4.11	4.09	4.07	4.38
電気電子工学専攻	4.15	3.13	3.96	3.71	3.83	3.98	4.05	3.96	3.95	3.92	4.12
建築学専攻	4.36	3.24	4.15	3.95	4.05	4.44	4.39	4.21	4.22	4.09	4.34
化学生命化学工学専攻	4.25	2.75	4.15	3.96	3.93	4.22	4.28	4.08	4.18	4.11	4.28
海洋土木工学専攻	4.58	3	4.24	4.06	4.15	4.31	4.33	4.2	4.24	4.28	4.41
情報生体システム工学専攻	4.46	2.87	4.09	3.91	3.99	4.17	4.22	4.04	4.1	4.17	4.35
数理情報科学専攻	4.36	3.36	4.26	4.11	4.3	4.36	4.51	4.32	4.3	4.32	4.51
物理・宇宙専攻	3.88	2.21	4.06	3.61	4.06	4.06	4.15	3.88	3.67	3.97	4.15
生命化学専攻	4.3	3.14	3.91	4.04	4.44	4.48	4.5	4.04	3.81	4.07	4.46
地球環境科学専攻	4.02	2.98	4.09	4	4.05	4.13	4.4	4.15	4.16	4.2	4.29
理工学研究科(工学系)平均値	4.39	3.08	4.13	3.94	4.01	4.23	4.27	4.10	4.13	4.11	4.31
理工学研究科(理学系)平均値	4.14	2.92	4.08	3.94	4.21	4.26	4.39	4.10	3.99	4.14	4.35
理工学研究科平均値	4.29	3.02	4.11	3.94	4.09	4.24	4.32	4.10	4.07	4.12	4.33
平成26年度後期											
項目	①出席	②予習と復習	③シラバス	④理解度	⑤研究に	⑥仕事に	⑦教養に	⑧教科書・教材	⑨レポート	⑩板書等の明瞭さ	⑪教員の熱意
機械工学専攻	4.34	3.42	4.32	4.14	4.34	4.41	4.54	4.28	4.11	4.25	4.57
電気電子工学専攻	4.17	3.07	4.02	3.82	4.06	4.17	4.21	4.18	3.92	4.11	4.29
建築学専攻	3.79	3.16	3.91	4.02	4.16	4.47	4.53	4.16	4.07	4.19	4.28
化学生命化学工学専攻	3.99	2.65	4.32	4.21	4.29	4.38	4.53	4.39	4.27	4.48	4.54
海洋土木工学専攻	4.16	2.95	4.54	4.51	4.51	4.58	4.60	4.54	4.52	4.54	4.60
情報生体システム工学専攻	4.00	2.75	4.25	4.00	3.75	4.00	4.00	3.25	3.50	3.75	4.00
数理情報科学専攻	4.12	2.25	4.06	4.00	4.44	4.25	4.44	3.62	4.12	4.44	4.38
物理・宇宙専攻	3.97	3.21	4.24	4.00	4.41	4.41	4.55	4.31	4.14	4.31	4.21
生命化学専攻	4.59	3.52	4.05	4.21	4.45	4.41	4.70	4.12	3.86	4.07	4.34
地球環境科学専攻	3.43	2.36	4.57	3.71	4.29	4.36	4.64	4.71	4.14	4.71	4.93
理工学研究科(工学系)平均値	4.08	3.00	4.23	4.12	4.19	4.34	4.40	4.13	4.07	4.22	4.38
理工学研究科(理学系)平均値	4.03	2.84	4.23	3.98	4.40	4.36	4.58	4.19	4.07	4.38	4.47
理工学研究科平均値	4.06	2.93	4.23	4.06	4.27	4.34	4.47	4.16	4.07	4.29	4.41

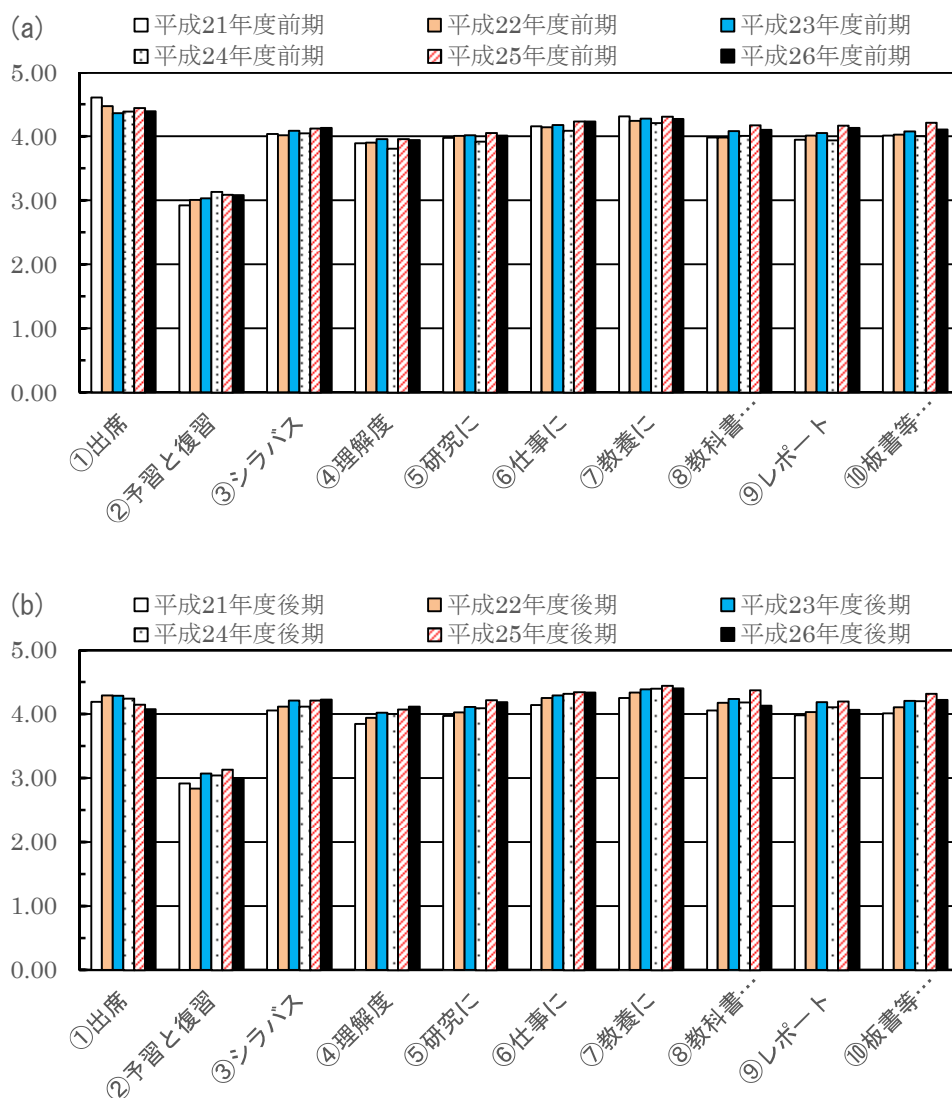


図 3.1.1 博士前期課程（工学系専攻）授業評価アンケート結果の推移（上，前期；下，後期）

3.1.2 理学系専攻の授業評価アンケートの結果報告（小林 哲夫）

表 3.1.1 と図 3.1.2 の授業アンケート評価点平均値（理学系）をみると、前期開講の授業については「予習と復習」の項目を除き、4 前後の高い評価となっている。また、「予習と復習」を含めすべての項目の数値は、6 年間をとおしてみると上昇傾向にあるといえる。各教員の努力によって授業が改善されていることが読み取れる。評価点の平均値が 4 前後ということは、全般的に高い評価に到達しているものとみなすことができる。

後期開講の授業についても、「予習と復習」の項目を除き、4 を超える評価点になっている。前期と同様に 6 年間をとおしてみると、全体的に評価点が増加傾向にある。前期と後期を比較すると、「出席」はやや減少傾向にあるが、全般的に上昇している。担当教員の授業改善の努力が受講生による評価に反映されているのであろう。

「予習と復習」の評価点は、前期・後期ともに他の項目と比べて一段階低いが、これは従来の

報告書でも指摘されているように、授業内容が予習復習をあまり必要としない形式を採用しているためと判断される。現状でも大きな支障がでておらず、早急な改善策の必要性は低いと思われる。



図 3.1.2 博士前期課程（理学系）授業評価アンケート結果の推移（上，前期；下，後期）

3.2 博士前期課程の授業評価アンケートの分析結果

3.2.1 機械工学専攻（上谷 俊平）

機械工学専攻の講義科目に対して実施された授業評価アンケートの結果を図 3.2.1 に示す。この結果は、主なアンケート項目の評価点について1年間に開講された科目で平均した点の過去10年間における推移を示している。

平成19年度後期から理工学研究科FD委員会として新規にアンケートの実施を始めたことによるアンケート項目の変更があった。また、平成21年度にはアンケート項目の簡素化と精査が行われた。過去のアンケート項目のうち変更のあった項目については、内容が同じと見なせる項目に対応させている。以下では、アンケート項目の変更による影響はないものとして考察する。

図より、この10年間を通して右方上がりではあるが、平成23年度からほぼ横ばいの傾向を示していることがわかる。平成26年度は前年度に比べ評点がわずかに低くなっているが高い水準を維持していることから、教員による授業改善への成果が現れていると考えられる。

項目②の「予習と復習」について見ると、年々増加してきたが、平成22年度からはほぼ横ばいとなっている。教員が課すレポート等による授業の予習・復習の方式が定着してきたといえる。

項目③の「シラバス」、項目④の「理解度」、項目⑤の「研究に（役立つ）」については、平成19年度～平成20年度でやや下降しているが、それ以降は上昇して高い点を維持している。教員が授業改善に意識して取り組んでいる結果であろう。

項目⑥の「仕事に（役立つ）」と項目⑦の「学力に（役立つ）」については、役立つと考えている学生が多い。項目⑪の「教員の熱意」についても高い点を維持している。

今後も継続的な授業評価アンケートの実施と分析により、教員と学生の意識改善に役立てていくことが重要である。

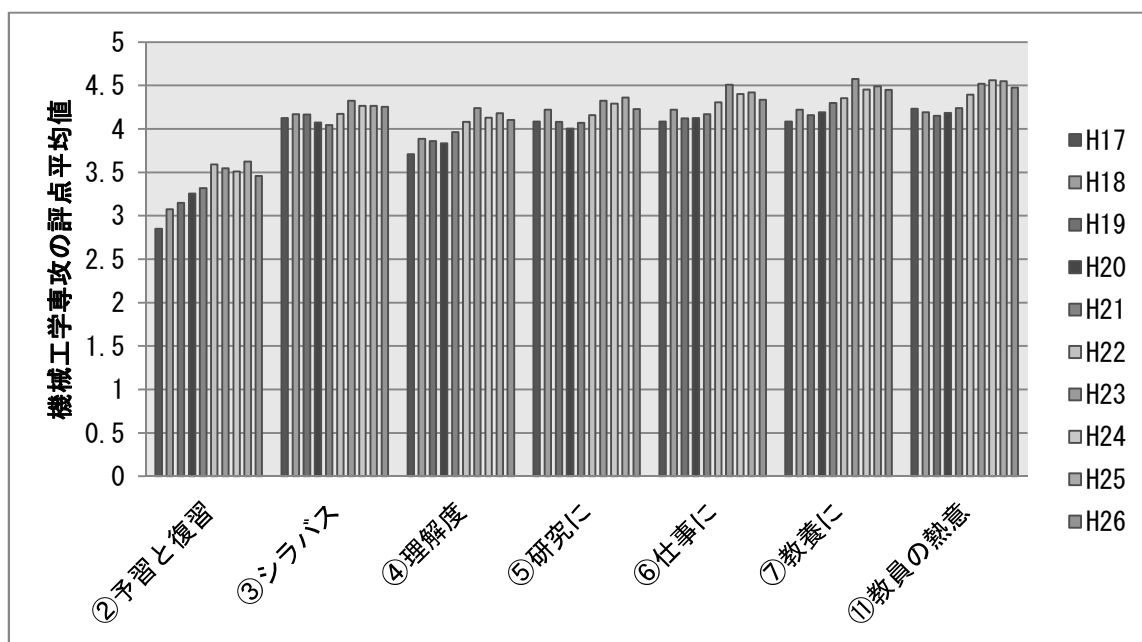


図 3.2.1 機械工学専攻の授業評価アンケート結果の推移

3.2.2 電気電子工学専攻（八野 知博，川越 明史，寺井 慶和）

図 3.2.2(1)，(2)に，電気電子工学専攻の過去 5 年分（平成 22 年度から 26 年度）の授業評価アンケート結果の推移を示す。ほぼ同じ講義科目で比較できるように，項目毎専攻平均点の推移を，前期については図 3.2.2(1)に，後期については図 3.2.2(2)に示している。本年度は前後期ともにほとんどの項目で平成 25 年度より評点が低下し，平成 24 年度までの平均的な水準とほぼ同じ評点となった。過去 5 年間では平成 25 年度の評点が全体的に突出しており，本年度は元の平均的な評点に戻ったと言える。本年度後期の「設問 2：予復習」および「設問 9：レポート等」の評点の平成 25 年度からの低下幅が大きいことが，やや危惧される点である。これらの項目を含め，評点の現状維持または向上が実現できるか，来年度以降も傾向を注視していく必要があると考えられる。以前から本専攻では担当教員の演習問題やレポート，発表方法等の改善に向けた継続的な努力により授業改善に努めてきているが，さらに講義形式の工夫，オフィスアワーの充実，演習課題・レポートの質と量の改善，予復習などの時間外学習を充実させるための工夫などを継続していくことが重要であると考えられる。

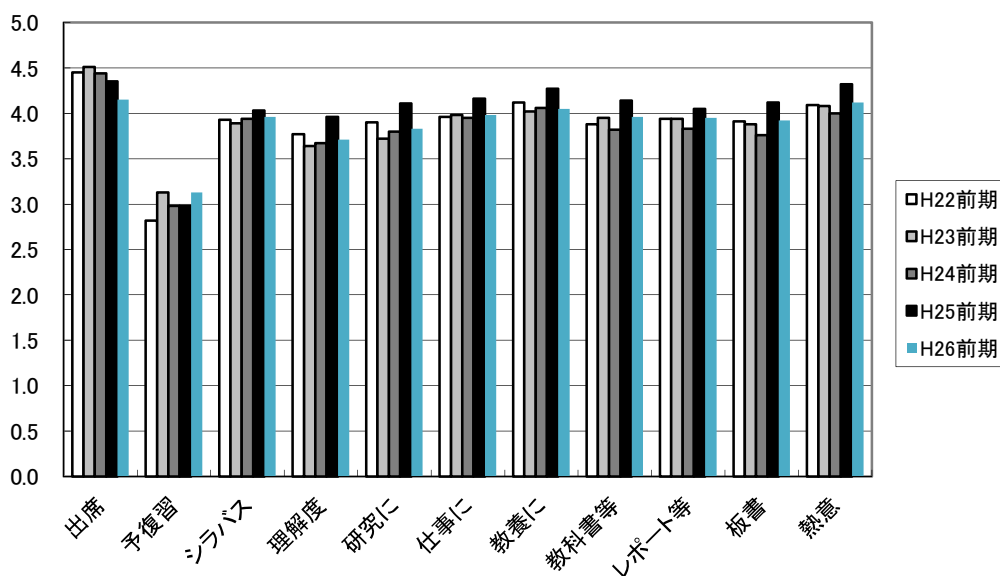


図 3.2.2(1) 電気電子工学専攻の授業評価アンケート結果の推移（前期）

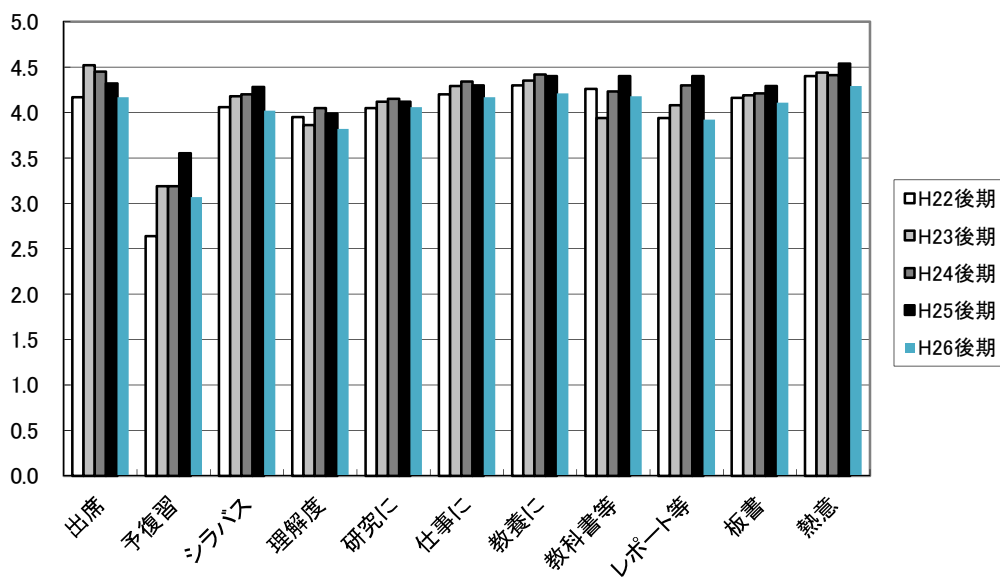


図 3. 2. 2(2) 電気電子工学専攻の授業評価アンケート結果の推移（後期）

3.2.3 建築学専攻（黒川 善幸）

建築学専攻の平成25年度の授業アンケートについて、設問項目の平均を図4に示す。評点が高いのは、項目1の「出席」、項目6の「仕事に」、項目7の「教養に」、項目15の「教員の熱意」である。これは、コースワーク制度の充実と教員の授業に対する準備が整ってきたことによる効果と考えられる。これに対し項目4「理解度」が相対的に低い。専門分野に即した高度なレベルの授業内容を理解することが困難となっていることが考えられる。また項目5の「研究に」もやや低い傾向にある。項目2の「予習と復習」は、相対的に低く、次年度以降の改善が望まれる。

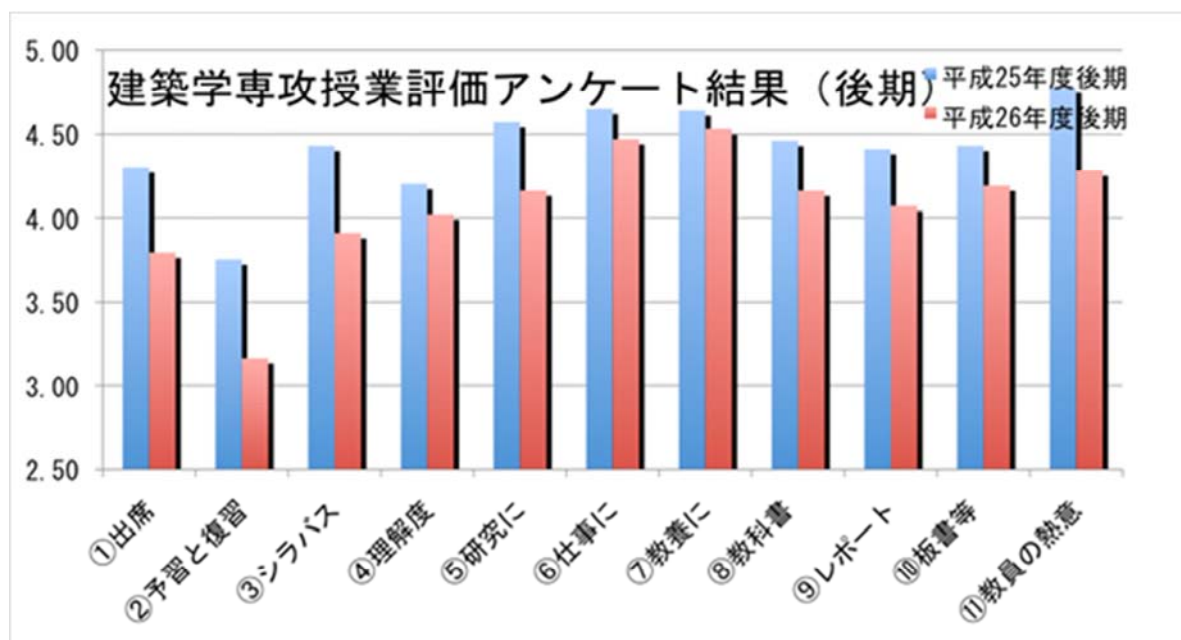
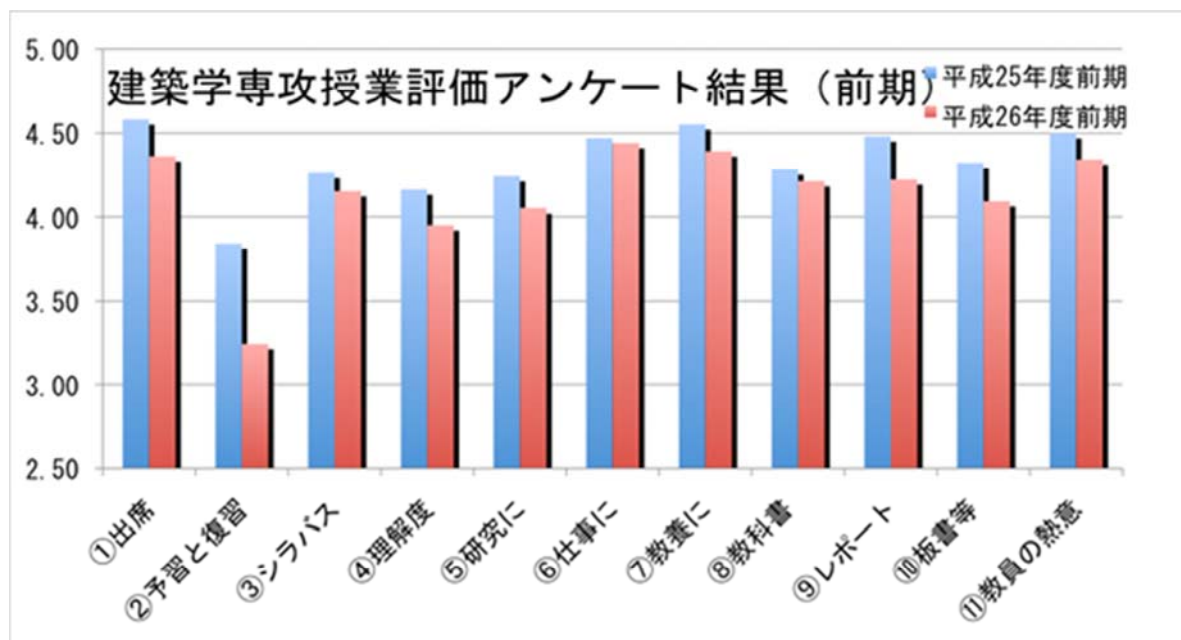


図4 建築学専攻の26年度の講義科目の授業アンケートの結果

3.2.4 化学生命・化学工学専攻（中里 勉）

化学生命・化学工学専攻の最近3年間（平成24～26年度）の授業アンケート結果を図3.2.4に示す。項目②予習と復習の評価が2.5付近と低いのを除き、ほとんどの項目で4.0付近の評価を得ており、総じて高い評価を受けている。項目によってトレンドに差があるものの、大きく変動している項目は見あたらない。

特徴的な傾向として、前期は項目①⑤の評価が3年連続で下がっている一方、項目⑨は若干ではあるが年々高くなっており項目②の評価が昨年度より顕著に改善した。後期は項目③④⑤⑥⑦⑨の評価が増加傾向にあった。項目②の評価は前後期ともに理工学研究科（工学系）6専攻の中で最も低く、平均レベルの3.0には依然として追いついていない。教員側が授業の改善と合わせてもっと積極的に学生に時間外学習を促すよう、働きかけが必要と考えられる。

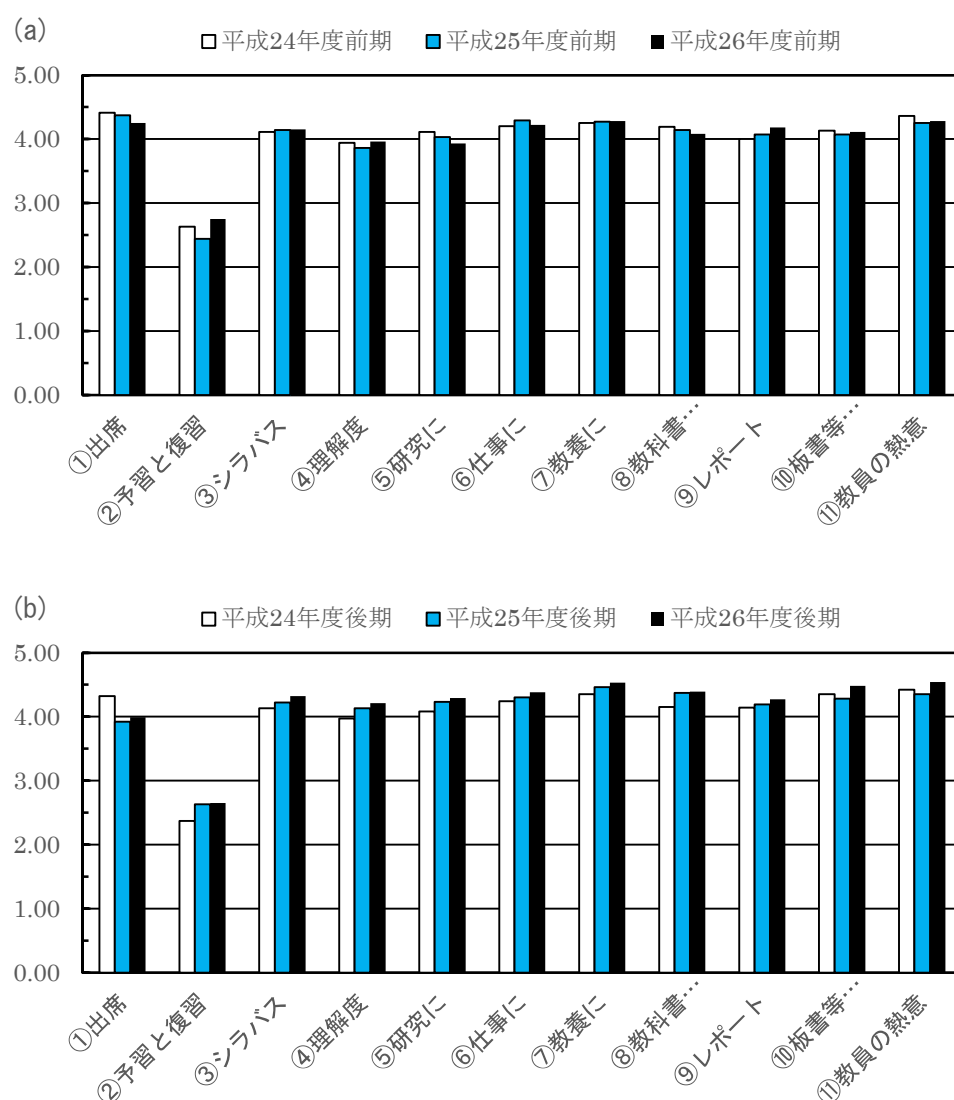


図3.2.4 化学生命・化学工学専攻の最近3年間の授業アンケート結果：(a) 前期、(b) 後期

3.2.5 海洋土木工学専攻（三隅 浩二）

海洋土木工学専攻における過去6年間の授業アンケートの結果を表3.2.5に示す。この結果を見ると、ほぼ全ての項目において4程度ないしはそれ以上の評価が得られており、大学院の講義に対して学生は所定の満足を得ているものと判断される。ただし、設問②「予習と復習は毎週どれくらいしましたか。（レポート作成時間も含まれます）」の評価のみが2.26～3.30となっており、他の設問の評価に比べて極端に低い評価点となっている。平成24年度前期の評価3.3より評点の減少が継続したが、平成26年度には3程度に回復している。何らかの対策を講じて4程度の評価に改善することが必要と思われる。平成26年度の③～⑩の項目は、過去6年間で最高の評価となっている。今後もこの状況を維持することが必要である。

表 3.2.5 海洋土木工学専攻のアンケート結果

	①出席	②予習と復習	③シラバス	④理解度	⑤研究に	⑥仕事に
平成21年度前期	4.61	3.00	3.99	3.78	4.02	4.33
平成21年度後期	4.13	3.00	3.98	3.90	4.13	4.17
平成22年度前期	4.51	2.86	4.05	3.97	4.11	4.29
平成22年度後期	4.35	2.69	4.08	3.94	4.01	4.24
平成23年度前期	3.87	2.69	4.40	4.31	4.38	4.44
平成23年度後期	3.89	2.62	4.30	4.14	4.14	4.19
平成24年度前期	4.19	3.30	4.13	3.81	3.86	4.07
平成24年度後期	4.35	2.80	4.27	4.14	4.18	4.49
平成25年度前期	4.33	2.76	4.07	3.89	3.89	4.11
平成25年度後期	4.33	2.26	3.96	4.00	3.96	4.26
平成26年度前期	4.58	3.00	4.24	4.06	4.15	4.31
平成26年度後期	4.16	2.95	4.54	4.51	4.51	4.58

	⑦教養に	⑧教科書・教材	⑨レポート	⑩板書等の明瞭さ	⑪教員の熱意
平成21年度前期	4.40	4.13	4.05	4.14	4.44
平成21年度後期	4.19	4.06	4.13	4.06	4.40
平成22年度前期	4.38	4.10	4.03	4.20	4.43
平成22年度後期	4.25	4.31	4.20	4.18	4.39
平成23年度前期	4.44	4.31	4.09	4.33	4.60
平成23年度後期	4.35	4.32	4.30	4.32	4.68
平成24年度前期	4.20	4.00	3.95	4.11	4.43
平成24年度後期	4.53	4.45	4.31	4.37	4.65
平成25年度前期	4.15	4.06	3.96	4.19	4.39
平成25年度後期	4.41	4.52	4.00	4.44	4.56

3.2.6 情報生体システム工学専攻（塗木 淳夫）

平成 21 年度に改組が行われ、情報工学専攻と生体工学専攻生体電子工学講座が統合して情報生体システム工学専攻が立ち上がり、6 年が経過した。情報生体システム工学専攻の FD 授業評価アンケートは平成 21 年度から 26 年度分の 6 年間のデータが収集されていることになる。ここではその 6 年間の経年変化を見ることにする。今年度の FD 活動報告書では、情報生体システム工学専攻のデータと平成 26 年度の工学系専攻の平均値及び平成 26 年度の理工学研究科全専攻の平均値と比較することによって評価と論評を加えたい。

平成 21 年度から質問内容に若干の修正が施されているが、比較対象となった項目は、

- ①出席
- ②予習と復習
- ③シラバス
- ④理解度
- ⑤研究に役に立つか
- ⑥仕事に役に立つか
- ⑦教養になるか
- ⑧教科書・教材は適切か
- ⑨レポート
- ⑩板書等の明瞭さ
- ⑪教員の熱意

の 11 項目である。

情報生体システム工学専攻の集計結果を前期および後期に分け、図 3.2.6(a)及び図 3.2.6(b)に示す。

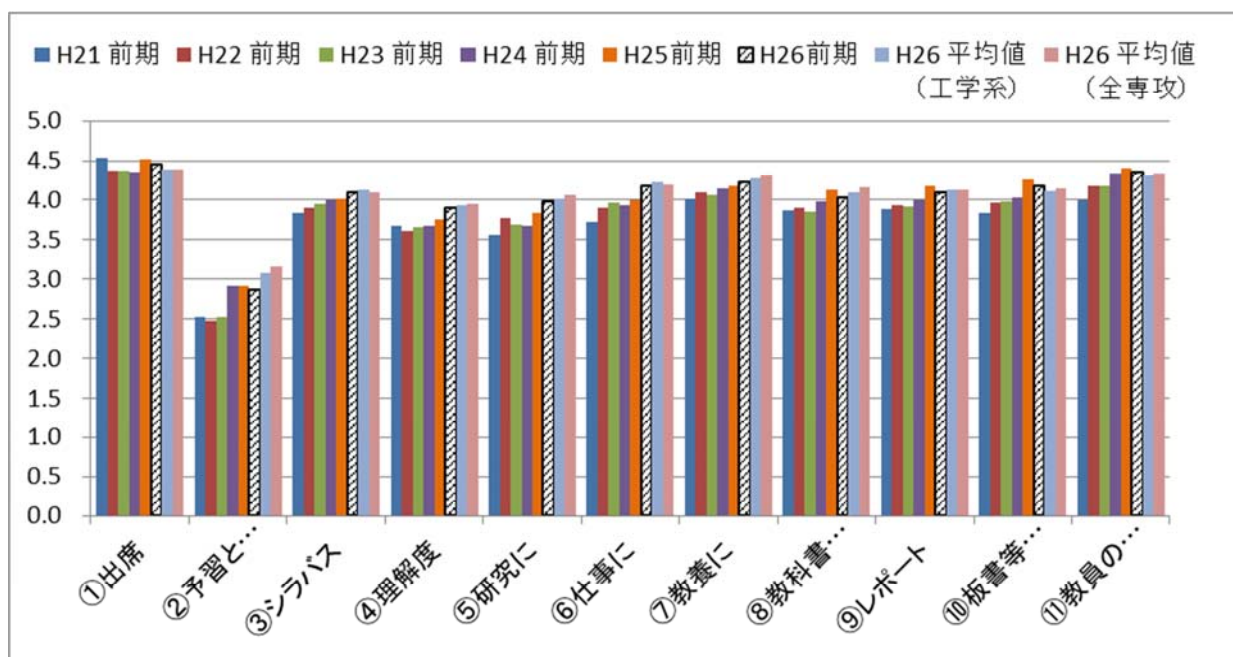


図 3.2.6(a) 情報生体システム工学専攻の授業評価アンケート結果の推移
(平成 21～26 年度 前期)

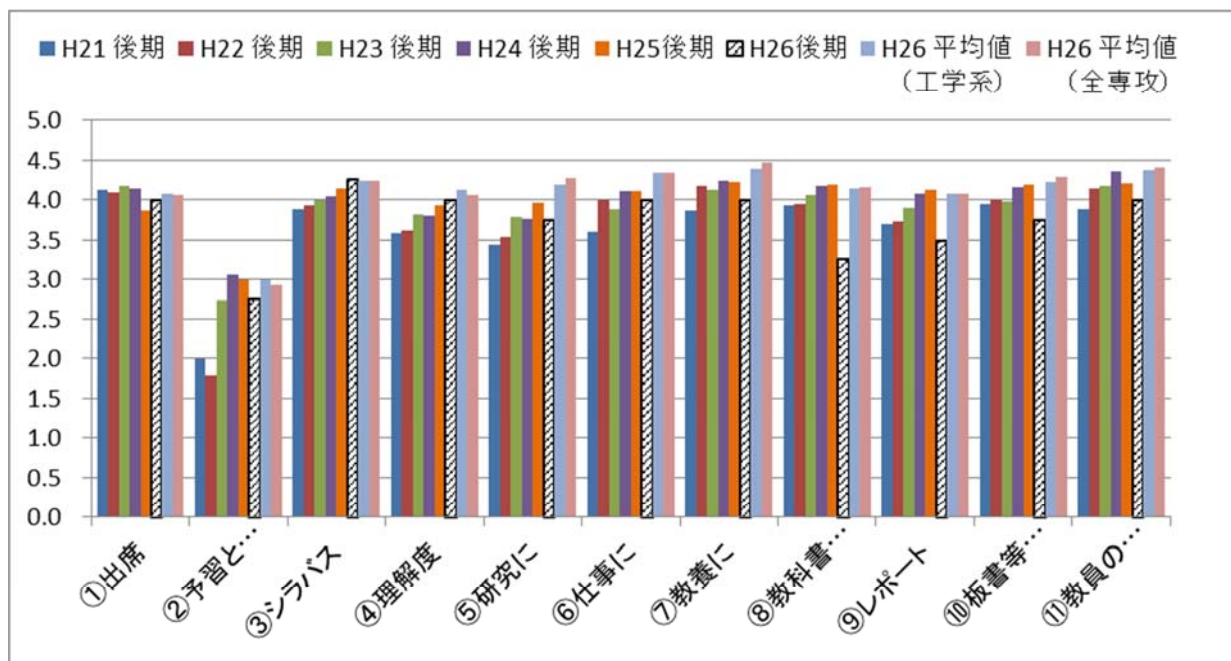


図 3.2.6(b) 情報生体システム工学専攻の授業評価アンケート結果の推移
(平成 21～26 年度 後期)

情報生体システム工学専攻の平成 26 年度の評価は、前期は 224 枚の平均値であり、後期は 186 枚の平均値である。また、集計した科目数は、それぞれ前期 10 科目、後期 11 科目であった。

各項目の最高点は 5.0 で、5 年間の推移を見ると、ほとんどの項目で右肩上がりの傾向となっているが、6 年目後期の「⑧教科書・教材は適切か」「⑨レポート」「⑩板書等の明瞭さ」「⑪教員の熱意」の項目が著しく下がっている。また、平成 26 年度後期の 8 つの項目の評価が前年の評価より下がっており、その中で「⑧教科書・教材は適切か」「⑨レポート」「⑩板書等の明瞭さ」の 3 つの項目は、それぞれ、0.93、0.62、0.44 下がっている。後期の開講科目の担当者に周知し、改善する努力しなければならない。各項目の評価は、「②予習と復習」と「⑧教科書・教材は適切か」以外の項目では、前期・後期とも 3.5 以上で、4.0 に達しているかその近傍である。

平成 26 年度後期の「①出席」の項目の評価は、4.0 であり、前年より 0.13 評価が上がった。全専攻の平均値でも前期の評価より低い、専攻の評価は全専攻の平均と比べても明らかに低くなっている。後期の出席には、就職活動による影響が考えられるが今後の推移を見守る必要がある。

平成 26 年度後期の「⑪教員の熱意」の評価は 4.00 であり、前期の評価 4.35 と比べて低い評価となったが、4.0 を超えており問題はないと考えられる。

「②予習と復習」の項目は、昨年度の評価とあまり変わりがなく 3.0 に達していない。また、「④理解度」、「⑤研究に役に立つか」、「⑥仕事に役立つか」の 3 項目は、専攻の平均値と比べて、評価が低くなっている。これらの点は、次年度以降、改善すべき課題である。

3.2.7 数理情報科学専攻（青木 敏）

数理情報科学専攻では、受講者がきわめて少数の講義を除くすべての講義で、授業評価アンケートを実施した。講義の担当教員は、授業評価アンケートに基づいて授業計画改善書を作成し提出した。授業評価アンケートの各項目の平均値を表 3.2.7 に示す。

表 3.2.7 授業アンケート結果

項目	平成 26 年度前期の平均値			平成 26 年度後期の平均値		
	数理情報	理系全体	研究科全体	数理情報	理系全体	研究科全体
①出席	4.36	4.14	4.29	4.12	4.03	4.03
②予習と復習	3.36	2.92	3.02	2.25	2.84	2.88
③シラバス	4.26	4.08	4.11	4.06	4.23	4.22
④理解度	4.11	3.94	3.94	4.00	3.98	4.05
⑤研究に	4.30	4.21	4.09	4.44	4.40	4.26
⑥仕事に	4.36	4.26	4.24	4.25	4.36	4.34
⑦教養に	4.51	4.39	4.32	4.44	4.58	4.47
⑧教科書・教材	4.32	4.10	4.10	3.62	4.19	4.14
⑨レポート	4.30	3.99	4.07	4.12	4.07	4.06
⑩板書等の明瞭さ	4.32	4.14	4.12	4.44	4.38	4.29
⑪教員の熱意	4.51	4.35	4.33	4.38	4.47	4.40

理学系全体、研究科全体と比較した専攻の評点に注目すると、まず、前期はどの項目も専攻評点が理系・研究科平均を上回っている。特に評価の高い項目は、「②予習と復習」「⑦教養に」「⑪教員の熱意」であり、これは昨年度と同様の傾向である。中でも、「⑪教員の熱意」の評点が際立って高く、前期の講義担当の教員が、特に力を入れて授業改善を行った項目であるといえる。一方で後期に関しては、多くの項目で専攻評点が理学系、研究科の全体平均を下回っている中、「①出席」の評点が高い。この項目の過去 5 年間の平均値は、一昨年度までは研究科全体平均と同じかそれよりやや低い程度であったのが、昨年度、大幅な改善が見られており、今年度も改善が継続していることが分かる。前期の「⑪教員の熱意」の平均値を図 3.2.7(1)に、後期の「①出席」の平均値を図 3.2.7(2) に示す。

今後も継続して授業評価アンケートを行い、その結果を分析することにより、教員が授業改善を効率的に行い、全ての項目で改善が見られるよう、努力していくことが重要である。

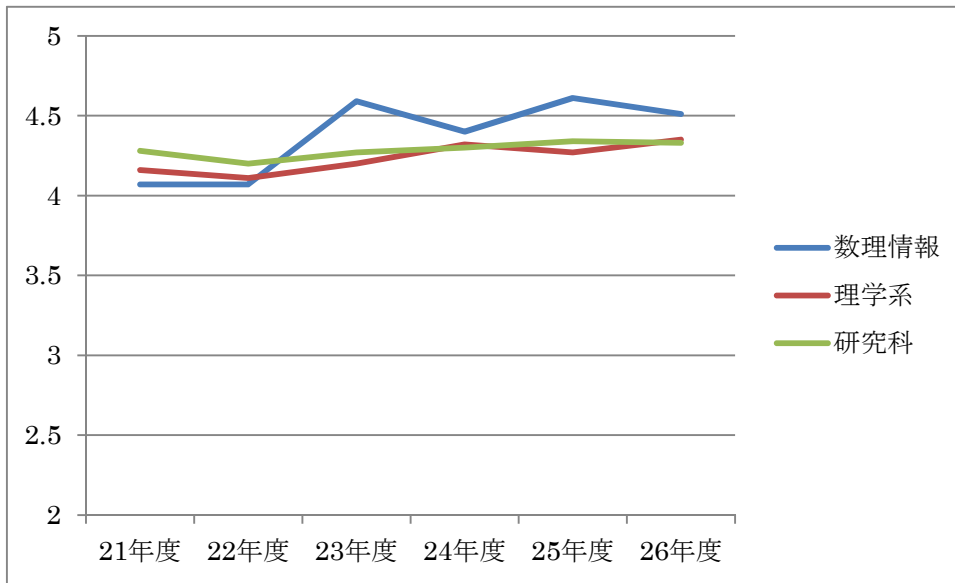


図 3.2.7(1) 「①教員の熱意」の平均値（前期）

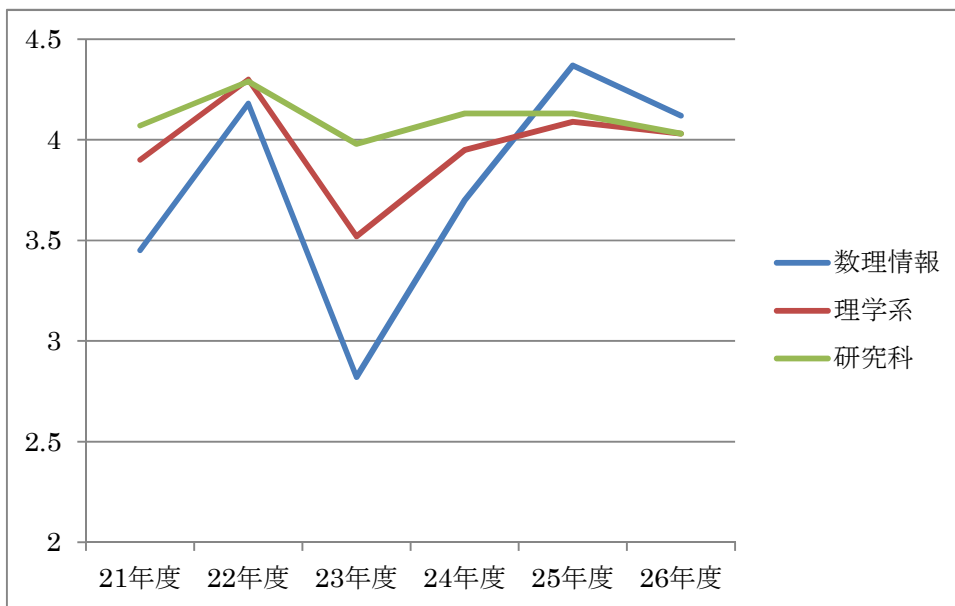


図 3.2.7(2) 「①出席」の平均値（後期）

3.2.8 物理・宇宙専攻（和田 桂一）

図 3.2.8 は、本専攻における授業アンケート各項目の平均点の平成 22 年度からの年次推移である。前期と後期科目でそれぞれ平均を取っている。出席がやや低下傾向にあるのと、シラバスや板書がやや改善されていることが伺える他は、各項目とも過去 5 年間目立った変動はない。予習、復習の項目が低いのは学部の授業評価でも同様である。

しかしながら、本専攻の大学院の授業は学部とは異なり、ゼミ形式など比較的少人数で教員や学生相互間のやりとりが重要となる形式である。そういう事情を考慮すると、このような学部や共通教育と同様の形式のアンケートにどれだけ意味があるか疑問である。少人数ゆえに学生にとってみればアンケートに正直に書きにくい事情もあるだろうし、また、逆に直接教員に要望を伝えることも可能である。各項目ともほとんど、評価が 4 前後で、年度ごとにほとんど変わらないのは、本専攻だけに限らずどの専攻でも同様である。学生によるこれまでの授業評価の形式について見直す時期に来ているのではないだろうか。

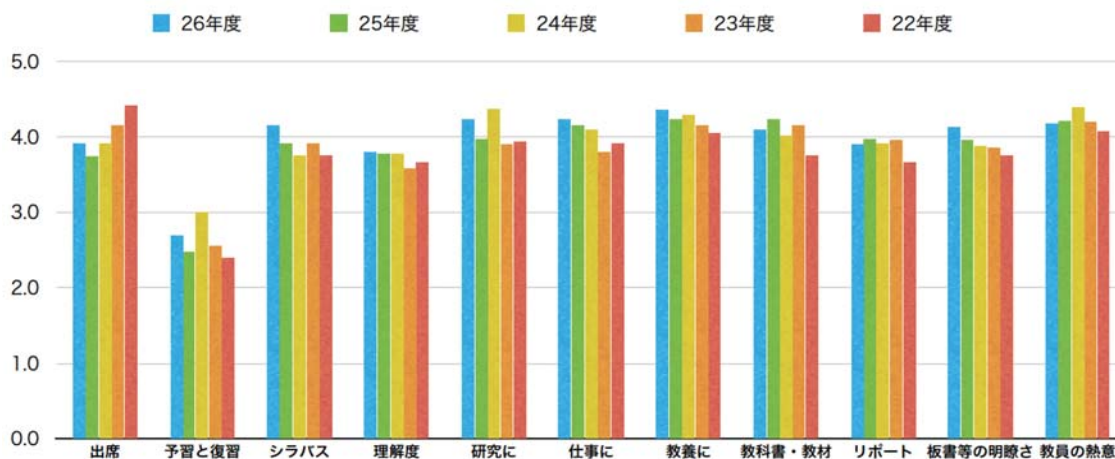


図 3.2.8 22 年度～26 年度のアンケート結果の平均値

3.2.9 生命化学専攻（横川 由起子）

生命化学専攻では、例年通り、前後期に授業アンケートを実施した。各講義の評価値を平均した値の、アンケート項目別の推移をグラフで示す。図 3.2.9(A)は前期の講義の平均値の推移、図 3.2.9(B)は後期の講義の平均値の推移である。

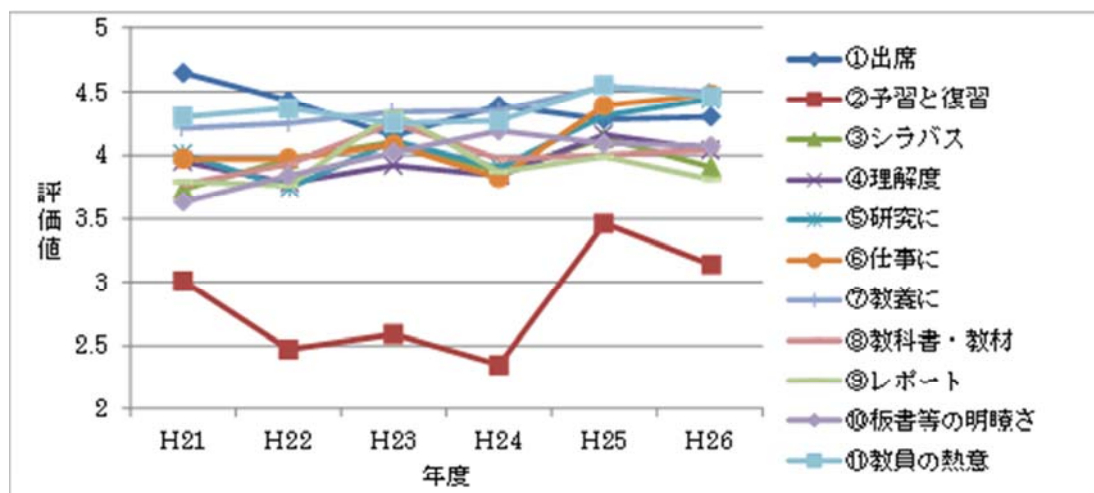


図 3.2.9 (A) 生命化学専攻の評価値の推移（前期）

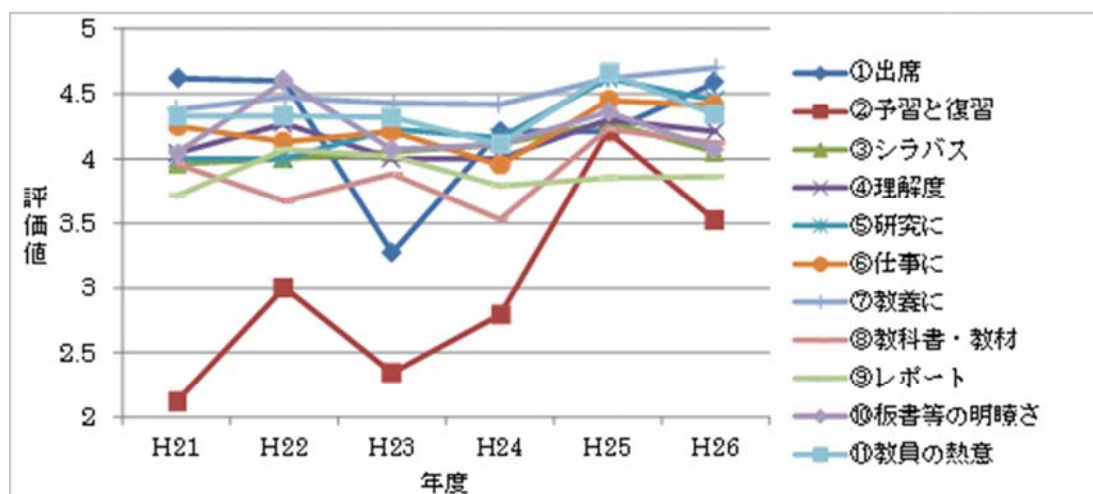


図 3.2.9 (B) 生命化学専攻の評価値の推移（後期）

前後期とも多くの項目で、評価値は 4 前後で推移しており、良好であると言える。年度ごとのばらつきは、若干後期の方が大きい。学生はなるべく前期で単位を取得したいという考えから前期に多くの講義を受講する。そのため、後期に受講者数が少なく、平均値が年度によってばらついてくるのではないかとと思われる。

前後期とも「②予習と復習」の評価値が低くなっており、改善すべき点である（前期は図 3.2.9 (C)、後期は図 3.2.9 (D) を参照）。他の項目は評価値 3.5～4.5 であるが、「②予習と復習」の評価値のみ 2.5～3.5 になっている。学部学生だけでなく、博士前期課程の学生でも予習復習を促す手段を講じる必要がある。「②予習と復習」の評価値が低いことは、生命化学専攻だけでなく、理学系や理工学研究科の評価値も同様である。後期の講義では「②予習と復習」の評価値が上昇傾向にあるが、さらに自学自習を行うような指導が求められる。

博士前期課程では研究に関連した講義を受講するため、「⑤研究に」の項目の評価値は高い。加えて「⑤研究に」の項目だけでなく、「⑥仕事に」や「⑦教養に」の項目の評価値も高い。修士論文に直接関連した講義だけでなく、幅広い分野で学力を身に付けようという傾向がうかがえる。教員は、受講生の専門分野ではない講義でも、わかりやすく、興味をもてるような講義を行っているかと推察できる。

ほとんどのアンケートは、自由記入欄が空欄である。大学院の講義は受講生が少ないので、受講生もなかなか書きづらいこともあると思うが、受講する立場からの意見も積極的に記入してほしい。受講生の意見、感想も、授業改善に大いに役立つと思われる。

今後も継続的な調査を行い、講義内容の充実の一助になることを期待する。

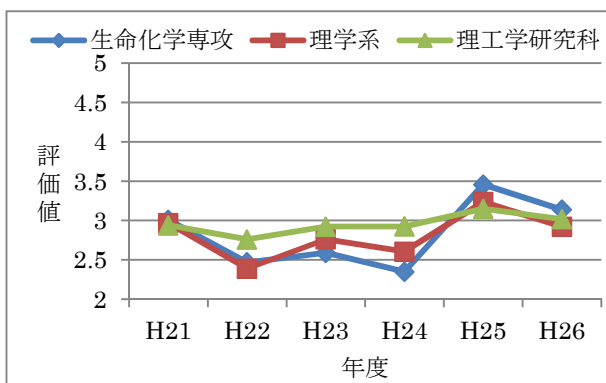


図 3.2.9 (C) 「②予習と復習 (前期)」の評価値の推移

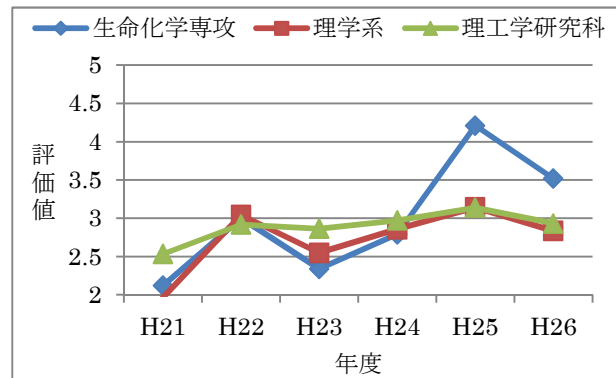
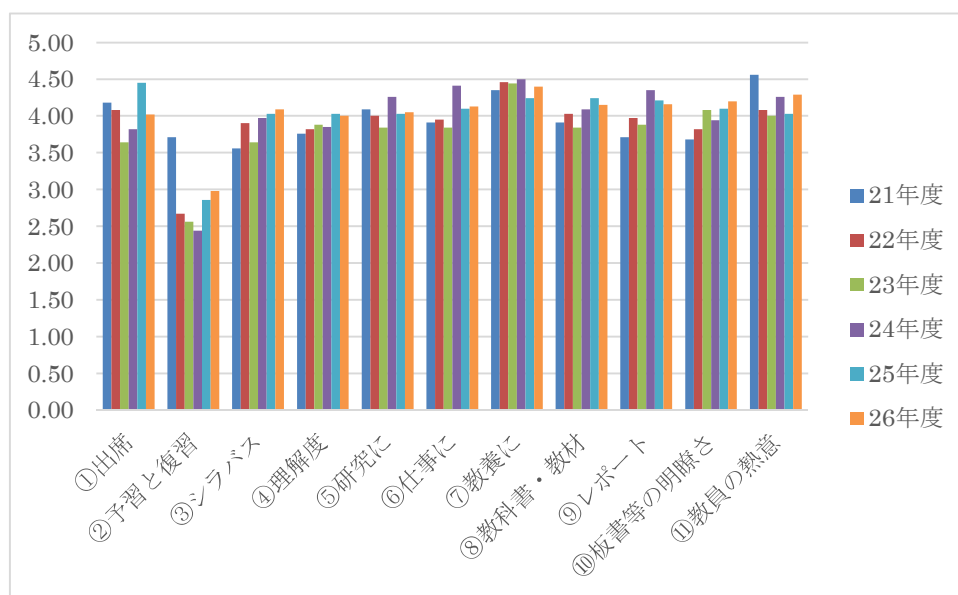


図 3.2.9 (D) 「②予習と復習 (後期)」の評価値の推移

3.2.10 地球環境科学専攻（小林 哲夫）

平成21年度～平成26年度の前期・後期のアンケート結果を、図3.2.10に示す。まず前期の評価の特徴は、「②予習と復習」以外の各項目は4.0以上であり、全般的によい結果となっている。シラバスの利用も確実に増えている。「④理解度」、「⑤研究に」、「⑥仕事に」は専門の理解度と類似するのは理解できるが、「⑦教養に」がさらに高い評価ということは、受講生の分野が違ってもある程度は理解でき興味の湧く授業に心がけている結果と考えられる。修士論文を書き上げるために地球環境科学専攻では野外での観察や観測、室内での実験が必要であるが、調査や観察に適した季節があるなど自然現象による制約や実験機器の使用のスケジュールなどの条件が学生自身によるものでなく、外的に決まる。そのため、予習復習の時間的負担に対して配慮がなされている可能性がある。

後期のアンケート結果では、項目間の傾向は前期同様「②予習と復習」を除くと各項目ともよい結果となっている。26年度の「②予習と復習」の時間が前期よりも少なくなっているが、入学して半年がたち、修士論文のための観測・実験にさらに時間を割く必要が生じるためと考えられる。その他の項目は年度を追うごとに点数が上昇しており、授業改善の努力が反映された結果と考えられる。このことは、前期同様授業の内容評価に関係する項目「⑤研究に」、「⑥仕事に」、「⑦教養に」の点数が高いことから、授業の内容を充実させるとともに修士論文を作成するための観察・実験・観測に配慮した授業が行われていることが伺える。



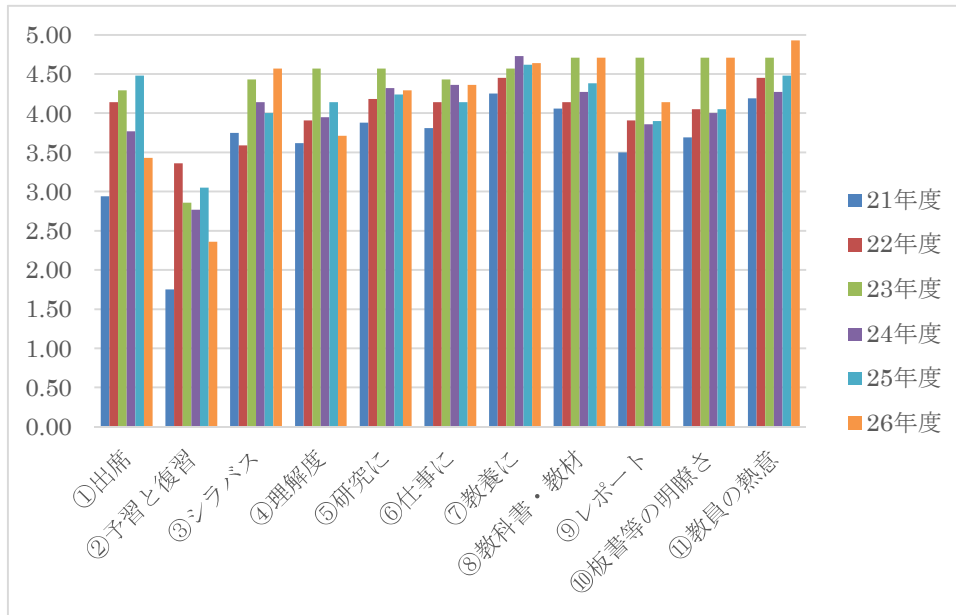


図 3.2.10 地球環境科学専攻の授業評価アンケート結果の推移
(上, 前期; 下, 後期)

3.3 授業計画改善書の活用

(1) 機械工学専攻

学部（学科）と同様に、専攻のFD委員が収集した授業計画改善書は、授業評価アンケートの評価点や科目GPAとともに専攻教育評価委員会が整理して分析を行っている。専攻教育評価委員会は、整理した内容と分析した結果を「専攻教育評価委員会報告書」としてまとめている。この報告書は冊子とCD-ROMの形で保管され、授業改善を実施する際の資料として利用できるように全教職員に公開されている。

(2) 電気電子工学専攻

授業計画改善書は、各科目の授業評価アンケート評点とそのレーダーチャート、および授業評価アンケート回答用紙（実施済みのもの）と共に学科事務室にて保管され、教員はいつでも閲覧できる。主として理工学研究科FD委員が管理し、専攻FD委員会において授業改善に向けた活用方法等を議論している。

(3) 建築学専攻

授業計画改善書に関して、全科目の評点を学科内で公開して問題点を共有することになっている。建築学専攻ではコースワーク科目など複数教員で担当する科目も多いため、それらの科目では授業アンケートの結果を複数教員で確認し議論した結果を授業改善に結びつけている。

(4) 化学生命・化学工学専攻

各教員は、授業計画改善書の作成により授業内容や進め方に問題がなかったか再確認するとともに、改善に向けた取り組みを継続的に行っている。FD委員は、各教員より提出された授業計画改善書を確認し、保管する。不備がある場合は、FD委員が差し戻しを行い、不備箇所を指摘して再提出させている。問題が発見された場合には、専攻長と協議の上、対応を検討する。

(5) 海洋土木工学専攻

海洋土木工学専攻は、環境システム工学コースと建設システム工学コースという2つのコースに分けられている。コース毎に専門性や取得すべき必修科目が異なっているため、各コースで科目部会（環境システム科目部会と建設システム科目部会）を開催し、担当科目数のバランスや授業改善等について検討を行っている。また、授業アンケートに対して担当教員は授業計画改善書を作成し、本専攻の教育点検を継続的に改善するために活用している。これらの取り組みは、JABEE受審以降継続的に実施されている。

(6) 情報生体システム工学専攻

情報生体システム工学専攻では平成22年度より、授業計画改善書を学科事務室に保管し、

全ての教員が閲覧可能となるように管理している。各教員による授業改善への取組み及び結果を教員全員で共有することで、情報生体システム工学専攻全体の教育内容への継続的な改善を試みる。

(7) 数理情報科学専攻

担当教員は授業アンケートに対して授業計画改善書を作成、提出し、保管は担当教員自身が行っている。特に、授業計画改善書には、昨年、一昨年の評点を記入する欄があり、各教員が授業計画改善書を作成する際に評点の推移を確認することが、継続的かつ効率的な授業改善につながる重要な要素となっている。授業アンケートおよび授業計画改善書を、専攻内の他の教員に公開するような体裁は、今のところとっていない。

(8) 物理・宇宙専攻

授業アンケートを行った教員は、その結果を踏まえた授業計画改善書を作成し、各教員および FD 委員が保管している。しかし他の教員に公開することは今のところ行っていない。また、提出率は高いとは言えない。3.2.8 で触れたように博士前期課程の授業は少人数もしくはゼミ形式が多く、授業中、授業後に教員に直接要望を伝えることが可能であるため、このようなアンケートにもとづいて授業を改善するという学部と同様の方式はあまり適さないと考える

(9) 生命化学専攻

授業アンケートを実施した教員は、アンケート結果をふまえて改善報告書を提出し、今後の講義に役立てている。アンケート結果は各教員が保管しており、現在のところ公開する予定はない。一期 15 回の講義が終了した後は、それで終わりということになりがちである。そのため授業改善報告書の作成は、アンケート結果を見て自分の講義を振り返るよい機会である。受講生には自由記入欄にも忌憚のない意見、感想を書いてもらいたい。調査項目の評価値には反映されないような内容も、授業改善には大いに役立つであろう。

(10) 地球環境科学専攻

授業を担当した教員は授業計画改善書を作成し、大学院係に提出している。そのため各教員とも各自の授業を見直し、授業形態や教材などについて様々な工夫を試みている。このような改善書作成という作業は毎年行われており、継続的に授業の改善が図られていると考えられる。なおアンケートの取りまとめで改善すべき点としては、個々の授業の受講生が少ないために、アンケートの回収ができない科目が少ないことである。そのため学科内全体の傾向を把握するには、やや難しさを感じる。

第4章 学生の研究活動と教育成果（和田桂一、三隅浩二、塗木淳夫）

大学院生の研究発表の支援はFD活動の目的の一つであることから、その実績を把握するために調査を実施した（表4.1）。当該年度における在籍者数を表4.2に、受賞実績について4.3に示す。

表4.1 大学院生の研究成果の発表数

年度	分類		機械	電気	建築	化学	海洋	情報	数理	物理	生命	地環	合計
平成20年度	口頭発表 (含むポスター発表)	国際会議	7	14	0	37	10	4	3	3	9	1	88
		国際会議以外	40	64	69	126	34	28	5	30	45	16	457
	論文	査読あり	21	28	11	46	18	18	2	16	16	3	179
		査読なし	4	16	64	25	24	17	5	2	1	1	159
平成21年度	口頭発表 (含むポスター発表)	国際会議	9	5	1	34	6	1	1	2	16	7	82
		国際会議以外	31	67	46	125	42	32	8	28	35	15	429
	論文	査読あり	29	20	7	54	32	9	4	11	26	3	195
		査読なし	3	16	32	17	21	9	3	8	0	3	112
平成22年度	口頭発表 (含むポスター発表)	国際会議	3	7	2	53	4	2	1	6	27	11	116
		国際会議以外	44	65	38	126	29	46	4	9	41	19	421
	論文	査読あり	19	12	3	39	17	19	1	4	29	2	145
		査読なし	7	30	26	20	2	36	0	6	7	2	136
平成23年度	口頭発表 (含むポスター発表)	国際会議	1	5	1	49	2	6	0	3	8	11	86
		国際会議以外	15	60	38	135	34	35	1	14	26	26	384
	論文	査読あり	4	13	0	25	27	9	1	3	9	8	99
		査読なし	3	18	6	7	9	7	1	6	3	0	60
平成24年度	口頭発表 (含むポスター発表)	国際会議	6	21	2	43	20	3	0	9	15	3	122
		国際会議以外	32	66	46	141	18	28	0	49	52	20	452
	論文	査読あり	10	30	9	36	11	11	0	8	7	4	126
		査読なし	4	38	0	9	5	7	0	10	6	0	79
平成25年度	口頭発表 (含むポスター発表)	国際会議	9	27	2	40	8	15	0	2	10	4	117
		国際会議以外	80	78	32	104	15	50	0	17	34	8	418
	論文	査読あり	15	33	6	24	14	22	0	5	9	3	131
		査読なし	10	28	0	1	4	22	0	3	9	0	77
平成26年度	口頭発表 (含むポスター発表)	国際会議	8	25	2	28	2	12	0	8	7	7	99
		国際会議以外	68	88	24	164	25	56	3	36	32	13	509
	論文	査読あり	21	27	1	24	21	27	0	11	6	3	141
		査読なし	1	10	0	0	2	31	0	0	1	1	46

表4.2 在籍者数（博士前期課程）

専攻名	平成20年度	平成21年度	平成22年度	平成23年度	平成24年度	平成25年度	平成26年度
機械	111	115	109	116	116	99	93
電気	97	98	106	105	104	95	96
建築	42	46	46	52	52	43	46
化学	97	116	132	88	88	84	85
海洋	35	36	39	32	32	26	30
情報	78	80	85	89	89	84	90
数理	24	23	25	24	24	21	20
物理	38	32	30	28	28	32	36
生命	32	37	36	32	32	34	33
地環	42	38	36	30	30	33	31
合計	596	621	644	596	595	551	560

表 4.3 受賞など

受賞者名	学年	受賞賞名等
山本 誠	D3	日本コンクリート工学会九州支部長賞
木村 晃彦	D2	平成26年度土木学会西部支部研究発表会優秀講演賞
山下 勇人	D2	JSMS Kyushu, Young Researcher Award
谷口 康太郎	D1	Best Paper in Session Award, 2015 IEEE/IES International Conference on Mechatronics
宮島 洋文	D1	Certificate of Merit for The 2014 IAENG International Conference on Artificial Intelligence and Applications
精松 賢一	M2	日本金属学会九州支部会ポスター優秀発表賞
石井 拓洋	M2	Outstanding Poster Award(優秀ポスター賞)、Taiwan Japan Bilateral Workshop 2014 (TJBW 2014)(2014.10.12-15 国立成功大学、台南市、台湾)
宮内 駿矢	M2	Best Poster Award(優秀ポスター賞)、The 17th International Symposium on Silicon Chemistry (ISOS XVII BERLIN 2014)(2014.8.3-8 Technische Universität Berlin (ベルリン工科大学)、ベルリン、ドイツ)
徳永 貴大	M2	高分子学会九州支部 優秀ポスター賞、第51回化学関連支部合同九州大会(2014.6.28 北九州国際会議場)
久保 翔平	M2	平成26年度化学工学会九州支部学生賞
田中 啓寛	M2	第25回九州地区若手ケミカルエンジニア討論会ポスター賞
村田 祐馬	M2	化学工学会第46回秋季大会反応工学優秀発表賞
田中 啓寛	M2	第27回化学工学に関する国際シンポジウムBest Paper
畑中 大輔	M2	化学関連支部合同九州大会ポスター賞
酒井 美奈	M2	土木学会西部支部研究発表会 優秀講演賞
小倉 隆伸	M2	日本コンクリート工学会九州支部長賞
田畑 亮	M2	日本熱処理技術協会研究発表奨励賞(最優秀賞)
奥津 智恵	M2	日本鉄鋼協会第169回春季講演大会学生PS優秀賞
遠山 達也	M2	T. J. Tarn Best Paper in Robotics Award, 2014 IEEE International Conference on Robotics and Biomimetics
遠山 達也	M2	T. J. Tarn Best Paper in Robotics Finalist, 2014 IEEE International Conference on Robotics and Biomimetics
西村 太志	M2	精密工学会九州支部鹿児島地方講演会ベストプレゼンテーション賞
田中 奈津希	M2	日本建築学会コロキウム構造形態の解析と創生2014優秀講演
田中 奈津希	M2	構造形態創生コンテスト 入選
山口 洋平	M2	構造形態創生コンテスト 入選
西森 裕人	M2	生・若手実務者のための構造デザインコンペティション奨励賞
山口 洋平	M2	学生・若手実務者のための構造デザインコンペティション奨励賞
Hitoshi Masuyama	M2	MIRU優秀賞
益山 仁	M2	山下記念研究賞
米倉 梨菜	M2	インタラクション2015ベストペーパー賞
末吉 隆太郎	M2	26年度(第67回)電気・情報関係学会九州支部連合大会講演奨励賞
榊 裕翔	M2	The Thailand-Japan MicroWave 2014 Young Researcher
高森 凌	M2	xcellent Student Award of the IEEE Fukuoka Section
榊 裕翔	M2	鹿児島大学学長表彰
高森 凌	M2	鹿児島大学学長表彰
岩元 雅太郎	M2	電子情報通信学会学術奨励賞
堀口 史人	M1	若手優秀演題賞(第18回日本がん分子標的治療学会)
坂口 美幸	M1	化学工学会第80年会ポスター賞
斉藤 諒太	M1	第51回化学関連支部合同九州大会優秀ポスター賞
坂井 公輔	M1	木学会全国大会 第69回年次学術講演会 優秀講演賞
坂井 公輔	M1	優秀論文賞(コンクリート構造物の補修、補強、アップグレードシンポジウム)
森岩 寛稀	M1	第49回地盤工学研究発表会優秀論文賞
森岩 寛稀	M1	鹿児島大学学長表彰
森岩 寛稀	M1	平成26年度地盤工学会九州支部 学生賞(優良学生賞)
佐藤 貴志	M1	日本鉄鋼協会第169回春季講演大会学生PS努力賞
里中 拓矢	M1	日本建築学会コロキウム構造形態の解析と創生2014優秀講演
辻 孝輔	M1	構造形態創生コンテスト 入選
里中 拓矢	M1	IASS 2016 Tokyo ログコンペ優秀作品
里中 拓矢	M1	学生・若手実務者のための構造デザインコンペティション奨励賞
辻 孝輔	M1	学生・若手実務者のための構造デザインコンペティション奨励賞
Tatsuya Hanayama	M1	IEVC2014 Best Paper Award
椎屋 美咲	M1	電気学会優秀論文発表賞
平田 翔	M1	電気学会優秀論文発表賞
中村 聡志	M1	ETロボコン「かごしまITフェスタ杯」準優勝
岩切 浩亮	M1	ETロボコン「かごしまITフェスタ杯」準優勝
江口 敬大	M1	日本知能情報ファジィ学会九州支部 学生優秀ポスター発表賞
高木 基冬	M1	電子情報通信学会九州支部 学生会講演奨励賞
江口 敬大	M1	電子情報通信学会九州支部 学生会講演奨励賞
秋吉 勇佑	M1	電子情報通信学会九州支部 学生会講演奨励賞
瀬戸口 聡	M1	The 6th FTRA International Conference on Computer Science and its Applications Best Paper Award
塚本 裕明	M1	International conference and summer school on advanced silicide technology 2014 (ICCS-Silicide 2014) Young Scientist Award

第5章 今後の理工学研究科FD活動への期待

理工学研究科は平成21年度からの部局化により新しい組織としてスタートした。大学院教育におけるFD活動は、「教員が授業及び研究指導等の内容・法を改善し向上させるための組織的な取り組みの総称」とされている。大学院教育の共通の認識として、「はじめに」で述べたように、教育目標と

- (1) 入学者受入方針（アドミッション・ポリシー）
- (2) 教育課程編成・実施の方針（カリキュラム・ポリシー）
- (3) 学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）

の3つのポリシーを明文化し、継続した点検を実施することが重要になる。理工学研究科では、鹿児島大学の教育目標と3つのポリシーの提示に伴い、平成26年度も継続して見直しを実施した。

一方、中央教育審議会（平成23年1月31日）の答申「グローバル化社会の大学院教育 ～世界の多様な分野で大学院修了者が活躍するために～」では、大学院教育の改善の方向性が示されている。この中では、明確な学位プログラムとしての大学院教育を確立し、学生の質を保証する体系の整備が重要なものとして指摘されている。学生の質を保証する組織的な教育・研究指導體制の確立に関して、FD活動に関連する項目としては次の事項があげられる。

- (1) FDの充実、ピアレビューの実施による教員の教育・研究指導能力の向上
- (2) 教員の教育業績や能力の評価の充実、人事や処遇への反映などの推進、教員の教育研究活動の評価に関する指標の開発推進

また、「教員の教育研究活動の適切な評価」に関しては、「教員の教育・研究指導能力を向上させるためには、組織的な研修体制の充実、学生に対する厳格な成績評価とともに、教員の教育研究活動を適切に評価する仕組みが一体となって機能することが必要である。その際、教員の教育研究活動評価においては、論文数のみではなく研究業績を適切に評価するとともに、授業の研究指導の実施状況、修了者の活躍状況など教育面の取り組みを可能な限り客観的に把握、可視化し、教育業績や能力の多面的な評価を充実させ、人事や処遇への反映せる工夫が必要である。」としている。

今後、大学院のおかれた環境は、益々厳しい状況になっている。理工学研究科の教育プログラムでは、グローバル化に対応した人材輩出を念頭にした語学教育を始め、コースワークあるいはコア科目によるカリキュラム編成によって「大学院と学生の量的増大」の中で「学位プログラム等を通じた大学院教育の実質化」が図られている。すなわち、理工学研究科においても、各専攻の独自の教育・研究指導の実績に加えて、コースワーク科目により広範囲の学習を可能にした教育プログラムが実施されている。大学院の学生数が増大しことにより多様な能力を有する学生の教育・研究指導に対応したような大学院教育の展開も必要になってきている。これまでは各教員の能力に大きく依存してきた大学院の教育・研究を、研究科として点検して改善していくことが必要になる。FD活動に関しても、大学院教育の共通認識として前述した3項目の再確認を行い、教育・研究指導の点検と行うことで、理工学研究科の目標の実現を図ることができると考える。

このような観点からFD活動の一つとして、学生による授業評価アンケートの実施がある。学生の意見、考えの一端を汲み取ることで、高度の学習・研究能力の育成といった学習目標の到達度

に対する評価を行うことができると考えられる。また、今年度も昨年度に引き続き、学生の質の保証の一つとして研究発表の状況の調査を試みた。「どのような学位を出すのか」と言った要望に対して、本研究科の修了生の有する能力の評価の一つの指標なると思われる。単なる研究発表数だけでは、その質の評価になるのかと言った見方もあると思われるが、学外での評価を受けた指標の一つである研究発表数は、専攻による特性なども考慮することで本研究科の修了生の質の保証と学位水準の評価の指標の一つになるものと思われる。

FD委員会では、研究科として「どのような人材を入学させるのか」、「どのような教育プログラムを組むのか」、「どのような学位を出すのか」の課題に継続的に取り組むことで、中央教育審議会から示された大学院教育の改善の方向性にも対応できると考えており、今後も修了生の質の保証と学位水準の明確化に貢献できるようにFD活動を実施することが望まれる。

なお、次年度以降、大学院改革の一環として理工学研究科では、博士前期課程におけるグローバル人材養成の体制強化、博士後期課程におけるイノベーション人材養成の体制強化が打ち出されている。平成27年度には、留年をしない短期留学・現地調査実施可能とする学年4期分割授業、平成28年度以降に計画している、博士後期課程の3専攻を1専攻として基幹コースと先端科学技術コースを設け、地域の発展寄与する人材育成に対しては、先端科学技術コースと連携させ、地域コトづくりセンターの創設による機能強化が図られる。これらの改革推進には、各教員の教育研究能力のさらなる向上が求められ、理工学研究科所属教職員のFD活動がより重要にならざるを得ない。

平成26年度第1回理工学研究科FD委員会議事要旨（案）

日時：平成26年5月15日（木）9:05～9:25

場所：共通棟203講義室

委員：1号委員；本間（委員長）

2号委員；上谷、寺井、黒川、中里、酒匂（三隅代理）、塗木、青木、和田、濱田（横川代理）、小林

3号委員；本間（再掲）、青木（再掲）

4号委員；山本事務部長

委員外：有村総務係員、南野学生係員

議事に先立ち、各委員の自己紹介があった。

議題

1 平成25年度研究科FD活動報告及び平成26年度FD活動計画について

委員長から、資料1に基づき、平成25年度研究科FD活動等について報告があった。

引き続き委員長から、同資料に基づき、平成26年度FD活動について、昨年度同様下記5項目に沿って実施したい旨の説明があり、承認された。

- (1) FD講演会の実施
- (2) 海外実習報告
- (3) 学生による授業評価
- (4) 学生の研究活動と教育成果
- (5) 他大学主催のFD研修会参加及び調査

2 FD経費予算要求について

委員長から、平成26年度FD経費予算要求について、資料2に基づき、本年度の実施計画に沿って昨年度と同額を要求予定である旨の説明があり、承認された。

3 委員の活動分担について

委員長から、4活動項目における担当委員を理学系、工学系毎に推薦願いたい旨提案があり、承認された。推薦結果は次のとおり。

- (1) FD講演会の実施：青木委員、本間委員
- (2) 海外実習報告：横川委員、黒川委員
- (3) 学生による授業評価：小林委員、中里委員
- (4) 学生の研究活動と教育成果：和田委員、三隅委員、塗木委員

なお、本年度のFD講演会の実施については、青木委員（理学系）を中心として実施することが確認され、同委員より、講師として同志社大学 学習支援・教育開発センター所長の山田礼子教授に内諾を得ている旨の報告があった。

また、委員長から、他大学主催のFD研修会参加についても、職員旅費の予算要求が承認された場合は、理学系教員から推薦してほしい旨の依頼があり、承認された。

配布資料：

平成26年度第1回研究科FD委員会資料

平成25年度研究科FD活動報告書

平成26年度第2回理工学研究科FD委員会議事要旨(案)

日時：平成27年2月5日(木)9:10～9:25

場所：理学部1号館2階会議準備室

委員：1号委員；本間(委員長)

2号委員；上谷、川越(寺井代理)、黒川、中里、三隅、塗木、青木、
和田、横川、小林

3号委員；(本間)、(青木)

4号委員；山本

委員外：坂口学務課長、野邊総務係長、南野学生係員、有村総務係員

議事に先立ち、委員長の挨拶後、前回議事要旨が確認された。

議題

1 平成26年度研究科FD活動報告書の作成について

委員長から、平成26年度研究科FD活動報告書作成に係る、担当割り当てについて諮られ、資料1に基づき説明があった後、審議の結果、承認された。

また、同報告書作成について、下記の事項が確認された。

○委員会資料の見本及び昨年度報告書に基づき作成する。

○作成に要する各種データ等については、研究科・工学系総務係から、各委員宛にメールで送付する。

○各担当項目のデータ提出期限は3月末とし、同データを基に、委員長及び研究科・工学系総務係にて、4月中旬を目途に、最終の取り纏めを行う。

○平成26年度修了生からGPAの結果が出るため、次年度から同制度の学習成果等について分析し、記載項目として追加する。

理工学研究科博士前期課程
学生による授業評価アンケート（平成26年度・〇期）

鹿児島大学大学院理工学研究科では、授業の改善と理解度の向上を目指して、授業を受けた諸君の評価や意見を参考にしたいと思います。以下の各設問に対して、選択肢の中から一つだけ選び回答用紙の該当する番号欄に○印を記入し、また、記述欄に意見を記入ください。なお、このアンケートは統計的に処理され、個人名が出たりすることはありませんし、成績評価にも関係ありませんので、適切な評価や率直な意見を記入してください。

A（受講態度等について）

設問1 授業にどれだけ出席しましたか。

5. 全て出席 4. 1回欠席 3. 2回欠席 2. 3回欠席 1. 4回以上欠席

設問2 予習と復習は毎週どれくらいしましたか。（レポート作成時間も含まれます）

5. 3時間より多く 4. 2～3時間 3. 1～2時間 2. 30分～1時間 1. 30分未満

【自由記述A】 その他、受講態度等を含めて感想や授業改善に役立つと思われる意見を回答用紙の自由記述欄に簡潔に書いてください。

B（授業内容等について）

設問3 この授業のシラバス記載内容は受講申請に役立ちましたか。

5. 大いにそう思う 4. そう思う 3. どちらともいえない 2. そう思わない 1. 全くそう思わない

設問4 授業はほぼ理解でき、学習目標は達成できそうか。

5. 大いにそう思う 4. そう思う 3. どちらともいえない 2. そう思わない 1. 全くそう思わない

設問5 授業の内容は自身の研究を進める上で役立つと思う。

5. 大いにそう思う 4. そう思う 3. どちらともいえない 2. そう思わない 1. 全くそう思わない

設問6 授業の内容は目指す（職業上の）高度専門知識として役立つと思う。

5. 大いにそう思う 4. そう思う 3. どちらともいえない 2. そう思わない 1. 全くそう思わない

設問7 授業の内容は自身の教養や学力を高める上で役立つと思う。

5. 大いにそう思う 4. そう思う 3. どちらともいえない 2. そう思わない 1. 全くそう思わない

【自由記述B】 授業内容全般について感想や授業改善に役立つと思われる意見を回答用紙の自由記述欄に簡潔に書いてください。特に、理解できない場合にはどこに原因があると考えますか。

C（授業方法等について）

設問8 使用した教科書や教材は授業の理解に役立った。（教材等を使用しなかった場合には記入しなくて良い。）

5. 大いにそう思う 4. そう思う 3. どちらともいえない 2. そう思わない 1. 全くそう思わない

設問9 レポートなどは授業の理解に役立った。（無かった場合には記入しなくて良い。）

5. 大いにそう思う 4. そう思う 3. どちらともいえない 2. そう思わない 1. 全くそう思わない

設問10 板書などは明瞭だった。

5. 大いにそう思う 4. そう思う 3. どちらともいえない 2. そう思わない 1. 全くそう思わない

設問11 教員の熱意が感じられた。

5. 大いにそう思う 4. そう思う 3. どちらともいえない 2. そう思わない 1. 全くそう思わない

【自由記述C】 授業方法全般について感想や授業改善に役立つと思われる意見を回答用紙の自由記述欄に簡潔に書いてください。

博士前期課程授業評価アンケート回答用紙

実施日 年 月 日

科目名 : _____

※注意事項

- ・HB、Hの鉛筆又は0.5mmシャープペンシル(HB)で濃く記入し、それら以外のボールペンなどの筆記用具は使用しないで下さい。
- ・隣のマーク領域へかからないようにして下さい。
- ・間違った場所に○を記入した場合は、消しゴムできれいに消して下さい。

専攻コード

機械工学 電気電子工学 建築学 化学生命・化学工学 海洋土木工学 情報生体システム工学
 21 22 23 24 25 26
 数理情報科学 物理・宇宙 生命化学 地球環境科学
 31 32 33 34

良い記入例 しっかり枠内に記入して下さい。

1	2	3	4	5	6	7	8	9	0
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

数字は、枠線にかからないように真ん中にはっきりと書いて下さい。

開講専攻名:

あなたの所属専攻名:

科目コード:

科目コードは右詰めで記入してください。

<設問の回答>

	5	4	3	2	1
設問1	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
設問2	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
設問3	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
設問4	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
設問5	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>

	5	4	3	2	1
設問6	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
設問7	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
設問8	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
設問9	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
設問10	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>

	5	4	3	2	1
設問11	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>

自由記述(枠線にかからないように楷書で記入して下さい。)

科目名:	<input style="width: 985px; height: 20px;" type="text"/>
A 関連	<input style="width: 985px; height: 20px;" type="text"/>
B 関連	<input style="width: 985px; height: 20px;" type="text"/>
C 関連	<input style="width: 985px; height: 20px;" type="text"/>

授業計画改善書（平成26年度 O期 講義・演習用）

1. 授業アンケート結果に基づいて、授業科目ごとに記載して下さい。
2. 複数で担当されている科目は、アンケートに応じて代表者の方あるいは分担者が記載して下さい。
3. この文書を○月○日（○）までに専攻のFD委員に添付ファイルで送付して下さい。
4. この文書は3年間保管して下さい。

記入年月日： 平成 年 月 日

授業科目名： _____

授業担当者（代表者）名： _____

※ Pt. 8 ゴシックで記入して下さい。

※自由記述欄については、授業評価アンケート実施の有無に関わらず記入してください。

評価項目	アンケートの評点			現時点での自己分析と改善の方策	
	今回	前回	前々回		
(A) 受講態度について	①出席				
	②予習と復習				
	※自由記述				
(B) 授業内容について	③シラバス				
	④理解度				
	⑤研究に				
	⑥仕事に				
	⑦学力・教養に				
	※自由記述				
(C) 授業方法について	⑧教科書・教材				
	⑨レポート等				
	⑩板書等の明瞭さ				
	⑪教員の熱意				
	※自由記述				

登録者数 = 名： 受験者数 A = 名： 単位取得者数 B = 名： 比率 (B/A) = %

総括

- ・ 成績の評価基準：
- ・ 学習目標の達成：
- ・ その他（自由記述）

（記述欄不足の場合は、続紙を設けて記述下さい。）

授業計画改善書（平成26年度 後期 講義・演習用）

1. 授業アンケート結果に基づいて、授業科目ごとに記載して下さい。
2. 複数で担当されている科目は、アンケートに応じて代表者の方あるいは分担者が記載して下さい。
3. この文書を○月○日（○）までに専攻のFD委員に添付ファイルで送付して下さい。
4. この文書は3年間保管して下さい。

記入年月日： 平成27年3月○日

授業科目名： ○○○特論

授業担当者（代表者）名： 工学 太郎

※ Pt. 8 ゴシックで記入して下さい。

※自由記述欄については、授業評価アンケート実施の有無に関わらず記入してください。

評価項目	アンケートの評点			現時点での自己分析と改善の方策	
	今回	前回	前々回		
(A) 受講態度について	①出席				
	②予習と復習	2.50	2.25	2.80	予習・復習の時間が1から2時間であり、本科目の内容を修得するためには不足しているので、課題を増やしたい。
	※自由記述				
(B) 授業内容について	③シラバス				
	④理解度	3.16	3.0	3.2	今年度は少し理解度を上げることができた。小テストなどで理解度の向上を図り、次年度は評点3.5となるようにしたい。
	⑤研究に				
	⑥仕事に				
	⑦学力・教養に				
	※自由記述				
(C) 授業方法について	⑧教科書・教材				
	⑨レポート等	3.70	3.20	3.50	今年度は5回のレポートを提出させた。昨年度は3回（評点は3.20）であったので、少し改善することができた。次年度は評点4.0となるようにしたい。
	⑩板書等の明瞭さ				
	⑪教員の熱意				
	※自由記述				

登録者数 = 14名 : 受験者数 A = 14名 : 単位取得者数 B = 14名 : 比率 (B/A) = 100%

総括

- ・ 成績の評価基準：シラバスに従い、試験7割、レポート課題3割の割合で評価した。
- ・ 学習目標の達成：合格者の平均はC(78点)であり、大学院の成績としては、十分でない。レポート課題への取り組みが十分でないことが考えられるので、次年度は何らかの改善をしたい。
- ・ その他（自由記述）

※フォントの色は青から黒にして変更して下さい。

※青字の箇所は参考例を示したものです。あくまでも参考です。

（記述欄不足の場合は、続紙を設けて記述下さい。）

医歯学総合 研究科

医歯学総合研究科 FD 活動報告

1. はじめに

医歯学総合研究科 FD 委員会は、研究倫理指針に則った研究の遂行と大学院教育の充実、活性化を目的として、講演会、教育プログラムと学生支援改善のための調査、ならびに効果的な学習を行うための学習支援システムの普及をめざして活動した。本年度は留学生を対象とした意識調査も実施した。

2. 授業公開

授業公開は「優れた授業を公開し、参観をした教員が授業方法を学ぶ機会を提供する」ことを目的とし、さらに、より多くの教職員が授業参観する機会とするために、昨年引き続き、研究者が関心を持つべきテーマの授業を公開授業とした。

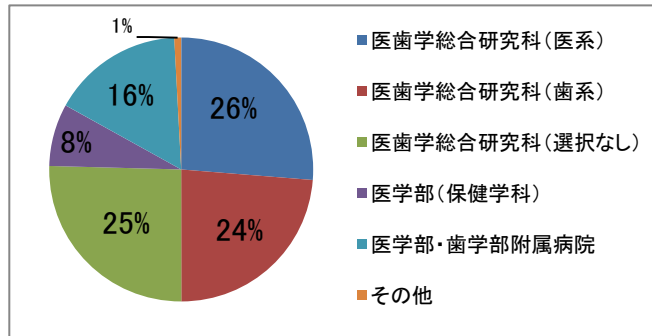
日時	2014年11月18日(火) 6限目
科目・テーマ	医療・医人倫理学(博士科目) 「遺伝子研究の倫理的側面」
講師	高嶋 博(神経内科・老年病学分野 教授)
会場	医歯学総合研究科棟2(基礎医学系2 大学院講義室)
参観者	12名(対象 研究科教員、学生)
概要	研究倫理に関する歴史的背景から倫理審査のための書類の作成について講義された。多数の学生の受講生の他に、今年度は比較的多い参観者があった。参観者はテーマ、講義の進め方に対する種々の意見をアンケートに記載した。

3. 研究倫理に関する講演会

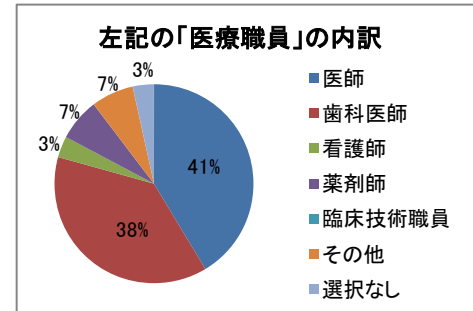
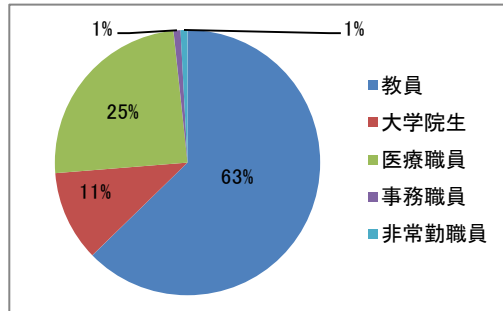
日時	2014年11月13日(木) 18:00~19:30
テーマ	「臨床研究に関する倫理指針」のポイント
講師	板井 孝彦郎 (宮崎大学医学部医学科社会医学講座 生命・医療倫理学講座 教授 宮崎大学附属病院 中央診療部門臨床倫理部 部長、 臨床研究支援センター 教育・研修部門 部門長)
主催	医歯学総合研究科 FD 委員会
共催	医学部 FD 委員会、歯学部 FD 委員会、医歯学総合研究科教育委員会 生命・遺伝子倫理委員会 疫学等倫理委員会、ヒト ES 細胞研究倫理委員会、医学部倫理委員会
会場	鶴陵会館大ホール
参加者	158名(対象 研究科・医学部・歯学部の授業担当者、附属病院教職員)
概要	桜ヶ丘キャンパスで研究に従事している多数の教職員、大学院学生が参加した。 医学研究に関わる様々な倫理指針と最近の事案の紹介、「臨床研究に関する倫理指針」見直しの内容、特に宮崎大学での事案に関する具体的な問題点についての調査と対応、研究デザイン上で重要となるインフォームド・コンセント、匿名化、試料の扱い等具体的に説明された。事後アンケートには118名が回答し、非常にわかりやすい内容で理解できたとの意見が多数であった。

図 1. アンケート結果

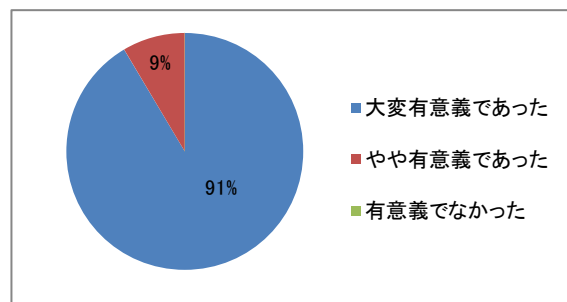
【1 所属】



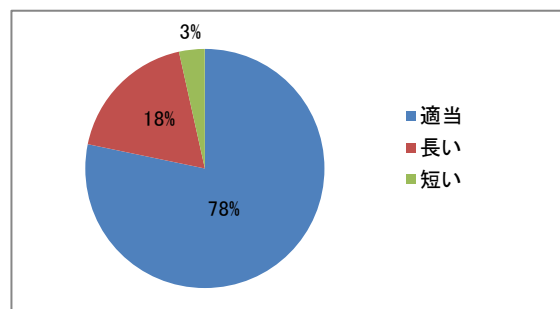
【2 職名】



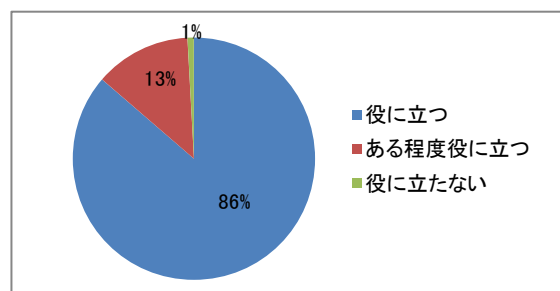
【3 今回の講演会はあなたにとって】



【4 講演時間について】



【5 講演会で得られた知識が、今後の実務に役に立ちますか】



4. 学生による授業評価アンケート

実施方法の概要 現在、授業科目の評価アンケート、演習・実験科目の研究環境と研究指導に関するアンケートを日本語と同じ内容の留学生用の英語のアンケート用紙により実施している。大学院係がアンケート用紙を作成、対象学生に配布、回収して集計業務を行った。また集計結果は科目責任者にフィードバックした。

講義科目アンケート 講義を主体とする科目アンケートは5名以上の受講生がいる科目を対象として授業評価7項目、自己評価2項目、全体評価とし、無記名により各項目について7段階の評定尺度で回答し、自由な意見も記載してもらった。前期は対象13科目中8科目51枚(図2)、後期は対象14科目中9科目55枚(図3)の回答が得られた。

演習、実験科目のアンケート 演習、実験科目についてのアンケートは後期に実施し、無記名で医系歯系の別、入学年度、演習科目の授業形態、内容と指導3項目、実験科目(研究指導)6項目、研究中断の有無について回答を求めた。選択項目以外は、5段階の評定尺度で回答した。

医系46枚、歯系23枚の回答が得られた(図4)。

医系 入学年度は平成16年(10年目)の学生が在籍しており、在籍期間が長い傾向が続いている。項目7で、「個人的理由以外での研究の中断が6名(13%)となっており変化がない。科目の有用性、教員の対応・支援は高い評価を得ているが、研究指導に関する6項目中5項目で評価が昨年より低下した。自由記載では、良かった点

- 受講者数が少ない講義でも、大変丁寧に指導して下さった先生に感謝いたします。
- 自分の研究に関する情報提供を随時行ってくれる。
- 基礎の科目の実習を受けられたこと。
- 指導医が良い。
- 講義、実験等で先生方が即座に質問等に対応して頂けたこと。
- 学習環境はとてもよいです。
- 自由に討論ができたこと。
- 指導教室の先生方が皆様親身になって下さり、とても励みになりました。
- しっかり指導して頂いています。
- 時間割は学生にとって柔軟で便利です。
- 現在取り組んでいる研究に対して詳細なコメントを頂くことができた。
- いい先生と環境です。

改善すべき点

- すべての大学の書類を英語版で提供してほしい。
- 大学院セミナーと講義の時間(日時)が重なり、聴講したいセミナーへ行くことが出来ないことがありましたので、何か改善策があればしていただきたいと思います。
- 倫理委員会承認まで約6ヶ月を要し、研究が大幅に遅れた。承認の基準が審査する人によって異なり、そのための教育や指導がない。
- 医学研究講義室等の整備。
- 基礎の実習を希望していたが、曜日が合わなかった。日程をうまく調整して頂ければ有難い(外勤などで決められた曜日に大学不在のことがあるため)。
- 英語での講義を増やしてほしい。
- 建物の改装があり、実験中の物品移動が難しい(通行止めの場所が多くある)例:冷やすための氷や測定器への

物の移動。

- 英語の授業や Journal club は外国の卒業生により有益であると思う。
- 遠隔地では取得できない単位が必修要件となっております。大学院は研究の場ですので単位に重点を置くことは根本的に誤りだと存じます。早急に改善を望みます。
- もっとパートナーシップや研究室間や専攻間での学生交換ができるようにしてほしい。
- 配布資料がない講義もあった。

その他

- 施設工事の影響で、ほとんどの活動に支障が出た。
- 担当指導教官が長期間未定であり、無駄に時間を浪費した。
- 大学は学生に特に外国人学生により多くのサポートを与えてくれて、とても感謝しています。
- 集中講義等、早めに日程を案内して欲しいです。

歯系 (図3) 学生の最長の在籍機関が伸びている。ほとんどの項目で昨年度より評価が向上しているが、個人的な理由以外での研究の長期中断が0から3名(13%)に増加した。自由記載では良かった点

- オーベンの熱心な指導。
- 多岐にわたり親身になって相談に乗って下さり、研究論文においても、答えを教えて下さるのではなく答えを導き出すまでの過程や方法を教えて下さる点は特に良いと感じました。
- 臨床と研究が同時にできること。
- カンファランスなどで医局員全員で情報を共有し、様々な先生の意見を聞くことができよかったです。
- 遠隔地から通学しているが、よくフォローしてもらっていて本当に助かっています。
- 先生はツールや研究のための機器を提供してくれたり、多くの方法で私をサポートしてくれる。
- 研究に関連した多くの問題を解決するためにいつも私を助けてくれて、論文を適切に書き留めるように指導してくれます。
- 指導教員ならびに他の教員がアドバイスをする環境が与えられていて大変恵まれた環境で研究が行えた。
- 私はすべての点において満足している。

改善すべき点

- 学位を4年間で取得できるようにしてほしい。
- 学位取得まで年数がかかっていること。
- 臨床に時間を使ってしまい、研究にかける時間が少なくなってしまった。自分の中でも時間の使い方は改善していかなくてはいけないと考えます。
- もっと効率的に時間を使わないといけないと反省した。
- 論文検索をしていて見ることができない(有料など)ものがあるので、見れるようになればいいと思いました。
- 英語で話してくれるように改善してほしいと思います。

その他

- まだまだ臨床も研究も上手になってませんので、これからも頑張ります。
- いろんな先生に意見を聞くことができ、よかったです。

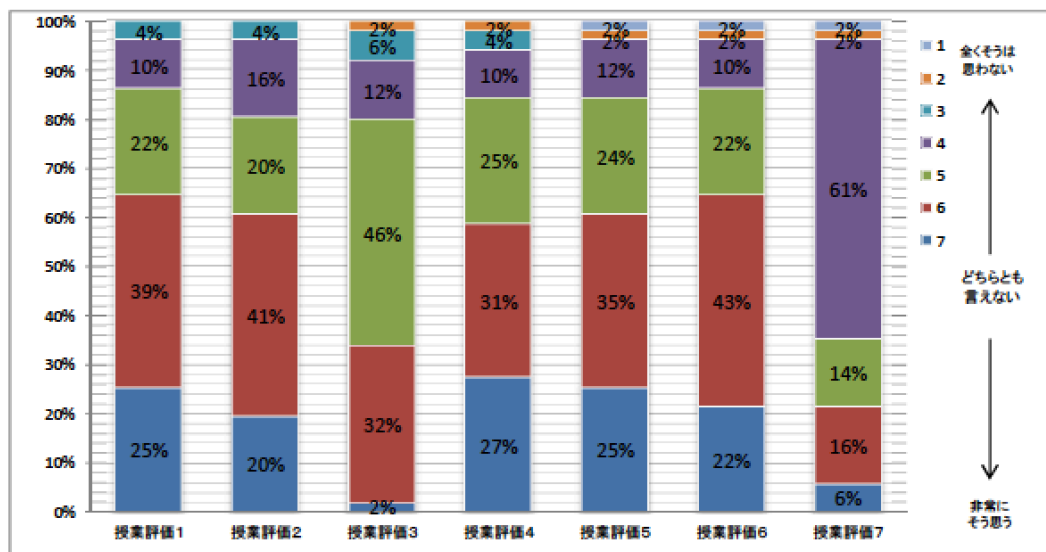
図2 前期アンケート

医歯学総合研究科 授業に関するアンケート全体集計 (H26年度 前期)

集計 8科目 アンケート回収枚数 51枚

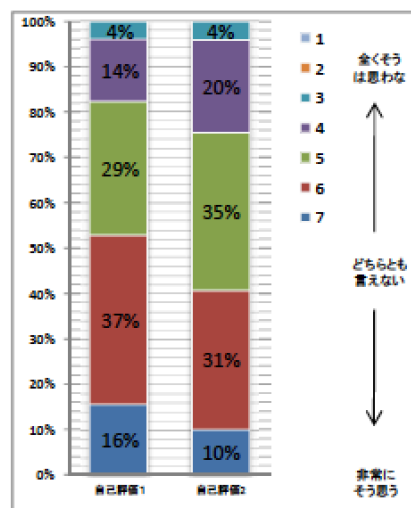
【授業評価】

- 1 この授業はあなたのニーズに合っていましたか
- 2 この授業はあなたの現在、将来の研究に有用な内容でしたか
- 3 講義の内容はよく理解できましたか
- 4 講義内容や配付資料の掲示など、発展的な学習、研究を支援しましたか
- 5 教員はあなたの質問を促し、適切に対応しましたか
- 6 教員は参考資料の掲示など、発展的な学習、研究を支援しましたか
- 7 講義時間は適切でしたか



【自己評価】

- 1 この授業で新しい知識や考え方を習得しましたか
- 2 授業日は積極的に参加しましたか(質問、自習など)



【全体評価】

- 1 この授業に満足し、他の学生にも受講を薦めますか

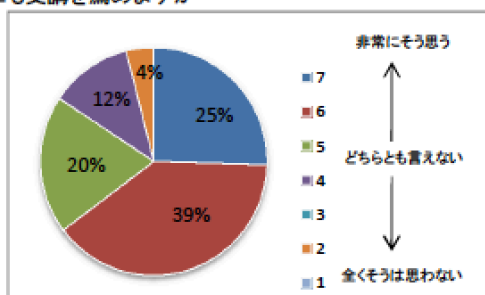


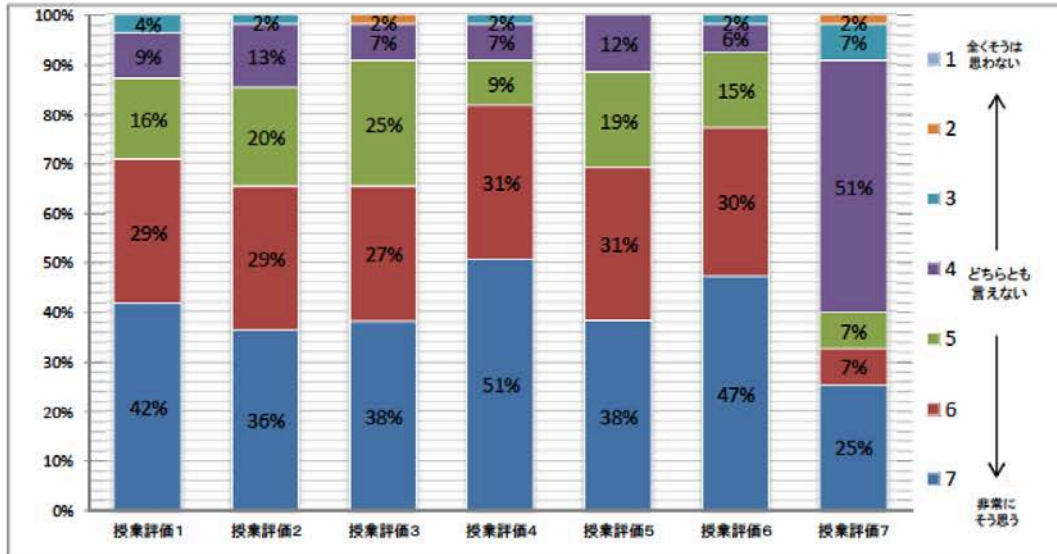
図3 後期アンケート

医歯学総合研究科 授業に関するアンケート全体集計 (H26年度 後期)

集計 9科目 アンケート回収枚数 55枚

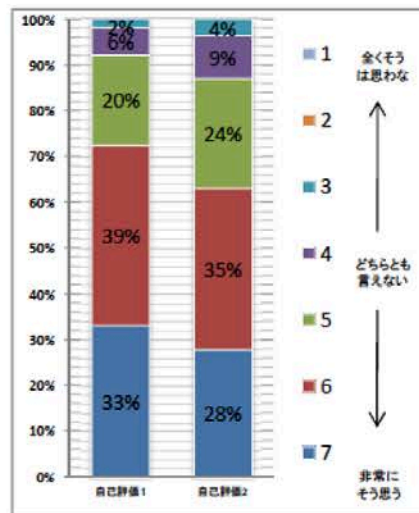
【授業評価】

- 1 この授業はあなたのニーズに合っていましたか
- 2 この授業はあなたの現在、将来の研究に有用な内容でしたか
- 3 講義の内容はよく理解できましたか
- 4 講義内容や配付資料の掲示など、発展的な学習、研究を支援しましたか
- 5 教員はあなたの質問を促し、適切に対応しましたか
- 6 教員は参考資料の掲示など、発展的な学習、研究を支援しましたか
- 7 講義時間は適切でしたか



【自己評価】

- 1 この授業で新しい知識や考え方を習得しましたか
- 2 授業日は積極的に参加しましたか(質問、自習など)



【全体評価】

- 1 この授業に満足し、他の学生にも受講を薦めますか

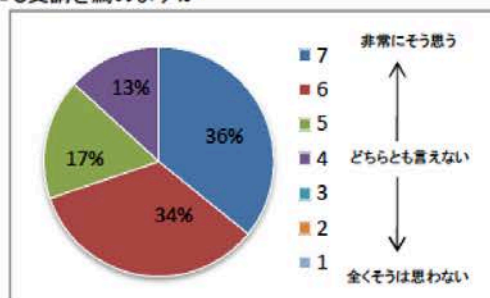
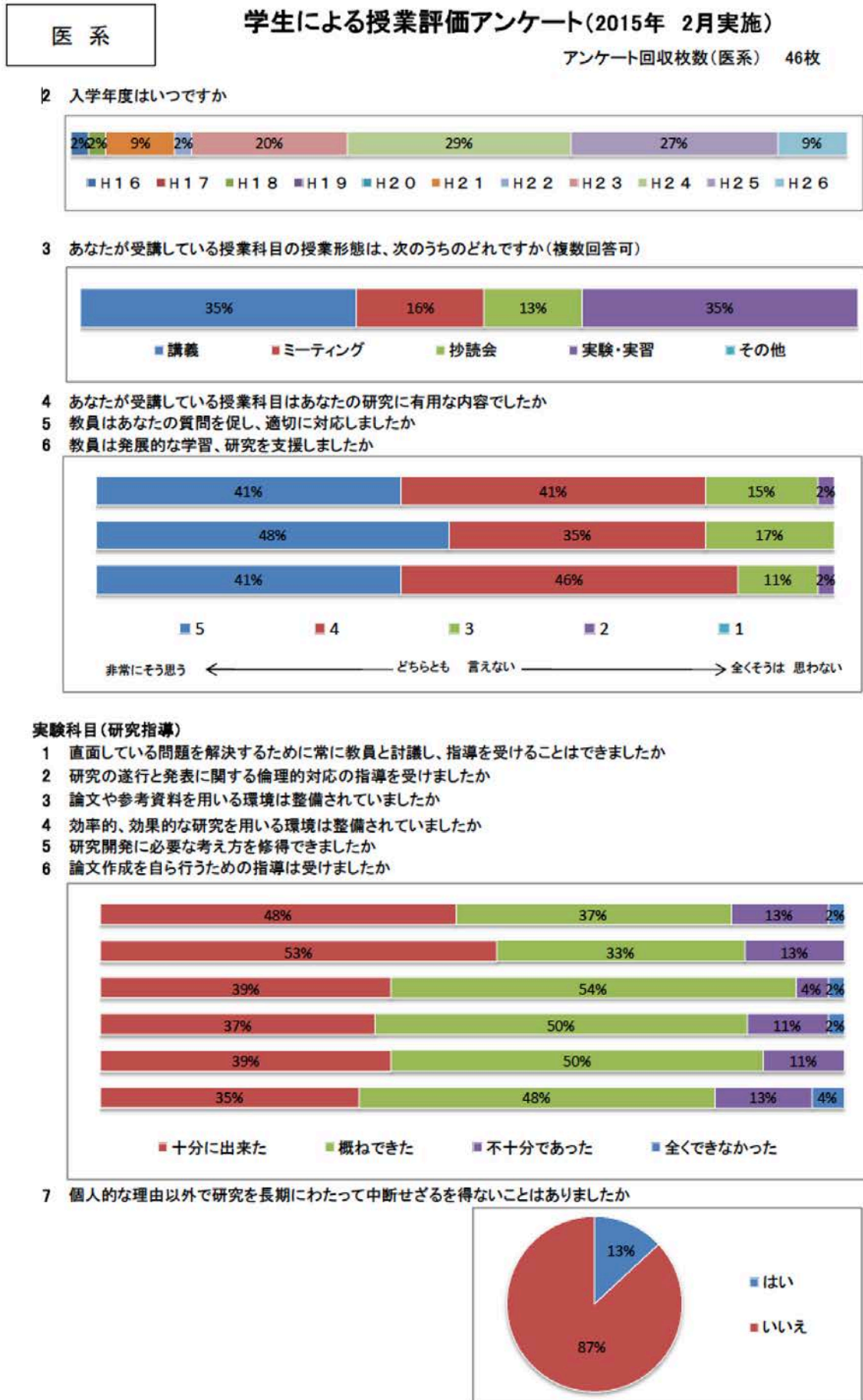


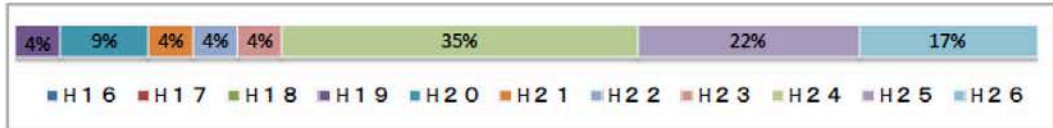
図4 実験科目等アンケート



学生による授業評価アンケート(2015年 2月実施)

アンケート回収枚数(歯系) 23枚

2 入学年度はいつですか



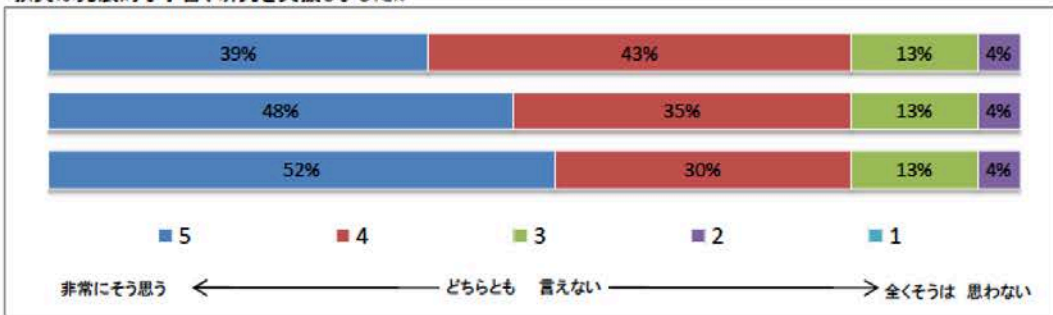
3 あなたが受講している授業科目の授業形態は、次のうちのどれですか(複数回答可)



4 あなたが受講している授業科目はあなたの研究に有用な内容でしたか

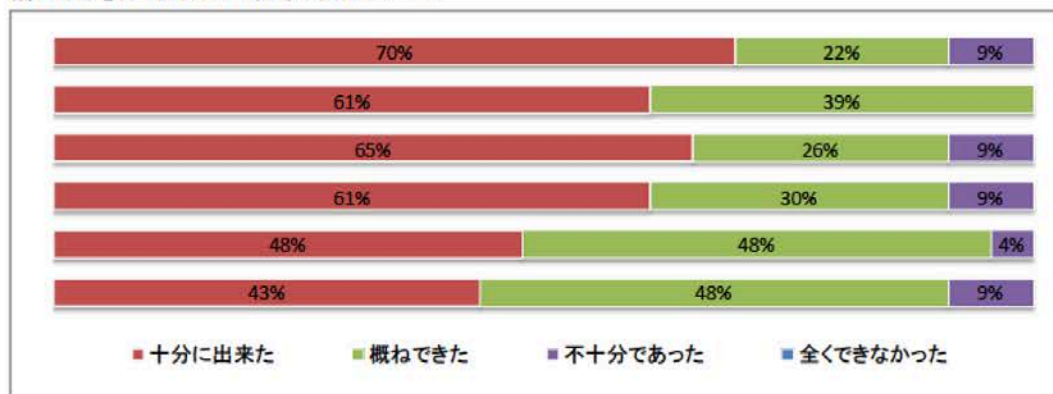
5 教員はあなたの質問を促し、適切に対応しましたか

6 教員は発展的な学習、研究を支援しましたか

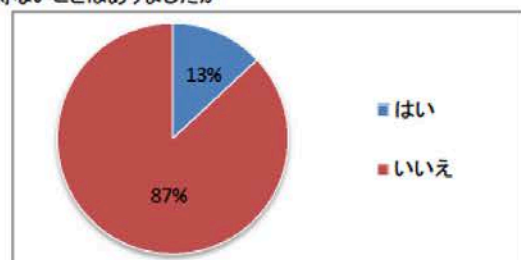


実験科目(研究指導)

- 1 直面している問題を解決するために常に教員と討議し、指導を受けることはできましたか
- 2 研究の遂行と発表に関する倫理的対応の指導を受けましたか
- 3 論文や参考資料を用いる環境は整備されていましたか
- 4 効率的、効果的な研究を用いる環境は整備されていましたか
- 5 研究開発に必要な考え方を修得できましたか
- 6 論文作成を自ら行うための指導は受けましたか



7 個人的な理由以外で研究を長期にわたって中断せざるを得ないことはありましたか



5. 留学生を対象とした研究と大学院教育に関するアンケート

医歯学総合研究科の留学生の指導体制、研究環境、生活支援の改善と、今後の国際交流のあり方に対する情報を収集する目的で、留学生を対象に英語でのアンケートを実施した。

実施期間 2014年7月15日～9日5日

調査方法 アンケートの電子ファイルを各研究分野を通じて留学生宛に配信し、留学生からメール・紙媒体により無記名式で回答を得た。

調査項目 1. 大学院教育（科目、講師、カリキュラム、試験、管理担当者、他）
2. 研究環境（テーマ、機材、設備、時間、広さ、資源、他）
3. 生活支援（奨学金、住居、支援者、健康管理、学生教職員との交流、家族の支援、他）
4. 将来のキャリア形成支援（雇用、メンター、インターンシップ、他）

対象者 27名（健康科学専攻14名、先進治療科学専攻12名、医科学専攻（修士課程）1名）

性別 男性8名 女性19名

経費種別 国費14名、県費1名、私費12名

回答者数 21名

1 Please write down your comments on your study (courses, lectures, curriculum, examinations, administrators, others) in GSMDS.

1-1) How are you considering it on the whole?

Very good 2名 Good 13名 Moderate 6名 Not good 0名

1-2) List the good items.

- Curriculum, Administrators.
- Some courses are available in English. Some lecturers give the subject's schedule according to students appropriate time. Final presentation can be held in English. The thesis can be written in English. There are tutors that are appointed to help foreign students in many things.
- All the people are very helpful.
- Kind faculties. Positive attitude to foreigners.
- Teachers are cooperative.
- Everybody is sensible and kind. Environment for research activity is good.
- Every international student has his or her own guider.
- Courses (JICA), Lectures.
- Environment and PH course & Epidemiology and PH course / curriculum.
- Examination, Administrator.
- Lectures, Administrators.
- Course, Lectures, Administrators.
- Lectures taught/explained in English, can be understood well. Courses and curriculum are clear to follow.
- The administration and the service is very good. The curriculum is explained briefly.
- Good curriculum and lectures.
- Well planned.
- Nicely developed curriculum.
- Courses are great and the lecturers can speak English quite well.
- Administrators. 2名

- 無回答 1名

1-3) List the items to be improved.

- Lectures (English lectures is better).
- It is better to have more courses in English, especially in clinical and medical field. Courses are not just as a lecturer or class, but also have some practice, for example in medical field, students be able to observe directly the surgery performance, or some medical examination using high-tech devices, such as MRI, CT-Scan, etc. It is better if all the necessary documents (such as, subject paper per semester, seminar attending sheet, etc) are also available in English. It is better if all of the announcements for students (usually by e-mail or website) are written also in English, and it will be very helpful if some staffs in Student's office can speak English.
- More lectures in English, Examinations and curriculum should involve an English advisor.
- Major oriented courses, English classes (for those with good English capabilities those courses sound redundant.)
- English speaking staff for foreign students at student's office, Sakuragaoka. Many foreign students wish this.
- Please increase the usage of English.
- Conversation with English.
- Almost administrative staffs cannot speak English in Sakuragaoka campus.
- A few lectures took longer time to accomplish than it's supposed to be.
- For administration service, please put someone who can speak English because it will be very helpful for foreign student. For university website or GSMDS website please update any information in English page, because as foreigner we can't read in Japanese version. In every semester, I think now it's better to use computerized system either to input the subject that we want to take in the beginning of semester or the result at the end of semester.
- Ability to speak English.
- Very few administrative task done in English easily.
- Language.
- Study plan should be planed.
- Administrators.
- Lectures, curriculum.
- Curriculum.
- Courses.
- None in particular.
- I almost do not have courses and lectures.
- 無回答 1名

2 Please write down your comments on your research environment (theme, instructors, facilities, time, space, resources others).

2-1) How are you considering it on the whole?

Very good 5名 Good 14名 Moderate 2名 Not good 0名

2-2) List the good items.

- Instruction, Equipment, Environment.

- The given time to complete the course is appropriate so students do not need to rush and feel exhausting. Supervisor gives the opportunity to students to research and study the topic according to their own choices. Some staff can speak English (secretary or associate professor) so they can be very helpful for foreign students, particularly as a translators. Students have the opportunity to attend Japanese class to study and improve their Japanese skills.
- Helpful faculties.
- Disciplined and very academic.
- Professor and my instructors help me for doing research and they are very kind.
- Great study environment (facilities and resources), instructor and colleagues are helpful and friendly.
- The instructors are always very helpful and patient, when I do not understand something in Japanese. They try to explain in other ways. The resources are also good.
- Very friendly and helpful staff.
- Theme, Instructors, Facilities, Space, Resources.
- Instructors and facilities.
- Good resources & Facilities & Knowledgeable instructors.
- The space. Resources are good for research.
- Time, Space.
- Theme, facilities, resources.
- Theme, Facilities, Time, Space, Instructors.
- Research facilities (24 hour electricity). Resources very available.
- Instructors are very helpful. Facilities can be used freely.
- Laboratory facilities are complete. The campus environment is clean.
- Facilities.
- Instructors, Time, Resources.
- 無回答 1名

2-3) List the items to be improved.

- Time.
- Time, Space.
- Some constructions and machines are very old.
- Should organize exchange students visit the advanced research environment.
- Theme.
- Resource.
- Some resources and facilities are limited or need to be updated.
- Training for some machines.
- Facilities.
- I do not have a project or a research well defined. If I have a project to follow, I think it would be better.
- There is not any auditing on the research process of students and everything is only dependent on how good labs work individually.
- The meeting and research presentation and discussion are all held in Japanese, it is better to be in English. To give the chance for foreign doctors to get more experiences in clinical study. To include English more frequent in every academic activities.
- Research environment to be attuned to foreigner needs, More English support, Increase in facilities to facilitate

accommodation of incoming researchers.

- Please put any sign inside the campus with English version also. There is no Wi-Fi inside the campus for free use.
- Access to English manuals.
- Communication in English.
- Nothing 2名
- 無回答 3名

3 Please write down your comments on support of your life (scholarship, housing, advisors, health care, exchange with other students and faculty members, support of your family, others)

3-1) How are you considering it on the whole?

Very good 3名 Good 13名 Moderate 5名 Not good 0名

3-2) List the good items.

- Advisors, Health care, Support family.
- To be able to work as teaching or research assistant. Receiving the support money to pay apartment/house rent.
- Health care, Advisors, Support of my family, Students and faculty members.
- Exchange with other students and faculty members advisor.
- My professor, scholarship.
- The advisors, scholarship. 2名
- Scholarship, health care. 2名
- Scholarship, advisors, health care.
- Health care (cheap insurance), support of family, tutor support system.
- Advisors are very helpful. Life here is secured by the scholarship, health insurance, and government/Kagoshima city support.
- All faculty member support me in every each of daily life. The tutor facility was very helpful for me as foreign student.
- Scholarship and health care.
- Housing, advisors.
- Support from advisors.
- Scholarship & the health insurance are the good items.
- Scholarship.
- The housing, location and resources are very good.
- Everything.
- 無回答 2名

3-3) List the items to be improved.

- Housing, Public transport.
- Housing (too far from Sakuragaoka).

- Housing for student, and tuition fee for private student.
- University need to care more about housing for foreign student that it is not easy to search and make contract by themselves, it is also required a lot of money.
- Housing (house rent is expensive). 2名
- Longer stay at Kaikan (国際交流会館) would be great help. Communication with student center office in Sakuragaoka is really difficult.
- The scholarship information or job opportunity is better to be in English. Because foreign students usually miss this information so they do not get any of this.

Kagoshima University does not have the agreement with Indonesian government about the scholarship, and because of this KU has been removed from the list of University that is allowed to get into and receive the scholarship. Because the scholarship from Indonesia government for PhD Program is just for 3 years, and beyond that (as it in KU for 4 years) some universities have agreed to cover the extended expenses (in this case, they give 1 year scholarship). It leads to students who are receiving scholarship form Indonesian government cannot choose KU as their destination anymore.

- Interactive programs between foreign students and faculties members at faculty of medicine would be very beneficial. Foreign students hardly know anything except to their department.
- Scholarship, Housing.
- Scholarship is OK! But housing fee is expensive.
- Scholarship very, very late; Really involved tutors who can speak English and are dedicated should be required.
- Tuition fee should be exempted for privately-financed students.
- Exchange with other students & faculty members is not very easy for foreigners.
- Health care and family support.
- There is only health clinic for students in Korimoto campus.
- Facility of health care in Korimoto campus only? How about in Sakuragaoka?
- Nothing 2名
- 無回答 2名

4 Please write down your comments on support of your future carrier development (employment, mentor, internship, others)

4-1) How are you considering it on the whole?

Very good 3名 Good 10名 Moderate 6名 Not good 1名 無回答 1名

4-2) List the good items.

- Good relationship even after graduation.
- Kagoshima University groomed me with a vision in the field of scientific research. I am very glad to get nurtured in it, that turned me more confident and my career opportunities are widened.
- World class university.
- I've learned many things during my course that will be useful for future. I've got job in my country so after I finish my course it will support my job carrier.
- There are knowledgeable people to learn skills you need from them.
- My tutor always ask what I want to do, if I am liking my activities. And my tutor is not only supporting my future carrier, but also supporting my experiences in Japan in general and I appreciate it, especially in improving my

- Japanese skills.
- Employment, mentor, internship.
- Employment mentor.
- Employment.
- Mentor, Dependent on supervisor.
- The mentor, internship.
- Internship. 2名
- Mentor. 3名
- 無回答 5名
-

4-3) List the items to be improved.

- To have the collaboration with our home university, such as in research, student exchanging program, etc.
- Career development seminar, regarding opportunities for foreign graduates would be interesting.
- Never be a mentor.
- Should provide part-time job for exchange student.
- Mentor.
- Organization.
- Employment.
- Employment options not tailored only to Japanese, although it's understandable that they are citizens. Equal opportunities regardless of gender. Internship options not available.
- Please let me know about any carrier information.
- Job opportunities for past doctorate level researchers. Direct contact with other universities and working on collaborative research projects would be helpful.
- Not much is planned for this purpose and is totally depends on the people you work with.
- Never had any employment experience of becoming a mentor or research/teaching assistant.
- Nothing. 3名
- 無回答 6名

5. Any other comments on GSMDS.

- Thank you for giving us this questionnaire. This is very advantageous to accommodate students to share about their problems and issues. We hope there will always be a questionnaire like this afterwards.
- Thank you for creating such a warm environment. We expect an English speaking staff in Sakuragaoka, who is specially assigned for foreign students. There would be no communication gap and students won't have to suffer. This is highly recommended.
- I hope you have someone who can speak and understand English at Int. student office.
- All Documents should be translated in English.
- In total, GSMDS is good.
- The rent of the 3rd Kaikan (国際交流会館 3号館) is too expensive. The house is too far from Sakuragaoka.
- Generally, I consider it a balanced experience considering my stay here.
- GSMDS need to develop English website, so seminar/lectures schedule available in English.
- Thank you.
- 無回答 12名

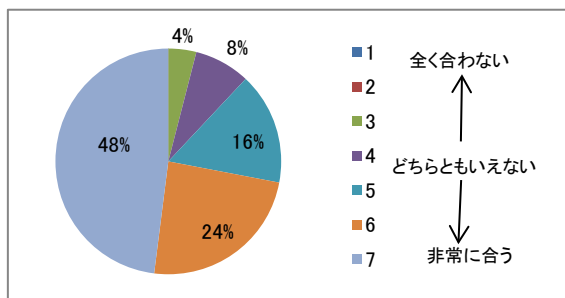
6. 桜ヶ丘キャンパス学習支援システムの活用

1) e-learning 講習会

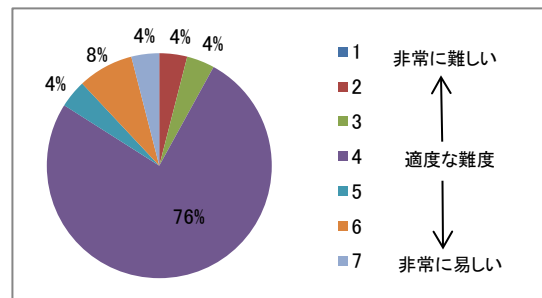
日時	2015年1月22日(木) 16:30~18:00
テーマ	学習支援システム Moodle と e-ポートフォリオの活用
講師	村永 文学 (医学部・歯学部附属病院 医療情報部 講師)
主催	医歯学総合研究科 FD 委員会
共催	医学部 FD 委員会、歯学部 FD 委員会
会場	共通教育棟 6階 インテリジェント講義室
参加者	25名 (研究科医系7名 歯系5名、医学部保健学科5名、附属病院歯科教員1名、他1名)
概要	桜ヶ丘キャンパスで e-learning システムとして利用できる Moodle、医学部、歯学部での利用拡大を予定している学生の学習履歴書ともいえる e-portfolio システムの紹介の後に、参加者はテスト用の ID パスワード (学生、指導者) を用いて、Moodle システムを用いたオンラインでの教材の提供・小テストの実施、ポートフォリオへの振り返りの記録等、集合型対面教育と遠隔教育での支援に役立つ機能を中心としたコース運営の実習を行った。アンケートは下記回答とともに、とてもわかりやすい内容であった、継続して研修を受けたいとの自由記載があった。

図5 アンケート結果

【1 このプログラムは先生のニーズにあっていましたか？】

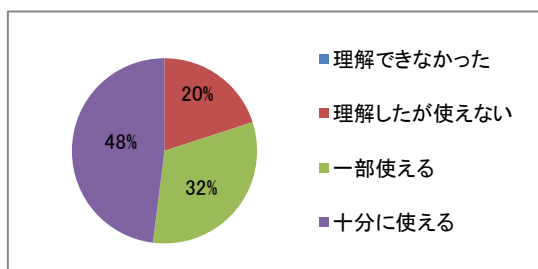


【2 講義とグループ作業の難度は？】

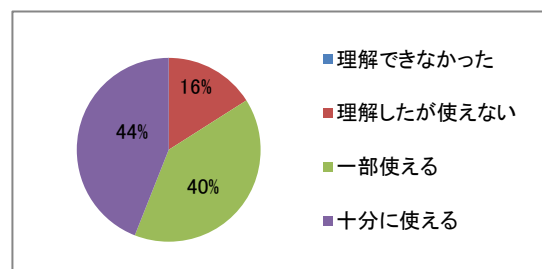


【3 Moodle の以下の機能は理解できましたか？】

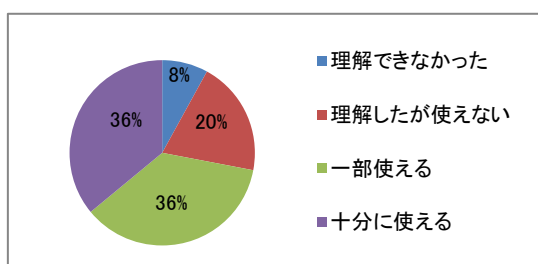
コースの設定



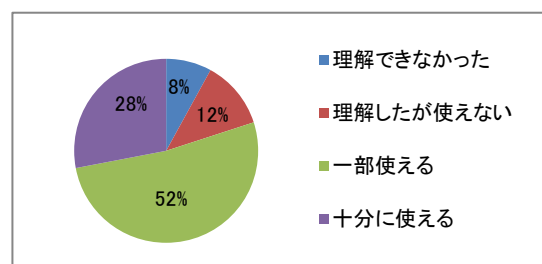
資料の供覧



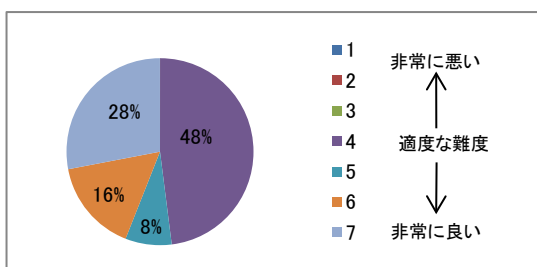
レポートの提出



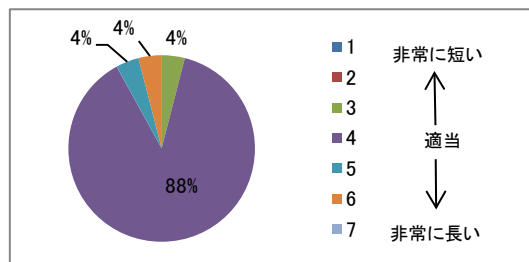
小テスト



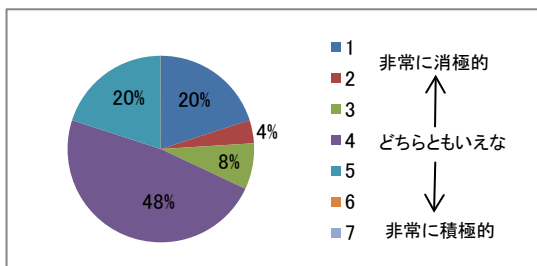
【4 講師の指導は？】



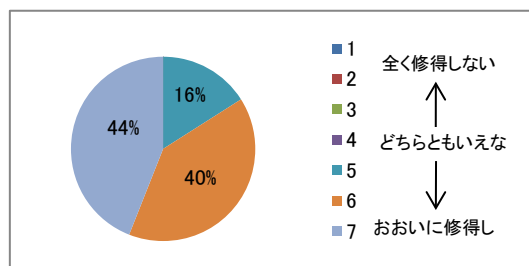
【5 時間は？】



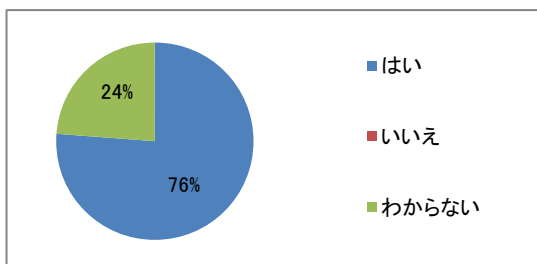
【6 積極的に質問等をしましたか？】



【7 新たな知識、技能を修得しましたか？】



【8 Moodle を利用した教育・研修を実施したいですか？】



2) 桜ヶ丘 Moodle 備品の整備

今年度はFD 委員会予算の一部を Moodle システムの維持、管理のための備品整備に用いた。

7. 大学教育改革フォーラム in 東海 2015

教職員の学外研修として本年度は研究科 FD 活動担当者である医歯学大学院係長前田やよいが下記活動に参加した。

日時 2015 年 3 月 7 日 (土) 10:00~17:00
 会場 名古屋大学東山キャンパス (IB 電子情報館、ES 総合館、中央図書館)
 主催 大学教育改革フォーラム in 東海 2015 実行委員会、名古屋大学高等教育研究センター

日程

10:00	開会挨拶 (夏目 達也 名古屋大学高等教育研究センター教授)
10:10 - 11:00	基調講演 「大学教育を進めるために必要なものとは」 (秦 敬治 追手門学院大学 副学長)
11:15 - 12:00	ポスターセッション
13:00 - 14:45	オーラルセッション I 「長期学外実習での学生の学びを支える教職員の関わり」
15:00 - 16:45	オーラルセッション II 「大学業務の高度化と大学院での学習」

概 容

基調講演 「大学教育改革を進めるために必要なものとは」

大学教育改革を進めるためには、まず大学の存在意義や教育理念・目標を明確にする必要があることが述べられ、改革を推進する主体組織の構成例や改革において教員のみならず職員や学生に期待される役割等について実例を交えて報告があった。

ポスターセッション

学生に質の高い教育を提供するための多様な取組みが計 26 のポスターを通じて紹介された。発表のテーマは、授業改善や職員による教学支援、特色ある留学生交流プログラムや学生派遣時のリスク管理、地域連携における課題等、と多岐に渡り、参加者が他機関のアイデアや取組みについて知り、発表者と意見交換を行うための貴重な機会となった。

オーラルセッションⅠ テーマ：長期学外実習での学生の学びを支える教職員の関わり

現在、多くの大学でインターンシップやボランティア等、多様な形態による学外実習が行われているが、実習現場での指導に関しては現場に任されているケースがほとんどである。本セッションでは、学外実習において学生が深い学びに到達することを目的とし、教員・職員が実習に積極的に関わり、支援することを目指した 2 大学の取組みが紹介された。

オーラルセッションⅡ テーマ：大学業務の高度化と大学院での学習

大学教育改革を進める上で大学職員の役割は年々高まって来ており、その業務はより高度な知識と技能を必要とするものへ変化している。本セッションでは、大学職員としての専門性を高める方法の一つとして大学院での学習を選択した 3 名の事例について紹介が行われ、大学院での学びで得られた知識や研究能力を業務の実践においてどのように還元しているかということについて報告が行われた。

感 想

本フォーラムに参加する以前、FD とは、一部の教職員が大学業務の一部の領域における改善を目指す活動のことであると考えていた。しかし、本フォーラムで講演や他機関の教職員による報告等を聴講した現在では、FD とは、大学の教育改革そのものであり、大学が学生に質の高い学習の機会を提供するという共通の目的のために教職員がそれぞれの部署で改善に取り組むことであると考えようになった。

本フォーラムでは、ポスターセッションやオーラルセッションを通じて他大学の活動や取組みを知ることができ、例えば、今会では、ポスターセッションにおける女子学生の学びを支援するための教育プログラムや留学生のキャリア支援策、海外派遣時のリスク管理等の取組みについての発表が特に印象深いものであった。参加者はフォーラムで報告される様々なアイデアから自学での業務に対するヒントや示唆を必ず与えられるものと考えられ、他の職員にも、勤務の都合が許す限り、ぜひ参加を勧めたいと考えた。

FD とは組織全体の問題であり、大学のスタッフの一人一人がそれぞれの持ち場において質の高い教育の創出を目指す活動のことであるという認識を得たことが最大の収穫であった。

8. おわりに

本年度は桜ヶ丘キャンパスの部局、委員会の協力を得て講演会、講習会、アンケート調査を実施し、多数の教職員が FD 活動に参加することができた。留学生からは極めて有用なご意見をいただいた。教育、国際交流、学生生活支援担当者とも連携を継続し、今後の FD 活動を実施していきたい。

保健学研究科

平成26年度 保健学研究科FD活動報告

1. はじめに

平成26年度の保健学研究科FD委員会の主な活動として

- 1) 学生による授業評価、
 - 2) 修士論文発表会への教員の参加
- を行った。以下にその概略を述べる。

2. 学生による授業評価アンケート

1) 対象科目と方法

対象となる授業科目は、博士前期課程では原則として受講者が4名以上の講義とし（3名以下にあつては授業科目担当者の任意とする）、博士後期課程では全ての講義であった。評価方法は、アンケート調査であり、「あなた自身に関する項目」、「授業に対する評価」、「自由記載」から成り立っている。アンケートの中の質問項目5は、「0回」「1・2回」「3・4回」「5回以上」の選択肢から回答してもらい、その他の質問項目に対しては、「そう思う」「どちらかと言えばそう思う」「どちらかと言えばそう思わない」「そうは思わない」「判らない」の選択肢から選び、回答してもらった。アンケート票は各授業終了までに学生に配布し、無記名で記入させたアンケートを学生に封筒に入れ、厳封の後に教務係りに提出してもらうよう依頼した。

あなた自身について

- 1 この授業のシラバスを前もって読みましたか
- 2 この授業の予習又は復習をしましたか
- 3 この授業科目に関連する本（参考書や文献等）を読みましたか
- 4 授業中にノートをとりましたか
- 5 この授業を何回欠席しましたか

授業に対する評価

- 6 授業はシラバスに沿った内容でしたか
- 7 配布資料は適切であり、授業に役立ちましたか
- 8 授業内容に興味が持てましたか
- 9 授業の進め方は適切でしたか
- 10 教員は授業に対する熱意がありましたか
- 11 授業中の話し方、声の大きさ、明瞭さは良かったですか
- 12 学生の質問に対して適切な対応がなされましたか
- 13 授業を受講して、知力・学力の向上に役立ちましたか
- 14 この授業は、全体的に満足できるものでしたか

この授業に対して、上記以外に考えたこと、良かった点、その他授業改善に役立つ意見があれば書いて下さい。

3) 学生による授業評価アンケートの結果

平成26年度は、前期開講科目31科目、後期開講22科目について実施した。前期開講科目は科目から回答を得（回収率 %）、また後期科目については科目より回答を得た（回収率 %）。アンケート調査の結果を前期開講分（表1）と後期開講分（表2）に分けて、以下に示す。

表1. 平成26年度前期開講授業科目の学生による授業評価結果

質問項目	1 この授業のシラバスを前もって読みましたか				
回 答	1	2	3	4	5
人 数	79	71	59	94	10
%	25	23	19	30	3
質問項目	2 この授業の予習又は復習をしましたか				
回 答	1	2	3	4	5
人 数	79	113	79	36	6
%	25	36	25	12	2
質問項目	3 この授業科目に関連する本（参考書や文献等）を読みましたか				
回 答	1	2	3	4	5
人 数	106	118	56	22	6
%	34	39	18	7	2
質問項目	4 授業中にノートをとりましたか				
回 答	1	2	3	4	5
人 数	219	87	7	3	0
%	69	28	2	1	0
質問項目	5 この授業を何回位欠席しましたか				
回 答	1	2	3	4	-
人 数	288	13	1	0	-
%	95	4	0	0	-
質問項目	6 授業はシラバスに沿った内容でしたか				
回 答	1	2	3	4	5
人 数	178	74	25	2	40
%	56	23	8	1	13
質問項目	7 配布資料は適切であり、授業に役立ちましたか				
回 答	1	2	3	4	5
人 数	228	61	10	6	8
%	73	19	3	2	3
質問項目	8 授業内容に興味を持ってましたか				

回 答	1	2	3	4	5
人 数	246	51	14	0	0
%	79	16	5	0	0
質問項目	9 授業の進め方は適切でしたか				
回 答	1	2	3	4	5
人 数	248	51	12	2	1
%	79	16	4	1	0
質問項目	10 教員は授業に対する熱意がありましたか				
回 答	1	2	3	4	5
人 数	258	46	6	0	0
%	83	15	2	0	0
質問項目	11 授業中の話し方、声の大きさ、明瞭さは良かったですか				
回 答	1	2	3	4	5
人 数	261	47	9	0	0
%	82	15	3	0	0
質問項目	12 学生の質問に対して適切な対応がなされましたか				
回 答	1	2	3	4	5
人 数	259	46	4	0	1
%	84	15	1	0	0
質問項目	13 授業を受講して、知力・学力の向上に役立ちましたか				
回 答	1	2	3	4	5
人 数	255	50	9	1	1
%	81	16	3	0	0
質問項目	14 この授業は、全体的に満足できるものでしたか				
回 答	1	2	3	4	5
人 数	265	39	7	0	0
%	85	13	2	0	0

表2. 平成26年度後期開講授業科目の学生による授業評価結果

質問項目	1 この授業のシラバスを前もって読みましたか				
回 答	1	2	3	4	5
人 数	30	33	28	18	1
%	27	30	25	16	1
質問項目	2 この授業の予習又は復習をしましたか				
回 答	1	2	3	4	5
人 数	22	19	52	19	0
%	20	17	46	17	0
質問項目	3 この授業科目に関連する本（参考書や文献等）を読みましたか				
回 答	1	2	3	4	5
人 数	29	10	53	18	0
%	26	9	48	16	0
質問項目	4 授業中にノートをとりましたか				
回 答	1	2	3	4	5
人 数	79	30	1	1	0
%	71	27	1	1	0
質問項目	5 この授業を何回位欠席しましたか				
回 答	1	2	3	4	-
人 数	82	13	1	0	-
%	85	10	1	0	-
質問項目	6 授業はシラバスに沿った内容でしたか				
回 答	1	2	3	4	5
人 数	71	34	0	5	1
%	64	31	0	5	1
質問項目	7 配布資料は適切であり、授業に役立ちましたか				
回 答	1	2	3	4	5
人 数	81	21	2	5	0
%	74	19	2	5	0
質問項目	8 授業内容に興味を持ってましたか				
回 答	1	2	3	4	5
人 数	85	19	3	0	0
%	78	17	3	0	0

質問項目	9 授業の進め方は適切でしたか				
回 答	1	2	3	4	5
人 数	85	21	4	1	0
%	77	19	4	1	0
質問項目	10 教員は授業に対する熱意がありましたか				
回 答	1	2	3	4	5
人 数	88	18	4	1	0
%	79	16	4	1	0
質問項目	11 授業中の話し方、声の大きさ、明瞭さは良かったですか				
回 答	1	2	3	4	5
人 数	87	16	6	1	0
%	79	15	5	1	0
質問項目	12 学生の質問に対して適切な対応がなされましたか				
回 答	1	2	3	4	5
人 数	94	12	4	1	0
%	85	11	4	1	0
質問項目	13 授業を受講して、知力・学力の向上に役立ちましたか				
回 答	1	2	3	4	5
人 数	91	17	2	1	0
%	82	15	2	1	0
質問項目	14 この授業は、全体的に満足できるものでしたか				
回 答	1	2	3	4	5
人 数	91	17	2	1	0
%	82	15	2	1	0

上記の表1、表2では「そう思う」と回答したものを1、「どちらかと言えばそう思う」と回答したものを2、「どちらかと言えばそう思わない」と回答したものを3、「そうは思わない」と回答したものを4、「判らない」と回答したものを5として表している。なお、質問項目5のみ、「0回」と回答したものを1、「1・2回」と回答したものを2、「3・4回」と回答したものを3、「5回以上」と回答したものを4で表している。

また、オムニバス方式で開講されている科目は、担当教官ごとに学生による授業評価を行ったため、回答数は多くなっている。なお、質問項目によっては、未記入の場合もあり、合計がこの数に満たないものもある。

4) 結果の解釈

平成26年度は大学院博士前期課程に新たに助産師課程が加わり、4人が入学した。助産師課程の場合、必修科目（多くはオムニバス形式）が多く、シラバスを前もって読む必要の無い科目が増えた。そのためか、平成26年度は25年度に比べ、全体としての「あなた自身について」の中の「授業のシラバスを前もって読む」

学生の割合が減少しているが、これはその助産師課程が加わったためかもしれない。

「授業に対する評価」の中の項目6「授業はシラバスに沿った内容でしたか」について、前期では13%の学生が「判らない」と回答している。これは「授業はシラバスに沿った内容ではない」の意味かもしれない、もしそうであれば、改善の必要があると考えられる。

「授業に対する評価」の中の項目14の「授業を受講して、知力・学力の向上に役立ちましたか」と項目15「この授業は、全体的に満足できるものでしたか」については概ね良い評価を得ていると思われた。

- 5) 学生による授業評価の教員へのフィードバック、
学生によるこれらの授業評価の結果は、当該科目の調査票と共に担当教員にフィードバックした。

3. 修士論文発表会への教員の参加

各領域（看護学専攻、理学療法学専攻、作業療法学専攻）で、修士論文発表会に教員が参加し、学生が発表する論文について教員が質問し、意見交換を行った。この発表会には看護学専攻で23名、理学療法学専攻で16名、そして作業療法学専攻では20名が参加した。

4. おわりに

学生による授業評価アンケートは、特に自由記載事項について各教員が今後の授業に活かせるものとなることを期待したい。修士論文発表会へ教員の参加と教員による修士論文評価についてはこれまでよりもさらにより長い時間をかけて行うべきかと思われた。

(文責：医学部FD委員会保健学科部会長 藤野 敏則)

司法政策 研究科

平成 26 年度〈FD活動〉報告書

(司法政策研究科)

1 組織体制

鹿児島大学大学院司法政策研究科（以下、「法科大学院」という）におけるFDを企画・実施する組織として、鹿児島大学大学院司法政策研究科運営規則に基づき、教育活動点検評価委員会（以下、「FD委員会」という）が設置されている。

FD委員会の役割は、法科大学院の教育内容の点検・評価・改善に関すること全般にわたり、その具体的な活動は、「教育活動点検評価活動の実施に関する申し合わせ」に基づいて、各年度のFD委員会が定める活動計画によって決定される。例年実施する活動としては、以下の諸活動が挙げられる。

- ①法科大学院における教育指針・到達目標の検討
- ②学生による授業評価アンケートの実施
- ③学生による期末試験等に対するアンケートの実施
- ④教員相互の授業参観
- ⑤教員自身による映像での自己点検
- ⑥成績評価総括の取りまとめ
- ⑦授業改善のための取組みに関する報告・検討会
- ⑧教員の外部研修の推進
- ⑨法科大学院認証評価および国立大学法人としての各評価への対応
- ⑩FD報告書の作成

法科大学院におけるFD活動は、すべての教員を対象として実施している。研究者教員と実務家教員の双方とも、専任教員及びみなし専任教員も含めて、FD活動に参加している。FD懇談会の開催は、学期の始めに非常勤教員に対しても案内されている。

授業評価アンケート、授業のビデオ録画、教員相互の授業参観については、専任教員の担当科目のみならず、非常勤教員の担当科目も含めた全科目を対象としている。

2 FD活動の概要

平成 26 年度に行ったFD活動の概要は、以下のとおりである。

【4月】

□FD委員会（23日）、FD懇談会（9日）

□主な検討内容：

○平成 26 年度前期 F D 委員会活動計画の策定

【5月】

□ F D 委員会（28 日）、 F D 懇談会（14 日）

□主な検討内容：

○平成 26 年度前期【中間】授業評価アンケート結果の検討と各科目の担当教員が作成する「所感と対応」掲載スケジュールの確認。

○授業ビデオ収録スケジュール確認

【6月】

□ F D 委員会（25 日）・ F D 懇談会（11 日）

□主な検討内容：

○平成 26 年度前期試験修了後の授業評価アンケート実施に関する検討。

審議の結果、従来どおり実施。アンケートの内容や様式について一部修正の上で承認。

○平成 25 年度組織評価報告書を確認。

【7月】

主な活動内容

○平成 26 年度前期最終授業評価アンケートの実施

【8月】

□ F D 委員会（27 日）

□主な検討内容：

○平成 26 年度前期成績評価総括と、各学生の成績及び学習状況に対応した指導の方向性の検討。

【9月】

□ F D 委員会（25 日）・ F D 懇談会（10 日）

□主な検討内容：

○平成 26 年度前期期末試験アンケートの集計結果について検討。アンケート設問への回答分布や自由記述欄への感想に関して意見交換がなされた。

【10月】

□ F D 委員会（22 日）・ F D 懇談会（8 日）

□主な検討内容：

- 平成 26 年度後期 F D 活動実施計画の策定。
- 平成 26 年度後期【中間】授業評価アンケート実施スケジュール確認。
- 授業ビデオ撮影スケジュール日程確認。

【11月】

□ F D 委員会（26 日）・ F D 懇談会（12 日）

□主な検討内容：

- 平成 26 年度後期【中間】授業評価アンケートの回答率に関する検討。
- 授業視聴システムによる視聴体制整備スケジュール確認と、授業参観報告書の提出方針の確認。

【1月】

□ F D 委員会（7 日、28 日）・ F D 懇談会（14 日）

□主な検討内容：

- 平成 26 年度後期【最終】授業評価アンケート実施日程の確認。
- 授業見学（視聴システムも可）と報告書の提出依頼。
- F D 経費の執行状況確認と今後の執行計画に関する検討。
- 学生の履修希望アンケート結果を基にした、司法試験対策も見据えた学生ごとの学習のあり方についての意見交換。
- 授業評価アンケートの回収率向上に向けた意見交換。

【3月】

F D 委員会（3 日）・ F D 懇談会（11 日）

主な検討内容：

- 平成 26 年度後期の成績評価総括について

3 F D 活動の内容

(1) 学生による授業評価アンケートの実施

教育内容や教育方法に対する学生からの評価は、①授業評価アンケート、②「学期末試験」「出題の趣旨／採点のポイント」に対するアンケート、③クラスワークによる担任との相談や懇談、④その他の方法を通じて実施された。

法律基本科目および司法試験の選択科目となっている分野の科目については、①授業中間アンケート（授業のおよそ半分を経過した、前期は 5 月、後期は 11 月）、②授業終了時のアンケートを実施してい

る。講義終了時だけでなく、進行中の授業に対する学生の評価を把握し、開講中の講義の改善に当該学生の評価を活かすために行った。

「学期末試験」「出題の趣旨／採点のポイント」に対するアンケートは、法律基本科目および司法試験の選択科目となっている分野の科目について、期末試験が終了したのち、各科目の成績評価総括報告書が公開された時点で、学生に対するアンケートを実施して、①期末試験の出題が、「基本的な法的知識や体系的理解」「法的思考能力」「事案の事実を把握し分析する能力」をそれぞれどの程度問うものであったか、②成績評価総括報告書に記載された「出題の趣旨／採点のポイント」が、自身の答案を見直して復習するのに資するものであるかどうかを評価した。

上記すべてのアンケート結果は、授業で用いている電子シラバス・システムに掲載されることにより、当該科目の履修者のみならず、すべての学生に向けて公開された。また、最終アンケートについては、翌年度の担当教員が同一である場合は、翌年度のシラバス・システムの欄にも、参考データとしてアンケート結果が掲載された。

授業評価アンケート（中間・最終）の結果が通知されたのち、法律基本科目および司法試験の選択科目となっている分野の科目については、担当教員がアンケート結果に対する「所感と対応」の作成を行った。

（2）クラスワークによる担任との相談や懇談

クラスワークによる担任との相談や懇談では、学生を3名程度のクラスに分けて、これに対して1名の担任と1名の副担任を割り当てて、教員が学生の学修全般や学生生活をケアした。

（3）教員相互の授業参観

法科大学院においては、各教員はすべての授業を自由に相互参観することができる。また、学期ごとに最低でも1回は、他の教員による授業を参観した。

授業参観の感想・評価等については、各教員から報告書として提出され、報告書は、当該科目の担当教員に送付されると同時に、FD懇談会において回覧され、授業改善のための検討資料とされた。

（4）授業のビデオ収録参観

授業を学期ごとに1回ずつビデオ収録し、ネットワーク上のサイトで随時閲覧できる体制を構築している。各教員は、自分自身の講義をこのビデオ映像で視聴して、改善点や成功している点を自ら点検するためのツールとして活用した。

（5）外部研修等への参加

教育連携を結んでいる熊本大学法科大学院のFD活動への参加がある。

今年度は、熊本大学法科大学院において開催された学習会「国学院大学法学部における講義改善の取組みに学ぶ」に2名の教員が参加し、そこでの知見がFD懇談会で報告された後、教員相互で討議・総括がされた。

また、実務家教員が、日本弁護士連合会法科大学院センター主催により東北大学法科大学院で開催された「ローヤリング科目の教え方についての研修会」に参加した。

(6) FD研修会の開催

平成27年2月に、京都産業大学法科大学院の草鹿晋一教授を招聘し、離島における法律相談実習（リーガルクリニックA）を指導する各教員に対して研修会を開催した。非常勤講師も含む科目担当教員をはじめ、同行した実務家（弁護士）も交えて活発な意見交換が行われ、法曹養成を目的とした専門職大学院である法科大学院において、実務を想定した学生指導の観点から大変意義のある研修となった。

(7) 成果に結びつかせるための方策・工夫

法科大学院のFD活動は、教員間の問題意識を共通化するとともに、その取組みを具体的な成果に結びつけるため、①情報伝達の双方向・多方向性、②日常的な意見交換の実施を重視している。

法科大学院におけるFD活動は、月例で開催されるFD懇談会を中核的な「場」として実施している。授業参観の結果、授業評価アンケートの結果、授業評価アンケートに対する応答内容、各教員が参加した外部研修など、各教員がそれぞれに行ったFD活動は、すべて定例のFD懇談会の席上で全員に対して開示される。そして、懇談会では、各種報告書等の内容に基づいて、自由な意見交換が行われる。これによって、個々の活動を記録・蓄積するだけでなく、その成果を常に全教員がリアルタイムに近い形で共有し、即時に議論の対象とすることによって、個々の活動により得られた知見を多面的に検証し、共有している。

また、この懇談会を教授会と同頻度で定例化することによって、授業改善のための情報交換・意見交換を特別な「行事」に仕立てるのではなく、日々の教育活動や研究科運営と一体化した日常的な取組みとしている。懇談会では、FD委員会が設定したテーマに限らず、各分野や各教員から授業や学生の状況に関する問題提起を自由に行う時間帯を設けている。

臨床心理学 研究科

臨床心理学研究科 FD 活動報告

1. はじめに

臨床心理学研究科 FD 委員会では、平成 26 年度 FD 活動として学生による授業評価アンケート、GPA による厳格な成績評価、教員による FD 研修会を実施したので、その概要を以下に報告する。

2. 学生による授業評価の実施

(1) 実施時期

原則として、26 年度前期第 1 回目が 6 月 2 日（月）～6 日（金）、第 2 回目が 7 月 14 日（月）～18 日（金）、後期第 1 回目が 11 月 17 日（月）～21 日（金）、第 2 回目が 1 月 13 日（火）～19 日（月）であった。

「臨床心理地域援助実習」（いわゆる学外実習科目）は、その科目の特殊性を考慮し、各 Semester 終了後の 1 回のみの実施とした。

(2) 各科目の評価項目

専門職大学院である本研究科では、幅広い領域で活躍する高度専門職業人養成に特化した授業科目を網羅し、それぞれ独自の質問項目を設定している。また、それらの質問項目は、必要に応じて、よりふさわしい評価項目への修正・改定が柔軟に行われることが望ましい。本年度は、昨年度に「臨床心理実践研究」が新設されたことにもない、「臨床心理地域実習Ⅱ、Ⅳ」の評価方法に変更が行われた。

現時点での評価項目を以下に挙げる。

<講義科目>

1. 授業を総合的に 5 段階で評価してください。
2. 授業のテキスト・資料等は適切でしたか（テキスト・資料等を使用した場合のみ回答してください）。
3. 授業の内容は理解できましたか。
4. 授業の内容に満足していますか。
5. 授業を通して臨床心理学の理論に興味が増しましたか。
6. あなたは授業を熱心に受講しましたか。
7. この授業に対するご意見を自由に書いてください。

<演習科目>

1. 授業を総合的に 5 段階で評価してください。
2. 授業の内容は理解できましたか。
3. 授業の内容に満足していますか。
4. 授業を通して臨床心理学に興味が増しましたか。
5. 授業を通して講義（理論）の理解や実習体験の理解につながりましたか。
6. あなたは授業を熱心に受講しましたか。
7. この授業に対するご意見を自由に書いてください。

<実習科目>

1. 実習を総合的に5段階で評価してください。
2. 実習での体験に満足していますか。
3. 実習体験を通して臨床心理学や臨床業務にイメージが増しましたか。
4. 実習体験の中で講義や演習で学んだことが役に立ちましたか。
5. あなたは実習に熱心に取り組みましたか。
6. この授業に対するご意見を自由に書いてください。

(3) 結果

結果は以下の通りであった。

表1. 前期第1～2回目の講義科目における授業評価(3科目平均評価点)

	第1回目			第2回目		
	最高	最低	平均	最高	最低	平均
1. 授業を総合的に5段階で評価してください	5.0	3.7	4.7	5.0	3.3	4.5
2. 授業のテキスト・資料等は適切でしたか	5.0	3.5	4.4	5.0	3.3	4.4
3. 授業の内容は理解できましたか	5.0	3.3	4.0	5.0	3.3	4.1
4. 授業の内容に満足していますか	5.0	3.3	4.5	5.0	3.3	4.5
5. 授業を通して臨床心理学の理論に興味が増しましたか	5.0	3.3	4.7	5.0	3.3	4.6
6. あなたは授業を熱心に受講しましたか	5.0	2.7	4.4	5.0	3.0	4.3

(科目名) 臨床心理学原論・臨床心理学入門・臨床精神薬理学特論

表2. 前期第1～2回目の演習科目における授業評価(6科目平均評価点)

	第1回目			第2回目		
	最高	最低	平均	最高	最低	平均
1. 授業を総合的に5段階で評価してください	5.0	3.2	4.5	5.0	3.7	4.6
2. 授業の内容は理解できましたか	5.0	2.8	4.3	5.0	3.3	4.3
3. 授業の内容に満足していますか	5.0	3.7	4.5	5.0	3.8	4.6
4. 授業を通して臨床心理学に興味が増しましたか	5.0	3.5	4.6	5.0	3.7	4.7
5. 授業を通して講義(理論)の理解や実習体験の理解につながりましたか	5.0	3.0	4.6	5.0	3.7	4.7
6. あなたは授業を熱心に受講しましたか	5.0	3.2	4.5	5.0	3.8	4.5

(科目名) 総合的事例研究演習Ⅰ・臨床心理査定演習Ⅰ・臨床心理事例研究演習Ⅰ・臨床心理関連行政論・臨床心理面接演習Ⅰ・医療心理臨床論

表3. 前期第1～2回目の学内実習科目における授業評価(4科目平均評価点)

	第1回目			第2回目		
	最高	最低	平均	最高	最低	平均
1. 実習を総合的に5段階で評価してください	5.0	4.0	4.6	5.0	3.3	4.4
2. 実習での体験に満足していますか	5.0	3.5	4.5	5.0	3.3	4.5
3. 実習体験を通して臨床心理学や臨床業務にイメージが増しましたか	5.0	3.8	4.6	5.0	3.5	4.6
4. 実習体験の中で講義や演習で学んだことが役に立ちましたか	5.0	3.5	4.6	5.0	3.3	4.4
5. あなたは実習に熱心に取り組みましたか	5.0	3.5	4.7	5.0	3.8	4.6

(科目名) 臨床心理実践研究Ⅰ・臨床心理実践研究Ⅲ

臨床心理査定・面接実習Ⅰ・臨床心理査定・面接実習Ⅲ

表4. 前期第1～2回目の学外実習科目における授業評価(2科目平均評価点)

	第1回目			第2回目		
	最高	最低	平均	最高	最低	平均
1. 実習を総合的に5段階で評価してください				5.0	3.5	4.6
2. 実習での体験に満足していますか				5.0	3.0	4.6
3. 実習体験を通して臨床心理学や臨床業務にイメージが増しましたか	(実施なし)			5.0	3.0	4.6
4. 実習体験の中で講義や演習で学んだことが役に立ちましたか				5.0	3.0	4.6
5. あなたは実習に熱心に取り組みましたか				5.0	3.5	4.8

(科目名) 臨床心理地域援助実習Ⅰ・臨床心理地域援助実習Ⅲ

表5. 後期第1～2回目の講義科目における授業評価(3科目平均評価点)

	第1回目			第2回目		
	最高	最低	平均	最高	最低	平均
1. 授業を総合的に5段階で評価してください	5.0	3.0	4.4	5.0	2.7	4.4
2. 授業のテキスト・資料等は適切でしたか	5.0	2.3	4.3	5.0	3.0	4.4
3. 授業の内容は理解できましたか	5.0	3.0	4.1	5.0	2.7	4.2
4. 授業の内容に満足していますか	5.0	2.7	4.3	5.0	2.7	4.5
5. 授業を通して臨床心理学の理論に興味が増しましたか	5.0	3.0	4.5	5.0	2.7	4.6
6. あなたは授業を熱心に受講しましたか	5.0	3.0	4.3	5.0	3.0	4.3

(科目名) ストレスマネジメント論・認知行動療法論・臨床心理面接学原論

表6. 後期第1～2回目の演習科目における授業評価(6科目平均評価点)

	第1回目			第2回目		
	最高	最低	平均	最高	最低	平均
1. 授業を総合的に5段階で評価してください	5.0	3.0	4.2	5.0	3.3	4.4
2. 授業の内容は理解できましたか	5.0	3.0	4.1	5.0	3.2	4.2
3. 授業の内容に満足していますか	5.0	3.0	4.2	5.0	3.0	4.3
4. 授業を通して臨床心理学に興味が増えましたか	5.0	3.2	4.5	5.0	3.4	4.5
5. 授業を通して講義(理論)の理解や実習体験の理解につながりましたか	5.0	3.2	4.3	5.0	3.2	4.4
6. あなたは授業を熱心に受講しましたか	5.0	3.3	4.3	5.0	3.0	4.3

(科目名) 総合的事例研究演習Ⅱ・臨床心理査定演習Ⅱ・青年期心理臨床論・
臨床心理面接演習Ⅱ・エスノグラフィック心理臨床論・
臨床心理事例研究演習Ⅱ

表7. 後期第1～2回目の学内実習科目における授業評価(4科目平均評価点)

	第1回目			第2回目		
	最高	最低	平均	最高	最低	平均
1. 実習を総合的に5段階で評価してください	5.0	3.5	4.4	5.0	3.3	4.5
2. 実習での体験に満足していますか	5.0	3.3	4.5	5.0	3.5	4.5
3. 実習体験を通して臨床心理学や臨床業務にイメージが増えましたか	5.0	3.5	4.6	5.0	3.3	4.6
4. 実習体験の中で講義や演習で学んだことが役に立ちましたか	5.0	3.3	4.5	5.0	3.5	4.4
5. あなたは実習に熱心に取り組みましたか	5.0	3.8	4.6	5.0	3.5	4.6

(科目名) 臨床心理実践研究Ⅱ・臨床心理実践研究Ⅳ
臨床心理査定・面接実習Ⅱ・臨床心理査定・面接実習Ⅳ

表8. 後期第1～2回目の学外実習科目における授業評価(2科目平均評価点)

	第1回目			第2回目		
	最高	最低	平均	最高	最低	平均
1. 実習を総合的に5段階で評価してください				5.0	3.5	4.5
2. 実習での体験に満足していますか				5.0	3.0	4.6
3. 実習体験を通して臨床心理学や臨床業務にイメージが増えましたか	(実施なし)			5.0	3.5	4.7
4. 実習体験の中で講義や演習で学んだことが役に立ちましたか				5.0	3.0	4.3
5. あなたは実習に熱心に取り組みましたか				5.0	4.0	4.8

(科目名) 臨床心理地域援助実習Ⅱ・臨床心理地域援助実習Ⅳ

3. 厳格な成績評価制度について

(1) 成績評価方法 (表 9)

成績評価方法は、表 9 の通りである。なお、この厳格な成績評価制度は、講義科目と演習科目に限られる。

表 9. 講義、演習科目の評価基準

	評価	評価得点	
合格	A+	90 点以上	特に優れた成績を示した者
	A	80～89 点	優れた成績を示した者
	B	70～79 点	合格と十分認められる者
	C	60～69 点	合格と認められる最低限度の成績を示した者
不合格	F	60 点未満	

(2) GPA (Grade Point Average) の計算方法 (表 10)

①GPA は、各科目の GP (Grade Point) に各授業科目単位数を乗じ、その総和を GPA 適合の履修登録科目総単位数で割って算出する。

②GPA 評価対象科目は受講生 10 名以上の講義、演習科目であり、受講生が 10 名に満たない授業ならびに実習科目は含まれない。

例) $GPA = \{(\text{臨床心理学原論 GP} \times 2 \text{ 単位}) + (\text{臨床心理面接学原論 GP} \times 2 \text{ 単位}) + (\quad) + (\quad) \dots\} / \text{GPA 適合の履修登録科目総単位数}$

表 10. GPA 適合科目 (講義・演習) の GP 配点表

	評価	評価得点	GP 得点	
合格	A+	90 点以上	4.0	特に優れた成績を示した者 (受講者の上位 20% までの人数につけることができる)
	A	80～89 点	3.0	優れた成績を示した者 (A+ と A の学生が、合計で 40% 以内の人数になるようにつける)
	B	70～79 点	2.0	合格と十分認められる者
	C	60～69 点	1.0	合格と認められる最低限度の成績を示した者
	不合格	F	60 点未満	0.0

※GPA の最高点は 4.0 であり、通常の 5 段階評価とは異なる。

(3) GPA の問題点

現在のところ、臨床心理学研究科では GPA は上記 (2) の計算方法によって算出されており、実習科目は含んでいない。しかしながら、専門職大学院として高度な専門職を養成する立場からは、むしろ実習科目にこそ専門職大学院としての特徴ある評価がみられるべきではなかろうかという議論が研究科内で交わされている。今後、研究科教務委員会・実習委員会等で、実習科目を GPA に反映させるにはどうしたらよいか、専門職大学院にふさわしい GPA のあり方が検討される予定である。

4. F D 研修会

平成 26 年度は下記の通り、国立大学法人として臨床心理士を養成する同じ立場から、①公認心理師の国家資格化への対応、②高度専門職人を養成するための特色ある教育課程について、③高度なスキルを修得するための臨床心理実習について、④学生の成長を促進するコミュニケーション力について、討論を交わし、九州大学と鹿児島大学の教育課程について情報交換を行った。

平成 26 年度 F D 研修会

日時：2014 年 7 月 11 日（金）13:30～16:00

場所：法文棟 1 階小会議室

講師：増田健太郎（九州大学大学院人間環境学府教授）

演題：専門職大学院における教育課程の充実と強化について

5. 特筆すべき取組みや改善事例

学生の授業評価アンケートへの具体的な改善策として、アンケートへの意見を活かすために、これまで各学期第 2 回目のアンケートを 15 回目の授業終了時に実施していたが、14 回目を実施し、第 15 回目には、学生の意見に対するフィードバックを各教員が授業内で行なった。結果として、学生からの意見が教員に伝わる手応えを学生は得ることができただけでなく、教員の授業の進め方の意図を理解できたと好評であった。

文責：平成 26 年度 FD 委員長・安部恒久

連合農学 研究科

F D活動報告書

(平成 26 年度)



大学院連合農学研究科

平成 2 7 年 3 月

大学院連合農学研究科 F D 活動報告

1. はじめに

大学院連合農学研究科は、佐賀大学、琉球大学と鹿児島大学の3大学4研究科が連合した農水産学系の独立博士課程大学院で、高度な専門的能力と豊かな学識をそなえた研究者の養成を目的として、構成大学が連合し、多彩な教員組織を構築して、研究施設及び設備も連合しながら教育研究体制を整えて、社会・世界に貢献する博士を輩出することを目指している。また、社会人並びに外国人留学生を積極的に受け入れ、東アジアにおける農水産学の教育研究の中核となるとともに、農水産業及び地域の発展に寄与することを目的としている。

本研究科は、1988(昭和63年)に設立され、平成19年度宮崎大学の離脱に伴って、平成21年度に4専攻11連合講座を3専攻9連合講座に改組し、単位制導入の改革を行った。平成26年5月1日現在、日本人学生65名外国人留学生44名計109名が在籍している。

博士の学位は、12単位以上修得の上、学位論文の審査及び最終試験に合格して授与されるが、新カリキュラムとして職業人教育や国際感覚を養うことを意図した人材養成学生支援セミナーや国際農学特別講義などを創設することで大学院教育の実質化を目指している。さらに、年に一度、地理的に離れた3構成大学の学生が一堂に会して行う農学特別講義Ⅰ(一般セミナー)の実施や、多地点制御遠隔講義システムを用いた授業を行うことで教育方法等の工夫を行っている。

また、本研究科では、学生1人に対し、主指導教員1人、副指導教員2人の計3人による指導体制をとっており、1年次の学生には「中間報告会」、2年次の学生には「中間発表会」を課し、その達成状況の検証を実施している。

F D活動に関しては、平成19年度に代議委員会のサブ委員会としてF D委員会が設けられ、農学特別講義Ⅰ(一般セミナー)を中心とした授業アンケートや修了生アンケートの集計・解析評価を行い、改善に向けて取り組んでいる。

平成22年度は、3年に1度実施してきた自己評価・自己点検を行った。そして、さらにその自己評価書に基づき、平成12年度以来途絶えていた外部評価も受けて、21年改組後の連合農学研究科の教育システムや改善状況を把握することにした。平成24年度には、本研究科における学位の質の保証を確立し、研究者、技術者、教育者として地域社会及び国際社会に幅広く貢献できるリーダーを養成するために、3つのポリシーを策定した。

平成26年度のF D活動としては、F D委員会を4回開催し、「学生教育の改善及び教育体制の向上を図ること」をテーマに掲げ、本研究科における課題及びアンケートのデータ分析、それに伴う改善に向けた検討を継続して行い、今後の英語教育の充実に向けて、学生の海外研修等への意識調査を実施し、教員対象の英語講義のためのセミナー開催などを実施した。

2. 連合農学研究科における3つのポリシー

(1) アドミッションポリシー(入学者受入方針)

農林水産学分野、すなわち生命科学に基づく食料生産や生物資源環境に対する興味と問題意識を持ち、学位取得に至るまでの熱意と能力を備え、課題解決と学理探究を目指す、学生および社会人を国内外から積極的に受け入れる。

(2) カリキュラムポリシー(教育カリキュラム・学習指針)

本研究科では、「生物生産科学」、「応用生命科学」、「農水圏資源環境科学」のそれぞれの専攻分野

で、次に掲げる学位プログラム教育と高度人材養成教育を行う。

学位プログラム教育：農学に関連する幅広い学問と高度な専門知識・技能を修得させ、研究指導を通して諸課題を探索・解決する能力を向上させる。

高度人材養成教育：博士課程学生として確かな分析力・俯瞰力・説明能力を身につけさせるとともに、困難な課題に挑むチャレンジ精神やグローバルな視野の獲得など、実社会の発展に貢献できる能力を育てる。

(3) ディプロマポリシー（学位授与方針）

本研究科の定める所定の単位を履修するとともに、学術誌に発表した主論文に基づき作成した学位論文の審査及び最終試験に合格することが学位取得の要件である。なお、取得時においては以下の能力が具備されていることが期待される。

1. 「博士」として社会から期待される品位と高度な専門知識を持ち、農林水産分野の課題探求と解決に至るまでの研究を、自立的に遂行できる能力を具備していること。
2. 「研究者・技術者・教育者」として、地域社会から国際社会まで幅広く活躍できる能力とリーダーシップ精神が涵養されていること。



(多地点制御遠隔講義システムを用いた授業)

3. 「農学特別講義 I（一般セミナー）」の開講と改善に向けたアンケート調査の結果と分析

本研究科では、3構成大学（4研究科）に配属されている学生が一堂に会し、3日間の集中講義形式で「農学特別講義 I（一般セミナー）」を実施しており、1年次及び2年次の2回受講（2単位）することを必須としている。

本セミナーは、全学生を対象として、個人の専門に偏らない幅広い農林水産学分野の知識の習得を目的としており、6名の内外の講師による講義、全学生を4班に分けて1年生が各自の研究発表を行う専攻セミナー、2年生全員（未発表の3年生を含む。）が研究成果報告を行うポスターセッション（情報交換セミナー）で構成されている。

講義は、先端的でトピック性のある内容とされ、広範囲で専門的に高い水準のものであり、研究の視野が広がることが期待される。また、専攻セミナー及びポスターセッションは、学生のプレゼンテーション能力の向上に役立つものであり、国籍を超えた貴重な交流の場でもある。

また、開設した当初から、受講生を対象にアンケート調査を行い、その集計結果の分析を参考に、授業内容等の改善を図ることがFD活動の第一の取り組みになると考えている。

平成26年度は、佐賀大学の担当により、11月5日～7日の3日間の日程で開催され、学生50名、教職員20名の参加があり、外部講師を交えて連大教員・学生による交流会も併せて実施された。

平成26年度 鹿児島大学大学院連合農学研究科・農学特別講義 I (一般セミナー) 日程表

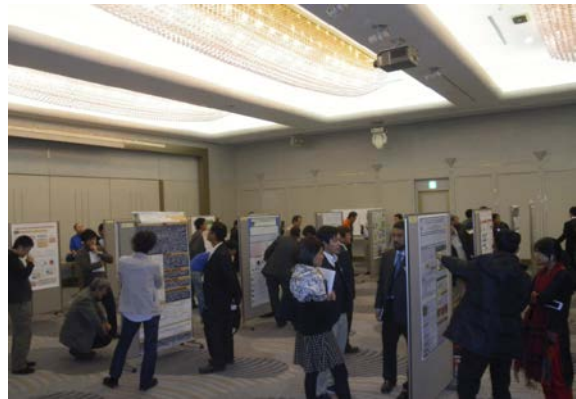
時 日付	9:00	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00	18:00	19:00	
11/5(木)								15:00	15:45	16:30	18:30	
								受付	開 講 式 ・ 写 真 撮 影	専攻セミナー		
11/6(木)	9:00	10:30	10:40	12:10	13:10	14:40	14:50	16:20	16:30	18:00	19:00	
	受付	セミナーA 「高地における家畜化と家畜利用: アンデスとヒマラヤの遺伝学研究」 川本 芳 京都大学農林学研究所 准教授	休憩	セミナーB 「植物リフェノールの機能と化学的性質(柿タンニンと紅茶を中心に)」 田中 陸 長崎大学大学院薬学総合研究科 教授	昼食	セミナーC 「ステロイドホルモンが可る多様な生理作用: 主にアンドロゲンによる雄性化について」 萩野 由紀子 自然科学研究機構 基礎生物学研究所 助教	休憩	セミナーD 「システムとしての葉の光合成系: なぜ葉は緑色なのだろうか」 寺島 一郎 東京大学大学院理学系研究科 教授	休憩	情報交換セミナー (ポスターセッション)	交流会	
11/7(金)	9:00	10:30	10:40	12:10	12:40							
	受付	セミナーE 「1億年の歴史をもつシロアリから何を学ぶ?」 板倉 修司 近畿大学農学部 教授	休憩	セミナーF 「都市の生態系における動物の行動」 Lisa Filippi Hofstra 大学 (アメリカ ニューヨーク州) 生物学科 准教授	閉 講 式							



平成26年度 大学院連合農学研究科 農学特別講義 I (一般セミナー)



「農学特別講義 I（一般セミナー）」の講義



ポスターセッション（情報交換セミナー）

農学特別講義 I（一般セミナー）参加学生から徴した平成 26 年度のアンケートの集計結果は次表のとおりである。〔参加学生：50 名 アンケート提出者：42 名 アンケート回収率：84%〕

平成 26 年度農学特別講義 I（一般セミナー）アンケート調査結果

セミナーの理解度について						
〔回答項目〕	セミナー-A	セミナー-B	セミナー-C	セミナー-D	セミナー-E	セミナー-F
ほぼ理解できた	18名 (43%)	17名 (41%)	19名 (45%)	19名 (45%)	22名 (52%)	22名 (52%)
半分程度理解できた	18名 (43%)	19名 (45%)	20名 (48%)	16名 (38%)	19名 (45%)	17名 (41%)
理解できなかった	6名 (14%)	6名 (14%)	3名 (7%)	7名 (17%)	1名 (3%)	3名 (7%)
セミナーの運営・企画等について						
〔回答項目〕	日程 (時期)	日程 (日数)	会場			
良 い	37名 (88%)	38名 (90%)	37名 (88%)			
悪 い	1名 (3%)	3名 (7%)	2名 (5%)			
そ の 他	4名 (9%)	1名 (3%)	3名 (7%)			
専攻セミナーについて						
〔回答項目〕	グループの分け方					
良 い	38名 (90%)					
改善すべき	4名 (10%)					
無 回 答	0名					
専攻・情報交換セミナーについて						
〔回答項目〕	プレゼンテーション	ポスターセッション	交流会について			
意義がある	26名 (62%)	34名 (81%)	34名 (81%)			
少しは意義がある	14名 (33%)	7名 (17%)	6名 (14%)			
そ の 他	2名 (5%)	1名 (2%)	2名 (5%)			
無 回 答	0名 (0%)	0名 (0%)	0名 (0%)			

①セミナーの理解度について

ほとんどの講義で、日本語と英語の併用で実施していることにより、理解度が上がっているが、専門用語については、日本語の補足が必要であるとの意見があった。

また、ほとんどの講義について、「非常に解りやすく、有意義なテーマだった。」「研究内容、研究成果、利用方法等興味深かった。」等の意見が見られたが、講義内容が専門性の高いものについては、理解が困難だったとの意見があった。専門用語については、用語説明と配付資料がある

とより理解できると思うという意見が多くみられた。

②セミナーの運営・企画等について

「時期」「日数」「会場」については、約 90%の学生から「良い」との評価を得られているため、今後も従来通りの実施方法を考えている。

③専攻セミナー・情報交換セミナーについて

学生間での研究についてのディスカッションの時間がもっと多く取れるように改善してほしいとの意見があった。

情報交換セミナーについては、異分野の研究を知る機会が得られたこと、自分の研究に役立つ情報があり有意義だったことなどの意見が多かった。

④セミナー全般について

- ・事前の案内を詳細にしてもらえると助かる。
- ・せっかく構成大学の学生が一堂に会する機会なので、施設見学等現場の実態に触れる機会も設けてほしい。また、開催大学についての研究や施設等の紹介があったらいいと思う。
- ・社会人学生の場合、仕事との兼ね合いがあるので、レポート対応を検討してほしい。
- ・自分たちの研究についてのディスカッションの時間がもっとほしい。

アンケートによる意見等を踏まえて、教務委員会を通して構成を検討し、次年度に鹿児島大学農学部当番で開催される本セミナーでは、講義を6コマから4コマに変更し、エクサカーションを取り入れ、併せて研究紹介等も検討していくこととした。

4. 人材養成学生支援セミナーⅠ・Ⅱ

平成 22 年度から、本研究科では、博士課程修了者が社会から何を求められているかを理解し、今後の修学姿勢及び社会へ出る際の心構え等の修得に役立てることを目的に、各方面の第一線で活躍する方々からより実践的な講演をしていただく機会として、「人材養成学生支援セミナーⅠ」を開催している。

本セミナーは、選択科目であり、集中講義形式で行われ、1単位となっている。

平成 26 年度は、鹿児島大学農学部担当の基、7月31日、8月1日に8コマ8名の外部講師により、多点制御遠隔講義システムを使用して各構成大学に配信して実施し、連大生 12 名、修士課程学生等 33 名の計 45 名の参加者があった。なお、今年度は、各構成大学研究科から講師を2名ずつ推薦していただき、各研究科で講演を行うことで、多くの学生が直接講演を聴講できる試みを行った。今後もその成果が繋がるようにしたい。

平成 24 年度から、連大生だけでなく、研究者を目指す修士課程や学部の学生及び教職員の参加も推進しており、講師の方々の広い視野からの有意義な講話は、今後企業や研究機関の研究者を目指している学生にとって、大きな励みと貴重な教訓になったと思われる。学生のみならず、教員にとっても教育指導を考える上で、参考になるものが得られたのではないだろうか。

今後もより広い分野の講師を迎えて、多くの学生及び教職員の意識向上に繋がるよう実施していくとともに、より一層の協力体制を築けるように、企業及び研究機関の開拓に努力していくことも必要になってくると思われるため、今年度から、各構成大学に就職支援活動担当教員を置き、本セミナーを推進していくこととしている。

また、10月には、水産学部の練習船「新かごしま丸」に乗船して、我が国の国土とそれを取り巻く水圏に関する総合的理解を持った人材養成の一翼を担うことを目的とした「人材養成学生支援セミナーⅡ（洋上セミナー）」を実施しており、平成 26 年度は、10月9日～17日（9日間）の乗船により、フィールド及び寄港地高雄（台湾）での実践的な学習、高度な専門能力を涵養することを目指して、連大生

6名が参加した。

人材養成学生支援セミナーⅠ・Ⅱともに継続実施し、地域社会、国際社会で幅広く活躍できる能力と意識の養成に繋がるよう、今後も整備していかねばならない。

平成26年度 鹿児島大学大学院連合農学研究科「人材養成学生支援セミナーⅠ 2014」日程表

	8:50	9:00	10:20	10:30	11:50	13:00	14:20	14:30	15:50	16:00	17:40
1日目 7月31日(木) July 31(Thu)	開講挨拶 Opening	講義1 Lec1 高学歴学生が「今」やっておくべきこと —研究と社会のつながり— 塚原 正俊 株式会社バイオジェット 代表取締役 Higher education students to be done now —Ties of society and research— Masatoshi TSUKAHARA BioJet Co., LTD President	講義2 Lec2 一歩踏み出す 侯 徳興 鹿児島大学農学部 教授 Take one step forward De-Xing HOU Kagoshima University Professor	講義3 Lec3 産総研が求める人材 杉元 宏行 愛媛大学農学部 准教授 AIST will ask "What potentials do you have for society??" Hiroyuki SUGIMOTO Ehime University Associate Professor	講義4 Lec4 「フリーの研究者」という生き方 —曲がりくねった夢街道を道なりに進む— 伊藤 春香 独立行政法人 水産総合研究センター 支援研究員 Live a life as a "freelance researcher" Haruka ITO Fisheries Research Agency Researcher	総合討論会 交流会 Discussion					
		講義大学	琉球大学 University of the Ryukyus	鹿児島大学 Kagoshima University	鹿児島大学 Kagoshima University	鹿児島大学 Kagoshima University	各大学				
2日目 8月1日(金) August 1(Fri)	開講挨拶 Opening	講義5 Lec5 製薬会社におけるメディカル 部門の仕事について 村田 修治郎 ノバルティスファーマ(株) マネージャー A work of the medical affairs in pharmaceutical company Shujiro MURATA Novartis Pharma K.K. Manager	講義6 Lec6 「原因」と「結果」の法則 我が人生を顧みて・・・ 明石 良 宮崎大学農学部 教授 As a man thinketh, a turning point in my life Ryo AKASHI Miyazaki University Professor	講義7 Lec7 低コレステロール卵黄の開発 半田 明弘 キュービー(株) ブリック＆エグゼクティブ AKIHIRO HANDA Kewpie Co., LTD Principal Corporate Scientist	講義8 Lec8 農学から広がる私のキャリア 西川 和孝 専門教育大学大学院 学校教育研究科 教授 My career that spread from agricultural science Kazutaka NISHIKAWA Naruto University of Education Professor	閉講挨拶 Closing					
		講義大学	琉球大学 University of the Ryukyus	佐賀大学 Saga University	鹿児島大学 Kagoshima University	佐賀大学 Saga University					

場所：各大学 SINET 設置教室 Place: Sinet room of each University
 佐賀大学：佐賀大学農学部1号館南棟1階学生演習室
 鹿児島大学：鹿児島大学連合農学研究科3階会議室
 琉球大学：琉球大学農学部2階会議室



人材養成学生支援セミナーⅠ（鹿児島市）



洋上セミナー（船上での漁獲測定）

5. 英語論文作成指導セミナー

平成23年度から、学生の英語論文作成のための知識の習得・向上のために英語論文の作成法及び書き方などの指導としてのセミナーを、一部インターネットを使用して、多地点制御遠隔講義システムにより各構成大学へ配信して実施している。

本セミナーは、学生及び教員からも高評価を得ており、継続的な開催を希望する意見が多く、学位論文作成のみでなく、グローバル化に対応した、国際的に活躍できる人材を育成する上でも、実践的な教育として、今後も継続して開催していくこととしている。

平成24年度は、英語論文のみならず、研究者の「書く」能力の向上を図ることを目的として開催し、添削作業を取り入れ、より実践的な指導が行われた。

平成 26 年度においては、5名の学生の参加があり、インターネット辞書利用により応用問題解説を取り入れ、的確な指導の基、高い評価が得られた。

6. 分野別セミナーの開催

平成 24 年度から、構成大学間の連携を促進し、さらに地域特性に根ざした産学官の連携も視野に入れて、連大生を中心とした若手研究者の意欲の向上に資することを目的とした「分野別セミナー」を開催している。

平成 26 年度は、鹿児島大学において農芸化学分野の分野別セミナーが開催され、外部講師による講演会、博士課程学生による口頭発表及びポスター発表が行われ、同分野に関わる工場見学を実施し、今後の博士論文研究の遂行と進路選択等に大いに役立つものとなった。

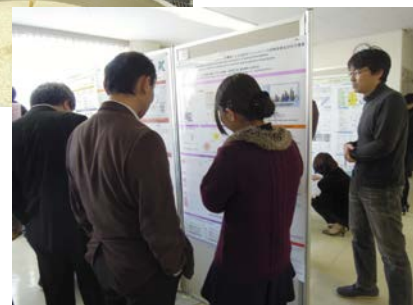
なお、本セミナーには、学内外からの研究者、学生の多数参加があり、教員 18 名、学生 30 名の合計 48 名が集い、有意義なものとなった。今後も他の分野においても開催する機会を広げ、分野ごとに議論、研究・教育を行える環境を整備し、大学間及び地域と共同・連携した共同研究プログラムの推進にも繋がるものと期待するところである。



「分野別セミナー（農芸化学）」



工場見学



「分野別セミナー ポスター発表」

7. 英語講義のためのセミナー開催

グローバル化が急速に進展している昨今の事情を踏まえ、連大教員の教育力向上のための取組として授業方法等の改善を図るために、平成 26 年度に、英語授業のあり方、授業の進め方等に精通した、本学水産学研究所長に講師をお願いして「英語講義のためのセミナー」を開催した。

講演に際して水産学研究科（修士課程）の学生 5 名に出席願い、同学生に対して英語による模擬授業が行われ、引き続き「専門分野の知識・技術の英語での運用能力を高める」と題して、スライドにより講演があった。当日は、多地点制御遠隔講義システムを利用し、佐賀大学及び琉球大学にも同時発信され、多数の参加者の下、教員にとって参考となる取組みが示され、有意義なセミナーとなった。

本セミナーを今後の連大の英語授業の向上に生かすとともに、今後もこのような機会を継続して設けていきたい。

（参加者；1月21日（水）鹿児島大学水産 30名

2月24日（火）鹿児島大学農学 18名 佐賀大学 9名

琉球大学 10名 合計 67名）



8. 修了生を対象としたアンケートの実施

例年3月と9月に、修了生を対象としたアンケートを実施している。

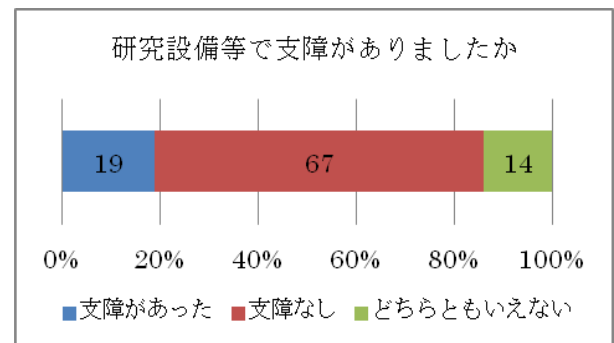
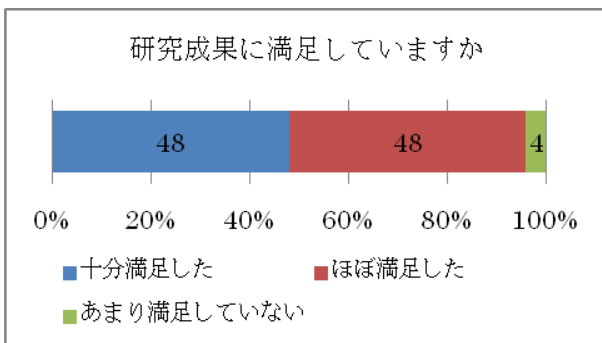
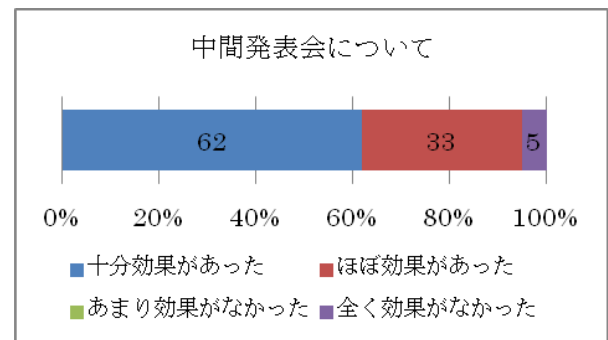
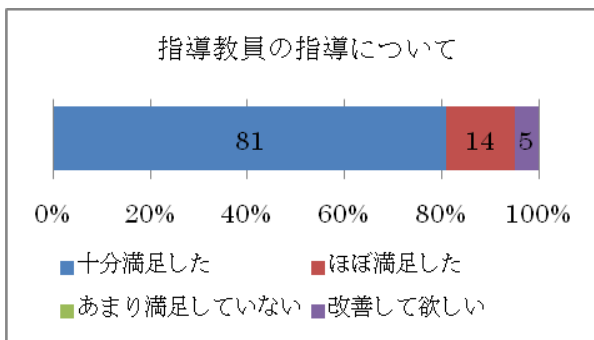
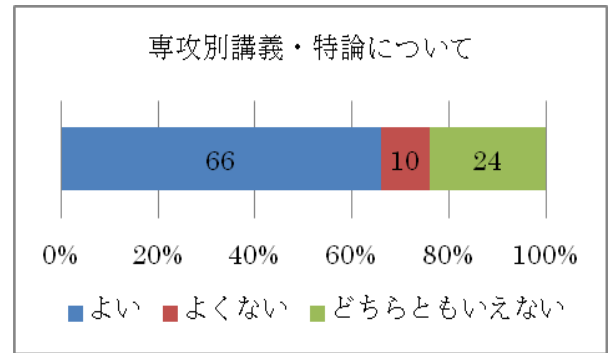
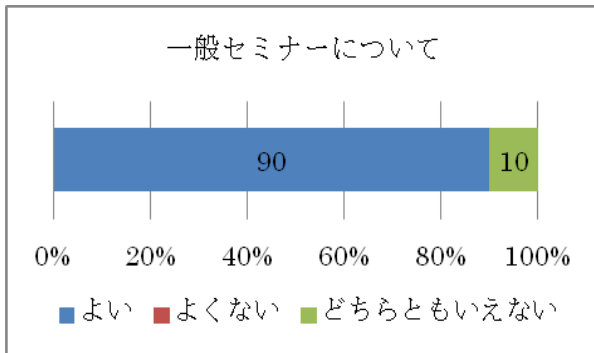
これは、自己点検・評価の参考とするため、平成18年4月に、平成11～17年度修了者を対象に郵送により実施したのが始まりで、以後は修了時に学生から回答してもらう形を取っており、平成24年度からは、Webによる入力方式で行っている。

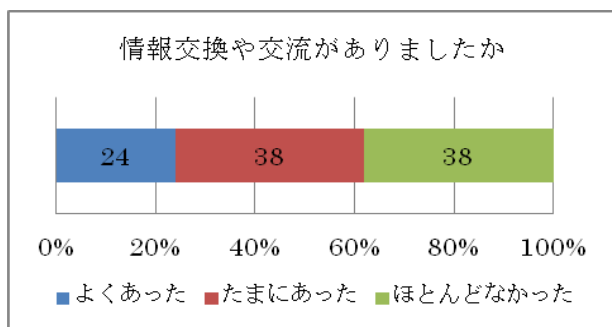
さらに、平成25年度から、在学生へのアンケートを開始した。これは、FD委員会において、現在連大で学ぶ学生から一番身近な現場の声を聞くことで、より学生の声が反映されるのではないかとの見解から、実施を決定したものである。

平成26年度の修了生アンケートの集計結果

H26年度修了生28名中（H26.9、H27.3）、回答学生21名（日本人11名、留学生10名）回答率75%

（以下アンケート項目抜粋）





各セミナーの内容、教員の指導、研究設備等への評価が高い中、他の構成大学間の情報交換や交流については、あまり交流が図れなかったとの意見があり、他の大学の学生とのコミュニケーションを深める機会を望む声が多かった。学生間の交流不足については、例年意見が挙げられており、交流の機会を設ける場を広げるべく、平成 24 年度から分野別セミナーの継続などを実施しており、今後も、学生交流の機会の必要性を追求していくこととしたい。

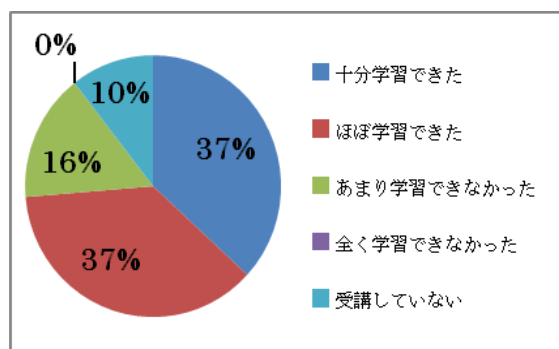
また、中間発表会は学位論文作成への推進のためにも非常に有効であったとの評価が高かったが、情報不足等で、整備された研究設備が有効的に活用できなかったなどの意見があり、平成 27 年度における F D 活動の一環として反映させるようにしたい。

平成 25 年度学生アンケートの集計結果

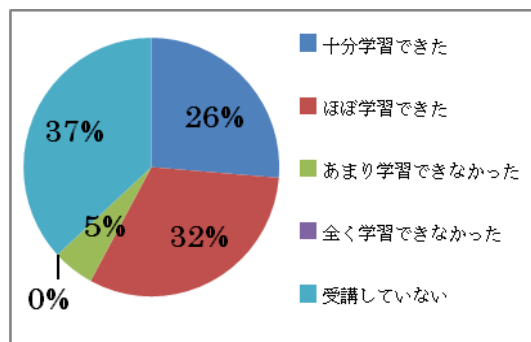
対象学生（2 年生）28 名中、 回答学生 19 名（日本人 9 名、留学生 10 名） 回答率 68%
 在籍（佐賀 2 名、琉球 6 名、鹿児島（農）4 名、鹿児島（水産）7 名）

（以下アンケート項目抜粋）

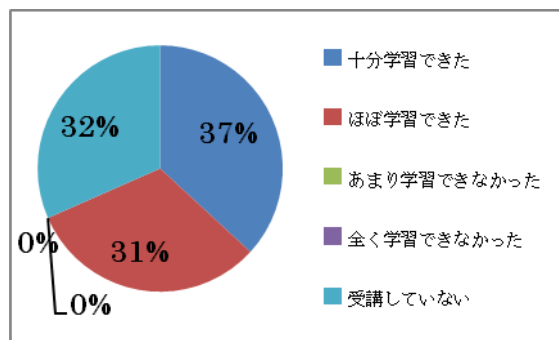
1-1 農学特別講義 I（一般セミナー）



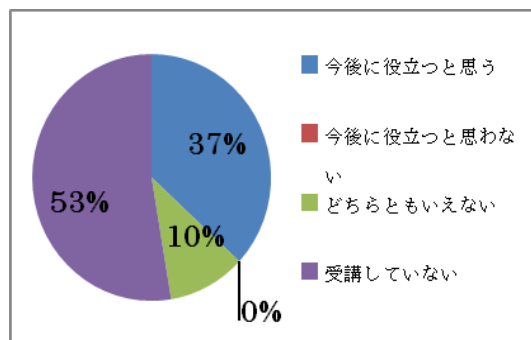
1-2 農学特別講義 II



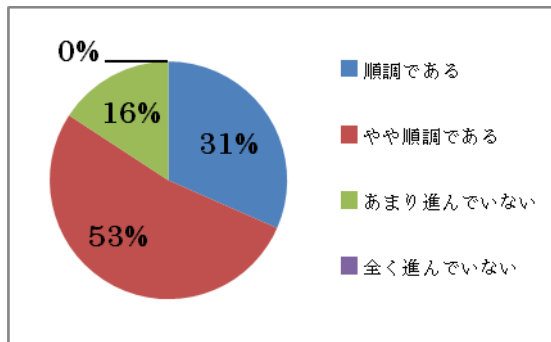
1-3 専攻別特別講義・特論



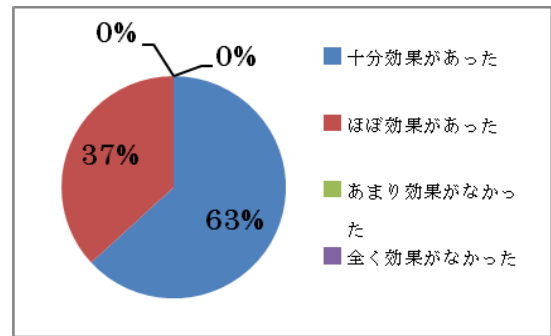
1-4 人材養成学生支援セミナー



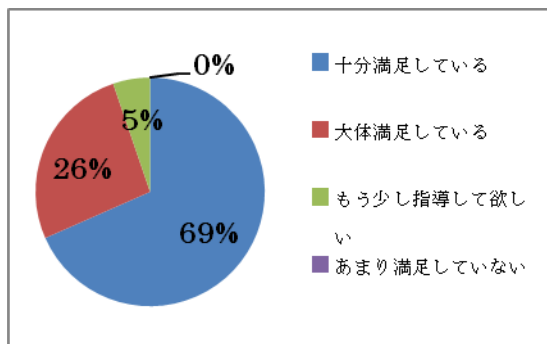
2-1 研究の進捗状況について



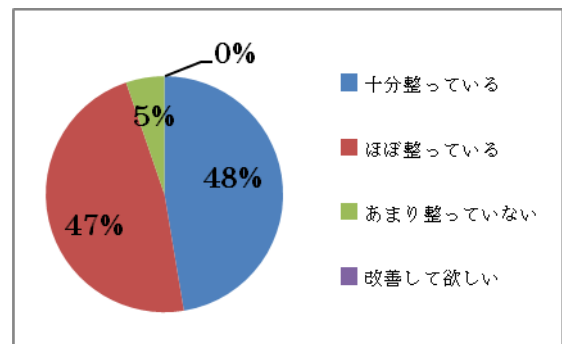
2-2 中間報告会及び中間発表会について



2-3 指導教員の指導について



2-4 研究設備・環境等について



各セミナーの内容、教員の指導、研究設備等に関しては、ほぼ満足している回答が多かったが、一般セミナーでの日本語と英語の統一性や専門用語に対する補助、専攻別講義での共通項を生かした授業など、講義の実施方法への要望も見られた。

また、英語教育の向上（英語による授業拡大）については、英語学習の講義や機会を増やして欲しい、などの意見があり、グローバル化が求められる中、教員の英語講義のあり方と併せて早急な検討を進めていく必要がある。

各種情報の伝達のあり方についても、学生から改善を求める声があり、学生に必要な情報が届いていないケースがあった。研究設備等に関しても、情報不足や使用方法の指導などに対する具体的な意見も見られ、今後、教職員ともに現状の見直しを行い、FD委員会を中心に改善策を検討し、FD活動の一環として反映させていきたい。

これらのアンケートについては、今後も継続して実施し、年度ごとの比較も含めてデータ分析を行い、FD活動の源として本研究科の教育研究の将来に役立たせていきたいと考える。

9. 学生の海外研修への意識に関するアンケート調査

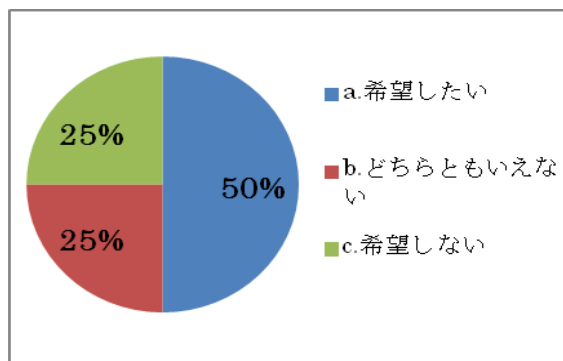
平成 27 年度以降、本研究科におけるグローバル人材の育成を目指し、日本人学生の海外派遣・海外研修の支援実施を計画しており、その遂行のための基礎資料となる「学生の海外研修への意識に関するアンケート」を実施した。

本アンケート調査の分析を、今後、新しい農水産業の創成の中核となり、国際的な視野を持つリーダーとして活躍できる人材を養成するとともに、国際社会への貢献を担う博士の輩出への礎となる一歩としたいと考える。

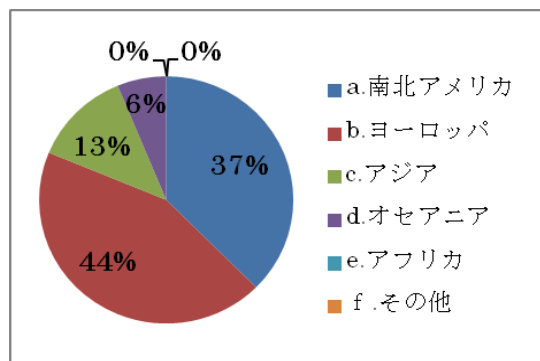
対象日本人学生 52 名中、回答学生 32 名 回答率 61.5%

(以下アンケート項目抜粋)

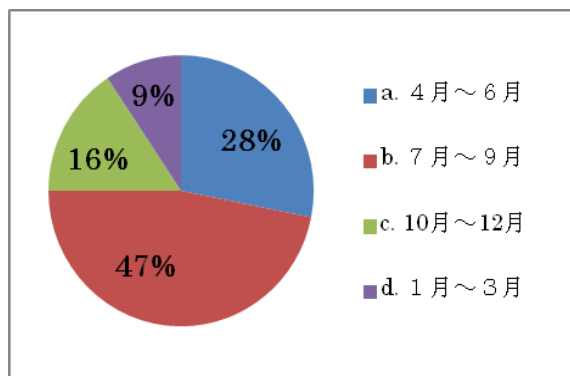
Q 3 海外研修等の機会があったら希望しますか。



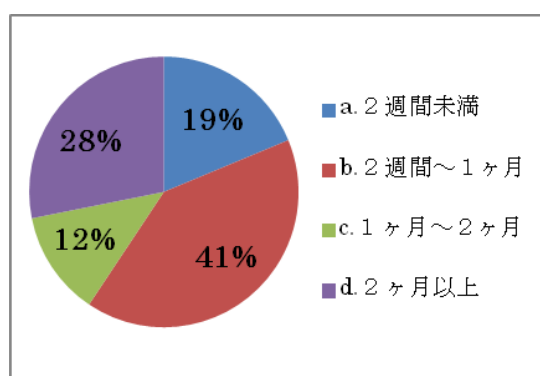
Q 4 最も海外研修したい地域はどこですか。



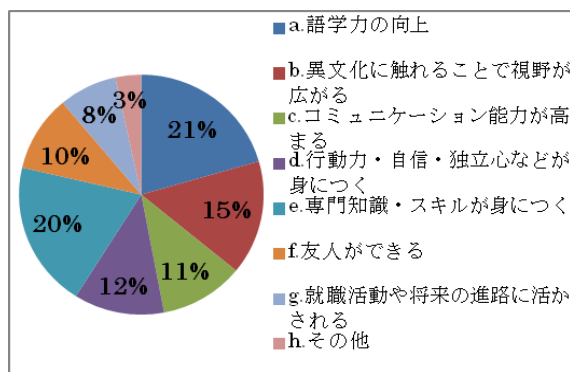
Q 5 海外研修したい時期について。



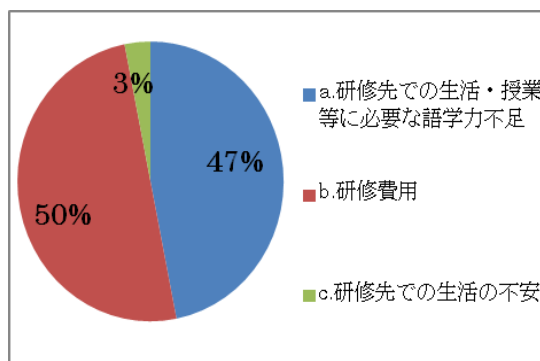
Q 5-2 海外研修したい期間について。



Q 6 海外研修の目的又はメリットは何ですか。
(複数回答可)



Q 7 海外研修を検討する場合、不安や問題点は何ですか。



海外研修を希望する学生が半数を占め、研修先としては欧米（南北アメリカ、ヨーロッパ）に集中しており、夏休み期間を中心に1ヶ月未満の希望が多くみられた。

また、海外研修に専門知識・スキル・語学力の向上などの大きな期待を抱くとともに、その反面、不安や問題点として研修費用と同じ割合で語学力不足が挙げられている。今後は、早期実施に向けて検討していくとともに、平成26年度に試みた教員への英語講義のセミナーにとどまらず、学生の英語能力のスキルアップに繋がる対応を推進していくことも必要と思われる。

10. その他のFD活動

①ティーチング・アシスタント制度による活動実態把握

ティーチング・アシスタント（TA）制度は、大学院学生の処遇の改善とともに、指導者としてのトレーニングの機会提供を目的として実施しており、平成18年度からTA業務に従事する連大生を対象にアンケート形式の「TA活動実施報告書」を提出させ、さらに平成19年度からはTAの指導を受けた学生を対象にしたアンケート形式の「TA活動評価調査」を実施して、その内容を分析することによりTA活動の実態把握に努めている。

また、平成21年度から、TA採用学生及び当該学生の指導教員を対象に、「大学の教育理念とTAの心構え」「TA業務に関わる注意事項」「安全衛生」を指導することを目的とした「TA研修会」を構成大学毎に実施しており、TA活動に携わる学生への事前指導を遂行している。

今年度の報告書では、教えてもらう立場から教える立場になることで学ぶことが多かったこと、自身自身の知識、学力を高めることの意識が強くなったことなどが多く見られた。今後も、TAに求められること、TAに何が必要かを見極めて、学生の研究指導能力の向上に繋がるよう、教員からの指導助言も取り入れるなど、改善を図っていくこととしたい。

11. おわりに

本研究科のFD活動については、平成18年度末から平成19年度にかけて、FDに関する規則や委員会の整備を行い、教育研究のより一層の充実に向けた体制が整ったといえる。各種アンケートを実施し、その集計結果に対してFD委員会で意見交換を行い、次年度に反映できるようFD委員会及び代議委員会において早急に検討し、改善できる部分については、見直しを図るように教職員で協力して進めているところである。

今後は、本研究科でのFD委員会を含むさまざまなFD活動を、いかに今後の教育力、特に博士課程学生に対する研究指導能力の向上に反映させていくか、また、国際化が進む昨今の状況においては、学生・教員共に英語学習への対応が急務とされ、グローバル人材の育成を目指し、英語教育の向上（英語による授業拡大）や日本人学生の海外派遣促進を行うことが検討課題であると思われる。

現在、本研究科では標準修業年限内での学位取得率が低下しており、これまでも学位取得率向上対策の一環として、1年次に中間報告、2年次に中間発表会を義務化させ、主指導教員から1年次終了時点で「研究指導報告書」を、2年次終了時点で「研究経過の『中間報告会』終了報告書」を提出させ、研究の進捗状況を確認するシステムを導入している。この制度をさらに有効化するために、平成23年度からは、2年生対象の「中間発表会」は、多地点制御遠隔講義システムを利用して、専攻ごとに合同で行い、お互いに相対的な進捗状況等を把握できるようにした。さらに、平成24年度からは、関係講座にかかわらず、学生及び教員ともに他の講座の発表にも参加するように推進し、自己研鑽の要素となり、研究の推進に繋がることを目指している。この「中間報告会」及び「中間発表会」については、学生アンケートや修了生アンケートにおいて、研究を進める上でも、学位論文作成においても非常に有意義なものとなっているとの評価が高く、今後も継続して推進していくとともに、より良い方法を模索していきたい。

また、平成25年度から在学生にもアンケートを実施し、ニーズを把握するとともに問題点などを改善していくこととしており、今後も、標準修業年限内での学位取得率の向上も含め、学生及び指導教員双方を意識した取り組みの推進を図りたい。そして、「大学院博士課程におけるFD活動とは何か」という原点に立ち返り、教育研究力向上のための一層の努力をしていきたいと考える。

平成 26 年度 鹿児島大学大学院連合農学研究科 F D 委員会委員

委員長	杉	元	康	志	研究科長
委員	山	本		淳	副研究科長
委員	野間口		眞	太郎	(佐賀大学)
委員	鈴木		章	弘	(佐賀大学)
委員	川	満	芳	信	(琉球大学)
委員	芝		正	己	(琉球大学)
委員	岡	本		新	(鹿児島大学)
委員	西	野	吉	彦	(鹿児島大学)
委員	上	西	由	翁	(鹿児島大学)